早稲田大学審査学位論文
博士（人間科学）

近世江戸遺跡出土の漆製品の考古学的研究
An Archaeological Study of Lacquerware Excavated from Early Modern Period Edo Sites

２０２０年１月

早稲田大学大学院　人間科学研究科
都築　由理子
TSUZUKI, Yuriko

研究指導担当教員：　谷川　章雄　教授

目　　次

序　論 …… 1

はじめに　1

1　研究の背景　2

2　問題の所在　8

3　本論文の構成　9

第1章　近世江戸遺跡出土漆製品の集成……11

はじめに　11

1　近世江戸遺跡出土の漆製品の集成　12

2　漆製品の出土点数・行政区ごとにみる様相　14

3　墓と漆製品　23

結語　25

第2章　大名屋敷遺跡から出土した漆製品の材質・製作技法……54

はじめに　54

1　漆製品出土遺跡の概要　55

2　漆製品の材質・製作技法の分析方法　58

3　漆製品の材質・製作技法の分析結果　59

4　漆器の器種と材質・製作技法　64

5　出土漆製品の器種組成の検討　67

6　漆器の時期別の様相　71

結語　75

第3章　町屋遺跡から出土した漆製品の材質・製作技法……86

はじめに　86

１　漆製品出土遺跡の概要　86

２　漆製品の材質・製作技法の分析方法　88

３　漆製品の材質・製作技法の分析結果　88

４　若葉三丁目遺跡Ⅲと南元町遺跡Ⅲの様相の検討　93

結語　97

第4章　南部箔椀・吉野椀・朽木盆……107

はじめに　107

１　南部箔椀、吉野椀、朽木盆の伝世品　108

２　近世江戸遺跡から出土した南部箔椀・吉野椀・朽木盆　111

３　南部箔椀、吉野椀の文化財科学的分析　118

結語　121

第5章　近世江戸遺跡出土の漆工用具……128

はじめに　128

１　現在の漆工用具　128

２　近世江戸遺跡から出土した漆工用具　129

３　貝製漆溜容器の文化財科学的分析　131

結語　137

結　論　……144

引用・参考文献……150

序 論

はじめに

ウルシは熱帯から温帯に 81 属 800 種ほどが分布するウルシ科の一種で、ウルシ科にはウルシ属の他にカシューナットノキ属、マンゴー属、ヌルデ属などがある。

ウルシ科の樹液を塗料として利用する文化は、中国、朝鮮、日本、インドネシアなどの地域に限られる（日高 2017)。これらは熱分解-GC/MS 分析法によって、日本・中国に分布する Urushiol を主成分とするウルシ（*Toxicodendron vernicifluum*)、台湾・ベトナムに分布する Laccol を主成分とするハゼノキ(アンナンウルシ)(*Toxicodendron succedaneum*)、タイ・ミャンマーに分布する Thitsiol を主成分とするブラックツリー（ビルマウルシ）（*Gluta usitata*）に識別できる（本多ら 2017b)。

ウルシ属の植物で現在、日本に生息しているのは、ウルシ、ヤマウルシ、ツタウルシ、ハゼノキ、ヤマハゼである。ウルシとハゼノキは日本に本来自生しない外来植物であり、ハゼノキは中世末期から江戸時代に中国から持ち込まれた（能城 2017b)。

日本列島にウルシが存在した最古の例は、福井県鳥浜貝塚出土のウルシ材で放射性炭素年代測定により 12,600 年前（縄文時代草創期）のものとされている（鈴木ら 2012)。ウルシの原産地は中国の揚子江中・上流域から東北部で、縄文時代草創期の堆積物にもウルシ花粉が伴っていることから、中国からこの時期にはすでにウルシがもたらされていたと考えられている（能城 2017a)。さらに、縄文時代草創期半ばには後氷期的な温暖で湿潤な気候が成立し、そうした環境ではウルシは在来の植物に負けてしまい、人手をかけて管理しないと生育できないとしている（能城 2017a)。

以来、日本列島において縄文時代から現代にいたるまで、ウルシは人間に管理、栽培され採取された樹液を塗料として食器、調度品や武具などの様々な器物や建築物に塗られるだけでなく、接着剤や実を蝋の原料、材を染料とするなど有用植物として幅広く利用されている。なお、一般的に「ウルシ」は植物のウルシすなわちウルシ科ウルシ属ウルシ（*Toxicodendron vernicifluum*）を示し、「漆」はウルシから採取された樹液、樹液を利用し製作された工芸品などに用いる。

漆液は水分が気化して乾くのではなく、酵素であるラッカーゼが空気中の水分から酸素を取り込み、ウルシオールを酸化させることによって固まる。したがって、湿度 70～85%、温度 25～30℃の環境が漆製品の製作に適している。漆製品は下地材と漆を塗布、研磨を繰

り返すことで完成する。素地には主に木材が使用されるが、縄文時代の籃胎漆器（竹）にみられるように先史・古代から布、皮革、竹、金属、紙、焼き物、薄い紐状の木など様々な素材が使用されてきた。

日本列島における最古の出土漆製品は、北海道垣ノ島 B 遺跡出土の繊維状装飾品とも石川県三引遺跡出土の竪櫛ともいわれている。放射性炭素年代測定により前者は約 9,000 年前（縄文時代早期）（南茅部町埋蔵文化財調査団 2002）、後者は約 7,200 年前（縄文時代早期末から前期初頭）（工藤・四柳 2015）のものである。

日本の漆工技術は、飛鳥・奈良時代以降、大陸からの高度な髹漆、螺鈿・平文・蒔絵など加飾技術を摂取して著しい発展をみた。特に蒔絵は平安時代以降、日本独特の加飾法として、漆工史の中心的存在であり続けた重要な技法である（日高 2017）。このような高い漆工技術で製作されたものは寺社の宝物、調度として限られた階層で使用され伝世されてきた。また、16 世紀末のいわゆる南蛮漆器に代表されるように海外へ輸出された。

一方、出土資料からは 11～12 世紀にかけて下地に漆の代わりに柿渋と炭粉を使用する炭粉渋下地の漆器が出現し、材料や工程を大幅に省略した安価で、量産が可能となって普及した（四柳 2009）。近世の遺跡で出土する多くの漆製品もこれに該当し、漆器は日常什器であったと考えられる。

明治時代以降、遺跡から出土する漆製品は少なくなり、内国勧業博覧会や海外の博覧会に出品された作品、帝室技芸員による美術工芸品や膳椀などの民具資料にみられるようになる。さらに、「和風」の家具が広く普及した大正から昭和初期には、漆塗りを施した家具が「和風」あるいは「伝統的」「民芸的」な商品イメージを伴い始めたとされる（山崎 2017）。

このように、ウルシは縄文時代早期から現代に至るまで利用されてきた有用植物であり、つくられる製品は優良な工芸品から日常雑器まであり、階層性や製作された時代性を反映したものであった。

1 研究の背景

以上のように、考古学における漆研究は、外来植物であるウルシの起源と日本列島への将来、列島内の漆文化の起源や伝播をめぐる問題と相まって縄文時代を中心におこなわれている（工藤ほか 2014）。一方、歴史時代になると漆研究は低調になる。近世江戸遺跡においてもその傾向は同様で、漆製品をはじめとする木製品など有機質の遺物は遺跡の立地環境により遺存状況が異なるため、研究対象として大きく取りあげられてこなかった。

ここでは、本論文で対象とする近世考古学での漆製品の研究史を中心に関連分野における研究の背景を述べる。

(1) 近世考古学の成立

近世都市江戸は、天正 18 年（1590）に徳川家康が関東へ転封され、江戸城を居城としたことに始まる。その後、江戸は将軍家徳川氏の居城である江戸城を中心とした城下町であると同時に、江戸幕府の拠点となる政権都市になった。参勤交代で参府した各藩勤番武士、旗本などの幕臣とその生活を支える商工業者が居住し、享保 6 年（1721）の人口は武士が約 50～60 万人、町人が約 50 万人、僧・神官が 2 万 6,000 人とされ（内藤 1966）、人とモノの集まる大消費地であったことがわかる。

文政元年（1818）に幕府は御府内の範囲を「江戸朱引図」で示した。御府内は大名・各藩藩士と幕臣の屋敷地である「武家地」、町人の居住地である「町人地」、墓地を含む寺社があった「寺社地」で構成される。御府内の面積の 69%が武家地、16%が町人地、15%が寺社地であり（内藤 1966）、近世江戸遺跡の考古学的調査の対象の多くは武家地である。

日本における近世考古学の出発点の一つは、1969 年の中川成夫氏・加藤晋平氏による「近世考古学の提言」（中川・加藤 1969）とされる。東京都内では 1980 年代から再開発工事にともなう発掘調査数の増加と相まって、江戸の近世考古学は飛躍的に発展した。

近世江戸遺跡における遺物研究の中心は、土壌環境に因らず普遍的に出土する磁器・陶器・土器資料である。これらは生産地の窯址など生産関連遺跡と消費地遺跡と比較することで、江戸において詳細な年代を比定できるようになった（堀内 1997 など）。一方、漆製品をはじめとする木製品など有機質の遺物は遺跡の立地環境により遺存状況が異なるため、陶磁器研究のような成果があげ難い。しかしながら、近世の絵画資料には飲食器、化粧道具から台などの調度品にいたるまで生活用具として多くの漆製品が描かれ、陶磁器同様に広く流通・普及していた。近世江戸遺跡の遺物研究において供膳具をまとめる際、「漆器という主体を未だ欠いたまま議論を進めている」（成瀬・長佐古 1998, p. 9）という指摘から 20 年余りが経過し、低地遺跡の発掘調査の増加に伴い、漆製品の出土事例の増加など資料の蓄積がすすんだ。また、この間、文化財科学、分析科学による漆製品の材質・製作技法の研究は発展し、深化した。

(2) 中世・近世考古学における漆製品の研究

中世考古学における漆製品の研究の中心となった遺跡は、都市内での生産活動や生活の復元がおこなわれた広島県草戸千軒町遺跡、福井県一乗谷朝倉氏遺跡、神奈川県鎌倉遺跡群、岩手県平泉遺跡群が挙げられる。主に鎌倉の神奈川県千葉地東遺跡、千葉地遺跡、佐助ヶ谷遺跡では、出土した 13～14 世紀代の漆器椀・皿の関係と使用された場について検討されてきた（大河内 1993;岡山 1982;斉木 1995;宍戸 1986,1987)。

仲田茂司は、東国の中世遺跡の出土状況から漆器と土師器はともに日常と非日常の両方に使われたと考え、11 世紀から 12 世紀の中世前期の食器様式は、土師器が主体で漆器が補完していた。13 世紀後半から 15 世紀後半の中世後期の食器様式は、漆器の大量生産を反映し、日常において土師器・漆器・陶磁器が組み合わされて使用された。16 世紀前半には高い高台をもつ椀を特徴とする近世漆器が出現したことにより土師器は駆逐され、漆器と陶磁器がセットの近世的食器様式が成立したと考えている。(仲田 1999)。

これに対して、京都府平安京左京域の調査をおこなった上村和直は、北陸・関東以北や西日本の一部では下地に柿渋と炭粉を用いる炭粉渋下地の中品・下品の漆器が日常の食器として普及したが、京都では中品・下品の漆器は基本的に日常の食器でなく、非日常でのハレの儀礼に使用される器と位置づけられる。さらに、下地に漆を用いるサビ下地の上品は奢侈器として位置づけられるとし､地域や品質によっても違いがあると指摘している(上村 2003)

中世末から近世初頭にかけては、各地の城郭、城下町の遺跡から漆製品が出土するようになり、16 世紀末から 17 世紀初頭にかけての愛知県清洲城下町遺跡（梅村 1987)、15 世紀以降の小田原城とその城下の遺跡が挙げられる（宮坂 1996)。そこでは、中世から近世への器形の変化を追う器種分類と、器種組成から椀構成の変化を把握することに重点が置かれ研究がすすめられた。永越信吾は、東京都葛飾区葛西城址遺跡を中心に関東（東京都、神奈川県、埼玉県）の戦国期から近世初頭にかけての漆器の形態変化を細分化し、15 世紀後葉から 16 世紀前葉と 16 世紀末から 17 世紀前葉に食膳具様式の画期が認められる。後者は平椀、壺椀といわれるタイプや天目型など新たな器形が出現し、漆器の器形的な面に近世的な要素がでてくる時期としている（永越 2006)。

中井さやかは、一乗谷朝倉氏遺跡、葛西城址遺跡、清州城下町遺跡、大坂城三の丸跡、堺環濠都市の中世遺跡と仙台城三の丸遺跡、都立一橋高校遺跡、旧芝離宮庭園遺跡の近世遺跡出土漆器椀、伝世資料の法量を比較し、16 世紀から 19 世紀までの椀の組み合わせを

概観した。16 世紀の椀は基本的に高い高台をもつ一の椀、低い高台をもつ二の椀、器高の低い三の椀の入れ子状の重椀形式であり、17 世紀初頭には平椀・壺椀を加えた椀揃形式が成立していたことを指摘した（中井 1989,1992）。

近世江戸遺跡における漆器研究は、都立一橋高校遺跡（古泉 1985）、芝増上寺子院群光学院・貞松院跡・源興院跡（安藤 1988）から始まった。いずれも、中世遺跡出土の漆器とは異なる形態のため、細かい分類がおこなわれている。

その後、後藤宏樹により近世江戸遺跡出土漆器の器種組成が検討された。後藤は、16 世紀末から 17 世紀初頭に蓋付漆器椀が出現し、近世的な食器構成である四椀（飯・汁・平・壺椀）と腰高がセットとなる椀揃が成立するが、このセットが普遍的に現れるのは 18 世紀初頭段階であるとした。また、饗宴などの非日常の場に使用される食器は基本的に漆器が主体で、四椀を中心とした構成になる。漆器椀の品質は、17 世紀初頭には一般的な質の飯・汁椀と平・壺椀、腰高がセットとなる優品にわけられるが、18 世紀前半には優品が多かった平・壺椀が一般的な質となるという（後藤 1992,2001）。

同様の器種組成の変遷傾向を追川吉生も指摘している。追川は、漆器椀に共伴する肥前産磁器の編年によって漆器椀の形態を 5 期に区分した。17 世紀末から 18 世紀前半までに相当する 3 期以降にⅢ類（平椀）・Ⅳ類（壺椀）が出現することで形態が多様化し、入れ子状を維持することが不可能となり、中世的な漆器椀組成から近世的な漆器椀組成である椀揃形式への変化がおきたとした（追川 1999）。このように、近世江戸遺跡の出土漆器は、17 世紀には椀揃形式が成立し、18 世紀に普及することによって器種のバリエーションが広がったとみられている。

江戸遺跡出土漆製品の研究の多くは一遺跡の出土遺物の様相を報告したものである。清水香は、東京大学本郷構内遺跡医学部附属病院入院棟 A 地点から出土した漆製品の銘、樹種分類による器形・文様から特徴的な指標を示した（清水 2016）。また、同遺跡よりまとまって出土した 17 世紀代に属する緑色系漆器の樹種、製作技法から流通の推定をおこなっている（清水 2017）。

（3）文化財科学における漆製品の研究

漆製品の出土資料に対する文化財科学的アプローチの嚆矢は、1971 年の中里寿克による宮城県山王遺跡の縄文時代の漆塗櫛の分析である（中里ら 1971）。その内容は、①蛍光 X 線分析装置による使用顔料の同定、②漆塗膜断面の観察、③X 線透過による内部構造の調査

と現在の出土資料の分析方法と同じであり、その基礎が確立されたといえる。この方法により、漆製品の材質・技法、生産技術を明らかにすることができるようになった。その後、永嶋正春（1985,1987)、岡田文男（1995)、四柳嘉章（1991）による出土漆製品の漆塗膜断面の観察により縄文～中世の出土漆器の塗り構造が明らかとなった。

四柳は、石川県を中心に北陸地方遺跡出土漆器資料の型式、塗り色や加飾の観察といった考古学的手法と、顕微鏡下での塗膜断面の観察や蛍光 X 線分析、FT-IR 分析など機器を用いた自然科学的手法を融合した漆器考古学を提唱し、12 世紀から 19 世紀までの出土漆器の研究をおこなっている。古代の漆器が高価な漆を何層にも塗り重ねたのに対して、柿渋に炭粉粒子を混ぜた炭粉渋下地、漆を 1～2 層施しただけの漆器の出現でコストダウンと省力化がはかられて漆器は普及し（四柳 1992)、新潟県上越市一之口遺跡の出土漆器が「炭粉渋下地」漆器の初源であり、炭粉渋下地は 11 世紀中葉まで遡るとした(四柳 1997)。

近世江戸遺跡における出土漆製品の文化財科学的な漆の分析は、永嶋正春による東京都新宿区三栄町遺跡出土の貝溜容器の分析（永嶋 1991)、漆製品の分析は北野信彦による東京都港区№19 遺跡の出土漆器の分析に始まる（北野 1989)。北野は塗膜断面の観察だけでなく、木胎の樹種同定、X 線分析装置による使用顔料の同定という文化財科学的手法で材質・技法、生産技術を明らかにし、その結果と漆器製作に関連する古文書を対照し、個々の漆器資料の性格・性質を把握した。さらに、近世出土漆器は日常生活什器類である飲食器類が中心であるとし、材質・製作技法から時期的変遷をとらえた。また、樹種と漆塗り構造や漆工材料との間には明らかな相関関係が認められ、大量生産に向く用材には廉価な材質と簡便な漆塗りを施す量産品と、吟味された用材には良い素材と良い漆塗りを施す優品の需要と供給のバランスの上に成り立っていたことを指摘した（北野 2005a,b)。

また、北野のような包括的に一遺跡ごとに出土した大量の漆製品を分析対象とする研究だけでなく、一遺跡から特徴的な資料を選び、分析する研究、調査報告もおこなわれている。

武田昭子・赤沼英男・土谷信高は、新宿区尾張藩上屋敷跡遺跡から出土した漆製品の下地層の鉱物組成と製作技法を報告した（武田ら 2005)。武田昭子・渡部マリカは文京区東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院入院棟 A 地点から出土した漆製品の下地製作法を現在の材料で製作した試料と比較した（武田・渡部 2017)。

難波道成・服部哲則は新宿区大京町東遺跡、新宿区天龍寺跡から出土した漆工用具と新宿区行元寺跡、新宿区水野原遺跡から出土した補修跡のある漆器の材質・製作技法の報告

をおこなった（難波・服部 2005）。服部哲則・難波道成・長岐僚子は、新宿区行元寺跡から出土した補修跡のある漆器や緑色系漆器などの材質・製作技法の報告をおこなった（服部ら 2006）。

本多貴之・増田隆之介・宮腰哲雄は、文京区東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院入院棟 A 地点から出土した緑色系漆器の材質・製作技法の報告をおこなった（本多ら 2017a）

（4）美術史学における研究史

近年の潮流として、16 世紀後半にヨーロッパ向けに輸出されたいわゆる「南蛮漆器」、およびそれ以降の日本から東アジア、中東、ヨーロッパ、南アメリカへもたらされた輸出漆器についての研究がおこなわれるようになった（加藤 2002；永島 1999；西田 1972，1973；日高 2001，2008；山崎 2001；吉村 1976）。近世から近代にかけての日本と海外の交流の視点、西洋世界における日本観の形成が重要なテーマとなっている。

前述のように、漆工技法でも特に蒔絵は平安時代以降、日本独特の加飾法として、漆工史の中心的存在であり続けた重要な技法であるため（日高 2017）、膨大な研究の蓄積があり、詳しく述べることは難しい。したがって、ここでは近世を含む漆工芸の通史を概観し、技術面に重きをおいた研究を挙げる。

黒川真頼の『工芸志料』（1878）は、江戸時代の漆器生産地の沿革と生産技術の変遷を紹介している。黒川の研究は「漆工史研究」の礎になるとともに、美術工芸品的な要素が強い伝世品とは性格の異なる漆器、すなわち江戸時代において多くの人々が日常生活で使用したであろう漆器の貴重な研究と評されている（北野 2005a）。さらに、沢口悟一の『日本漆工の研究』（1966）は、漆器生産地の沿革だけでなく、製作に必要な基本的な材料、用具をはじめとした材質・技法をまとめている。

六角紫水の『東洋漆工史』（1932）は、楽浪郡址から出土した漢代の漆器を取りあげるとともに、飛鳥・奈良時代から明治時代までの日本漆工の発達の経過を記した。また、荒川浩和の『漆椀百選』（1975）は、伝世した漆椀を素地、形、塗り、加飾、文様、用途、組み合わせ、産地、茶人好み・所有者の名前・産地の人物に因んだ名称など様々な属性で分類し、法量、断面図、文様の展開図とともに解説している。

いずれも、高度な漆工技術によって製作された伝世品を対象として観察がおこなわれてきた。

(5) 民俗学における研究史

日本列島各地には漆にかぶれないようにするための俗信や椀貸し伝説が残されている。柳田國男の『木綿以前の事』(1939) に「昔の貴人公子が佩玉の音を楽しんだように、かちりと前歯が当る陶器の幽かな響には、鶴や若松を画いた美しい塗盃の歓びも、忘れしめるものがあった。」とあるように、漆塗りの器物は美しく喜ばしいものであった。また、『山島民譚集 (3)』(1969) の「朝日夕日」、「椀貸塚」、「隠れ里」にみられるような長者、富のイメージがあり、『遠野物語』(1910) では「マヨヒガ」にみられるような水の神や異界との交流が描かれている。

折口信夫の『国文学の発生 (第三稿)』(1927)、『河童の話』(1929) にみられるように、貴人、客人を饗応する漆器は憧れや富貴のイメージと関連するものである。

宮本常一は、地域の生産活動の成立や変遷などを実証的に検討する民具資料の一つとして漆製品を扱った (田村・宮本 2012)。民具資料には多くの膳椀があり、特に共有膳椀という講中で共有するハレの食事の膳椀類がある。南関東地方では、膳椀の箱書き紀年銘は文政期 (1818～1830) 以降、安定的にみられるようになる (関東民具研究会 1999)。庶民の食生活のなかにハレの食器に漆塗りの膳椀類を用い、本膳形式などによって食事やもてなしをするようになるのは 18 世紀後半としている (小川 2002)。

現在の生産地に関わる総合的な調査としては、漆利用の人類誌調査グループによる浄法寺地域を中心にした漆掻き、木地師、塗師、鍛冶屋への聞き取り、道具類、漆椀の法量、文様絵付けの絵画資料などの調査が挙げられる (山田・岡澤 1997;山田ら 1998,1999;後藤ら 2000;加藤ら 2001;岩瀬ら 2002)。

木地師研究と塗師研究で代表的なものを取り上げる。木地師研究は杉本寿、須藤護、橋本鉄男により集大成され、今日でも出土漆器の製作技法を解明する際に参考にされている。木地師集団の成立と変遷 (杉本 1965) から全国の木地師集団の由来、ろくろ技術や道具を集成し (橋本 1979)、地域別に材の選択をまとめて樹種から木地屋の移動について考察している (須藤 1997)。塗師研究は塗師自身が著したものが多く、なかでも山岸寿治は塗師屋内の構造、木地師集団との関わりを客観的に記述している (山岸 1995,1996)。

2 問題の所在

以上のような各分野の研究史をみると、分野によって研究対象や方法論が異なっていることが問題点として指摘できる。研究対象の違いを具体的に述べると、美術史学が対象と

する高度な漆工技術で製作された美術工芸品と、考古学が対象とする中世以来、安価で簡易な工程で製作された日常什器は、製作技術や資料のもつ背景が異なることから同列に扱うことはできず、そこから描かれる世界は別のものであった。前者の使用者や用途は主に上位の階層に限られるのに対して、後者は上位から下位の階層まで幅広いと考えられる。

また、美術史学が扱う美術工芸品は権力者や富裕層の所有するものが多く、城下町など都市で使用されたものであり、考古学が対象とする近世江戸遺跡出土の漆製品は同様に都市で使用されていた。これに対して、民具資料は主に村落に伝世されたものである。

次に、方法論の違いを具体的に述べると、考古学は発掘調査によってどのような遺跡から（遺跡性格・遺構）、どのような個々の漆製品（用途分類・器種）が出土したかを追究してきたのに対し、文化財科学ではどのような質（材質・技法）の漆製品であるかについて、多くの漆製品の全体的な傾向を明らかにしてきたのである。

以上のような各分野の研究対象や方法論の相違点を踏まえて、本論文では、徳川将軍家を頂点とした城下町であり、大消費地であった近世都市江戸において、遺跡出土の漆製品を研究対象にし、考古学に立脚しつつ文化財科学的手法による分析をおこなう。さらに、美術史学や民俗学の成果を援用しながら、近世都市江戸の漆製品の利用の実態を明らかにすることを目的とする。

3 本論文の構成

本論文は、以下のように構成される。

第 1 章では、近世江戸遺跡出土の漆製品の全体像を捉えるために発掘調査報告書からの集成を試みる。その上で墓地遺跡出土の漆製品の様相をとり上げる。

第 2 章では、江戸の大名屋敷遺跡である東京都千代田区有楽町二丁目遺跡を中心に千代田区紀尾井町遺跡Ⅱ、千代田区紀尾井町遺跡、千代田区尾張藩麹町邸跡から出土した漆製品の材質・製作技法の文化財科学的な分析と、考古学による漆器の器種との関係、および漆器の器種組成を検討する。

第 3 章では、江戸の町屋遺跡である東京都新宿区若葉三丁目遺跡Ⅲ、南元町遺跡Ⅲから出土した漆製品の材質・製作技法の文化財科学的な分析をおこない、2 遺跡間の比較から各遺跡の漆製品の様相を明らかにする。

第 4 章では、美術史学による伝世品の様相をふまえて、近世江戸遺跡出土の南部箔椀、吉野椀、朽木盆について、考古学的所見による遺跡の性格・年代と文化財科学的な分析に

よって得られた材質・製作技法をあわせて述べる。

第 5 章では、近世江戸遺跡出土の漆工用具の様相を述べ、漆工用具の一つである漆溜容器の文化財科学的な分析により大名屋敷における漆工の一端を明らかにし、絵画資料や文献史料から職人、町人との関係を検討する。

以上のような武家屋敷、町屋、墓地遺跡出土の漆製品を扱い、考古学、文化財科学、美術史学、民俗学などの総合的な視点によって、近世江戸遺跡から出土した漆製品の利用の実態を明らかにしたい。

第１章　近世江戸遺跡出土漆製品の集成

はじめに

近世都市江戸は、天正 18 年（1590）に徳川家康が関東へ転封され、将軍家徳川氏の居城である江戸城を中心とした城下町であると同時に、江戸幕府の拠点となる政権都市になった。そして、参勤交代で参府した各藩勤番武士、旗本などの幕臣とその生活を支える商工業者が居住する人とモノの集まる大消費地であった。

近世都市江戸の範囲、いわゆる御府内は大名・各藩藩士と幕臣の屋敷地である「武家地」、町人の居住地である「町人地」、墓地を含む寺社があった「寺社地」で構成される。御府内の面積の 69％が武家地、16％が町人地、15％が寺社地であり（内藤 1966）、近世江戸遺跡の考古学的調査の対象の多くは武家地である。

近世江戸遺跡における出土漆製品の研究には、漆製品の材質・製作技法に重きをおいた自然科学・文化財科学的研究と、型式や遺跡・遺構ごとにみた漆器の器種組成の変遷を中心にした考古学的研究という二つの方向性があった。

自然科学・文化財科学的研究において、北野信彦は、近世出土漆器は日常生活什器類である飲食器類が中心であるとし、材質・製作技法から時期的変遷をとらえた。また、樹種と漆塗り構造や漆工材料との間には明らかな相関関係が認められ、大量生産に向く用材には廉価な材質と簡便な漆塗りを施す量産品と、吟味された用材には良い素材と良い漆塗りを施す優品の需要と供給のバランスの上に成り立っていたことを指摘した（北野 2005a, b）。

考古学分野における出土漆製品の研究の多くは一遺跡の出土遺跡の様相を報告したものであるが、一遺跡の出土漆器の様相だけでなく、器種構成の変遷から漆器の全体像の変化を示したのは後藤宏樹と追川吉生である。後藤は、16 世紀末から 17 世紀初頭に蓋付漆器椀が出現し、近世的な食器構成である四椀（飯・汁・平・壺椀）と腰高がセットとなる椀揃いが成立するが、このセットが普遍的に現れるのは 18 世紀初頭段階であるとした。また、18 世紀末以降、磁器碗が圧倒的な量となり、漆器椀を凌駕するとした（後藤 1992, 2001）。

同様の器種組成の変遷傾向を追川も指摘している。追川は、18 世紀前半以降に平椀・壺椀が出現し、中世的な漆器椀組成である組椀形式から、近世的な漆器椀組成である椀揃形式への変化がおきたとした（追川 1999）。

したがって、近世江戸遺跡の出土漆器は、量産品の飲食器類を中心として 18 世紀には椀揃形式にみるように器種のバリエーションが広がるとみられる。

以上のように、従来の近世江戸遺跡の漆製品研究の対象は飲食器が中心であった。しかし、近世の絵画資料に描かれているように飲食器以外の生活用具にも漆製品は多く、飲食器以外の漆製品の全体像を欠いたまま研究が進んできたことが指摘できる。したがって、本章では江戸遺跡出土の漆製品の全体像を捉えるための第一段階として、集成を試みることにした。

1 近世江戸遺跡出土漆製品の集成

東京は地形的に「山の手台地」と「下町低地」よりなる（貝塚 1979)。前者は赤羽・田端から上野、本郷・小石川、麹町、赤坂・麻布、高輪・品川の 5 つの台地、後者は隅田川、中川、江戸川などの流れる三角州地帯を指す。近世の「山の手台地」には江戸城を取りまく武家屋敷と寺社、「下町低地」には町人地が広がるイメージがあるが、実際には明確な住み分けがなされておらず、時期によりその範囲は変動し複雑な様相を示す。有機質の遺物である漆製品の出土量は、台地上の遺跡には少なく、低地に多い傾向にある。しかし、実際には台地上の遺跡でも池、上水、下水、井戸、溝や堀など水分を含む遺構から一定量出土している。

（1）集成対象の遺跡、遺物

本章では、近世江戸遺跡から出土した漆製品を把握するため、報告書掲載出土漆製品の集成をおこなった（附表 1-1 近世江戸遺跡出土漆製品一覧表)。江戸の御府内とその周辺に相当する現在の行政区で千代田区、中央区、港区、新宿区、文京区、台東区、墨田区、江東区、渋谷区、豊島区を主とし、平成 28 年（2016）3 月 31 日までに刊行された近世遺跡発掘調査報告書を対象とした。漆製品が出土した東京都内の近世遺跡報告書は 237 冊、全 262 遺跡であった。その内訳は武家地 171 遺跡、町人地 40 遺跡、寺社地 46 遺跡で、江戸城外堀や堀護岸など城郭に関わるもの、台場や御蔵など幕府の施設も武家地に含めた。上記に分類できなかったものはその他とし、神田川沿いの河岸地であった千代田区外神田一丁目遺跡、御府内の耕作地、田地であった台東区芝崎町二丁目遺跡と墨田区横川一丁目遺跡、将軍家の狩場周辺で水田であった板橋区高島平北遺跡、江戸の周辺村落であった北区袋低地遺跡の 5 遺跡あった。

集成対象の遺物は、①遺構年代が 16 世紀末から明治元年（1868）までのもの、②個体資料、破片資料を問わず、実測図もしくは写真図版として掲載され、且つ遺物観察表を伴

うもの（実測図 1 点を出土点数 1 点とした）、③遺物観察表で「漆」と記載されているものとした。「赤色」や「黒色」という漆か否か曖昧な表現のものや、漆継陶磁器や漆付着陶磁器は漆工用具として報告されていないものは対象外とした。

出土遺物の年代観は、出土遺構の共伴遺物から推定される遺構廃絶年代を主とし、記載がないものは共伴遺物の中心年代とした。

（2）出土漆製品の分類

出土漆製品の名称は掲載報告書に拠るが、適宜修正・統一した。分類は『行元寺跡』の「江戸遺跡出土木製品の製作技法と用途分類」（越村 2003）を参考とし、以下の 8 つとした。なお、図 1-1 には上記の文献から漆製品の代表的なものを選び、図示した。

①食事道具・調理具

椀類、椀類蓋、杯、皿類、鉢、盆、棗、器台類、膳類、三方、鍋類蓋、重箱、湯桶、水注、匙、杓子、箸、切匙、箆、栓、柄、柄杓など

②生産道具

刷毛、糸巻など

③調度・収納具

箱類、櫃類、鏡箱、鏡台、化粧道具、櫛台、花生、燭台、灯台、提灯、手桶など

④装身具

櫛、簪、笄、扇子、入れ歯、印籠、根付、紅板、紅猪口、煙草入れ、口薬入れ、袋物（編み物）、煙管、下駄、傘など

⑤玩具・遊戯具

駒、浮子、独楽、面、ミニチュア製品、人形、羽子板など

⑥漆工用具

定盤、漆液容器、溜容器、漆箆、漆刷毛、貝パレット、濾し紙、濾し布、漆塊など

⑦建築材

建材、釣瓶など

⑧その他（信仰・儀礼用具、文具、武器・武具、楽器など）

獅子頭、龍頭、卒塔婆、位牌、呪符札、暦札、筆類、羅針盤、磁針、木刀、鞘、太刀、掛け軸、太鼓など

⑨用途不明

合子、蓋物類、曲物類、容器類、桶・樽類など

2 漆製品の出土点数・行政区ごとにみる様相

(1) 出土点数の変遷

全 262 遺跡からの漆製品総出土点数は 9,469 点であった。図 1-2 はその内訳を武家地、町人地、寺社地の遺跡性格ごとに示したものである。総出土点数の約 8 割が武家地からの出土であった。これは御府内の面積の 69%が武家地であるため、近世江戸遺跡の対象遺跡の多くが武家地に該当することによると考えられる。

次に図 1-3 は総出土点数の 16 世紀、17 世紀、18 世紀、19 世紀という時期別推移を示したものである。17、18 世紀代の出土点数が多く、両時代とも 3,000 点を越えるが、19 世紀代に入ると約 900 点まで減少する。ただし、16 世紀は 16 世紀末から、19 世紀は明治元年（1868）までを対象としているため出土点数に偏りが生じていることを念頭におく必要がある。

(2) 行政区ごとの様相

ここでは、現在の行政区別に出土漆製品の様相の概略を述べる（附表 1-1 近世江戸遺跡出土漆製品一覧表）。

・千代田区

〔武家地〕31 遺跡が該当する。東京駅八重洲北口遺跡、外神田四丁目遺跡の 2 遺跡が 16 世紀代に出土し、18 世紀もしくは 19 世紀代まで継続して出土している。江戸城三の丸地区、一ツ橋二丁目遺跡など 9 遺跡が 17 世紀代に、有楽町一丁目遺跡、紀尾井町遺跡など 8 遺跡が 17～18 世紀代に、飯田町遺跡、溜池遺跡など 7 遺跡が 17～19 世紀代に出土している。屋敷地ではないが、江戸城外堀に該当する丸の内一丁目遺跡、江戸城外堀跡市谷御門外橋詰・御堀端では、江戸城の城郭が整備され土地利用が開始される 17 世紀代以降に出土している。

出土点数は食事道具・調理具が 1,603 点と最も多く、次いで装身具 110 点、用途不明 98 点、調度・収納具 67 点が続く。

溜池遺跡（1996）では 17 世紀代に鬢水入れ、紅板、紅猪口、櫛など、18 世紀代に櫛台など化粧に関連する調度・収納具、装身具が多くみられる。有楽町一丁目遺跡では 17 世紀代に金箔が施された門の冠木と推定される部材（波多野 2016）が出土し、隣接する屋敷の

建築材が廃棄された後、下水溝の構築材に転用されたと考えられている。同遺跡では、本稿で集成対象としなかった金箔瓦も出土している。瓦に金箔を貼るための接着剤として漆が使用された。外神田四丁目遺跡では漆箆、刷毛、定盤など漆工用具の一括して出土し、16 世紀代のものである。飯田町遺跡では江戸遺跡のなかで最も多い 16 点の浮子が 19 世紀代に出土し、庭園の泉水と中島が検出されていることから、大名庭園の泉水が魚釣りの場所でもあったことが窺える。

〔町人地〕5 遺跡が該当する。江戸城外堀跡四谷御門外町屋跡、尾張藩麹町邸跡Ⅳ、外神田一丁目遺跡の 3 遺跡が 17 世紀代に、岩本町二丁目遺跡、都立一橋高校遺跡の 2 遺跡が 18 世紀代に出土している。

出土点数は食事道具・調理具が 69 点と最も多く、次いで調度・収納具 6 点が続く。

〔寺社地〕都立一橋高校遺跡、弥勒寺跡・栖岸院跡、溜池遺跡（1997）の 3 遺跡が該当する。都立一橋高校遺跡が 17 世紀代に、弥勒寺跡・栖岸院跡、溜池遺跡が 17～18 世紀代に出土している。都立一橋高校遺跡、弥勒寺跡・栖岸院跡の 2 遺跡が墓地遺跡で、溜池遺跡は墓地以外の寺社遺跡である。

出土点数は食事道具・調理具が 152 点と最も多く、次いで装身具 14 点が続く。

〔その他〕河岸地である外神田一丁目遺跡が該当する。17～19 世紀代に出土している。出土点数は食事道具・調理具が 17 点と最も多い。

・中央区

〔武家地〕9 遺跡が該当する。明石町遺跡が 18 世紀代の出土であるが、他は全て 17 世紀代以降に出土している。

出土点数は食事道具・調理具が 108 点と最も多く、次いで用途不明 11 点、装身具が 8 点が続く。

〔町人地〕6 遺跡が該当する。八丁堀二丁目遺跡が 18 世紀代以降の出土であるが、他は全て 17 世紀代以降に出土し、18 世紀もしくは 19 世紀代まで継続して出土している。

出土点数は食事道具・調理具が 180 点と最も多く、次いで調度・収納具 26 点、用途不明 19 点、装身具 17 点が続く。

〔寺社地〕八丁堀三丁目遺跡、八丁堀三丁目遺跡Ⅱの 3 遺跡が該当する。前者は 17 世紀代に出土し、後者は 16～17 世紀代に出土している。八丁堀三丁目遺跡は墓地遺跡で、八丁堀三丁目遺跡Ⅱは墓地遺跡と墓地以外の寺社遺跡である。

出土点数は食事道具が 13 点と最も多く、次いで装身具が 8 点、その他（信仰・儀礼用

具、文具、武器・武具、楽器など）7 点が続く。

・港区

〔武家地〕31 遺跡が該当する。愛宕下遺跡Ⅱが 16 世紀代に、汐留遺跡Ⅰが 17 世紀代に、愛宕下遺跡、汐留遺跡、旗本田中家屋敷跡遺跡など 16 遺跡が 17 世紀代に出土し、18 世紀もしくは 19 世紀代まで継続して出土している。播磨赤穂藩森家屋敷跡遺跡Ⅱなど 5 遺跡が 18 世紀代に、筑前福岡藩黒田家屋敷跡遺跡、石見津和野藩亀井家屋敷跡遺跡Ⅱの 2 遺跡が 18～19 世紀代、港区№91 遺跡など 5 遺跡が 19 世紀代に出土している。特に愛宕下遺跡、汐留遺跡は 17～19 世紀代まで継続的に土地利用がみられ、大規模な発掘調査がおこなわれた遺跡である。

出土点数は食事道具・調理具が 1,902 点と最も多く、次いで用途不明 245 点、調度・収納具 208 点、装身具 97 点である。

汐留遺跡Ⅲ・Ⅳでは 17 世紀代に耳盥、櫛など、18 世紀代に鏡箱など化粧に関連する調度・収納具、装身具がみられる。汐留遺跡Ⅱでは江戸遺跡のなかで最も多い 7 点の南部箔椀が出土し、17 世紀前～中葉のものである。次いで多い 5 点が愛宕下遺跡Ⅲから出土している。また、屋敷地ではないが、幕府の施設である品川台場（第 5）遺跡は出土点数は少なく、台場建設や台場利用にともなうもので、19 世紀代のものである。

〔町人地〕4 遺跡が該当する。麻布龍土町町屋敷跡遺跡は 18 世紀代に、芝田町五丁目町屋跡遺跡は 18～19 世紀代に、芝神谷町町屋跡は 19 世紀代に出土している。

出土点数は食事道具・調理具が 17 点と最も多く、次いで用途不明 16 点、装身具 8 点が続く。

〔寺社地〕8 遺跡が該当する。済海寺長岡藩牧野家墓所が 18 世紀代以降の出土であるが、他は全て 17 世紀代以降に出土している。墓地遺跡が 5 遺跡、墓地以外の寺社遺跡が 3 遺跡である。

出土点数は食事道具・調理具が 204 点と最も多く、次いでその他（信仰・儀礼用具、文具、武器・武具、楽器など）68 点、装身具 33 点が続く。

増上寺寺域第 2 遺跡では、17 世紀代に宝塔覆屋と推定される部材（天木 2014）が出土している。済海寺長岡藩牧野家墓所では、11 代藩主忠寛墓の副葬品の印籠に土田宗悦銘 4 点、桃葉（飯塚桃葉か）銘 3 点があり、モチーフも稲束、鶴、蝶、千鳥、兎などでそれぞれ高蒔絵、蒔絵、螺鈿が施された優品である。増上寺子院群では、江戸遺跡のなかで最も多い 55 点の位牌が 18 世紀代に出土している。

・新宿区

〔**武家地**〕46 遺跡が該当する。行元寺跡が 16～19 世紀代に出土している。若宮町遺跡、市谷左内町遺跡の 2 遺跡が 17 世紀代に、新小川町遺跡、尾張藩上屋敷跡遺跡など 15 遺跡が 17 世紀代以降、18 世紀もしくは 19 世紀代まで継続して出土する。市谷砂土原三丁目遺跡、市谷甲良町遺跡、荒木町など 13 遺跡が 18 世紀代に、三栄町遺跡など 4 遺跡が 18～19 世紀代に、払方町遺跡、四谷一丁目遺跡、信濃町遺跡など 10 遺跡が 19 世紀代に出土している。

出土点数は食事道具・調理具が 592 点と最も多く、次いで漆工用具 559 点、用途不明 182 点、調度・収納具 110 点が続く。

尾張藩上屋敷跡遺跡では 18～19 世紀代の漆工用具が多く、特に尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅸでは江戸遺跡のなかで最も多い 408 点の濾し紙が 18 世紀代に出土している。新宿区内の漆工用具は主に 18 世紀代もしくは 19 世紀代に出土し、その多くは払方町遺跡、矢来町遺跡、市谷甲良町遺跡のように貝パレット、濾し紙のみ出土する。一方、坂町遺跡から出土した漆液容器、溜容器、漆箆、漆刷毛、貝パレット、濾し紙は漆工用具の一括の資料で 18 世紀代のものである。

また、尾張藩上屋敷跡遺跡では、金属、紙、石製品などの様々な素材に漆が塗布されたものが 18～19 世紀代に出土している。その他払方町遺跡で漆塗土器、住吉町南遺跡・市谷台町遺跡・住吉町西遺跡Ⅱで漆塗駕籠製品、市谷砂土原三丁目遺跡、四谷一丁目遺跡、信濃町南遺跡で陶胎漆器が 18 世紀もしくは 19 世紀代に出土している。陶胎漆器はいずれも小碗か小鉢とみられる小型の飲食器で、生産地が不明なものが大半であるが、胎土から京・信楽系陶器と推定される。内藤町遺跡ではオオカミ上顎骨加工品が 19 世紀代に出土し、上顎骨を削り漆で固め、垂下できるように穿孔を施したものである。これは、修験道などに関わる呪具と指摘されている（金子 1992、植月 2008）。

〔**町人地**〕16 遺跡が該当する。山吹町遺跡、市谷田町一丁目遺跡、細工町遺跡など 7 遺跡が 17 世紀代以降に出土し 18 世紀代もしくは 19 世紀代まで継続して出土する。南伊賀町遺跡、四谷一丁目遺跡の 2 遺跡が 18 世紀代に、四谷四丁目遺跡Ⅲ、南元町遺跡Ⅲなど 4 遺跡が 18～19 世紀代に、若葉三丁目遺跡Ⅱ、新宿四丁目遺跡の 2 遺跡が 19 世紀代に出土している。

出土点数は食事道具・調理具が 130 点と最も多く、次いで装身具 16 点、調度・収納具 15 点、漆工用具 15 点が続く。

漆工用具は武家地と同様に 18 世紀代もしくは 19 世紀代から出土している。その多くは四谷一丁目遺跡Ⅲ、南伊賀町遺跡のように貝パレット、濾し紙のみ、または市谷薬王寺Ⅴ・市谷柳町Ⅱ、細工町遺跡のように溜容器と貝パレットの組み合わせである。南元町遺跡Ⅲでは 19 世紀代に厨子と推定される部材（北野 2015）が出土し、隣接する寺院の建築材が廃棄された後、下水溝の構築材に転用されたと考えられている。木胎以外に漆が塗布された製品は、新宿四丁目遺跡で陶胎漆器 1 点が出土し、19 世紀代のものである。

〔寺社地〕14 遺跡が該当する。自證院遺跡（2 次）、南山伏町遺跡の 2 遺跡が 17 世紀代に、發昌寺跡、崇源寺・正見寺跡の 2 遺跡が 17～19 世紀代に出土している。法正寺遺跡、全勝寺遺跡Ⅱなどの 5 遺跡が 18 世紀代に、南元町遺跡Ⅱなどの 3 遺跡が 18～19 世紀代に出土している。墓地遺跡が 10 遺跡、法光寺跡、天龍寺跡、南山伏町遺跡、市谷薬王寺Ⅴ・市谷柳町Ⅱの 4 遺跡が墓地以外の寺社遺跡である。

出土点数は、食事道具・調理具が 57 点と最も多く、次いで玩具・遊戯具 44 点、装身具 42 点が続く。發昌寺跡では、江戸遺跡の中でも非常に残存度の高い朽木盆 1 点が出土している。

・文京区

〔武家地〕20 遺跡が該当する。春日町遺跡Ⅲ・Ⅳ地点が 16 世紀代に出土している。東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院地点が 17 世紀代に、東京大学本郷構内の遺跡工学部 14 号館地点、小石川牛天神下遺跡などの 7 遺跡が 17 世紀代以降に出土し 18 世紀代もしくは 19 世紀まで継続して出土する。本郷追分遺跡、春日町遺跡Ⅰ、大塚町遺跡第 5 地点など 6 遺跡は 18 世紀代に、東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院外来診察棟地点、諏訪町遺跡、春日町東遺跡の 3 遺跡が 19 世紀代に出土している。

出土点数は食事道具・調理具が 897 点と最も多く、次いで用途不明 92 点、漆工道具 60 点が続く。

漆工用具は、屋敷地拝領者の交替が少ない東京大学本郷構内の遺跡、春日町遺跡で多くみられる。東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院入院棟 A 地点では、拝領者である加賀藩前田家の家紋である梅鉢が黒色漆で描かれた門の一部と推定される部材が出土した。東京大学本郷構内の遺跡工学部 1 号館地点では江戸遺跡のなかで最も多い 4 点の吉野椀が出土し、18 世紀代のものである。木胎以外に漆が塗布された製品は、小石川牛天神下遺跡で竹胎漆器 1 点が出土し、日影町遺跡Ⅲで陶胎漆器 2 点が出土し、後者は 18～19 世紀代のものである。

〔**町人地**〕駒込嘉町遺跡第 3 地点、本郷五丁目東遺跡の 2 遺跡が該当する。前者は 19 世紀代に、後者は 17 世紀代に出土している。

出土点数は少なく、それぞれの遺跡で 1 点ずつで、前者は食事道具・調理具 1 点、後者は漆工用具 1 点である。木胎以外に漆が塗布された製品は、駒込浅嘉町遺跡第 3 地点で陶胎漆器 1 点が出土し、19 世紀代のものである。

〔**寺社地**〕昌林院跡、護国寺門前町遺跡、本郷五丁目西遺跡の 3 遺跡が該当する。護国寺門前町遺跡、本郷五丁目西遺跡の 2 遺跡が墓地遺跡、昌林院跡が墓地以外の寺社遺跡である。護国寺門前町遺跡は 17 世紀代に出土している。

出土点数はその他（信仰・儀礼用具、文具、武器・武具、楽器など）が 7 点と最も多く、次いで装身具 4 点が続く。

・台東区

〔**武家地**〕14 遺跡が該当する。浅草福井町遺跡、上車坂町遺跡などの 5 遺跡は 17 世紀代に、向柳原町遺跡、白鴎遺跡の 2 遺跡は 17～18 世紀に出土している。二長町東遺跡、上野花園町遺跡などの 4 遺跡は 18 世紀代に、仲御徒町遺跡など 3 遺跡は 18～19 世紀代に出土している。

出土点数は食事道具・調理具が 183 点と最も多く、次いで調度・収納具 36 点、用途不明 31 点が続く。

〔**町人地**〕浅草福井町遺跡、豊住町遺跡、浅草寺西遺跡の 3 遺跡が該当する。それぞれ 17～18 世紀代、18～19 世紀代、19 世紀代に出土している。

出土点数は食事道具・調理具 33 点と最も多く、次いでその他（信仰・儀礼用具、文具、武器・武具、楽器など）5 点が続く。

その他（信仰・儀礼用具、文具、武器・武具、楽器など）として、豊住町遺跡では鞘 3 点、鍔 1 点、浅草福井町遺跡では鞘 1 点が出土し、いずれも武器・武具である。

〔**寺社地**〕11 遺跡が該当する。竜泉寺町遺跡、北稲荷町遺跡の 2 遺跡は 17 世紀代に、池之端七軒町遺跡、№120 遺跡の 2 遺跡は 17 世紀代以降に出土し、18 世紀代もしくは 19 世紀代まで継続して出土している。浅草松清町遺跡、東叡山寛永寺護国院の 2 遺跡は 18 世紀代に、東叡山寛永寺徳川将軍家御裏方霊廟、入谷遺跡の 2 遺跡は 18～19 世紀代に、№68 遺跡は 19 世紀代に出土している。墓地遺跡が 6 遺跡、墓地以外の寺社遺跡が 5 遺跡である。

出土点数は食事道具・調理具が 47 点と最も多く、次いでその他（信仰・儀礼用具、文具、武器・武具、楽器など）19 点、調度・収納具 16 点が続く。一方、墓地遺跡である東

叡山寛永寺護国院、東叡山寛永寺徳川将軍家御裏方霊廟では調度・収納具が 15 点と最も多く、次いでその他（信仰・儀礼用具、文具、武器・武具、楽器など）10 点であり、台東区内の他の墓地遺跡とは異なる様相を示している。

〔その他〕御府内の耕作地である芝崎町二丁目遺跡が該当する。17～18 世紀代に出土している。出土点数は食事道具・調理具が 6 点と最も多い。

・墨田区

〔武家地〕11 遺跡が該当する。錦糸四丁目遺跡は 17 世紀代に出土し、錦糸町駅北口遺跡Ⅰ、江東橋二丁目遺跡Ⅱ、錦糸四丁目遺跡、千歳三丁目遺跡、陸奥弘前藩津軽家上屋敷跡の 4 遺跡は 17 世紀代以降に出土し 18 世紀代もしくは 19 世紀代まで継続して出土している。江東橋二丁目遺跡Ⅲ、肥前平戸新田藩下屋敷跡の 2 遺跡は 18 世紀代に出土し、江東橋二丁目遺跡、陸奥弘前藩津軽家上屋敷跡Ⅱ、本所一丁目遺跡の 3 遺跡は 18 世紀代に出土し、19 世紀代まで継続して出土している。

出土点数は食事道具・調理具が 109 点と最も多く、次いで調度・収納具 18 点、装身具 17 点が続く。また、屋敷地ではないが、幕府の御蔵である横網一丁目遺跡では本所御蔵として利用が始まる 18 世紀代に出土している。

〔町人地〕太平一丁目遺跡が該当する。17 世紀代に出土しており、出土点数は食事道具・調理具 4 点である。

〔寺社地〕本所一丁目 27 遺跡、大雲寺跡・墨田区№18 遺跡の 3 遺跡が該当する。本所一丁目 27 遺跡は 17 世紀代に、大雲寺跡・墨田区№18 遺跡は 17 世紀代以降に出土がある。前者は墓地以外の寺社遺跡、後者は墓地以外の寺社遺跡と墓地遺跡である。

出土点数は食事道具・調理具が 6 点と最も多く、次いで玩具・遊戯具 1 点である。

〔その他〕御府内の田地である横川一丁目遺跡が該当する。出土点数は食事道具・調理具 3 点が最も多い。18 世紀代に出土がみられるが、詳細な時期が不明なものが多い。。

・江東区

〔武家地〕千田遺跡が該当する。18～19 世紀代に出土している。出土点数は食事道具・調理具が 3 点、装身具が 3 点と最も多い。

〔寺社地〕雲光院遺跡が該当する。墓地遺跡で 19 世紀代に出土している。出土点数は玩具・遊戯具が 4 点と最も多い。

・渋谷区

〔武家地〕4 遺跡が該当する。千駄ヶ谷五丁目遺跡、千駄ヶ谷五丁目遺跡（2 次）の 2 遺

跡は 17～19 世紀代、青山学院大学構内遺跡は 18～19 世紀代、青山学院大学構内遺跡第 5 地点は 19 世紀代に出土している。

出土点数は食事道具・調理具が 77 点と最も多く、次いで装身具 23 点、調度・収納具 4 点が続く。

・豊島区

〔武家地〕東池袋遺跡Ⅰ、東池袋遺跡Ⅱ、染井遺跡Ⅲ、染井遺跡Ⅺの 4 遺跡が該当する。全ての遺跡が 18 世紀代に出土している。

各遺跡の出土点数は少なく、出土点数は食事道具・調理具が 8 点と最も多く、次いで調度・収納具 2 点、装身具 2 点が続く。

〔町人地〕巣鴨町遺跡Ⅲ、染井遺跡Ⅶ、雑司ヶ谷遺跡Ⅴの 3 遺跡が該当する。雑司ヶ谷遺跡Ⅴが 18 世紀代に、染井遺跡Ⅶが 18～19 世紀代に、巣鴨町遺跡Ⅲが 19 世紀代に出土している。

出土点数は食事道具・調理具が 6 点と最も多く、次いで漆工用具 2 点である。木胎以外に漆が塗布された製品は、染井遺跡Ⅶで陶胎漆器 1 点が出土し、19 世紀代のものである。

・北区

〔その他〕江戸の周辺村落である袋低地遺跡が該当する。食事道具・調理具 8 点、調度・収納具 1 点が出土しており、近世のものであるが詳細な時期は不明である。

・板橋区

〔その他〕将軍家の狩場周辺で水田地帯である高島平北遺跡が該当する。食事道具・調理具 4 点が出土しており、18 世紀代のものである。

(3) 主要器種の様相

ここでは、用途分類の主要器種の時期ごとの様相を述べる。表 1-1 は、出土点数の多い上位の器種をまとめたものである。調度類などは除き、箱類など具体的な器種がわかるもののみを対象とした。なお、先述のように 16 世紀は 16 世紀末から、19 世紀は明治元年(1868)までを対象としているため出土点数に偏りが生じていることを念頭におく必要がある。

・食事道具・調理具

出土点数上位 6 器種は椀類 3,170 点、椀類蓋 1,302 点、膳類 238 点、杯 119 点、杓子 94 点、皿類 52 点である。杯を除いた 5 器種は、いずれも 16 世紀代以降に出土がみられる。

上位 6 器種全てで 17、18 世紀代の出土点数が多い。椀類、椀類蓋の出土点数が圧倒的に多く、食事道具・調理具全体の約 70%を占める。

・生産道具

生産道具は刷毛、糸巻の 2 器種のみ該当し、出土点数が最も多い器種は刷毛 22 点である。17 世紀代以降に出土がみられる。糸巻は 2 点と少ない。

・調度・収納具

出土点数上位 3 器種は箱類 205 点、櫃類 74 点、鏡箱 40 点である。箱類は 16 世紀代以降に、箱類を除いた 2 器種はいずれも 17 世紀代以降に出土がみられる。上位 3 器種全てで 18 世紀代の出土点数が多い。鏡箱はそのほとんどが柄鏡形で、装飾のない褐色漆で塗られている非常に簡素なつくりのものが多い。なかには柿渋と観察記載されているものがあり、漆か否かの判別が目視では困難な状況であったことがわかる。

・装身具

出土点数上位 3 器種は櫛 173 点、下駄 148 点、傘 29 点である。下駄は 16 世紀代以降に、下駄を除いた 2 器種はいずれも 17 世紀代以降に出土がみられる。櫛、下駄は 17 世紀代の出土点数が多く、17 世紀以降も 30 点以上が出土しており安定的である。

上位 3 器種以外ではあるが、18 世紀以降に多く出土がみられるものとして煙管（11 点）が挙げられる。これは管の部分が竹や木を用いた羅宇きせるで（谷田 2000）、羅宇の部分に漆が塗られている。

・玩具・遊戯具

出土点数上位 2 器種は浮子 37 点、独楽 8 点である。いずれも 17 世紀代以降に出土がみられる。

・漆工用具

出土点数上位 2 器種は濾し紙 497 点、貝パレット 73 点である。濾し紙は 18 世紀代以降に、貝パレットは 17 世紀代以降に出土がみられる。上位 2 器種全てで 18 世紀代の出土点数が多い。濾し紙の出土点数が圧倒的に多く、漆工用具全体の約 70%を占める。

・建築材

表中に出土点数を示していないが、近世江戸遺跡の漆製品のなかでも出土点数は最も少なく、総出土点数全体の 1%にも満たない 13 点である。新宿区南元町遺跡Ⅲの部材のみ 19 世紀代の出土であり、他の全ては 17 世紀代に出土している。

・その他（信仰・儀礼用具、文具、武器・武具、楽器など）

出土点数上位 3 器種は位牌 86 点、鞘 19 点、鍔 7 点である。上位 3 器種全てが 17 世紀代以降に出土がみられる。また、上位 3 器種全てで 18 世紀代の出土点数が多い。

3 墓と漆製品

前節では、近世江戸遺跡から出土した漆製品を主に武家地、町人地、寺社地に分けて集成した。しかし実際には、特に武家地、町人地において同じ調査地点でも土地の拝領者、居住者の変化が著しく且つ複雑である。また、武家地であっても拝領者には大名や旗本、御家人など家禄の違いがあり、同じ大名屋敷の中に御殿空間と詰人空間がみられるように、異なる階層が居住している（吉田 1988）。一方、前節で述べたように寺社地は 46 遺跡中 27 遺跡が墓地遺跡であり、寺社地全体の約 59%を占める。これは寺社地の出土遺物が寺社施設の遺構だけでなく、寺院に付属した墓出土の副葬品が多く含まれていることを示す。したがって、本節では墓に副葬された漆製品について若干の考察を試みることにしたい。

江戸の近世墓制・葬制の考古学的研究は、1960 年代の増上寺徳川将軍墓の調査以来の蓄積がある。江戸の墓制の特徴として、遺体を納める埋葬施設の構造が多様であり、それは家の格式、被葬者の身分・階層との対応関係にあることが挙げられる（谷川 1991）。埋葬施設と被葬者の身分・階層は、石槨石室墓が徳川将軍家、石室墓が大名、木槨甕棺墓が高禄旗本、甕棺墓が低禄旗本、方形木棺墓、円形木棺が下級武士・町人と対応している。ただし、町人の墓でも町名主は甕棺墓である（谷川 2011）。

また、副葬品も身分・階層に拘束されるものがあったが、徐々に身分・階層間を下降し広がっていった。具体的には、17 世紀の徳川将軍家、大名の墓には豊富な武器・武具類がみられるものが多い。18 世紀以降になると武器・武具類は少ないか、持たないものが主体となる。その他の副葬品は被葬者の個性を反映し、18 世紀以降になると下級武士や町人の墓でも文房具・化粧道具・喫煙具などの個人の持ち物が副葬された（谷川 2011）。

以上のことから、副葬品には武家地、町人地という遺跡性格に相当する身分・階層性が反映されることがわかる。寺社地出土資料のうち、墓から出土した漆製品を身分・階層性の指標となる埋葬施設別に一覧にした（附表 1-2 近世江戸遺跡墓地出土副葬品一覧表）。本章では副葬品の中から漆製品のみを抽出したため、ここから副葬品の全体像を述べることができない。しかし、宮城県仙台市伊達家三代の瑞鳳殿、感仙殿、善応殿出土品や婚礼調度に代表されるような大名調度に漆製品が多く用いられていることから鑑みても、副葬品における漆製品の格式は高く、個人への帰属性が強いものと考える。

徳川将軍墓における副葬品を用途分類別にみると、調度・収納具、その他（信仰・儀礼用具、文具、武器・武具、楽器など）の順に多い。出土点数の最大は 13 点（19 世紀中葉、女性）であるが、墓 1 基あたりの出土点数の平均は 3.5 点であった。年齢による出土点数比は（ここでは乳児・乳幼児・幼児・小児と青年以上に大別した）、2（乳児・乳幼児・幼児・小児）:3.6（青年以上）と青年のほうが多く、さらに性別による出土点数比は 2.6（男）:4（女）と女性のほうが多い。

石室墓における副葬品を用途分類別にみると、調度・収納具、装身具の順に多い。出土点数の最大は 13 点（18 世紀後葉、男性）であるが、墓 1 基あたりの平均は 4.6 点であった。性別による出土点数比は石室墓で 5:4 と男女間で大差がなかった。

木槨甕棺墓における副葬品を用途分類別にみると、調度・収納具、装身具の順に多い。出土点数の最大は 8 点（18 世紀前葉、幼児）であるが、墓 1 基あたりの平均は 4 点であった。年齢による出土点数比は 5.5:4 で大差がなかった。

このように木槨甕棺墓以上になると調度・収納具では手箱などの箱類が、装身具では印籠、根付が、その他（信仰・儀礼用具、文具、武器・武具、楽器など）では厨子などの仏具が通時的に男女を問わず特徴的である。これらはいずれも蒔絵などの金装飾が施された優品である。さらに、石室墓以上の男性になると飾太刀、烏帽子が特徴的で、身分・階層性だけでなく性別の拘束が強い副葬品と考えられる。

一方、甕棺墓における副葬品を用途分類別にみると、装身具、食事道具・調理具の順に多く、食事道具・調理具が上位に位置づけられる。出土点数の最大は 6 点（18 世紀前半、乳幼児と 18 世紀後半、熟年男性）であるが、墓 1 基あたりの平均は 2.3 点であった。年齢による出土点数比は 2.8:2.1 で、性別による出土点数比は 2.3:2.1 と男女間、年齢間で大差がなかった。

方形木棺墓における副葬品を用途分類別にみると、食事道具・調理具、玩具・遊戯具の順に多い。出土点数の最大は 6 点（19 世紀前半、乳幼児）であるが、墓 1 基あたりの平均は 1.7 点であった。年齢による出土点数比は 3:1.5 と乳児・乳幼児・幼児・小児のほうが多いが、性別による出土点数比は 1.6:1 と男女間で大差がなかった。

円形木棺墓における副葬品を用途分類別にみると、方形木棺墓と同様に食事道具・調理具、玩具・遊戯具の順に多い。出土点数の最大は 33 点（17 世紀後葉、小児）であるが、墓 1 基あたりの平均は 2.1 点であった。年齢による出土点数比は 3.2:1.5 と乳児・乳幼児・幼児・小児のほうが多いが、性別による出土点数比は 1.4:1.8 と方形木棺墓と同様に男女

間で大差がなかった。さらに方形木棺と円形木棺に共通する傾向として、両者とも食事道具・調理具と玩具・遊戯具の割合が多く、その内容のほとんどが椀類で時期や男女、年齢を問わない点である。椀と椀蓋がセットになっており、黒色の地塗りに赤色で松竹文が施された漆椀が多くみられる。松竹文はハレの文様とされ、ハレに関連する器物に施文されることが多い。これは、生前に個人やその家の持ち物である椀を副葬する習俗が反映していると思われる。

また、装身具は全ての埋葬施設で 10%以上を占め、安定的に出土している。その内容は櫛が圧倒的に多く、17 世紀～19 世紀代まで連続して男女、年齢を問わず副葬され、身分・階層に拘束されない副葬品といえる。その理由として、櫛は魔除けの呪力をもっていたことが指摘されている（谷川 2011）。

以上のように、埋葬施設ごとに用途分類別の特徴があらわれ、身分・階層性が反映している一方、櫛のように身分・階層に拘束されない副葬品があることがわかった。

結語

本章では、近世江戸遺跡の報告書の集成から漆製品の出土状況と傾向について述べてきた。

出土点数の変遷においては、総出土点数の約 8 割が武家地からの出土であること、17、18 世紀代の出土点数は 3,000 点を越えるが、19 世紀代に入ると約 900 点まで減少することが明らかとなった。

現在の行政区ごとにみる出土漆製品の様相においては、千代田区 40 遺跡（武家地 31 遺跡、町人地 5 遺跡、寺社地 3 遺跡、その他 1 遺跡）、中央区 18 遺跡（武家地 9 遺跡、町人地 6 遺跡、寺社地 3 遺跡）、港区 43 遺跡（武家地 31 遺跡、町人地 4 遺跡、寺社地 8 遺跡）、新宿区 76 遺跡（武家地 46 遺跡、町人地 16 遺跡、寺社地 14 遺跡）、文京区 25 遺跡（武家地 20 遺跡、町人地 2 遺跡、寺社地 3 遺跡）、台東区 29 遺跡（武家地 14 遺跡、町人地 3 遺跡、寺社地 3 遺跡、その他 1 遺跡）、墨田区 16 遺跡（武家地 11 遺跡、町人地 1 遺跡、寺社地 3 遺跡、その他 1 遺跡）、江東区 2 遺跡（武家地 1 遺跡、寺社地 1 遺跡）、渋谷区 4 遺跡（武家地 4 遺跡）、豊島区 7 遺跡（武家地 4 遺跡、町人地 3 遺跡）、北区 1 遺跡（その他 1 遺跡）、板橋区 1 遺跡（その他 1 遺跡）から漆製品が出土したことが明らかとなった。行政区もしくは行政区内においても、漆製品の出土が 17 世紀代以降の遺跡と 18 世紀代以降の遺跡に大別できる傾向がみられた。

主要器種の変遷においては、椀類 3,170 点、椀蓋類が 1,302 点の出土点数が圧倒的に多く、食事道具・調理具の約 70%、総出土点数の約 50%を占めることがわかった。表 1 に挙げた上位器種 20 の器種全てで 17、18 世紀代の出土点数が多いが、12 の器種で 18 世紀代の出土点数がより多く、特に調度・収納具、漆工用具、その他（信仰・儀礼用具、文具、武器・武具、楽器など）でその傾向がみられる。食事道具・調理具では椀類、膳類などの食事道具が切匙、箆などの調理具よりも多く、調度・収納具では箱類、櫃類などの収納具（調度の要素を含むが）が櫛台、燭台などの調度よりも多い。また、その他（信仰・儀礼用具、文具、武器・武具、楽器など）では位牌、鞘などの信仰・儀礼用具、武器・武具が筆類、太鼓などの文具、楽器よりも多いことがわかった。

また、墓に副葬された漆製品においては、従来の近世墓制・葬制の考古学的研究の成果を踏まえると、埋葬施設ごとに異なる副葬品の様相が認められた。全ての埋葬施設で櫛などの装身具は共通してみられる一方、甕棺墓より下位になると食事道具・調理具の出土点数が多くなる傾向にある。

本章では、近世江戸遺跡出土の漆製品を行政区ごとに武家地、町人地、寺社地に大別したが、実際には同一の遺跡において、その土地利用や遺物の廃棄のあり方が複雑であることから、今後は個々の遺跡内で遺構単位での漆製品の検討をおこなう必要があるだろう。どのような遺跡から（遺跡性格・遺構）、どのような漆製品（用途分類・器種）が出土し、それはどのような質（材質・製作技法）であるかという知見を蓄積することによって、より明確な漆製品の様相が明らかになると考えられる。すなわち、器種の分類などの考古学的な遺物の観察、漆製品の材質・製作技法の文化財科学的な分析、遺物の出土状況と遺構と遺跡の性格を総合的に捉えることが今後の課題であると思われる。

出典略称

（自）『自證院遺跡』、（芝）『旧芝離宮庭園』、（發Ⅱ）『發昌寺跡（2次）』、（自Ⅱ）『自證院遺跡Ⅱ』、（細）『細工町遺跡』、（溜）『溜池遺跡』（1996）、（市御）『江戸城跡外堀市谷御門外橋詰・御堀端』、（住）『住吉町南遺跡　市谷台町遺跡　住吉町西遺跡』、（汐）『汐留遺跡Ⅱ』、（坂）『坂町遺跡』、（行）『行元寺跡』

※注記のないものはS=1:10

図 1-1　江戸遺跡出土の主要な漆製品（越村 2003 より抜粋・一部改変）

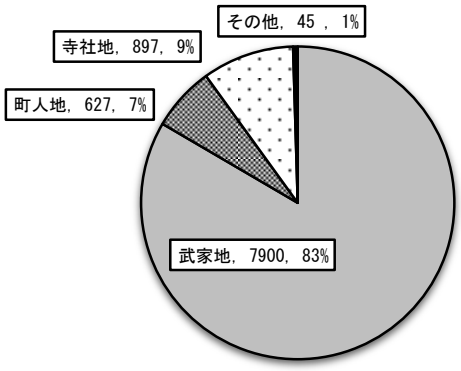

図 1-2 遺跡性格ごとの出土点数内訳

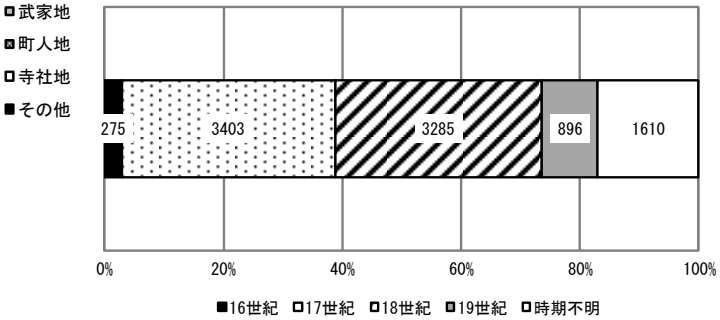

図 1-3 出土点数の時期別推移

表 1-1 出土点数上位器種一覧

用途分類	器種		16世紀	17世紀	18世紀	19世紀
食事道具・調理具	椀類	武家地	157	1517	825	221
		町人地	0	71	131	31
		寺社地	1	136	74	6
		合計	**3,170**	**158**	**1,724**	**1,030**	**258**
食事道具・調理具	椀類蓋	武家地	54	625	400	102
		町人地	0	10	33	10
		寺社地	0	41	25	2
		合計	**1,302**	**54**	**676**	**458**	**114**
食事道具・調理具	膳類	武家地	4	90	92	16
		町人地	0	7	9	5
		寺社地	0	8	7	0
		合計	**238**	**4**	**105**	**108**	**21**
食事道具・調理具	杯	武家地	0	42	42	7
		町人地	0	2	8	1
		寺社地	0	9	5	3
		合計	**119**	**0**	**53**	**55**	**11**
食事道具・調理具	杓子	武家地	1	42	36	6
		町人地	0	3	3	0
		寺社地	0	2	0	1
		合計	**94**	**1**	**47**	**39**	**7**
食事道具・調理具	皿類	武家地	3	23	15	2
		町人地	0	3	2	1
		寺社地	0	0	2	1
		合計	**52**	**3**	**26**	**19**	**4**
生産道具	刷毛	武家地	0	16	4	1
		町人地	0	1	0	0
		寺社地	0	0	0	0
		合計	**22**	**0**	**17**	**4**	**1**
調度・収納具	箱類	武家地	2	48	62	27
		町人地	0	5	16	4
		寺社地	0	8	20	13
		合計	**205**	**2**	**61**	**98**	**44**
調度・収納具	櫃類	武家地	0	22	35	7
		町人地	0	3	6	1
		寺社地	0	0	0	0
		合計	**74**	**0**	**25**	**41**	**8**
調度・収納具	鏡箱	武家地	0	2	22	6
		町人地	0	0	2	1
		寺社地	0	4	3	0
		合計	**40**	**0**	**6**	**27**	**7**

用途分類	器種		16世紀	17世紀	18世紀	19世紀
装身具	櫛	武家地	0	50	44	21
		町人地	0	0	8	7
		寺社地	0	24	15	4
		合計	**173**	**0**	**74**	**67**	**32**
装身具	下駄	武家地	3	43	28	43
		町人地	0	1	13	6
		寺社地	0	8	1	2
		合計	**148**	**3**	**52**	**42**	**51**
装身具	傘	武家地	0	5	14	1
		町人地	0	1	1	1
		寺社地	0	0	6	0
		合計	**29**	**0**	**6**	**21**	**2**
玩具・遊戯具	浮子	武家地	0	1	6	24
		町人地	0	0	0	1
		寺社地	0	1	0	4
		合計	**37**	**0**	**2**	**6**	**29**
玩具・遊戯具	独楽	武家地	0	1	1	2
		町人地	0	0	1	0
		寺社地	0	2	1	0
		合計	**8**	**0**	**3**	**3**	**2**
漆工用具	濾し紙	武家地	0	0	457	35
		町人地	0	0	5	0
		寺社地	0	0	0	0
		合計	**497**	**0**	**0**	**462**	**35**
漆工用具	貝パレット	武家地	0	5	44	16
		町人地	0	1	2	3
		寺社地	0	2	0	0
		合計	**73**	**0**	**8**	**46**	**19**
その他	位牌	武家地	0	8	3	1
		町人地	0	1	0	0
		寺社地	0	9	64	0
		合計	**86**	**0**	**18**	**67**	**1**
その他	鞘	武家地	0	5	8	0
		町人地	0	0	5	0
		寺社地	0	0	1	0
		合計	**19**	**0**	**5**	**14**	**0**
その他	鍔	武家地	0	3	3	0
		町人地	0	0	1	0
		寺社地	0	0	0	0
		合計	**7**	**0**	**3**	**4**	**0**

※時代が不明なものは除いた

附表1-1　近世江戸遺跡出土漆製品一覧

※付表1では遺跡の主体になる性格にもとづいて「武家地」、「町人地」、「寺社地」に分けて記載した。掲載順は遺跡所在地の地域にもとづいている。遺跡名は報告書名に準じた。報告書番号は【集成表掲載報告書】に付した番号である。

武家地

遺跡所在地	報告書名/遺跡名	遺跡出土総数	遺跡性格	遺跡性格別点数	用途分類	用途分類別点数	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	時期不明	報告書番号
千代田区	江戸城跡三の丸地区	6	武家地	6	食事道具・調理具	5		椀類5				千-7
					調度・収納具	1		箱類1				
千代田区	江戸城跡和田倉遺跡	18	武家地	18	食事道具・調理具	18		椀類3	椀類9, 椀類蓋5, 杯1			千-10
千代田区	東京駅八重洲北口遺跡	62	武家地	62	食事道具・調理具	60	椀類22, 椀類蓋1, 皿類2	椀類19, 椀類蓋10, 皿類2, 杯1	椀類2, 皿類1			千-22
					用途不明	2	合子1	合子1				
千代田区	大手町一丁目遺跡	4	武家地	4	食事道具・調理具	4		椀類蓋4				千-11
千代田区	丸の内三丁目遺跡	122	武家地	122	食事道具・調理具	88		椀類41, 椀類蓋13, 杓子2			椀類21, 椀類蓋8, 皿類1, 杓子2	千-28
					生産道具	6		刷毛5			刷毛1	
					装身具	18		櫛9, 下駄2			櫛6, 下駄1	
					その他	1					錺1	
					用途不明	9		雑物類4			雑物類5	
千代田区	有楽町一丁目遺跡	16	武家地	16	食事道具・調理具	12		椀類1, 椀類蓋2, 杓子1	椀類6, 椀類蓋1, 膳類1			千-31
					装身具	1			櫛1			
					建築材	2		建材2				
					用途不明	1			曲物類1			
千代田区	有楽町二丁目遺跡	59	武家地	58	食事道具・調理具	58		椀類37, 椀類蓋18, 杓子3				千-32
			南町奉行所	1	食事道具・調理具	1			椀類1			
千代田区	九段下南一丁目遺跡	44	武家地	23	食事道具・調理具	20		椀類11, 椀類蓋9				千-16
					装身具	3		櫛1, 下駄2				
			護岸	20	食事道具・調理具	20		椀類17, 椀類蓋2, 皿類1				
			馬場	1	漆工用具	1			瓦パレット1			
千代田区	一ツ橋二丁目遺跡	17	武家地	17	食事道具・調理具	16		椀類12, 椀類蓋2, 杯1, 箸1				千-25
					用途不明	1		曲物類1				
千代田区	明治大学記念館前遺跡	98	武家地	98	食事道具・調理具	85		椀類4	椀類73, 杯1, 杓子1, 盆1		椀類4, 杯1	千-30
					調度・収納具	6			調度類6			
					装身具	5			櫛1, 煙管4			
					用途不明	2			雑物類2			
千代田区	外神田四丁目遺跡	489	武家地	489	食事道具・調理具	400		椀類200, 椀類蓋126, 杯1, 膳類8, 盆2, 杓子3, 重箱1, 箸1, 器台類1, 注口1, 把手1, 柄杓1	椀類21, 椀類蓋15, 膳類4, 器台類1	椀類蓋2, 器台類1		千-18
					調度・収納具	19		櫃類4, 箱類5, 調度類7	箱類1	櫃類1, 箱類1		
					装身具	10		櫛1, 下駄6	下駄3			
					漆工用具	40	漆筆19, 漆刷毛1, 定盤2, 不明15	椀パレット1, 漆容器（曲物）1	筆し紙1			
					その他	2		箭1, 錺1				
					用途不明	18		雑物類4, 不明10	曲物類1, 不明1	不明2		
千代田区	岩本町二丁目遺跡	22	武家地	21	食事道具・調理具	21		椀類5, 椀類蓋1, 膳類2, 盆1	椀類5, 椀類蓋5, 杯1, 膳類1			千-5
			町人地	1	食事道具・調理具	1			椀類1			
千代田区	飯田町遺跡（1995）	112	武家地	112	食事道具・調理具	83		椀類18, 椀類蓋4, 膳類5, 杓子1, 柄杓1	椀類1, 椀類蓋2, 膳類2, 杓子1	椀類2, 椀類蓋4, 膳類5	椀類20, 椀類蓋10, 膳類4, 柄3	千-1
					調度・収納具	10		櫃類4, 箱類1			櫃類4, 台1	
					装身具	4				櫛1	櫛1, 傘2	
					用途不明	15		曲物類9, 桶・樽類1	曲物類1		曲物類4	
千代田区	飯田町遺跡（2001）	124	武家地	124	食事道具・調理具	91		椀類34, 椀類蓋9, 皿類6, 杯1, 膳類1, 盆1, 杓子1, 箸2, 把手2, 柄杓1	椀類10, 椀類蓋10, 膳類4, 杓子2, 碗1	椀類3, 椀類蓋2, 箸1		千-2
					生産道具	1		糸巻1				
					調度・収納具	4		鏡台1, 櫃類1, 調度類1	鏡箱1			
					装身具	5		櫛2	櫛2, 傘1			
					玩具・遊戯具	17				浮子16	浮子1	
					その他	2		箭1	筆類1			
					用途不明	4				不明4		
千代田区	紀尾井町遺跡	56	武家地	56	食事道具・調理具	47		椀類44, 椀類蓋1, 盆1			椀類1	千-14
					調度・収納具	2		調度類2				
					装身具	1			櫛1			
					用途不明	6		不明5			不明1	
千代田区	紀尾井町遺跡Ⅱ	21	武家地	21	食事道具・調理具	19		椀類8, 椀類蓋5, 膳類1, 杓子1	椀類1, 椀類蓋1		椀類1, 皿類1	千-15
					調度・収納具	2		櫃類2				
千代田区	尾張藩麻布邸跡	12	武家地	12	食事道具・調理具	12		椀類8, 椀類蓋4				千-12
千代田	堀池遺跡（2011）	234	武家地	234	食事道具・調理具	193		椀類58, 椀類蓋12, 皿類2, 杯1, 膳類1, 盆1, 杓子2, 柄杓1	椀類48, 椀類蓋11, 皿類1, 膳類2, 盆1, 箸, 1湯桶蓋1, 柄1	椀類5, 椀類蓋3	椀類22, 椀類蓋8, 杓子1	千-21
					生産道具	1		刷毛1				
					調度・収納具	11		櫃類1, 箱類1	鏡箱2, 箱類3	箱類3	調度類1	

遺跡所在地	報告書名/遺跡名	遺跡出土総数	遺跡性格	遺跡性格別点数	用途分類	用途分類別点数	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	時期不明	報告書番号
区	溜池遺跡（1997）	[illegible]	武家地	[illegible]	装身具	19		櫛2	櫛5, 下駄2, 傘1	櫛2, 骨角製笄1, 骨角製釦1	櫛2, 簪1, 傘2	
					その他	3			位牌1, 毛抜柄1, 掛け軸1			
					用途不明	7			曲物類3, 容器類1, 不明1		薯物類1, 容器類1	
千代田区	溜池遺跡（1996）	245	武家地・寺社	245	食事道具・調理具	168		椀類21, 椀類蓋14, 鉢1, 皿類2, 杯3, 盆1, 瓶2, 杓子1, 器台類1, 柄杓1	椀類10, 椀類蓋5, 皿類1, 三方1, 杓子1, 把手1		椀類39, 椀類蓋30, 鉢5, 皿類2, 杯4, 盆3, 徳利2, 重箱2, 菓子器3, 杓子3, 箸2, 器台類1, 漆塗かわらけ1, 柄杓2, 切匙1, 栓1, 柄1	千-20
					調度・収納具	8		鬢水入れ1, 調度類2	櫛台1		鬢水入れ2, 調度類2	
					装身具	37		櫛3, 下駄2, 紅板2, 紅猪口2, 煙草入れ1	櫛1		櫛19, 笄2, 下駄5	
					玩具・遊戯具	8		独楽1, 浮子1			独楽3, 浮子1, 貝皆2	
					その他	3			獣骨呪符1		獣骨呪符1, 鞘1	
					用途不明	21		合子2, 薯物類2	薯物類2, 曲物類1, 不明1		薯物類6, 曲物類4, 不明3	
千代田区	溜池遺跡（1997）	145	武家地	2	食事道具・調理具	2			椀類1, 椀類蓋1			千-19
			寺社	76	食事道具・調理具	62		椀類28, 椀類蓋17, 鉢1, 杯4, 瓶類6, 器台類2, 柄杓2, 切匙1	瓶類1			
					生産道具	1		刷毛1				
					調度・収納具	2		鍵箱2				
					装身具	5		櫛2, 下駄2	櫛1			
					玩具・遊戯具	2		独楽2				
					漆工用具	1		漆筆1				
					用途不明	3		曲物類1, 薯物類1	薯物類1			
			護岸	67	食事道具・調理具	62		椀類5, 椀類蓋3, 瓶類1, 器台類1	椀類3, 椀類蓋1	椀類8, 椀類蓋4	椀類28, 椀類蓋8	
					調度・収納具	1		櫃類1				
					装身具	2		下駄1		骨製笄1		
					用途不明	2		薯物類1, 曲物類1				
千代田区	和泉伯太藩・武蔵岡部藩上屋敷跡遺跡	47	武家地	47	食事道具・調理具	37		椀類21, 椀類蓋2, 注口1, 瓶類2	椀類8, 椀類蓋2, 瓶類1			千-4
					調度・収納具	3		櫃類1, 箱類1		櫃類1		
					装身具	2		印籠2				
					漆工用具	4			漉し紙4			
					その他	1			鞘1			
千代田区	和泉伯太藩上屋敷跡	2	武家地	2	装身具	2		櫛2				千-3
千代田区	永田町一丁目遺跡Ⅱ	5	武家地	5	食事道具・調理具	5		椀類4, 椀類蓋1				千-23
千代田区	永田町二丁目遺跡	1	武家地	1	調度・収納具	1				箱類1		千-24
千代田区	丸の内一丁目遺跡Ⅰ	38	武家地（外堀石垣土手裏）	38	食事道具・調理具	32		椀類24, 椀類蓋7, 瓶類1				千-26
					用途不明	6		合子1, 薯物類1, 不明4				
千代田区	丸の内一丁目遺跡Ⅱ	35	武家地（外堀）	35	食事道具・調理具	34		椀類24, 椀類蓋9, 盆1				千-27
					用途不明	1		薯物類1				
千代田区	江戸城外堀跡市谷御門外横詰・御堀端	14	武家地（横詰・外堀）	14	食事道具・調理具	10		椀類3, 椀類蓋2	椀類蓋1	椀類1, 椀類蓋1, 瓶類1	水注1	千-8
					装身具	1				櫛1		
					用途不明	3		薯物類1, 曲物類1		曲物類1		
中央区	日本橋蛎殻町一丁目遺跡	8	武家地	8	食事道具・調理具	6		椀類2, 椀類蓋1, 杓子1, 箸1		瓶類1		中-6
					装身具	1				笄1		
					その他	1		鞘1				
中央区	日本橋蛎殻町一丁目遺跡Ⅱ	44	武家地	44	食事道具・調理具	32		椀類3, 箸1	椀類12, 椀類蓋9, 鉢1, 瓶類4, 箸2			中-7
					調度・収納具	3			箱類2, 窓枠1			
					装身具	3			下駄1, 傘2			
					建築材	1			建材1			
					用途不明	5		薯物類2	薯物類1, 曲物類1, 不明1			
中央区	湊一丁目遺跡	13	武家地	13	食事道具・調理具	12		椀類4, 椀類蓋1, 瓶類1	椀類4	椀類1, 椀類蓋1		中-14
					調度・収納具	1			櫃類1			
中央区	明石町遺跡	1	武家地	1	食事道具・調理具	1			椀類1			中-1
中央区	築地五丁目遺跡（第291集）	41	武家地	41	食事道具・調理具	34		椀類16, 椀類蓋13, 瓶類2, 杓子1	椀類蓋1, 盆1			中-3
					調度・収納具	1			箱類1			
					装身具	1		下駄1				
					用途不明	5		薯物類2, 曲物類1	薯物類2			
中央区	築地五丁目遺跡（第299集）	14	武家地	14	食事道具・調理具	10		椀類3, 椀類蓋6, 重箱1				中-4
					調度・収納具	1		箱類1				
					装身具	2		下駄2				
					用途不明	1		容器類1				
港区	西新橋二丁目港区No. 19遺跡	47	武家地	47	食事道具・調理具	21		椀類9, 椀類蓋4, 杯1, 瓶類2, 箸1, 把手1		椀類1, 椀類蓋1, 盃1		港-25
					調度・収納具	13		調度類5		調度類8		
					装身具	4		下駄2		傘1, 下駄1		
					玩具・遊戯具	1		駒1				
					用途不明	8		曲物類3, 不明1		薯物類1, 曲物類2, 不明1		
	[illegible]				食事道具・調理具	11		椀類2	椀類2, 椀類蓋1, 杓子2		椀類2, 椀類蓋2	港-6

遺跡所在地	報告書名/遺跡名	遺跡出土総数	遺跡性格	遺跡性格別点数	用途分類	用途分類別点数	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	時期不明	報告書番号
港区	[illegible]屋敷跡遺跡	13	武家地	13	生産道具	1		刷毛1				
					装身具	1		下駄1				
港区	愛宕下遺跡Ⅰ	124	武家地	124	食事道具・調理具	106					椀類68, 椀類蓋33, 鉢2, 杯1, 雛類1, 箸1	港-3
					調度・収納具	2					箱類1, 調度類1	
					装身具	6					櫛1, 下駄5	
					玩具・遊戯具	1					浮子1	
					漆工用具	3					漆筒2, 漆容器（曲物）1	
					用途不明	6					蓋物類2, 曲物類1, 不明3	
港区	愛宕下遺跡Ⅱ	251	武家地	251	食事道具・調理具	200	椀類6	椀類92, 椀類蓋45, 杯2, 雛類3, 盆1, 箸1, 杓子6, 把手1	椀類10, 椀類蓋8, 杯1, 皿類1, 雛類1, 杓子2, 箸1, 把手1	椀類蓋1	椀類18, 椀類蓋7, 杯1, 雛類1	港-4
					調度・収納具	13		箱類7, 調度類3, 漆塗飾り金具1	鏡箱1		調度類1	
					装身具	11		櫛2, 下駄3, 傘1	櫛2, 傘1		櫛1, 下駄1	
					漆工用具	1		貝パレット1				
					用途不明	26		蓋物類8, 曲物類3, 容器類1, 不明5	蓋物類3, 容器類1, 漆塗調製品1, 不明2		桶・樽類1, 不明1	
港区	愛宕下遺跡Ⅲ	527	武家地・一部寺社	527	食事道具・調理具	424		椀類125, 椀類蓋41, 杯2, 皿類1, 雛類3, 盆4, 杓子1, 箸1, 柄杓1	椀類43, 椀類蓋30, 杯1, 皿類2, 雛類1, 杓子1	椀類13	椀類99, 椀類蓋32, 杯5, 皿類1, 盆1, 雛類9, 杓子2, 箸2, 器台類, 柄杓21	港-5
					生産道具	2		刷毛1			刷毛1	
					調度・収納具	28		櫃類2, 箱類3	箱類1		櫃類6, 箱類14, 調度類2	
					装身具	16		櫛6, 下駄3	櫛2	櫛1	櫛4	
					玩具・遊戯具	1					不明玩具1	
					用途不明	56		合子1, 蓋物類7, 曲物類3, 容器類2, 不明2	蓋物類5, 容器類1	蓋物類2	合子1, 蓋物類14, 曲物類11, 容器類4, 不明3	
港区	豊後日出藩木下家屋敷跡遺跡	22	武家地	22	食事道具・調理具	20		椀類20				港-37
					用途不明	2		不明1	曲物類1			
港区	上野沼田藩土岐家屋敷跡遺跡	26	武家地	26	食事道具・調理具	16		椀類2, 椀類蓋1	椀類3, 椀類蓋2	椀類1	椀類3, 椀類蓋3, 杓子1	港-8
					生産道具	1			刷毛1			
					調度・収納具	5			鏡箱1, 櫃類4			
					装身具	3		櫛1	櫛1		櫛1	
					その他	1			鞘1			
港区	西久保城山地区の武家屋敷跡遺跡	1	武家地	1	装身具	1			下駄1			港-26
港区	汐留遺跡	116	武家地	116	食事道具・調理具	96		椀類7, 椀類蓋1, 杯1	椀類32, 椀類蓋15, 鉢1, 重箱1	椀類1, 椀類蓋1, 漆塗かわらけ1	椀類17, 椀類蓋14, 杯1, 重箱1, 杓子1, 柄1	港-13
					生産道具	1					刷毛1	
					調度・収納具	3			箱類1	調度類1	鏡箱1	
					装身具	9			櫛2, 簪1, 煙管1, 下駄3	櫛1	下駄1	
					玩具・遊戯具	1					浮子1	
					用途不明	6		桶・樽類1	蓋物類2	蓋物類1	曲物類1, 不明1	
港区	汐留遺跡Ⅰ	194	武家地	194	食事道具・調理具	152		椀類110, 椀類蓋32, 杯3, 皿類1			雛類1, 杓子3, 把手1, 栓1	港-14
					調度・収納具	12					櫃類5, 箱類7	
					装身具	3					櫛1, 下駄2	
					玩具・遊戯具	1					人形1	
					その他	1					鞘1	
					用途不明	25		不明1			合子10, 蓋物類8, 不明6	
港区	汐留遺跡Ⅱ	157	武家地	157	食事道具・調理具	95		椀類13, 椀類蓋5, 雛類1, 栓1			椀類39, 椀類蓋18, 杯3, 皿類2, 雛類4, 杓子1, 匙2, 箸2, 把手2, 器台類1, 陶胎漆器1	港-15
					調度・収納具	19		調度類1	箱類2	調度類1	鏡箱1, 耳盥1, 櫃類1, 箱類6, 調度類5, 台1	
					装身具	14		下駄1	櫛1		櫛8, 下駄2, 傘2	
					玩具・遊戯具	5				浮子1	独楽2, 浮子1, ミニチュア盃1	
					用途不明	24		蓋物類1, 曲物類4, 不明1			蓋物類4, 曲物類8, 容器類1, 桶・樽類1, 不明4	
港区	汐留遺跡Ⅲ	205	武家地	205	食事道具・調理具	152		椀類51, 椀類蓋15, 鉢1, 杯2, 皿類2, 雛類5, 杓子3, 把手2, 匙1	椀類13, 椀類蓋5, 雛類1, 盆1, 杓子1	椀類1	椀類27, 椀類蓋9, 鉢2, 皿類4, 雛類2, 杓子2, 箸1, 陶胎漆器1	港-16
					調度・収納具	16		耳盥2, 灯明台1, 櫃類4, 箱類2	鏡箱2, 箱類1, 調度類3		櫃類1	
					装身具	16		櫛6, 下駄4, 傘1	櫛2		櫛3	
					玩具・遊戯具	1			浮子1			
					その他	2		鞘1	木刀1			
					用途不明	18		蓋物類2, 曲物類1, 不明8	蓋物類1		合子3, 蓋物類1, 容器類2	
					食事道具・調理具	261		椀類87, 椀類蓋62, 杯5, 皿類1, 雛類22, 杓子8, 湯桶1, 箸1, 把手2, 柄杓2, 栓1	椀類4, 椀類蓋6, 杯1	椀類2, 椀類蓋1	椀類36, 椀類蓋15, 杓子1, 箸2, 把手1	港-17

遺跡所在地	報告書名/遺跡名	遺跡出土総数	遺跡性格	遺跡性格別点数	用途分類	用途分類別点数	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	時期不明	報告書番号
港区	汐留遺跡Ⅳ	320	武家地	320	調度・収納具	17		耳皿1, 箱類4, 調度類7	箱類4		箱類1	
					装身具	11		櫛2, 下駄4, 傘2	櫛1		傘2	
					その他	1		錫1				
					用途不明	30		薑物類12, 曲物類2, 容器類1, 不明7		不明2	薑物類2, 曲物類1, 不明3	
港区	旧芝離宮庭園跡	334	武家地	334	食事道具・調理具	240		椀類49, 椀類薑35, 杯6, 膳類6	椀類46, 椀類薑35, 杯6, 皿類3, 膳類25, 杓子1, 箸1, 器台類1		椀類11, 椀類薑4, 杯1, 膳類7	港-11
					調度・収納具	54		櫃類1, 箱類5, 調度類2	櫃類12, 箱類7, 調度類17		櫃類4, 箱類1, 調度類5	
					装身具	3			下駄3			
					玩具・遊戯具	3			独楽1		独楽1, ミニチュア膳1	
					その他	10		鞘2, 札1	鞘4, 錫1		鞘2	
					用途不明	24		薑物類3, 桶・樽類3, 不明1	薑物類5, 桶・樽類4, 不明4		薑物類1, 桶・樽類1, 不明2	
港区	豊後岡藩中川家屋敷跡遺跡	8	武家地	8	食事道具・調理具	7		椀類1	椀類5		椀類1	港-36
					用途不明	1			薑物類1			
港区	播磨赤穂藩森家屋敷跡遺跡	12	武家地	12	食事道具・調理具	11		椀類4, 椀類薑1	椀類1		椀類3, 膳類2	港-33
					用途不明	1					容器類1	
港区	播磨赤穂藩森家屋敷跡遺跡Ⅱ	10	武家地	10	食事道具・調理具	7			椀類5, 盆1, 箸1			港-34
					調度・収納具	1			手燭1			
					玩具・遊戯具	1			浮子1			
					用途不明	1			薑物類1			
港区	筑前福岡藩黒田家屋敷跡遺跡	3	武家地	3	調度・収納具	1				調度類1		港-28
					装身具	2				櫛1, 下駄1		
港区	近江山上藩稲垣家屋敷跡遺跡Ⅱ	4	武家地	4	食事道具・調理具	4			椀類4			港-10
港区	萩藩毛利家屋敷跡遺跡	30	武家地	30	食事道具・調理具	15		椀類6, 椀類薑1	椀類1, 椀類薑4, 把手2, 柄1			港-30
					調度・収納具	4			櫃類2, 調度類2			
					装身具	1					櫛1	
					漆工用具	4			貝パレット4			
					用途不明	6		薑物類1, 不明1	曲物類2, 不明2			
港区	平和島藩伊達家屋敷跡遺跡	1	武家地	1	食事道具・調理具	1				椀類1		港-9
港区	旗本花房家屋敷跡遺跡	4	武家地	4	食事道具・調理具	2		柄1	椀類1			港-32
					調度・収納具	1		櫃類1				
					用途不明	1		不明1				
港区	筑前秋月藩黒田家屋敷跡遺跡Ⅱ	1	武家地	1	調度・収納具	1				調度類1		港-27
港区	港区No. 91遺跡	29	武家地	29	食事道具・調理具	14				椀類8, 椀類薑2, 杯1, 箸1, 器台類2		港-39
					調度・収納具	5				鏡箱3, 箱類2		
					装身具	2				櫛2		
					玩具・遊戯具	1				駒1		
					漆工用具	7				薑紙1, 漉し紙6		
港区	石見津和野藩亀井家屋敷跡遺跡Ⅱ	2	武家地	2	食事道具・調理具	1				椀類薑1		港-7
					用途不明	1			漆塗銅製品1			
港区	会津藩保科(松平)家屋敷跡遺跡	2	武家地	2	漆工用具	2			漉し紙2			港-1
港区	豊後森藩久留島家・丹波亀山藩松平家屋敷跡遺跡	8	武家地	8	食事道具・調理具	7		椀類3, 椀類薑1	椀類1, 椀類薑2			港-38
					装身具	1			下駄1			
港区	旗本田中家屋敷跡遺跡	55	武家地	55	食事道具・調理具	33		椀類17, 椀類薑4, 膳類3, 箸1, 柄1, 切匙1	椀類3, 椀類薑1, 膳類2			港-31
					調度・収納具	11		箱類2, 調度類7	箱類1, 調度類1			
					装身具	4		櫛2, 下駄1	笄1			
					その他	1		鞘頭1				
					用途不明	6		薑物類3, 桶・樽類1, 不明1	不明1			
港区	肥後熊本藩細川家屋敷跡遺跡	2	武家地	2	調度・収納具	2				箱類2		港-35
港区	白金館址遺跡Ⅱ	2	武家地	2	食事道具・調理具	2			膳類2			港-12
港区	品川台場（第5）遺跡	7	武家地（台場）	7	食事道具・調理具	4				椀類2, 膳類1, 鉢1		港-18
					生産道具	1				刷毛1		
					用途不明	2				薑物類1, 曲物類1		
新宿区	新小川町遺跡	52	武家地	52	食事道具・調理具	43		椀類20, 椀類薑5	椀類12, 椀類薑3	椀類薑1	椀類1, 椀類薑1	新-35
					調度・収納具	1		調度類1				
					装身具	6		櫛1	櫛2, 下駄1	下駄1	櫛1	
					用途不明	2		薑物類1	曲物類1			
新宿区	白銀町遺跡Ⅲ	13	武家地	13	食事道具・調理具	8			椀類3, 椀類薑2	椀類1, 椀類薑1, 膳類1		新-34
					生産道具	1			刷毛1			
					調度・収納具	3				櫃類1, 箱類2		
					装身具	1				下駄1		
新宿区	行元寺跡	51	武家地	51	食事道具・調理具	33	椀類5	椀類3	椀類8, 椀類薑6, 鉢1, 杯2, 膳類1, 重箱1, 湯橋薑2, 把手1	椀類1, 椀類薑1	把手1	新-25
					調度・収納具	6			鏡箱2, 櫃類1		櫃類2, 箱類1	
					装身具	1			櫛1			

遺跡所在地	報告書名/遺跡名	遺跡出土点数	遺跡性格	遺跡性格別点数	用途分類	用途分類別点数	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	時期不明	報告書番号
					用途不明	11		容器類1	不明10			
新宿区	筑土八幡町遺跡	1	武家地	1	調度・収納具	1			箱類1			新-44
新宿区	筑土八幡町遺跡Ⅲ	10	武家地	10	食事道具・調理具	4		椀類蓋2, 杓子1		把手1		新-45
					調度・収納具	1		箱類1				
					装身具	2		弊1, 下駄1				
					用途不明	3		合子1, 曲物類1, 不明1				
新宿区	若宮町遺跡	1	武家地	1	漆工用具	1		貝パレット1				新-72
新宿区	市谷砂土原三丁目遺跡	1	武家地	1	食事道具・調理具	1			陶胎漆器1			新-4
新宿区	市谷砂土原三丁目遺跡Ⅱ	1	武家地	1	装身具	1			櫛1			新-5
新宿区	払方町遺跡	3	武家地	3	食事道具・調理具	2				漆焼土器2		新-50
					漆工用具	1				貝パレット1		
新宿区	南町遺跡	2	武家地	2	食事道具・調理具	2			椀類蓋2			新-57
新宿区	矢来町遺跡	1	武家地	1	漆工用具	1				濾し紙1		新-68
新宿区	南山伏町遺跡	8	武家地	7	食事道具・調理具	1				箸1		新-60
					調度・収納具	2			調度類2			
					装身具	2					櫛1, 下駄1	
					用途不明	2			不明1		漆塗網製品1	
			寺社	1	食事道具・調理具	1		椀類蓋1				
新宿区	市谷甲良町遺跡	1	武家地	1	漆工用具	1			貝パレット1			新-2
新宿区	市谷甲良町遺跡Ⅴ	1	武家地	1	漆工用具	1			貝パレット1			新-3
新宿区	市谷仲之町遺跡Ⅷ	1	武家地	1	漆工用具	1			貝パレット1			新-9
新宿区	住吉町南遺跡 市谷台町遺跡 住吉町西遺跡Ⅱ	33	武家地	33	食事道具・調理具	17				椀類4, 椀類蓋7, 杯1, 雑類3, 鉢1, 箸1		新-39
					調度・収納具	2				箱類2		
					装身具	10				櫛1, 下駄8, 傘1		
					その他	3				獅子頭1, 太鼓1, バチ1		
					用途不明	1				漆塗寫龍製品1		
新宿区	稲荷前遺跡	1	武家地	1	調度・収納具	1			箱類1			新-11
新宿区	尾張徳川家下屋敷跡Ⅱ	7	武家地	7	食事道具・調理具	7		椀類4		椀類3		新-13
新宿区	新宿六丁目遺跡	5	武家地	5	食事道具・調理具	2			椀類蓋1	椀類1		新-37
					調度・収納具	2			調度類2			
					用途不明	1			曲物類1			
新宿区	市谷左内町遺跡Ⅱ	3	武家地	3	調度・収納具	1		調度類1				新-6
					用途不明	2		曲物類2				
新宿区	尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅲ	127	武家地	127	食事道具・調理具	59		椀類9, 椀類蓋5, 杯3, 雑類1	椀類9, 椀類蓋12, 杯8, 雑類1, 箸4, 把手3	椀類1, 杯1	椀類2	新-14
					調度・収納具	26		箱類1	香炉1, 手桶1, 箱類5, 調度類17, 漆塗網製吊り灯籠1			
					装身具	10		印籠1	櫛1, 弊3, 印籠3		弊1, 横押し1	
					漆工用具	5			濾し紙4		溜容器（曲物）1	
					その他	2			漆塗り碗2			
					用途不明	25		不明1	畳物類1, 容器類1, 桶・樽類1, 不明17, 漆塗銅製容器1	畳物類1	曲物類1, 漆塗銅製容器1	
新宿区	尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅳ	21	武家地	21	食事道具・調理具	8		椀類3	椀類蓋1, 杯1		椀類2, 杯1	新-15
					調度・収納具	4			箱類4			
					用途不明	9		畳物類1, 不明3	不明2	不明1	不明2	
新宿区	尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅴ	36	武家地	36	食事道具・調理具	17		椀類1, 椀類蓋3, 杯1	椀類2, 椀類蓋1	椀類4, 椀類蓋2, 杓子1, 箸1	椀類蓋1	新-16
					調度・収納具	9		箱類1, 調度類3	調度類2	箱状1, 調度類2		
					装身具	1			印籠1			
					漆工用具	2			漆塊1, 濾し紙1			
					用途不明	7		不明2	不明1	不明4		
新宿区	尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅵ	25	武家地	25	食事道具・調理具	10		椀類5	椀類3, 椀類蓋1, 杯1			新-17
					調度・収納具	3			箱類1, 調度類1	調度類1		
					玩具・遊戯具	2			玩具刀1	玩具刀1		
					漆工用具	4			薄紙1, 貝パレット2	貝パレット1		
					用途不明	6		不明1	不明1	桶・樽類1, 不明3		
新宿区	尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅶ	49	武家地	49	食事道具・調理具	4		椀類蓋1	椀類1, 陶胎漆器1	椀類1		新-18
					調度・収納具	6			箱類2, 調度類1	箱類3		
					漆工用具	39			溜容器（曲物）1, 漆塊3, 濾し紙13, 濾し布5	溜容器（陶器）1, 漆塊1, 濾し紙9	溜容器（曲物）1, 漆塊1, 薄紙2, 濾し紙2	
新宿区	尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅷ	86	武家地	86	食事道具・調理具	50			椀類17, 椀類蓋21, 鉢1, 杯1, 雑類1, 杓子1, 漆塗土器鉢1	椀類蓋4, 杯1, 皿類1, 陶胎漆器1		新-19
					調度・収納具	10			鏡箱5, 箱類2, 調度類3			
					装身具	3		印籠1	下駄2			
					漆工用具	1				薄紙1		
					その他	1				鐘1		

遺跡所在地	報告書名/遺跡名	遺跡出土総数	遺跡性格	遺跡性格別点数	用途分類	用途分類別点数	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	時期不明	報告書番号
					用途不明	21			曲物類2, 壷物類7, 不明11	不明1		
新宿区	尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅸ	574	武家地	574	食事道具・調理具	69		椀類15, 椀類蓋10, 杯1, 皿類2, 膳類1, 盆1, 杓子1, 箸1	椀類8, 椀類蓋3, 膳類1, 箸1, 紙胎漆器1	椀類3, 椀類蓋2, 杯1	椀類9, 椀類蓋6, 膳類1, 杓子1	新-20
					調度・収納具	8			行灯1, 箱類2	箱類1, 調度類1	提灯1, 箱類1, 調度類1	
					装身具	5			櫛1, 漆塗皮革製品3		傘1	
					漆工用具	461			漬容器（磁器）5, 漬容器（陶器）6, 漬容器（曲物）2, 漬容器（椀蓋）1, 貝パレット26, 濾し紙408, 研炭1	漬容器（陶器）3, 漬容器（曲物）1, 貝パレット3, 濾し紙1	漬容器（曲物）1, 貝パレット2, 曲物パレット1	
					その他	2		刀1			長刀1	
					用途不明	29		壷物類6, 不明6	壷物類4, 漆塗石製品1, 不明7	不明2	壷物類1, 不明2	
新宿区	尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅹ	4	武家地	4	食事道具・調理具	1		椀類蓋1				新-21
					調度・収納具	2		耳盥1			調度類1	
					漆工用具	1			濾し紙1			
新宿区	尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅺ	5	武家地	5	食事道具・調理具	1				杯1		新-22
					漆工用具	4				漆塊1, 濾し紙3		
新宿区	尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅻ	39	武家地	39	食事道具・調理具	22		椀類2, 椀類蓋1, 膳類1	椀類10, 椀類蓋1, 膳類1, 杓子3, 把手1, 柄杓1, 壁1			新-23
					調度・収納具	5			鏡箱1, 灯台1, 箱類2	箱類1		
					装身具	6		櫛2	櫛1, 傘3			
					漆工用具	2			濾し紙2			
					用途不明	4			桶・樽類2, 不明2			
新宿区	水野原遺跡Ⅱ	2	武家地	2	漆工用具	2				貝パレット2		新-61
新宿区	三栄町遺跡	190	武家地	190	食事道具・調理具	168			椀類45, 椀類蓋6	椀類62, 椀類蓋8, 杯1, 杓子4, 注口1, 器台類1, 柄1	椀類32, 椀類蓋7	新-29
					調度・収納具	5			櫃類1	調度類2	箱類2	
					装身具	13			櫛1, 下駄2	櫛2, 下駄6	櫛1, 下駄1	
					玩具・遊戯具	2				独楽1, ミニチュア鞠1		
					用途不明	2				壷物類2		
新宿区	荒木町遺跡Ⅱ	5	武家地	5	食事道具・調理具	2			椀類1, 杓子1			新-1
					生産道具	1			刷毛1			
					装身具	1			傘1			
					用途不明	1			壷物類1			
新宿区	四谷一丁目遺跡	6	武家地	6	食事道具・調理具	1				陶胎漆器1		新-62
					漆工用具	5				漆塊1, 濾し紙4		
新宿区	四谷二丁目遺跡Ⅱ	25	武家地	25	食事道具・調理具	11				椀類5, 椀類蓋2, 鉢2, 茶筅1, 器台類1		新-65
					調度・収納具	5				櫃入れ1, 燭台台座1, 箱類1, 調度類2		
					装身具	4				櫛1, 笄2, 根付1		
					漆工用具	3				漆筒3		
					その他	1				鞘1		
					用途不明	1				壷物類1		
新宿区	坂町遺跡	40	武家地	40	食事道具・調理具	7			椀類2, 椀類蓋1, 杯1, 膳類2, 杓子1			新-27
					調度・収納具	5			鏡箱1, 櫃類1, 箱類3			
					装身具	4			櫛3, 下駄1			
					漆工用具	24			漆液容器2, 漬容器（陶器）2, 漬容器（曲物）1, 漬容器（椀）5, 漆筆2, 漆刷毛1, 貝パレット3, 濾し紙5, 濾し布1, 濾し紙束1, 漆蓋紙1			
					用途不明	1			合子1			
新宿区	坂町遺跡Ⅱ	17	武家地	17	食事道具・調理具	12		椀類1, 椀類蓋3, 杓子1	椀類2, 椀類蓋2, 膳類1	椀類1, 重箱1		新-28
					調度・収納具	1				櫃類1		
					玩具・遊戯具	1				駒1		
					その他	1				鞘1		
					用途不明	2		不明2				
新宿区	大京町東遺跡	1	武家地	1	漆工用具	1				貝パレット1		新-42
新宿区	内藤町遺跡（1992）	11	武家地	11	食事道具・調理具	6				椀類蓋2, 重箱2	椀類1, 椀類蓋1	新-46
					調度・収納具	1					箱類1	
					その他	1				オオカミ上顎骨加工品1		
					用途不明	3			不明1	桶・樽類1	桶・樽類1	
新宿区	内藤町遺跡（2002）	15	武家地	15	食事道具・調理具	13			椀類1	椀類4, 椀類蓋5, 箸1	箸2	新-47
					用途不明	2				曲物類2		
新宿区	内藤町遺跡（2007）	8	武家地	8	食事道具・調理具	4			椀類1, 重箱2		椀類蓋1	新-48
					装身具	3		櫛2	櫛1			
					用途不明	1			曲物類1			
新宿区	信濃町遺跡	1	武家地	1	食事道具・調理具	1				椀類1		新-32

遺跡所在地	報告書名/遺跡名	遺跡出土総数	遺跡性格	遺跡性格別点数	用途分類	用途分類別点数	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	時期不明	報告書番号
新宿区	信濃町南遺跡	1	武家地	1	食事道具・調理具	1				陶胎漆器1		新-33
新宿区	千駄ヶ谷大谷戸遺跡・内藤町遺跡	4	武家地	4	食事道具・調理具	4		椀類2, 箸1		切匙1		新-40
文京区	東京大学本郷構内の遺跡工学部1号館地点	37	武家地	37	食事道具・調理具	18			椀類4, 杯3, 鉢類2, 杓子6, 把手3			文-18
					生産道具	1			刷毛1			
					調度・収納具	3			箱枕2, 箱類1			
					装身具	1			印籠1			
					用途不明	14			畜物類3, 曲物類4, 桶・樽類2, 不明5			
文京区	東京大学本郷構内の遺跡工学部14号館地点	17	武家地	17	食事道具・調理具	4		匙1		椀類蓋2	鉢類1	文-19
					調度・収納具	3			調度類3			
					漆工用具	10		貝パレット2	貝パレット1	貝パレット7		
文京区	東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院外来診療棟地点	9	武家地	9	食事道具・調理具	8				椀類5, 椀類蓋2, 鉢類1		文-16
					調度・収納具	1				下駄1		
文京区	東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院地点	3	武家地	3	食事道具・調理具	1		椀類蓋1				文-15
					調度・収納具	1		箱類1				
					用途不明	1		曲物類1				
文京区	東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院入院棟A地点	415	武家地	415	食事道具・調理具	332		椀類1	椀類179, 椀類蓋102, 杯11, 皿類2, 鉢類12, 杓子9, 匙5, 箸7, 箸3, 把手1			文-17
					調度・収納具	11			耳盥1, 箱類3, 調度類7			
					装身具	6			櫛2, 傘4			
					玩具・遊戯具	1			ミニチュア椀類蓋1			
					漆工用具	26			漆液容器6, 濾し紙7, 濾し布1	濾し紙11	濾し紙1	
					建築材	3		建材3				
					その他	3			位牌1, 木札1, 掛け軸1			
					用途不明	33			曲物類1, 容器類9, 不明23			
文京区	本郷追分	4	武家地	4	食事道具・調理具	1					椀類1	文-21
					調度・収納具	1			箱類1			
					装身具	1			櫛1			
					用途不明	1			不明1			
文京区	諏訪町遺跡	70	武家地	70	食事道具・調理具	52				椀類31, 椀類蓋19, 把手1	椀類1	文-14
					調度・収納具	6				櫃類2, 調度類4		
					装身具	10				櫛5, 下駄4, 傘1		
					用途不明	2				曲物類2		
文京区	新諏訪町遺跡	14	武家地	14	食事道具・調理具	9					椀類4, 椀類蓋3, 鉢1, 杓子1	文-13
					調度・収納具	1					櫃類1	
					装身具	1					下駄1	
					玩具・遊戯具	1					浮子1	
					用途不明	2					不明2	
文京区	春日町東遺跡	1	武家地	1	装身具	1				煙管1		文-7
文京区	春日町遺跡Ⅰ	7	武家地	7	食事道具・調理具	6			椀類4, 杓子1, 重箱1			文-3
					調度・収納具	1			文台1			
文京区	春日町遺跡第Ⅲ・Ⅳ地点	199	武家地	199	食事道具・調理具	185	椀類124, 椀類蓋53, 皿類2, 鉢類4, 杓子1, 箸1					文-4
					調度・収納具	5	灯台2, 箱類2, 調度類1					
					装身具	3	下駄3					
					用途不明	6	曲物類6					
文京区	春日町遺跡第Ⅵ地点	22	武家地	22	漆工用具	22			漆液容器1, 漆容器（磁器）1, 漆容器（陶器）7, 漆容器（曲物）2, 貝パレット4, 濾し紙7			文-5
文京区	春日町（小石川後楽園）遺跡第10地点	6	武家地	6	食事道具・調理具	6		椀類4	椀類2			文-6
文京区	小石川牛天神下遺跡	143	武家地	143	食事道具・調理具	121		椀類43, 椀類蓋17, 盆1, 杓子1, 箸1	椀類4, 椀類蓋7, 杓子1	椀類17, 椀類蓋8, 天目台1, 段重1	椀類7, 椀類蓋9, 盆1, 杓子1, 竹胎漆器1	文-8
					生産道具	1		刷毛1				
					調度・収納具	1		箱類1				
					装身具	11		下駄1	下駄1	印籠2, 下駄5	簪1, 下駄1	
					玩具・遊戯具	7			人形1	独楽1, 浮子3	独楽1, 浮子1	
					その他	1			扇子1			
					用途不明	1					不明1	
文京区	後楽二丁目南遺跡	157	武家地	157	食事道具・調理具	120		椀類77, 椀類蓋12, 鉢3, 杯1, 皿類2, 鉢類1, 三方2, 盆6, 把手2	椀類7, 椀類蓋2, 杓子1		椀類2, 皿類1, 盆1	文-9
					生産道具	3		刷毛3				
					調度・収納具	5		提灯2, 引出1, 鏡箱1, つまみ1				
					装身具	6		櫛1, 下駄3	下駄1	櫛1		
					玩具・遊戯具	1		駒1				
					その他	3			木刀2, 鞘1			
					用途不明	19		畜物類5, 曲物類2, 不明4	畜物類1, 曲物類1, 不明5		桶・樽類1	

遺跡所在地	報告書名/遺跡名	遺跡出土総数	遺跡性格	遺跡性格別点数	用途分類	用途分類別点数	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	時期不明	報告書番号
文京区	日影町遺跡Ⅲ	28	武家地	28	食事道具・調理具	17			椀類2, 陶胎漆器1	椀類6, 椀類蓋7, 陶胎漆器1		文-20
					調度・収納具	3				鏡箱1, 櫃類1, 箱類1		
					漆工用具	1					貝パレット1	
					用途不明	7		不明4		蓋物類1, 不明2		
文京区	本郷元町遺跡	6	武家地	6	食事道具・調理具	3					椀類蓋2, 鍋類1	文-24
					用途不明	3					曲物類1, 不明2	
文京区	本郷元町遺跡Ⅲ	17	武家地	17	食事道具・調理具	12		椀類2, 椀類蓋3, 鍋類1, 杓子1, 器台類1	椀類1		椀類3	文-25
					調度・収納具	2		箱類1			櫃類1	
					装身具	1					下駄1	
					用途不明	2		曲物類2				
文京区	お茶の水貝塚	4	武家地	4	食事道具・調理具	2			椀類2			文-2
					調度・収納具	1			櫃類1			
					用途不明	1			不明1			
文京区	大塚町遺跡第5地点	1	武家地	1	漆工用具	1			漆し紙1			文-1
台東区	浅草福井町遺跡	12	武家地	6	食事道具・調理具	6		椀類2, 椀類蓋3, 鍋類1				台-1
			町人地	6	食事道具・調理具	3		椀類1, 杓子1	椀類1			
					調度・収納具	1			鏡箱1			
					装身具	1		傘1				
					その他	1			鞘1			
台東区	二長町東遺跡	2	武家地	2	食事道具・調理具	1			鍋類1			台-21
					その他	1			鞘1			
台東区	向御厩町遺跡	84	武家地	84	食事道具・調理具	54		椀類12, 椀類蓋13, 鍋類14, 杓子1, 把手1	椀類蓋3		椀類6, 椀類蓋3, 鍋類1	台-23
					生産道具	2		刷毛2				
					調度・収納具	9		箱類9				
					装身具	1		傘1				
					用途不明	18		曲物類9, 不明1			蓋物類1, 不明7	
台東区	白鷺遺跡	116	武家地・一部墓地	116	食事道具・調理具	86		椀類蓋1, 陶胎漆器1	椀類32, 椀類蓋24, 鉢2, 鍋類13, 器台類1, 柄2		椀類2, 椀類蓋6, 鍋類2	台-22
					調度・収納具	24			煙草盆箱1, 櫃板1, 鏡箱1, 櫃類9, 箱類8, 調度類2		櫃類1, 調度類1	
					用途不明	6			蓋物類1, 曲物類2, 不明3			
台東区	仲御徒町三丁目遺跡（上野五丁目20番地点）	2	武家地	2	装身具	1				櫛1		台-15
					用途不明	1			不明1			
台東区	仲御徒町三丁目遺跡（上野五丁目27番地地点）	6	武家地	6	食事道具・調理具	4			椀類1	箸3		台-16
					その他	1				御子頭1		
					用途不明	1				不明1		
台東区	仲御徒町三丁目遺跡（上野五丁目27-8地点）	21	武家地	21	食事道具・調理具	14			椀類6, 椀類蓋5, 杯1, 皿類1	椀類蓋1		台-17
					調度・収納具	1				箱類1		
					装身具	2			櫛1, 斧1			
					その他	3			鋏2, 刀1			
					用途不明	1			蓋物類1			
台東区	上野花園町遺跡	1	武家地	1	調度・収納具	1			櫃類1			台-5
台東区	茅町遺跡	1	武家地	1	食事道具・調理具	1		椀類蓋1				台-8
台東区	西町遺跡	6	武家地	6	食事道具・調理具	1					椀類蓋1	台-20
					調度・収納具	1					鏡箱1	
					玩具・遊戯具	1					浮子1	
					用途不明	3			不明1		不明2	
台東区	上野坂町遺跡（東上野四丁目9番地地点）	4	武家地	4	食事道具・調理具	3		椀類3				台-7
					装身具	1		傘1				
台東区	上野坂町遺跡（東上野四丁目8・9番地地点）	4	武家地	4	食事道具・調理具	1		椀類1				台-6
					装身具	2		櫛1, 傘1				
					漆工用具	1		貝パレット1				
台東区	竜泉寺町遺跡	2	武家地	1	食事道具・調理具	1			椀類1			台-24
			墓地	1	食事道具・調理具	1		椀類1				
墨田区	墨田区錦糸町駅北口遺跡1	84	武家地	84	食事道具・調理具	53		椀類5, 椀類蓋5	椀類17, 椀類蓋6, 鉢1, 杯1, 鍋類2, 杓子1, 蓋2, 把手2, 器台類1	椀類7, 椀類蓋2, 鍋類1		墨-5
					調度・収納具	11			鹿取り1, 鏡箱2, 調度類1	鏡箱2, 箱類5		
					装身具	9		櫛1	下駄1	下駄7		
					玩具・遊戯具	1				浮子1		
					漆工用具	2				貝パレット2		
					用途不明	8			蓋物類1, 曲物類2, 不明1	蓋物類2, 不明2		
墨田区	江東橋二丁目遺跡	27	武家地	27	食事道具・調理具	13				椀類4, 椀類蓋2, 皿類1, 鍋類2, 箸1, 柄1, 栓1	椀類1	墨-2
					調度・収納具	3			櫃類1	箱類1	箱類1	
					装身具	5				櫛2, 下駄2	下駄1	
					玩具・遊戯具	1				浮子1		
					その他	2				位牌1, 物差1		
					用途不明	3				曲物類1, 容器類1, 不明1		
墨田区	江東橋二丁目遺跡Ⅱ	15	武家地	15	食事道具・調理具	12		椀類11, 柄杓1				墨-3
					装身具	1			傘1			
					その他	2						

遺跡所在地	報告書名/遺跡名	遺跡出土総数	遺跡性格	遺跡性格別点数	用途分類	用途分類別点数	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	時期不明	報告書掲載番号
墨田区	江東橫二丁目遺跡Ⅲ	3	武家地	3	食事道具・調理具	2			椀類2			墨-4
					調度・収納具	1			櫃類1			
墨田区	錦糸四丁目遺跡	1	武家地	1	食事道具・調理具	1		椀類蓋1				墨-1
墨田区	肥前平戸新田藩下屋敷跡	5	武家地	5	食事道具・調理具	1			椀類1			墨-9
					玩具・遊戯具	3			浮子3			
					用途不明	1			合子1			
墨田区	千歳三丁目遺跡	22	武家地	22	食事道具・調理具	20		椀類4, 椀類蓋2, 皿類1	椀類8, 椀類蓋2, 皿類1, 器台類1	鉢1		墨-8
					その他	2				獅子頭2		
墨田区	陸奥弘前藩津軽家上屋敷跡	5	武家地	5	食事道具・調理具	3		椀類1	椀類1, 椀類蓋1			墨-12
					用途不明	2			置物類2			
墨田区	陸奥弘前藩津軽家上屋敷跡Ⅱ	2	武家地	2	食事道具・調理具	1				椀類1		墨-13
					用途不明	1			不明1			
墨田区	本所一丁目遺跡	9	武家地	9	食事道具・調理具	1			膳1			墨-10
					調度・収納具	3			硯箱1, 箱類1, 調度類1			
					装身具	2			下駄2			
					玩具・遊戯具	1			浮子1			
					建築材	1				釣瓶1		
					用途不明	1				不明1		
墨田区	横綱一丁目遺跡	2	武家地（御殿）	2	食事道具・調理具	2			椀類2			墨-15
江東区	千田遺跡	10	武家地	10	食事道具・調理具	3			椀類1, 椀類蓋2			江-2
					調度・収納具	1				調度類1		
					装身具	3			櫛1, 下駄2			
					玩具・遊戯具	1			ミニチュア製品1			
					その他	2			獅子頭1, 木刀1			
渋谷区	千駄ヶ谷五丁目遺跡	126	武家地	126	食事道具・調理具	53		椀類14, 箸1	椀類17, 膳類2, 箸6	椀類8, 箸1	椀類4	渋-3
					生産道具	1		刷毛1				
					調度・収納具	4			硯箱2, 提灯1, 箱類1			
					装身具	20		櫛3, 下駄2, 傘1	櫛4, 下駄3	下駄6	下駄1	
					玩具・遊戯具	2				浮子2		
					その他	3			位牌1, 鞠1	木刀1		
					用途不明	43		置物類1, 不明1	置物類3, 曲物類2, 不明26	桶・樽類1, 不明7	不明2	
渋谷区	千駄ヶ谷五丁目遺跡（2次）	21	武家地	21	食事道具・調理具	20		椀類8, 椀類蓋2	椀類8, 椀類蓋2			渋-4
					用途不明	1		不明1				
渋谷区	青山学院構内遺跡	8	武家地	8	食事道具・調理具	4			椀類1, 皿類2	杓子1		渋-1
					装身具	3			下駄3			
					用途不明	1				合子1		
渋谷区	青山学院構内遺跡第5地点	1	武家地	1	漆工用具	1				貝パレット1		渋-2
豊島区	東池袋遺跡Ⅰ	1	武家地	1	調度・収納具	1			調度類1			豊-6
豊島区	東池袋遺跡Ⅱ	2	武家地	2	装身具	2			櫛2			豊-7
豊島区	染井遺跡Ⅲ	1	武家地	1	漆工用具	1			漆し紙1			豊-3
豊島区	染井遺跡Ⅺ	9	武家地	9	食事道具・調理具	8			椀類7, 椀類蓋1			豊-5
					調度・収納具	1			調度類1			
町人地												
千代田区	江戸城外堀跡四谷御門外町屋跡	1	町人地	1	食事道具・調理具	1		椀類1				千-9
千代田区	尾張藩麻布邸跡Ⅳ	2	町人地	2	食事道具・調理具	2		椀類2				千-13
中央区	日本橋一丁目遺跡	12	町人地	12	食事道具・調理具	9		椀類6, 皿類2		椀類1		中-5
					装身具	1			櫛1			
					玩具・遊戯具	1		駒1				
					その他	1			物差1			
中央区	日本橋二丁目遺跡	19	町人地	12	食事道具・調理具	3			椀類2, 箸1			中-8
					調度・収納具	3			箱類2台1			
					装身具	2			櫛2			
					用途不明	4			置物類3, 容器類1			
			入堀	4	食事道具・調理具	3		椀類1, 箸1, 把手1				
					装身具	1		下駄1				
			御典医屋敷	3	食事道具・調理具	3		椀類1, 椀類蓋1, 杓子1				
中央区	日本橋人形町三丁目遺跡	28	町人地	28	食事道具・調理具	20		椀類4, 膳類1, 段重1	椀類2, 椀類蓋3, 膳類2, 盆1, 箸2, 把手2, 切匙1, 調類蓋1			中-9
					調度・収納具	2			箱類2, 台1			
					装身具	4			櫛2, 傘1	鞠1		
					用途不明	2			置物類1, 曲物類1			
中央区	日本橋人形町三丁目遺跡Ⅱ	50	町人地	50	食事道具・調理具	21		椀類4, 椀類蓋1, 皿類1, 膳類6, 盆1, 柄杓1	椀類2, 椀類蓋1, 杯1, 皿類1, 膳類1, 盆1			中-10
					調度・収納具	18		櫃類3, 箱類5, 台1	櫃類2, 箱類6	箱類1		
					装身具	1		下駄1				
					玩具・遊戯具	3		人形1, 人形用具1	駒1			
					その他	1			刀1			
					用途不明	6		置物類4, 桶・樽類1, 不明1				
					食事道具・調理具	104		椀類37, 椀類蓋6, 杯2, 皿類1, 杓子1	椀類12		椀類37, 椀類蓋7, 膳類1	中-2

遺跡所在地	報告書名/遺跡名	遺跡出土総数	遺跡性格	遺跡性格別点数	用途分類	用途分類別点数	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	時期不明	報告書番号
中央区	京葉線八丁堀遺跡	117	町人地	110	装身具	3					櫛1, 下駄2	
					その他	1					位牌1	
					用途不明	2			曲物類1, 不明1			
			武家地	7	食事道具・調理具	7					椀類7	
中央区	八丁堀二丁目遺跡	37	町人地	37	食事道具・調理具	23			椀類10, 椀類蓋1, 杯1, 杓子1	椀類1, 椀類蓋1	椀類8	中-13
					調度・収納具	3			箱類1	箱類1	箱類1	
					装身具	6			櫛2, 下駄1		櫛1, 傘2	
					用途不明	5			曲物類1, 曲物類2, 蓋物類1		曲物類1	
港区	芝神谷町町屋跡	21	町人地	21	食事道具・調理具	6				椀類4, 皿類1, 栓1		港-19
					装身具	2				櫛1, 下駄1		
					用途不明	13				不明13		
港区	麻布龍土町町屋敷跡遺跡	2	町人地	1	食事道具・調理具	1			椀類1			港-2
			墓地	1	装身具	1		櫛1				
港区	芝田町五丁目町屋跡遺跡	18	町人地	18	食事道具・調理具	9			椀類2, 椀類蓋2	椀類2, 椀類蓋2	椀類1	港-20
					装身具	6			下駄3	櫛2, 下駄1		
					用途不明	3			不明1	蓋物類1, 不明1		
新宿区	市谷薬王寺V・市谷柳町II	22	町人地	12	食事道具・調理具	8			椀類4, 椀類蓋2, 膳類1, 柄1			新-10
					漆工用具	3			漆容器1, 貝パレット1	貝パレット1		
					用途不明	1			蓋物類1			
			寺社	9	食事道具・調理具	8			椀類2	椀類3, 椀類蓋1, 膳類1, 湯桶蓋1		
					装身具	1				下駄1		
			武家地	1	用途不明	1			曲物類1			
新宿区	山吹町遺跡	9	町人地	9	食事道具・調理具	6		椀類4, 杓子1, 湯桶1				新-67
					生産道具	1		刷毛1				
					装身具	1				下駄1		
					用途不明	1		容器類1				
新宿区	馬場下町遺跡	4	町人地	4	食事道具・調理具	4		椀類3, 椀類蓋1, 重箱1, 鍋類蓋1		椀類1		新-49
新宿区	市谷田町一丁目遺跡	8	町人地	8	食事道具・調理具	6		椀類3, 椀類蓋1, 重箱1, 鍋類蓋1				新-7
					調度・収納具	1				調度類1		
					用途不明	1		容器類1				
新宿区	市谷田町一丁目遺跡II	4	町人地	4	食事道具・調理具	1			膳類1			新-8
					調度・収納具	1			櫃類1			
					玩具・遊戯具	1		羽子板1				
					その他	1			箒1			
新宿区	南伊賀町遺跡	5	町人地	5	漆工用具	5			塗し紙5			新-56
新宿区	細工町遺跡	61	町人地	61	食事道具・調理具	45		椀類3	椀類20, 椀類蓋7, 鉢1, 膳類1	椀類6, 椀類蓋3, 膳類2, 器台類1	椀類1	新-26
					調度・収納具	8			行灯3, 櫃類2	鏡箱1, 箱類2		
					装身具	5			下駄2	下駄2, 傘1		
					漆工用具	2				漆容器（曲物）1, 貝パレット1		
					用途不明	1				曲物類1		
新宿区	四谷一丁目遺跡III	10	町人地	10	食事道具・調理具	6			椀類3, 椀類蓋2, 匙1			新-63
					漆工用具	1			貝パレット1			
					用途不明	3			曲物類2, 不明1			
新宿区	四谷三丁目遺跡	3	町人地	3	食事道具・調理具	3				椀類2, 椀類蓋1		新-64
新宿区	四谷四丁目遺跡III	3	町人地	3	食事道具・調理具	3			椀類1	椀類2		新-66
新宿区	若葉三丁目遺跡	21	町人地	21	食事道具・調理具	16			椀類8, 椀類蓋1, 鉢1, 杯1, 皿類1	椀類2, 膳類1, 桝1		新-69
					調度・収納具	1			櫃類1			
					装身具	1			櫛1			
					玩具・遊戯具	1				浮子1		
					その他	1			札1			
					用途不明	1			蓋物類1			
新宿区	若葉三丁目遺跡II	6	町人地	6	食事道具・調理具	4				椀類2, 鉢1, 杯1		新-70
					装身具	1				櫛1		
					漆工用具	1				漆筆1		
新宿区	若葉三丁目遺跡III	11	町人地	11	食事道具・調理具	8			椀類3, 椀類蓋2, 鉢1, 杯1, 膳類1			新-71
					調度・収納具	1			箱類1			
					装身具	1				櫛1		
					その他	1		位牌1				
新宿区	南元町遺跡III	29	道路・町人地	28	食事道具・調理具	13			椀類3, 椀類蓋3, 盆1, 杓子1	椀類3, 膳類1, 桶1		新-59
					調度・収納具	3			鏡箱1, 鬢水入れ1	櫃類1		
					装身具	2				櫛2		
					玩具・遊戯具	1			独楽1			

遺跡所在地	報告書名/遺跡名	遺跡出土総数	遺跡性格	遺跡性格別点数	用途分類	用途分類別点数	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	時期不明	報告書番号
					漆工用具	3			漆筒2	貝パレット1		
					建築材	5				建材5		
					用途不明	1				曲物類1		
			武家地	1	食事道具・調理具	1			椀類蓋1			
新宿区	新宿四丁目遺跡	1	町人地	1	食事道具・調理具	1				陶胎漆器1		新-36
新宿区	柏木淀橋町遺跡	12	町人地	12	食事道具・調理具	6		椀類2	椀類4			新-24
					装身具	5			下駄5			
					用途不明	1			不明1			
文京区	駒込浅嘉町遺跡第3地点	1	町人地	1	食事道具・調理具	1				陶胎漆器1		文-11
文京区	本郷五丁目東遺跡	1	町人地	1	漆工用具	1		貝パレット1				文-23
台東区	浅草寺西遺跡	1	町人地	1	食事道具・調理具	1				椀類蓋1		台-11
台東区	豊住町遺跡	59	町人地	39	食事道具・調理具	29			椀類12, 椀類蓋6, 杯3, 鉢類2, 甕1	椀類1, 椀類蓋1, 鉢1	椀類2	台-14
					調度・収納具	1			箱類1			
					玩具・遊戯具	1			ミニチュア皿1			
					その他	4			硯3, 碁1			
					用途不明	4			蓋物類2, 不明1		蓋物類1	
			武家地	20	食事道具・調理具	11		椀類8, 椀類蓋2, 甕1				
					その他	8		位牌8				
					用途不明	1		蓋物類1				
墨田区	太平一丁目遺跡	4	町人地	4	食事道具・調理具	4		椀類3, 椀類蓋1				墨-7
豊島区	巣鴨町遺跡Ⅲ	1	町人地	1	食事道具・調理具	1				椀類1		豊-1
豊島区	染井遺跡Ⅶ	4	町人地	4	食事道具・調理具	4			椀類2, 椀類蓋1	陶胎漆器1		豊-4
豊島区	雑司が谷遺跡Ⅴ	3	町人地	3	食事道具・調理具	1			杯1			豊-2
					漆工用具	2			漆容器1, 漆し紙1			
寺社地												
千代田区	都立一橋高校遺跡	176	墓地	102	食事道具・調理具	89		椀類65, 椀類蓋14, 杯4, 鉢類1, 杓子2, 栓3				千-6
					調度・収納具	4		耳皿1, 調度類3				
					装身具	7		櫛3, 煙管1, 下駄3				
					その他	2		位牌2				
			町人地	74	食事道具・調理具	64			椀類36, 椀類蓋2, 杓子1, 栓2		椀類18, 椀類蓋4, 鉢類1	
					調度・収納具	6			箱類3, 調度類2		箱類1	
					装身具	3			下駄2		下駄1	
					用途不明	1					蓋物類1	
千代田区	弥勒寺跡・極楽院跡	6	墓地	6	食事道具・調理具	1			器台類1			千-29
					調度・収納具	2		箱類1	調度類1			
					装身具	2		下駄2				
					その他	1			獅子頭1			
中央区	八丁堀三丁目遺跡	12	墓地	12	食事道具・調理具	5		椀類蓋1			椀類3, 椀類蓋1	中-11
					調度・収納具	1					盃類1	
					装身具	6		櫛4, 編み物1			小刀柄1	
中央区	八丁堀三丁目遺跡Ⅱ	22	墓地	14	食事道具・調理具	7	椀類1	椀類3, 椀類蓋2, 盤1				中-12
					調度・収納具	4		箱類4				
					装身具	2		櫛1, 印籠1				
					用途不明	1	不明1					
			寺社	8	食事道具・調理具	1		椀類1				
					その他	7		位牌7				
港区	天徳寺寺域第3遺跡	17	墓地	17	食事道具・調理具	10		椀類蓋1	椀類1, 椀類蓋1, 盆1		椀類3, 椀類蓋3	港-29
					調度・収納具	1					箱類1	
					装身具	4		櫛2			櫛2	
					その他	1					六角鏡1	
					用途不明	1			容器類1			
港区	増上寺徳川将軍墓	19	墓地	19	食事道具・調理具	1				杯1		港-24
					調度・収納具	8		手箱2	手箱4	箱類2		
					装身具	1		口紅入れ1				
					その他	7			筆類1, 日時計1, 厨子1, 飾太刀2	飾太刀2		
					用途不明	2			合子1	合子1		
港区	増上寺子院群遺跡	260	寺社	233	食事道具・調理具	168		椀類20, 椀類蓋2, 鉢類1	椀類46, 椀類蓋8, 杯2, 鉢類3, 器台類2		椀類66, 椀類蓋3, 杯3, 鉢類10, 器台類2	港-22
					調度・収納具	7			箱類1		鏡箱1, 盥1, 箱類1, 調度類3	
					装身具	1					下駄1	
					その他	56			位牌55		厨子扉1	
					用途不明	1					容器類1	
			墓地	27	食事道具・調理具	14		椀類7	椀類1		椀類4, 椀類蓋1, 杯1	
					装身具	9		櫛7			櫛2	

遺跡所在地	報告書名/遺跡名	遺跡出土部数	遺跡性格	遺跡性格別点数	用途分類	用途分類別点数	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	時期不明	報告書番号
					その他	1			木札1			
					用途不明	3		薑物類3				
港区	増上寺寺域第2遺跡	1	寺社	1	建築材	1		建材1				港-23
港区	済海寺長岡藩主牧野家墓所	31	墓地	31	食事道具・調理具	3			皿類1, 瓶類1	皿類1		港-40
					調度・収納具	6			鏡箱2, 鏡台1, 耳盥1, 化粧箱1, 箱類1			
					装身具	17			烏帽子1, 印籠10, 根付2	櫛締め1, 印籠1, 根付2		
					その他	3			厨子3			
					用途不明	2			薑物類2			
港区	上行寺跡・上行寺門前町屋敷遺跡	18	寺社	17	食事道具・調理具	8		椀類2, 椀類蓋1	椀類3, 椀類蓋2			港-21
					調度・収納具	3		鏡箱1	調度類1	箱類1		
					用途不明	6		不明1		薑物類1, 不明1	曲物類1, 不明2	
			町人地	1	食事道具・調理具	1					椀類蓋1	
新宿区	法正寺遺跡	6	墓地	6	調度・収納具	6			化粧水入れ1, 爪箱類2, 化粧箱1, 化粧箱蓋1, 化粧箱中蓋1			新-53
新宿区	法光寺跡	1	寺社	1	調度・収納具	1					花生1	新-51
新宿区	法光寺跡Ⅲ	3	墓地	3	食事道具・調理具	1					匙1	新-52
					装身具	1					煙管1	
					その他	1			舎利容器1			
新宿区	金勝寺遺跡Ⅱ	4	墓地	4	調度・収納具	3			鏡箱1, 箱類2			新-41
					装身具	1			煙管1			
新宿区	自證院遺跡	3	墓地	3	食事道具・調理具	1					匙1	新-30
					調度・収納具	1					箱類1	
					装身具	1					櫛1	
新宿区	自證院遺跡（2次）	2	墓地	2	調度・収納具	1		鏡箱1				新-31
					装身具	1		印籠1				
新宿区	發昌寺跡	14	墓地	14	食事道具・調理具	9		椀類2	椀類1	椀類1, 盆1	椀類3, 椀類蓋1	新-54
					装身具	1			煙管1			
					その他	1					位牌1	
					用途不明	3				不明3		
新宿区	發昌寺跡（2次）	5	墓地	5	食事道具・調理具	1			椀類1			新-55
					装身具	4			櫛1	櫛1	櫛1櫛1	
新宿区	圓應寺跡	4	墓地	4	玩具・遊戯具	1			ミニチュア鏡箱1			新-12
					装身具	3			櫛3			
新宿区	崇源寺・正見寺跡	121	墓地	121	食事道具・調理具	17		椀類3, 椀類蓋2	椀類4, 椀類蓋4, 杯1, 皿類1, 瓶類1	杯1		新-38
					生産道具	1			糸巻1			
					調度・収納具	2		箱類1	箱類1			
					装身具	22		印籠1	櫛6, 入れ歯1, 印籠4, 根付4, 扇子1, 下駄1	櫛1, 入れ歯2, 下駄1		
					玩具・遊戯具	43		駒33	独楽1, ミニチュア杯台1	駒6	ミニチュア壺1, ミニチュア壺1	
					その他	12			筆類1, 位牌9, 木刀1	磁針1		
					用途不明	24		薑物類1, 不明1	不明21	曲物類1		
新宿区	南元町遺跡Ⅱ	18	墓地	18	食事道具・調理具	14			椀類6, 椀類蓋4	椀類2, 椀類蓋2		新-58
					装身具	2				櫛1, 弊1		
					その他	2					位牌1, 鞘1	
新宿区	天龍寺跡	15	寺社	15	食事道具・調理具	5			椀類2, 椀類蓋2, 瓶類1			新-43
					装身具	7			櫛1, 牽2, 牽骨4			
					その他	1			鞘1			
					用途不明	2			薑物類2			
文京区	昌林院跡	1	寺社	1	その他	1					位牌1	文-12
文京区	護国寺門前町遺跡	12	墓地	12	食事道具・調理具	1		椀類1				文-10
					装身具	4		櫛4				
					玩具・遊戯具	1		ミニチュア壺1				
					その他	6		卒塔婆1, 掛け軸5				
文京区	本郷五丁目西遺跡	1	墓地	1	食事道具・調理具	1					盆1	文-22
台東区	池之端七軒町遺跡	28	寺社	22	食事道具・調理具	19		杓子1	椀類3		椀類14, 椀類蓋1	台-3
					装身具	1		下駄1				
					用途不明	2		薑物類1			不明1	
			墓地	6	食事道具・調理具	6					椀類6	
台東区	北稲荷町遺跡	6	寺社	6	食事道具・調理具	4		椀類2, 椀類蓋1, 盆1				台-9
					漆工用具	2		貝パレット2				
台東区	浅草松清町遺跡	1	寺社	1	食事道具・調理具	1			椀類1			台-2
台東区	東叡山寛永寺護国院	14	寺社	9	その他	9					位牌9	台-12
			墓地	5	調度・収納具	4			箱類4			
					装身具	1			煙管1			
					食事道具・調理具	2			杯1	杯1		台-13

遺跡所在地	報告書名/遺跡名	遺跡出土総数	遺跡性格	遺跡性格別点数	用途分類	用途分類別点数	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	時期不明	報告書掲号
台東区	東叡山寛永寺徳川将軍家御墓方霊廟	27	墓地	27	調度・収納具	11			小箱1	小箱6, 箱類2, 化粧刷毛2		
					装身具	3			櫛2	印籠1		
					その他	10			筆類2, 日時計1, 日時計蓋1	筆類4, 厨子2		
					用途不明	1				不明1		
台東区	No. 68遺跡	1	寺社	1	装身具	1				櫛1		台-19
台東区	No. 120遺跡	6	寺社	6	食事道具・調理具	2			椀類蓋1, 杯1			台-18
					装身具	3			櫛1	櫛1, 下駄1		
					玩具・遊戯具	1		浮子1				
台東区	入谷遺跡	14	寺社・町人地墳地	14	食事道具・調理具	12			椀類5, 椀類蓋3	椀類2, 杓子1, 墨台類1		台-4
					調度・収納具	1				箱類1		
					装身具	1			弊1			
墨田区	本所一丁目27遺跡	2	寺社	2	食事道具・調理具	2		椀類1, 杯1				墨-11
墨田区	大雲寺跡・墨田区no. 18遺跡	5	寺社	3	食事道具・調理具	3		椀類1			椀類1, 鉢1	墨-6
			墓地	2	食事道具・調理具	1					椀類蓋1	
					玩具・遊戯具	1			玩具1			
江東区	雲光院遺跡	8	墓地	8	食事道具・調理具	1				椀類1		江-1
					調度・収納具	2				木枕1, 箱類1		
					玩具・遊戯具	4				浮子4		
					その他	1				木刀1		
その他												
千代田区	外神田一丁目遺跡	19	河岸地	18	食事道具・調理具	17		椀類7, 椀類蓋2	箸1	椀類1	椀類3, 鍋類3	千-17
					用途不明	1					不明1	
			町人地	1	食事道具・調理具	1		椀類1				
台東区	芝崎町二丁目遺跡	7	耕作地	7	食事道具・調理具	6		椀類3, 椀類蓋1	椀類2			台-10
					用途不明	1			桶・樽類1			
墨田区	横川一丁目遺跡	7	田地	7	食事道具・調理具	3					椀類2, 椀類蓋1	墨-14
					調度・収納具	2			調度類1		箱類1	
					玩具・遊戯具	1						
					用途不明	1					容器類1	
北区	袋低地遺跡	9	村落	9	食事道具・調理具	8					椀類4, 椀類蓋4	北-1
					調度・収納具	1					調度類1	
板橋区	高島平北遺跡	4	水田	4	食事道具・調理具	4			椀類2, 椀類蓋2			板-1
合計		9,469	合計	9,469	合計	9,469						

附表1-2　近世江戸遺跡墓地出土副葬品一覧（漆製品のみ抽出）

※付表2は埋葬施設ごと、時代順に掲載した。報告書番号は【集成表掲載報告書】に付した番号である。

報告書名/遺跡名	遺構No./被葬者	埋葬施設	年齢、性別	時期	出土点数	食事道具・調理具	生産道具	調度・収納具	装身具	玩具・遊戯具	その他	用途不明	報告書番号
増上寺徳川将軍墓	秀忠	石槨石室	享年54、男性	17世紀中葉	3			手箱2	口薬入れ1				港-24
増上寺徳川将軍墓	家宣	石槨石室	享年51、男性	18世紀前葉	3						飾太刀1, 筆類1, 日時計1		港-24
東叡山寛永寺徳川将軍家御裏方霊廟	家重正室 證明院	石槨石室	享年23、女性	18世紀中葉	4				櫛2		日時計1, 日時計盆1		台-13
増上寺徳川将軍墓	家宣正室 天英院	石槨石室	享年76、女性	18世紀中葉	1						厨子1		港-24
増上寺徳川将軍墓	家重	石槨石室	享年51、男性	18世紀後葉	5			手箱4			飾太刀1		港-24
東叡山寛永寺徳川将軍家御裏方霊廟	家宣側室 法心院	石槨石室	享年85、女性	18世紀後葉	2						筆類2		台-13
東叡山寛永寺徳川将軍家御裏方霊廟	家斉六女 冲縁院	石槨石室	享年1、女性	18世紀末葉	2	杯1		小箱1					台-13
東叡山寛永寺徳川将軍家御裏方霊廟	家慶正室 浄観院	石槨石室	享年46、女性	19世紀中葉	6				化粧刷毛2		厨子2, 筆類2		台-13
増上寺徳川将軍墓	家斉正室 広大院	石槨石室	享年71、女性	19世紀中葉	1							合子1	港-24
増上寺徳川将軍墓	家定正室 天親院	石槨石室	享年26、女性	19世紀中葉	3	杯1		箱類2					港-24
東叡山寛永寺徳川将軍家御裏方霊廟	家定正室 澄心院	石槨石室	享年26、女性	19世紀中葉	13	杯1		小箱6, 箱類2	印籠1		筆類2	不明1	台-13
増上寺徳川将軍墓	家慶	石槨石室	享年61、男性	19世紀中葉	1						飾太刀1		港-24
増上寺徳川将軍墓	家茂	石槨石室	享年21、男性	19世紀後葉	1						飾太刀1		港-24
				石槨石室墓 合計	45	3	0	17	6	0	17	2	
				石槨石室墓1基あたりの平均	3.5								
増上寺徳川将軍墓	家光側室 桂昌院	石室	享年79、女性	18世紀前葉	1							合子1	港-24
済海寺長岡藩主牧野家墓所	4　四代 忠寿	石室	享年41、男性	18世紀中葉	1				印籠1				港-40
済海寺長岡藩主牧野家墓所	3　六代 忠敬	石室	享年20、男性	18世紀中葉	1				烏帽子1				港-40
済海寺長岡藩主牧野家墓所	11　八代 忠寛	石室	享年26、男性	18世紀後葉	13				印籠9, 根付2		厨子2		港-40
済海寺長岡藩主牧野家墓所	2　六代 忠敬正室 明仙院	石室	享年66、女性	18世紀末葉	1						厨子1		港-40
済海寺長岡藩主牧野家墓所	10　八代 忠寛正室 俊光院	石室	享年65～67、女性	18世紀末葉	10	皿類1, 膳類1		箱類1, 化粧箱1, 鏡箱2, 耳盥1, 鏡台1				薫物類2	港-40
済海寺長岡藩主牧野家墓所	7　九代 忠精子忠領	石室	享年20、男性	19世紀前葉	5	皿類1			印籠1, 根付2, 緒締め1				港-40
				石室墓 合計	32	3	0	6	17	0	3	3	
				石室墓1基あたりの平均	4.6								
東叡山寛永寺護国院	C133-2	木槨甕棺	女性	18世紀	5			小箱4	煙管1				台-12
巣源寺・正見寺跡	正見寺452	木槨甕棺	幼児	18世紀前半	8				根付4, 印籠4				新-38
法光寺跡Ⅲ	265	木槨甕棺	不明	18世紀中葉～後葉	1						舎利容器1		新-52
弥勒寺跡・栖岸院跡	栖岸院1	木槨甕棺	幼児	18世紀後半	3	器台類1		調度類1			獅子頭1		千-29
法正寺遺跡	84	木槨甕棺	壮年女性	18世紀末～19世紀初	6			化粧水入れ1, 爪箱盆1, 爪箱1, 化粧箱盆1, 化粧箱中盆1, 化粧箱1					新-53
天徳寺寺域第3遺跡	36	木槨甕棺	壮～熟年女性	不明	1				櫛1				港-29
				木槨甕棺墓 合計	24	1	0	11	10	0	2	0	
				木槨甕棺墓1基あたりの平均	4								
自證院遺跡（2次）	89	甕棺	壮年男性	17世紀	2			鏡箱1	印籠1				新-31
發昌寺跡	104	甕棺	熟年男性	17世紀後葉～18世紀初	2	椀類2							新-54
天徳寺寺域第3遺跡	56	甕棺	熟～老年女性	17世紀末葉	1				櫛1				港-29
芝増上寺子院群	B-M283	甕棺	若年女性	18世紀前半	3				櫛3				港-22

報告書名/遺跡名	遺構No./被葬者	埋葬施設	年齢、性別	時期	出土点数	食事道具・調理具	生産道具	調度・収納具	装身具	玩具・遊戯具	その他	用途不明	報告書番号
樂源寺・正見寺跡	樂源寺513	甕棺	未成年男性	18世紀前半	2		糸巻1				筆類1		新-38
樂源寺・正見寺跡	樂源寺528	甕棺	壮年男性	18世紀前半	1				櫛1				新-38
樂源寺・正見寺跡	樂源寺577	甕棺	壮年女性	18世紀前半	1				櫛1				新-38
樂源寺・正見寺跡	正見寺455	甕棺	青年～壮年	18世紀前半	1							不明1	新-38
樂源寺・正見寺跡	正見寺507	甕棺	青年女性	18世紀前半	3				櫛1, 扇子1			不明1	新-38
樂源寺・正見寺跡	正見寺577	甕棺	乳幼児	18世紀前半	6							不明6	新-38
圓応寺跡	26	甕棺	幼児	18世紀第2四半期	1				櫛1				新-12
天徳寺寺域第3遺跡	57	甕棺	老年男性	18世紀中葉	2	椀類1, 椀類蓋1							港-29
發昌寺跡（2次）	114	甕棺	壮年女性	18世紀中葉	1				櫛1				新-55
全勝寺遺跡Ⅱ	46	甕棺	20歳代女性	18世紀中葉～18世紀後葉	4			箱類2, 円鏡箱1	煙管1				新-41
發昌寺跡	50	甕棺	成人男性	18世紀中葉～19世紀前葉	1				煙管1				新-54
天徳寺寺域第3遺跡	42	甕棺	壮年女性	18世紀後半	1	盆1							港-29
圓応寺跡	79	甕棺	幼児	18世紀後半	2				櫛1	ミニチュア鏡箱1			新-12
樂源寺・正見寺跡	樂源寺141	甕棺	壮年女性	18世紀後半	3			箱1	入れ歯1			不明1	新-38
樂源寺・正見寺跡	樂源寺118	甕棺	乳幼児・幼児	18世紀後半	1					ミニチュア杯台1			新-38
樂源寺・正見寺跡	樂源寺238	甕棺	幼児	18世紀後半	2	椀類蓋1						不明1	新-38
樂源寺・正見寺跡	正見寺20a	甕棺	熟年男性	18世紀後半	6							不明6	新-38
發昌寺跡	15	甕棺	幼児	19世紀前葉～19世紀末	5	椀類1, 盆1						不明3	新-54
天徳寺寺域第3遺跡	167	甕棺	青年女性・成人女性・壮～熟年男性2	不明	1				櫛1				港-29
				甕棺墓 合計	52	9	1	5	16	2	1	19	
				甕棺墓1基あたりの平均	2.3								
自證院遺跡	79	二重木槨	壮年女性	不明	2			箱類1	櫛1				新-30
				二重木槨墓 合計	2	0	0	1	1	0	0	0	
				二重木槨墓1基あたりの平均	2								
八丁堀三丁目遺跡Ⅱ	481-10	方形木棺	熟年男性	16世紀末～17世紀前葉	1	椀類1							中-12
竜泉寺町遺跡	10	方形木棺	壮年男性、成人男性、成人女性	17世紀後半	1	椀類1							台-24
八丁堀三丁目遺跡Ⅱ	472-3	方形木棺	乳幼児	17世紀前葉～中葉	1	椀類蓋1							中-12
八丁堀三丁目遺跡Ⅱ	483-2～4	方形木棺	青年	17世紀前葉～中葉	3			箱類3					中-12
樂源寺・正見寺跡	樂源寺445	方形木棺	壮年男性	18世紀前半	1				櫛1				新-38
樂源寺・正見寺跡	正見寺520	方形木棺	小児・成年	18世紀前半	4							不明4	新-38
天徳寺寺域第3遺跡	82	方形木棺	熟年女性	18世紀中葉	1							容器類1	港-29
圓応寺跡	21	方形木棺	幼児・成人男性	18世紀中葉	1				櫛1				新-12
樂源寺・正見寺跡	樂源寺124	方形木棺	不明	18世紀後半	1	椀類蓋1							新-38
樂源寺・正見寺跡	樂源寺316	方形木棺	壮年女性	18世紀後半	1				櫛1				新-38
樂源寺・正見寺跡	樂源寺346	方形木棺	幼児	18世紀後半	2	皿類1					木刀1		新-38
樂源寺・正見寺跡	正見寺296	方形木棺	不明	18世紀後半	1	杯1							新-38
雲光院遺跡	120	方形木棺	青年男性	19世紀	4	椀類1				浮子3			江-1
發昌寺跡（2次）	4-No.2	方形木棺	壮年女性	19世紀初	1				櫛1				新-55
樂源寺・正見寺跡	樂源寺20	方形木棺	不明	19世紀前半	1				入れ歯1				新-38

報告書名/遺跡名	遺構No./被葬者	埋葬施設	年齢、性別	時期	出土点数	食事道具・調理具	生産道具	調度・収納具	装身具	玩具・遊戯具	その他	用途不明	報告書番号
樂源寺・正見寺跡	樂源寺74	方形木棺	壮年女性	19世紀前半	1				櫛1				新-38
樂源寺・正見寺跡	樂源寺159	方形木棺	幼児	19世紀前半	3				下駄1		磁針1	曲物類1	新-38
樂源寺・正見寺跡	樂源寺174	方形木棺	乳幼児	19世紀前半	6					駒6			新-38
樂源寺・正見寺跡	正見寺114	方形木棺	不明	19世紀前半	1	杯1							新-38
天徳寺寺域第3遺跡	255	方形木棺	熟年男性	不明	1			箱類1					港-29
天徳寺寺域第3遺跡	258	方形木棺	老年男性	不明	1						六角鏡1		港-29
天徳寺寺域第3遺跡	306	方形木棺	壮年男性	不明	2	椀類1, 椀類蓋1							港-29
法光寺跡Ⅲ	258	方形木棺	壮年男性	不明	1	匙1							新-52
自雄院遺跡	83	方形木棺	不明	不明	1	匙1							新-30
發昌寺跡（2次）	119	方形木棺	不明	不明	1				簪1				新-55
方形木棺墓 合計					42	12	0	4	8	9	3	6	
方形木棺墓1基あたりの平均					1.7								
八丁堀三丁目遺跡Ⅱ	483-1	方形木棺（蔵骨器）	青年	17世紀前葉～中葉	1	椀1							中-12
方形木棺（蔵骨器）墓 合計					1	1	0	0	0	0	0	0	
方形木棺（蔵骨器）墓1基あたりの平均					1								
八丁堀三丁目遺跡Ⅱ	351-12	円形木棺	乳幼児	16世紀末～17世紀前葉	1	椀類1							中-12
八丁堀三丁目遺跡Ⅱ	119-7	円形木棺	乳幼児	17世紀前葉～中葉	1				印籠1				中-12
八丁堀三丁目遺跡Ⅱ	154-1	円形木棺	不明	17世紀前葉～中葉	1	椀類1							中-12
八丁堀三丁目遺跡Ⅱ	201-5	円形木棺	乳幼児	17世紀前葉～中葉	1			箱類1					中-12
八丁堀三丁目遺跡Ⅱ	209-7	円形木棺	幼児	17世紀前葉～中葉	1	椀類蓋1							中-12
八丁堀三丁目遺跡Ⅱ	747-10	円形木棺	成人	17世紀前葉～中葉	1	盤1							中-12
増上寺子院群	B-M48上	円形木棺	成人男性	17世紀中葉	1	椀類1							港-22
増上寺子院群	B-M171	円形木棺	成人男性	17世紀中葉	1	椀類1							港-22
増上寺子院群	B-M181	円形木棺	不明	17世紀中葉	3							壺物類3	港-22
増上寺子院群	B-M181	円形木棺	不明	17世紀中葉	3				櫛3				港-22
弥勒寺跡・栖岸院跡	弥勒寺115	円形木棺	乳児	17世紀中～後葉	3			箱類1	下駄2				千-29
増上寺子院群	A-M12	円形木棺	不明	17世紀後半	1	椀類1							港-22
増上寺子院群	A-M186	円形木棺	成人	17世紀後半	2	椀類1			櫛1				港-22
増上寺子院群	B-M90	円形木棺	成人男性	17世紀後半	2	椀類2							港-22
増上寺子院群	B-M139	円形木棺	成人女性	17世紀後半	1	椀類1							港-22
八丁堀三丁目遺跡	6	円形木棺	不明	17世紀後葉	1				櫛1				中-11
八丁堀三丁目遺跡	56	円形木棺	不明	17世紀後葉	2				櫛2				中-11
八丁堀三丁目遺跡	82	円形木棺	不明	17世紀後葉	2	椀類蓋1			櫛1				中-11
八丁堀三丁目遺跡	68	円形木棺	不明	17世紀後葉	1				編み物1				中-11
天徳寺寺域第3遺跡	95	円形木棺	老年男性	17世紀後葉	1	椀類蓋1							港-29
護国寺門前町遺跡	77	円形木棺	壮年男性	17世紀後葉	1						掛け軸1		文-10
樂源寺・正見寺跡	正見寺687	円形木棺	小児	17世紀後葉	33					駒33			新-38
樂源寺・正見寺跡	正見寺741b	円形木棺	小児	17世紀後葉	5	椀類2, 椀類蓋2			印籠1				新-38
樂源寺・正見寺跡	正見寺764	円形木棺	幼児	17世紀後葉	1							壺物類1	新-38
樂源寺・正見寺跡	正見寺790	円形木棺	小児	17世紀後葉	1			箱類1					新-38
樂源寺・正見寺跡	正見寺809	円形木棺	幼児	17世紀後葉	1							不明1	新-38
樂源寺・正見寺跡	正見寺868	円形木棺	青年女性	17世紀後葉	1	椀類1							新-38
護国寺門前町遺跡	52	円形木棺	成年女性	17世紀後葉～末葉	3				櫛3				文-10

報告書名/遺跡名	遺構No./被葬者	埋葬施設	年齢、性別	時期	出土点数	食事道具・調理具	生産道具	調度・収納具	装身具	玩具・遊戯具	その他	用途不明	報告書番号
護国寺門前町遺跡	53	円形木棺	壮年男性	17世紀後葉～末葉	4						掛け軸4		文-10
護国寺門前町遺跡	85	円形木棺	成年男性	17世紀後葉～末葉	1				櫛1				文-10
護国寺門前町遺跡	89	円形木棺	青年男性	17世紀後葉～末葉	1	椀類1							文-10
護国寺門前町遺跡	96	円形木棺	壮年男性	17世紀後葉～末葉	1						卒塔婆1		文-10
護国寺門前町遺跡	101	円形木棺	幼児	17世紀後葉～末葉	1					ミニチュア壺1			文-10
麻布龍土町町屋敷跡遺跡	72e	円形木棺	不明	17世紀後葉～18世紀	1				櫛1				港-2
天徳寺寺域第3遺跡	175	円形木棺	青年女性	17世紀末葉	1				櫛1				港-29
發昌寺跡	94	円形木棺	幼児	18世紀初～18世紀中葉	1	椀類1							新-54
増上寺子院群	B-M109	円形木棺	小児	18世紀前半	1						木札1		港-22
増上寺子院群	B-M119	円形木棺	成人男性	18世紀前半	1	椀類1							港-22
崇源寺・正見寺跡	崇源寺516	円形木棺	壮年男性	18世紀前半	2	椀類2							新-38
崇源寺・正見寺跡	崇源寺564	円形木棺	青年女性・幼児	18世紀前半	1					独楽1			新-38
崇源寺・正見寺跡	正見寺686	円形木棺	幼児	18世紀前半	1				下駄1				新-38
崇源寺・正見寺跡	正見寺786	円形木棺	壮年男性	18世紀前半	2	椀類1, 椀類蓋1							新-38
崇源寺・正見寺跡	正見寺728b	円形木棺	幼児	18世紀前半	1				櫛1				新-38
南元町遺跡Ⅱ	155	円形木棺	幼児	18世紀前半	4	椀類2, 椀類蓋2							新-58
南元町遺跡Ⅱ	322	円形木棺	不明	18世紀前半	4	椀類2, 椀類蓋2							新-58
發昌寺跡（2次）	174	円形木棺	成人男性	18世紀中葉	1	椀類1							新-55
崇源寺・正見寺跡	正見寺329	円形木棺	幼児	18世紀後半	3	椀類1, 椀類蓋1, 鉢類1							新-38
南元町遺跡Ⅱ	116	円形木棺	成人男性	18世紀後半	1	椀類1							新-58
南元町遺跡Ⅱ	314	円形木棺	老年女性	18世紀後半	1	椀類1							新-58
南元町遺跡Ⅱ	253	円形木棺	成人男性	18世紀後半	1				櫛1				新-58
大雲寺跡・墨田区No.18遺跡	法性寺23	円形木棺	不明	18世紀末葉～幕末	1					玩具1			墨-6
雲光院遺跡	78	円形木棺	幼児	19世紀	1			箱類1					江-1
雲光院遺跡	84B	円形木棺	幼児	19世紀前半	2					浮子1	木刀1		江-1
崇源寺・正見寺跡	崇源寺123	円形木棺	熟年男性	19世紀前半	1				入れ歯1				新-38
南元町遺跡Ⅱ	310	円形木棺	青年女性	19世紀前半	2				櫛1笄1				新-58
南元町遺跡Ⅱ	95	円形木棺	未成年女性	19世紀前半	4	椀類2, 椀類蓋2							新-58
雲光院遺跡	88	円形木棺	成人中期男性	19世紀中葉～後葉	1			木枕1					江-1
増上寺子院群	A-M29	円形木棺	成人	不明	1	杯1							港-22
増上寺子院群	A-M124	円形木棺	成人男性	不明	3	椀類2, 椀類蓋1							港-22
増上寺子院群	A-M178	円形木棺	成人女性	不明	1	椀類1							港-22
大雲寺跡・墨田区No.18遺跡	法性寺8	円形木棺	壮年男性・壮年女性	不明	1	椀類蓋1							墨-6
本郷五丁目西遺跡	13	円形木棺	幼児	不明	1	盆1							文-22
天徳寺寺域第3遺跡	183	円形木棺	不明	不明	4	椀類2, 椀類蓋2							港-29
増上寺子院群	B-M51下	円形木棺	不明	不明	1	椀類1							港-22
増上寺子院群	B-M161	円形木棺	不明	不明	2				櫛2				港-22
池之端七軒町遺跡	178	円形木棺	不明	不明	3	椀類3							台-3
池之端七軒町遺跡	479	円形木棺	不明	不明	2	椀類2							台-3
池之端七軒町遺跡	466	円形木棺	不明	不明	1	椀類1							台-3
發昌寺跡	110	円形木棺	不明	不明	4	椀類3, 椀類蓋1							新-54
發昌寺跡（2次）	322	円形木棺	不明	不明	1				櫛1				新-55
円形木棺墓 合計					148	65	0	5	28	37	8	5	
円形木棺墓1基あたりの平均					2.1								

報告書名/遺跡名	遺構No./被葬者	埋葬施設	年齢、性別	時期	出土点数	食事道具・調理具	生産道具	調度・収納具	装身具	玩具・遊戯具	その他	用途不明	報告書番号
八丁堀三丁目遺跡Ⅱ	350-3	直葬	青年女性	16世紀末～17世紀前葉	1							不明1	中-12
八丁堀三丁目遺跡Ⅱ	478-38	直葬	熟年男性	17世紀前葉～中葉	1	椀類1							中-12
直葬 合計					2	1	0	0	0	0	0	1	
直葬1基あたりの平均					1								
發昌寺跡	57	直葬/改葬	成人男性	不明	1						位牌1		新-54
直葬/改葬 合計					1	0	0	0	0	0	1	0	
直葬/改葬1基あたりの平均					1								
法光寺跡Ⅲ	48・184	不明	不明	不明	1				煙管1				新-52
不明 合計					1	0	0	0	1	0	0	0	
不明1基あたりの平均					1								

【集成表掲載報告書】　※遺跡所在地（自治体コード順）ごと報告書名 50 音順

〔千代田区〕千-1 飯田町遺跡調査会 1995『飯田町遺跡』, **千-2** 千代田区飯田町遺跡調査会 2001『飯田橋遺跡』, **千-3** 地下鉄 7 号線溜池・駒込間遺跡調査会 1994『和泉伯太藩上屋敷跡』, **千-4** 東京都埋蔵文化財センター2007『和泉伯太藩・武蔵岡部藩上屋敷跡遺跡』, **千-5** 千代田区教育委員会 2001『岩本町二丁目遺跡』, **千-6** 都立一橋高校内遺跡調査団 1985『江戸　都立一橋高校地点発掘調査報告』, **千-7** 東京都埋蔵文化財センター2015『江戸城跡三の丸地区』, **千-8** 地下鉄 7 号線溜池・駒込間遺跡調査会 1996『江戸城外堀跡市谷御門外橋詰・御堀端』, **千-9** 地下鉄 7 号線溜池・駒込間遺跡調査会 1996『江戸城外堀跡四谷御門外町屋跡』, **千-10** 千代田区教育委員会 1995『江戸城跡和田倉遺跡』, **千-11** 加藤建設株式会社文化財調査部 2014『大手町一丁目遺跡』, **千-12** 紀尾井町 6－18 遺跡調査会 1994『尾張藩麹町邸跡』, **千-13** 加藤建設株式会社文化財調査部 2014『尾張藩麹町邸跡Ⅳ』, **千-14** 千代田区紀尾井町遺跡調査会 1988『紀尾井町遺跡』, **千-15** 大成エンジニアリング株式会社 2013『紀尾井町遺跡Ⅱ』, **千-16** 千代田区九段南一丁目遺跡調査会 2005『九段下南一丁目遺跡』, **千-17** 千代田区外神田一丁目遺跡調査会 1999『外神田一丁目遺跡』, **千-18** 東京都埋蔵文化財センター2004『外神田四丁目遺跡』, **千-19** 地下鉄 7 号線溜池・駒込間遺跡調査会 1997『溜池遺跡』, **千-20** 都内遺跡調査会永田町二丁目地内調査団 1996『溜池遺跡』, **千-21** 東京都埋蔵文化財センター2011『溜池遺跡』, **千-22** 千代田区東京駅八重洲北口遺調査会 2003『東京駅八重洲北口遺跡』, **千-23** 東京都埋蔵文化財センター2016『永田町一丁目遺跡Ⅱ』, **千-24** 東京都埋蔵文化財センター2003『永田町二丁目遺跡』, **千-25** 千代田区一ツ橋二丁目遺跡調査会 1998『一ツ橋二丁目遺跡』, **千-26** 丸の内 1-40 遺跡調査会 1998『丸の内一丁目遺跡』, **千-27** 千代田区丸の内一丁目遺跡調査会 2005『丸の内一丁目遺跡Ⅱ』, **千-28** 東京都埋蔵文化財センター1994『丸の内三丁目遺跡』, **千-29** 千代田区立四番町歴史民俗資料館 2010『弥勒寺跡・栖岸院跡』, **千-30** 明治大学記念館前遺跡調査団 2000『明治大学記念館前遺跡』, **千-31** 株式会社武蔵文化財研究所 2015『有楽町一丁目遺跡』, **千-32** 株式会社武蔵文化財研究所 2006『有楽町二丁目遺跡』

〔中央区〕中-1 明石町遺跡調査会 2003『明石町遺跡』, **中-2** 京葉線八丁堀遺跡調査団 1990『京葉線八丁堀遺跡』, **中-3** 東京都埋蔵文化財センター2014『築地五丁目遺跡(第 291 集)』, **中-4** 東京都埋蔵文化財センター2014『築地五丁目遺跡（第 299 集)』, **中-5** 日本橋一丁目遺跡調査会 2003『日本橋一丁目遺跡』, **中-6** 中央区教育委員会 2005『日本橋蛎殻町一丁目遺跡』, **中-7** 中央区教育委員会 2004『日本橋蛎殻町一丁目遺跡Ⅱ』, **中-8** 日本橋二丁目

遺跡調査会 2001『日本橋二丁目遺跡』,**中-9** 中央区教育委員会 2013『日本橋人形町三丁目遺跡』,**中-10** 中央区教育委員会 2014『日本橋人形町三丁目遺跡Ⅱ』,**中-11** 中央区教育委員会 1988『八丁堀三丁目遺跡』,**中-12** 八丁堀三丁目遺跡（第 2 次）調査会 2003『八丁堀三丁目遺跡Ⅱ』,**中-13** 中央区教育委員会事務局図書文化財課郷土天文館 2016『八丁堀二丁目遺跡』,**中-14** 中央区教育委員会事務局図書文化財課郷土天文館 2015『湊一丁目遺跡』

〔港区〕**港-1** 慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室・共和開発株式会社 2011『会津藩保科(松平)家屋敷跡遺跡』,**港-2** 株式会社パスコ 2014『麻布龍土町町屋敷跡遺跡発掘調査報告書』,**港-3** 東京都埋蔵文化財センター2010『愛宕下遺跡Ⅰ』,**港-4** 東京都埋蔵文化財センター2011『愛宕下遺跡Ⅱ』,**港-5** 東京都埋蔵文化財センター2014『愛宕下遺跡Ⅲ』,**港-6** 伊勢菰野藩土方家屋敷跡遺跡調査団 1992『伊勢菰野藩土方家屋敷跡遺跡発掘調査概報』,**港-7** 港区教育委員会 2009『石見津和野藩亀井家屋敷跡遺跡発掘調査報告書Ⅱ』,**港 -8** 港区教育委員会・共和開発株式会社 2006『上野沼田藩土岐家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』,**港-9** 東京都埋蔵文化財センター2003『宇和島藩伊達家屋敷跡遺跡』,**港-10** 港区教育委員会・共和開発株式会社 2005『近江山上藩稲垣家屋敷跡遺跡発掘調査報告書Ⅱ』,**港 -11** 旧芝離宮庭園調査団 1988『旧芝離宮庭園』,**港-12** 白金館址（亜東関係協会東京弁事処公舎等建設用地）遺跡調査団 1988『白金館址遺跡Ⅱ』,**港-13** 汐留地区遺跡調査会 1996『汐留遺跡』,**港-14** 東京都埋蔵文化財センター1997『汐留遺跡Ⅰ』,**港-15** 東京都埋蔵文化財センター2000『汐留遺跡Ⅱ』,**港-16** 東京都埋蔵文化財センター2003『汐留遺跡Ⅲ』,**港-17** 東京都埋蔵文化財センター2006『汐留遺跡Ⅳ』,**港-18** 東京都埋蔵文化財センター2014『品川台場（第 5）遺跡』,**港-19** 港区教育委員会 1988『芝神谷町町屋跡遺跡』,**港-20** 港区教育委員会・岡三リビック株式会社 2005『芝田町五丁目町屋跡遺跡発掘調査報告書』,**港-21** 港区教育委員会・盤古堂 2006『上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡発掘調査報告書』,**港-22** 港区芝公園 1 丁目遺跡調査団 1988『増上寺子院群光学院・貞松院跡・源興院跡』,**港-23** 港区教育委員会 2006『増上寺寺域第 2 遺跡発掘調査報告書』,**港-24** 鈴木尚・矢島恭介・山辺知行 1967『増上寺徳川将軍墓とその遺品・遺体』,**港-25** 港区西新橋二丁目遺跡調査会 1989『西新橋二丁目港区 No.19 遺跡』,**港-26** （仮称）城山計画用地内遺跡調査会 1994『西久保城山地区の武家屋敷跡遺跡』,**港-27** 株式会社武蔵文化財研究所 2008『筑前秋月藩黒田家屋敷跡遺跡発掘調査報告書Ⅱ』,**港-28** 東京都港区教育委員会 1994『筑前福岡藩黒田家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』,**港-29** 天徳寺寺域第 3 遺跡調査会 1992『天徳

寺寺域第 3 遺跡発掘調査報告書』,**港-30** 東京都埋蔵文化財センター2005『萩藩毛利家屋敷跡遺跡』,**港-31** 港区教育委員会 1998『旗本田中家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』,**港-32** 東京都埋蔵文化財センター2015『旗本花房家屋敷跡遺跡』,**港-33** 港区教育委員会事務局図書・文化財課文化財係 2005『播磨赤穂藩森家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』,**港-34** 港区教育委員会（同事務局図書・文化財課文化財係)2010『播磨赤穂藩森家屋敷跡遺跡発掘調査報告書Ⅱ』,**港-35** 港区教育委員会事務局図書・文化財課文化財係 2009『肥後熊本藩細川家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』,**港-36** 港区教育委員会事務局図書・文化財課文化財係 2006『豊後岡藩中川家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』,**港-37** 港区教育委員会・共和開発株式会社 2013『豊後日出藩木下家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』,**港-38** 港区教育委員会（事務局図書・文化財課文化財係）2014『豊後森藩久留島家・丹波亀山藩松平家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』,**港-39** 南麻布福祉施設建設用地内遺跡調査団 1991『港区 No.91 遺跡』,**港-40** 東京都港区教育委員会 1986『港区三田済海寺長岡藩主牧野家墓所発掘調査報告書』

〔新宿区〕新-1 新宿区荒木町遺跡調査団 1998『荒木町遺跡Ⅱ』,**新-2** 新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館学芸課 2003『市谷甲良町遺跡』,**新-3** 大成エンジニアリング株式会社 2014『市谷甲良町遺跡Ⅴ』,**新-4** 新宿区生涯学習財団 2002『市谷砂土原町三丁目遺跡』,**新-5** 大成エンジニアリング株式会社 2006『市谷砂土原三丁目遺跡Ⅱ』,**新-6** 株式会社武蔵文化財研究所 2014『市谷左内町遺跡Ⅱ』,**新-7** 新宿区生涯学習財団 2001『市谷田町一丁目遺跡』,**新-8** 加藤建設株式会社文化財調査部 2011『市谷田町一丁目遺跡Ⅱ』,**新-9** 加藤建設株式会社埋蔵文化財調査部 2007『市谷仲之町遺跡Ⅷ』,**新-10** 東京都埋蔵文化財センター2014『市谷薬王寺町遺跡Ⅴ・市谷柳町遺跡Ⅱ』,**新-11** 早稲田大学文化財整理室 2000『稲荷前遺跡』,**新-12** 新宿区厚生部遺跡調査会 1993『圓應寺跡』,**新-13** 新宿区戸山遺跡調査会 2003『尾張徳川家下屋敷跡Ⅱ』,**新-14** 東京都埋蔵文化財センター1998『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅲ』,**新-15** 東京都埋蔵文化財センター1999『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅳ』,**新-16** 東京都埋蔵文化財センター2000『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅴ』,**新-17** 東京都埋蔵文化財センター2001『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅵ』,**新-18** 東京都埋蔵文化財センター2001『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅶ』,**新-19** 東京都埋蔵文化財センター2001『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅷ』,**新-20** 東京都埋蔵文化財センター2002『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅸ』,**新-21** 東京都埋蔵文化財センター2002『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅹ』,**新-22** 東京都埋蔵文化財センター2002『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅺ』,**新-23** 東京都埋蔵文化財センター2006『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅻ』,**新-24** 東京都埋蔵文化財センター2008『柏木淀橋町遺跡』,**新-25** 新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館

埋蔵文化財課 2003『行元寺跡』,**新-26** 新宿区厚生部遺跡調査会 1992『細工町遺跡』,**新-27** 新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館埋蔵文化財課 2002『坂町遺跡』,**新-28** テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部 2008『坂町遺跡Ⅱ』,**新-29** 東京都新宿区教育委員会 1988『三栄町遺跡』,**新-30** 自證院遺跡調査団 1987『自證院遺跡』,**新-31** 東京都新宿区教育委員会 1991『自證院遺跡（第 2 次緊急発掘調査報告書)』,**新-32** 新宿区信濃町遺跡調査団 1999『信濃町遺跡』,**新-33** 大成エンジニアリング株式会社 2003『信濃町南遺跡』,**新-34** 株式会社武蔵文化財研究所 2013『白銀町遺跡Ⅲ』,**新-35** テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部 2011『新小川町遺跡』,**新-36** テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部 2008『新宿四丁目遺跡』,**新-37** 東京都埋蔵文化財センター2005『新宿六丁目遺跡』,**新-38** 大成エンジニアリング株式会社 2005『崇源寺・正見寺跡』,**新-39** 放射第 6 号線遺跡調査団 1998『住吉町南遺跡 市谷台町遺跡 住吉町西遺跡Ⅱ』,**新-40** 東京都埋蔵文化財センター2009『千駄ヶ谷大谷戸遺跡・内藤町遺跡』,**新-41** 大成エンジニアリング株式会社 2012『全勝寺遺跡Ⅱ』,**新-42** 株式会社第三開発発掘調査部 2004『大京町東遺跡』,**新 -43** 新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館学芸課 2004『天龍寺跡』,**新-44** 新宿区筑土八幡町遺跡調査団 1996『筑土八幡町遺跡』,**新-45** 新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館 2004『筑土八幡町遺跡Ⅲ』,**新-46** 新宿区内藤町遺跡調査団 1992『内藤町遺跡』,**新-47** 東京都埋蔵文化財センター2002『内藤町遺跡』,**新-48** 東京都埋蔵文化財センター2007『内藤町遺跡』,**新-49** 大成エンジニアリング株式会社 2001『馬場下町遺跡』,**新-50** 新宿区払方町遺跡調査団 1999『払方町遺跡』,**新-51** 新宿区法光寺跡調査団 1995『法光寺跡』,**新-52** 岡三リビック株式会社 2008『法光寺跡Ⅲ』,**新-53** 大成エンジニアリング株式会社 2007『法正寺遺跡』,**新-54** 新宿区發昌寺跡遺跡調査会 1991『發昌寺跡』,**新-55** 新宿区南元町遺跡調査会 1991『發昌寺跡（第 2 次緊急発掘調査報告書)』,**新-56** 新宿区生涯学習財団 2001『南伊賀町遺跡』,**新-57** 新宿区南町遺跡調査団 1996『南町遺跡』,**新-58** 国際文化財株式会社 2012『南元町遺跡Ⅱ(香蓮寺・崇源寺跡)』,**新-59** 国際文化財株式会社 2015『南元町遺跡Ⅲ』,**新-60** 警視庁・新宿区南山伏町遺跡調査団 1997『南山伏町遺跡』,**新-61** テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部 2008『水野原遺跡Ⅱ』,**新-62** 新宿区四谷一丁目遺跡調査団 1998『四谷一丁目遺跡』,**新-63** 新宿区生涯学習財団 2000『四谷一丁目遺跡Ⅲ』,**新-64** 新宿区四谷三丁目遺跡調査団 1991『四谷三丁目遺跡』,**新-65** 新宿区新司法書士会館遺跡調査団 1998『四谷二丁目遺跡Ⅱ』,**新-66** 大成エンジニアリング株式会社 2011『四谷四丁目遺跡Ⅲ』,**新-67** 加藤建設株式会社埋蔵文化財調査部 2009『山吹町遺跡』,**新-68** 新

宿区遺跡調査会 1994『矢来町遺跡』,**新-69** 株式会社四門文化財研究室 2008『若葉三丁目遺跡』,**新-70** 加藤建設株式会社 2013『若葉三丁目遺跡Ⅱ』,**新-71** 加藤建設株式会社文化財調査部 2016『若葉三丁目遺跡Ⅲ』,**新-72** 新宿区若宮町遺跡調査団 1998『若宮町遺跡』

〔文京区〕文-1 株式会社武蔵文化財研究所 2008『大塚町遺跡第 5 地点』,**文-2** 東京都埋蔵文化財センター2002『お茶の水貝塚』,**文-3** 文京区千川幹線遺跡調査会 1991『春日町遺跡Ⅰ』,**文-4** 文京区遺跡調査会 2000『春日町遺跡第Ⅲ・Ⅳ地点』,**文-5** 文京区遺跡調査会 1999『春日町遺跡第Ⅵ地点』,**文-6** 共和開発株式会社 2007『春日町(小石川後楽園)遺跡第 10 地点』,**文-7** 大成エンジニアリング株式会社埋蔵文化財調査部 2012『春日町東遺跡』,**文-8** 都立文京盲学校遺跡調査班 2000『小石川牛天神下』,**文-9** 東京都埋蔵文化財センター2010『後楽二丁目南遺跡』,**文-10** テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部 2009『護国寺門前町遺跡』,**文-11** 大成エンジニアリング株式会社 2006『駒込浅嘉町遺跡第 3 地点』,**文-12** 加藤建設株式会社埋蔵文化財調査部 2007『昌林院跡』,**文-13** 文京区遺跡調査会 1993『新諏訪町遺跡』,**文-14** 文京区遺跡調査会 1996『諏訪町遺跡』,**文-15** 東京大学埋蔵文化財調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院地点』,**文-16** 東京大学埋蔵文化財調査室 2005『東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院外来診療棟地点』,**文-17** 東京大学埋蔵文化財調査室 2016『東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院入院棟 A 地点』,**文-18** 東京大学埋蔵文化財調査室 2005『東京大学本郷構内の遺跡工学部 1 号館地点』,**文-19** 東京大学埋蔵文化財調査室 2006『東京大学本郷構内の遺跡工学部 14 号館地点』,**文-20** 都立学校遺跡調査会 2000『日影町Ⅲ』,**文-21** 東京大学構内雨水調整池遺跡調査会 1994『本郷追分』,**文-22** 大成エンジニアリング株式会社 2008『本郷五丁目西遺跡』,**文-23** 加藤建設株式会社 2008『本郷五丁目東遺跡』,**文-24** 都立学校遺跡調査会 1995『本郷元町』,**文-25** 都立学校遺跡調査会 1999『本郷元町Ⅲ』

〔台東区〕台-1 大成エンジニアリング株式会社 2011『浅草福井町遺跡』,**台-2** 台東区文化財調査会 1994『浅草松清町遺跡調査報告書』,**台-3** 台東区池之端七軒町遺跡調査団 1997『池之端七軒町遺跡(慶安寺跡)』,**台-4** 台東区文化財調査会 2008『入谷遺跡下谷二丁目 2 番地点』,**台-5** テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部 2011『上野花園町遺跡』,**台-6** 共和開発株式会社 2008『上車坂町遺跡東上野四丁目 8・9 番地地点』,**台-7** 台東区文化財調査会 2002『上車坂町遺跡東上野四丁目 9 番地地点』,**台-8** 台東区文化財調査会 1999『茅町遺跡』,**台-9** 加藤建設株式会社文化財調査部 2010『北稲荷町遺跡』,**台-10** 加藤建設株式会社 2009『芝崎町二丁目遺跡』,**台-11** 台東区文化財調査会 1999『浅草寺西遺跡』,

台-12 都立学校遺跡調査会 1990『東叡山寛永寺護国院』,**台-13** 寛永寺谷中徳川家近世墓所調査団 2012『東叡山寛永寺　徳川将軍家御裏方霊廟』,**台-14** 台東区文化財調査会 2010『豊住町遺跡下谷一丁目 5 番地点』,**台-15** 株式会社ジオダイナミック 2015『仲御徒町三丁目遺跡上野五丁目 20 番地点第 1・2 次調査』,**台-16** 台東区教育委員会 2009『仲御徒町三丁目遺跡上野五丁目 27 番地地点第 1 次調査』,**台-17** 株式会社ジオダイナミック 2010『仲御徒町三丁目遺跡上野五丁目 27-8 地点第 2 次調査』,**台-18** 株式会社ジオダイナミック 2009『No.120 遺跡浅草二丁目 11 番地地点』,**台-19** 台東区文化財調査会 2004『No.68遺跡常磐新線(仮称)新浅草駅東側出入口地点』,**台-20** 台東区文化財調査会 2001『西町遺跡』,**台-21** 台東区文化財調査会 2003『二長町東遺跡台東一丁目 34 番地点』,**台-22** 都立学校遺跡調査会 1990『白鴎』,**台-23** 東京都埋蔵文化財センター2005『向柳原町遺跡』,**台-24** 台東区文化財調査会 2008『竜泉寺町遺跡』

〔墨田区〕墨-1 大成エンジニアリング株式会社・墨田区教育委員会 2014『錦糸四丁目遺跡』,**墨-2** 墨田区江東橋二丁目遺跡調査団 1997『江東橋二丁目遺跡』,**墨-3** 墨田区教育委員会 2002『江東橋二丁目遺跡Ⅱ』,**墨-4** 墨田区教育委員会事務局生涯学習課文化財担当 2012『江東橋二丁目遺跡Ⅲ』,**墨-5** 墨田区錦糸町駅北口遺跡調査団 1996『墨田区錦糸町駅北口遺跡Ⅰ』,**墨-6** 墨田区教育委員会 2011『大雲寺跡・墨田区 no.18 遺跡』,**墨-7** 墨田区教育委員会 2011『太平一丁目遺跡』,**墨-8** 墨田区教育委員会 2016『千歳三丁目遺跡』,**墨-9** 東京簡裁墨田分室埋蔵文化財調査会 2007『肥前平戸新田藩下屋敷跡』,**墨-10** 墨田区教育委員会事務局生涯学習課文化財担当 2014『本所一丁目遺跡』,**墨-11** 墨田区教育委員会 2014『本所一丁目 27 遺跡』,**墨-12** 墨田区教育委員会事務局生涯学習課文化財担当 2011『陸奥弘前藩津軽家上屋敷跡』,**墨-13** 墨田区教育委員会事務局生涯学習課文化財担当 2016『陸奥弘前藩津軽家上屋敷跡Ⅱ』,**墨-14** 墨田区横川一丁目遺跡調査会 1999『横川一丁目遺跡』,**墨-15** 墨田区横網一丁目埋蔵文化財調査団 1990『横網一丁目遺跡』

〔江東区〕江-1 大成エンジニアリング株式会社 2010『雲光院遺跡』,**江-2** 大成エンジニアリング株式会社 2010『千田遺跡』

〔渋谷区〕渋-1 青山学院構内遺跡調査室 1994『青山学院構内遺跡』,**渋-2** 大成エンジニアリング株式会社 2012『青山学院構内遺跡第 5 地点』,**渋-3** 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1997『千駄ヶ谷五丁目遺跡』,**渋-4** 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1998『千駄ヶ谷五丁目遺跡 2 次調査報告書』

〔豊島区〕豊-1 豊島区遺跡調査会 1999『巣鴨町Ⅲ』,**豊-2** 都道整備事業関連豊島区遺跡

調査団 2010『雑司が谷Ⅴ』,**豊-3** 染井遺跡（加賀美家地区）調査団 1991『染井Ⅲ』,**豊-4** 染井遺跡（プリンスハイツ駒込地区）調査団 2001『染井Ⅶ』,**豊-5** 染井遺跡（プラウド駒込地区）発掘調査団 2006『染井Ⅺ』,**豊-6** 豊島区遺跡調査会 2000『東池袋Ⅰ』,**豊-7** 玉川文化財研究所 2007『東池袋Ⅱ』

〔北区〕北-1 東京都埋蔵文化財センター2001『袋低地遺跡』

〔板橋区〕板-1 都立学校遺跡調査会 1993『高島平北』

第 2 章　大名屋敷遺跡から出土した漆製品の材質・製作技法

はじめに

第 1 章で述べたように、近世江戸遺跡の漆製品の総出土点数は 9,469 点で、その約 8 割が武家地からの出土であった。これは御府内の面積の 69%が武家地であるため(内藤 1966)、近世江戸遺跡の対象遺跡の多くは武家屋敷である。慶長 8 年（1603）に徳川家康が征夷大将軍となり、江戸城が将軍の居城となると天下普請がおこなわれる。神田山の掘削土により日比谷入江を埋め立て、現在の日比谷から丸の内周辺を造成した。その造成地の西側には大名小路と称される武家地を設定した。大名に大名小路のほかに西丸下、外桜田、霞ヶ関を割り当てたが多くは未整地であったため、各大名で造成し屋敷を構えた(渋谷 2001)。

近世江戸遺跡における出土漆製品の研究には、漆製品の材質・製作技法に重きをおいた自然科学・文化財科学的研究と、型式や遺跡・遺構ごとにみた漆器の器種組成の変遷を中心にした考古学的研究という二つの方向性がある。

自然科学・文化財科学的研究において、北野信彦は、近世出土漆器の材質・製作技法から時期的変遷をとらえた。また、樹種と漆塗り構造や漆工材料との間には明らかな相関関係が認められ、大量生産に向く用材には廉価な材質と簡便な漆塗りを施す量産品と、吟味された用材には良い素材と良い漆塗りを施す優品があり、それらは需要と供給のバランスの上に成り立っていたことを指摘した（北野 2005a)。

考古学的研究では、中井さやかは、16 世紀の椀は基本的に高い高台をもつ一の椀、低い高台をもつ二の椀、器高の低い三の椀の入れ子状の重椀形式であり、17 世紀初頭には平椀・壺椀を加えた椀揃形式が成立していたことを指摘した（中井 1989,1992)。

後藤宏樹は、16 世紀末から 17 世紀初頭に蓋付漆器椀が出現し、近世的な食器構成である四椀（飯・汁・平・壺椀）と腰高がセットとなる椀揃が成立するが、このセットが普遍的に現れるのは 18 世紀初頭段階であるとした。また、饗宴などの非日常の場に使用される食器は基本的に漆器が主体で、四椀を中心とした構成になる。漆器椀の品質は、17 世紀初頭には一般的な質の飯・汁椀と平・壺椀、腰高がセットとなる優品にわけられるが、18 世紀前半には優品が多かった平・壺椀が一般的な質となるという。(後藤 1992,2001)。

同様の器種組成の変遷傾向を追川吉生も指摘している。追川は、漆器椀に共伴する肥前産磁器の編年によって漆器椀の形態を 5 期に区分した。18 世紀前半以降に平椀・壺椀が出現することで形態が多様化し、入れ子状を維持することが不可能となり、中世的な漆器椀

組成から近世的な漆器椀組成である椀揃形式への変化がおきたとした（追川 1999）。このように、近世江戸遺跡の出土漆器は、17 世紀には椀揃形式が成立し、18 世紀に普及することによって器種のバリエーションが広がったとみられている。

近世江戸遺跡の漆製品の研究において、今後は漆製品の材質・技法の文化財科学的な分析と、考古学的な器種分類、器種組成の変遷を重ね合わせることが必要ではないかと考えられる。本章では、その試みの一つとして、近世江戸遺跡における大名屋敷遺跡から出土した漆器の材質・製作技法の文化財科学的な分析と漆器の器種との関係、および漆器の器種組成を検討する。また、考古学的研究において指摘されている、近世的な椀揃形式の成立と普及に漆器の材質・製作技法がどのように関わっていたかを考えてみたい。

1 漆製品出土遺跡の概要

分析資料は、東京都千代田区有楽町二丁目遺跡出土の漆製品 250 点（後藤ら 2010）、千代田区紀尾井町遺跡 2 次調査（以下、紀尾井町遺跡Ⅱとする）21 点（都築 2013）、千代田区紀尾井町遺跡 1 次調査（以下、紀尾井町遺跡とする）24 点、千代田区尾張藩麹町邸跡 10 点である（附表 2-1 分析資料一覧表）。

（1）有楽町二丁目遺跡

東京都千代田区の南東部に位置する。慶長 13 年（1608）前後の「慶長江戸絵図」では日比谷入江が埋め立てられて、江戸城から外堀内側までの大名屋敷地が整備されたいわゆる「大名小路」の南東角、数寄屋橋御門内と呼ばれた地域にあたる。この段階では、当該調査地は羽柴美作守秀家（後の信濃飯田藩堀家）、大和御所藩桑山家と旗本堀因幡守秀信の屋敷であった。なお、羽柴美作守秀家は慶長 11 年（1606）に上屋敷を拝領したことが確認されている。寛永 6 年（1629）に大和御所藩桑山家が無嗣断絶すると水野監物忠善、井伊靭負直滋の屋敷を経て、寛永 7 年（1630）に井伊兵部少輔直勝が上屋敷を拝領した。明暦末～万治頃（1650 年代後半）の「万治年間江戸測量図」では堀美作守親昌、井伊兵部少輔直好（後の遠州掛川藩井伊家）の屋敷になり、土手附屋敷を有していた。元禄 11 年（1698）の勅額火事では堀家・井伊家の屋敷も類焼しており、幕府によって外堀に設けられた土手附屋敷の撤去、道路の拡幅、大名屋敷地割の整備、屋敷替えがおこなわれた。堀家・井伊家の屋敷も北側へ移動し、『御府内沿革図書』「元禄十一寅年九月之形」（1698）では当該調査地は堀家のみとなっている。宝永 4 年（1707）には、堀家は屋敷替えとなり、屋敷地が

縮小されて、南町奉行所・町奉行所御役屋敷が幕末まであった。大名屋敷期の遺構は 131 基、南町奉行所・町奉行所御役屋敷期の遺構は 23 基検出され、遺構の検出面や出土遺物の年代から大名屋敷期をⅠ・Ⅱ期、南町奉行所・町奉行所御役屋敷期をⅢ期としている。

分析資料は、以下の通りである。

Ⅰ期（1606～1640 年代）の遺構（土坑）から出土したもの 6 点（羽柴美作守秀家屋敷:6 点）

Ⅰa 期（1610～1630 年代）の遺構（土坑、S21 系建物跡、溝状遺構、木組土坑）から出土したもの 174 点（羽柴美作守秀家屋敷:174 点）

出土点数の多い遺構: 27 号遺構（溝状遺構）39 点、22 号遺構（土坑）37 点、49 号遺構（土坑）24 点

Ⅰb 期（1630～40 年代）の遺構（ごみ溜り、溝状遺構、S113 系溝）から出土したもの 48 点（羽柴美作守秀家屋敷:27 点、井伊兵部少輔直・直好屋敷:12 点、屋敷境:9 点）

出土点数の多い遺構: 20 号遺構（ごみ溜り）29 点

Ⅱ期（1640 年代～1707）の遺構（下水遺構）から出土したもの 6 点（羽柴美作守秀家・堀美作守親昌屋敷:6 点）

Ⅱb 期（1650 年代後半）の遺構（土坑）から出土したもの 4 点（堀美作守親昌屋敷:4 点）

Ⅱc 期（1650～1660 年代）の遺構（上水遺構、土坑）から出土したもの 6 点（堀美作守親昌屋敷:2 点、井伊兵部少輔直好屋敷:4 点）

Ⅱd 期（1650～1670 年代）の遺構（上水遺構）から出土したもの 1 点（堀美作守親昌屋敷:1 点）

Ⅱb 期の明暦 3 年（1657）の大火に伴う廃棄土坑である 250 号遺構（4 点）以外は、「日常」的な廃棄と考えられている（株式会社武蔵文化財研究所 2006）。

（2）紀尾井町遺跡Ⅱ

東京都千代田区の西部に位置し、赤坂御門に近接する紀尾井町と呼ばれる地域の最南端にある。寛永 19 年（1642）頃の『寛永江戸全図』では、当該調査地は菅沼織部定芳・定昭（丹波亀山藩菅沼家）の屋敷があった。正保 4 年（1647）に菅沼家が無嗣断絶すると、分割相続した次男・三男によって旗本菅沼家として屋敷利用することが認められた。元禄 4 年（1691）の麹町火災で当該調査地を含む麹町の 25 家の大名・拝領屋敷が上地され、同年、

紀州藩徳川家が麹町邸として拝領し、幕末まで続いた。遺構の検出面や出土遺物の年代から、丹波亀山藩菅沼家・旗本菅沼家屋敷期をⅠ期、紀州藩徳川家屋敷期をⅡ期、明治 3 年（1870）の東京府収公以降をⅢ期としている。当該調査地は清水谷の東側の台地上と西側の崖下の低地にわかれている。

分析資料は全て崖下の低地から出土している。Ⅰa 期（寛永期～1647）の遺構（土坑）から出土したものが 14 点（丹波亀山藩菅沼家屋敷:14 点）、Ⅰb 期（1647～1691）の遺構（下水溝）から出土したものが 2 点（旗本菅沼家屋敷:2 点）、17 世紀代と推定される盛土層から出土したものが 5 点である。盛土層の大部分は寛永 13 年（1636）の江戸城外堀普請に伴うものと考えられており、遺構はこの盛土を切って構築されている。崖下の低地は屋敷地の裏手にあたり、17 世紀末まで居住空間としては利用されず、大型の土坑に「日常」的なごみを廃棄する空間であったと考えられている（大成エンジニアリング株式会社 2013）。なお、旗本菅沼家は大名の系譜をひく高禄旗本であり、屋敷が継続して利用されていることから、ここでは大名屋敷として扱った。

（3）紀尾井町遺跡

東京都千代田区の西部に位置し、赤坂御門に近接する紀尾井町と呼ばれる地域の北方にある。寛永 19 年（1642）頃の『寛永江戸全図』では、当該調査地は出羽上山藩土岐家、遠州横須賀藩本多家の屋敷があった。『御府内沿革図書』「延宝頃ヨリ元禄三午年迄之形」（1673～1690）では、紀州藩徳川家の屋敷になる。明暦 3 年（1657）の大火後、紀州藩徳川家が上屋敷として拝領したが、文政 6 年（1823）の麹町大火以降、19 世紀初頭には赤坂邸が上屋敷となって幕末まで続いた。遺構の検出面や出土遺物の年代から、土岐・本多家屋敷期をⅠ期、紀州藩徳川家屋敷期をⅡ期、東京府に収公された明治 3 年（1870）以降をⅢ期と区分した。

分析資料は、Ⅰ期（寛永期～1657）の遺構（井戸、廃棄土坑）から出土したものが 20 点（遠州横須賀藩本多家屋敷:1 点、屋敷境:19 点）、Ⅱ期（1657～1870）の遺構（地下構造物遺構）から出土したものが 1 点、時期不明の遺構から出土したものが 2 点、遺構外 1 点である。Ⅰ期の 35 号遺構は周辺の遺構・遺物の関係から短時間に埋められ、出土遺物は明暦の大火後の屋敷整理に伴い廃棄されたものと考えられている（後藤 1992）。　Ⅱ期の 46 号遺構は貞享元年（1684）までに完成した紀州藩徳川家屋敷の御守殿と長局のいずれか、もしくは双方に該当する遺構で、出土遺物は屋敷の改築・新築に伴い廃棄されたものと考

えられている（大成エンジニアリング株式会社 2013;千代田区紀尾井町遺跡調査会 1988）。

（4）尾張藩麹町邸跡

東京都千代田区の西部に位置し、四谷御門の南側、麹町の南西角にある。寛永 14 年（1637）以前、当該調査地は「麹町拾一町目南之町」の町屋であった。寛永 14 年（1637）に尾張藩徳川家が麹町邸として拝領し、幕末まで続いた。遺構・遺物の年代、絵図や史料から尾張藩麹町邸の空間構成は、Ⅰ期（～17 世紀前半）、Ⅱ期（17 世紀中葉～17 世紀末）、Ⅲ期（17 世紀末～18 世紀中葉）、Ⅳ期（18 世紀中葉～18 世紀後半）、Ⅴ期（19 世紀前半～幕末）、Ⅵ期（明治 2 年（1869）以降）に区分される。

分析資料は、Ⅱ期（1680 後半～1700 年代）の遺構（地下室）から出土したものが 4 点、Ⅵ期（19 世紀前半～明治 10 年代）の遺構（溝状遺構）から出土したものが 4 点、時期不明の遺構から出土したものが 1 点、不明が 1 点である。

Ⅱ期の 303 号遺構は遺物の内容から短時間に埋められ、出土遺物は元禄 11 年（1698）の御成御殿建築に伴い廃絶されたと考えられている。Ⅵ期の 231 号遺構の遺物は、明治 2 年（1869）の収公から建物が取り壊される明治 10 年までのものであり、周辺の料亭などから投棄されたごみを一部含んでいる可能性もある（紀尾井町 6-18 遺跡調査会 1994）。

2 漆製品の材質・製作技法の分析方法

漆製品の製作は、①原木から木材を調整し成形する木地製作、②木地に下地および上塗りをおこなう髹漆、③漆絵や蒔絵などを施す加飾の工程からなる。考古学的な形態、文様などの観察の後、①を明らかにするため樹種同定、②③を明らかにするため蛍光 X 線分析（定性分析）による色漆の使用顔料の同定、クロスセクション観察による塗膜断面の構造観察をおこなった。なお、有楽町二丁目遺跡、紀尾井町遺跡Ⅱの樹種同定は東京都埋蔵文化財センター鈴木伸哉氏、明治大学黒耀石研究センター能城修一氏が実施しており、既刊の発掘調査報告書で報告されているものを引用した（後藤ら 2010;鈴木 2013）。

（1）樹種同定

出土した木製品から片刃カミソリによって木材の横断面、接線断面、放射断面の切片を採取し、これをガムクロラールで封入して同定用プレパラートとした（鈴木 2013）。

（2）蛍光 X 線分析（定性分析）

【有楽町二丁目遺跡、紀尾井町遺跡、尾張藩麹町邸跡】使用装置は、微小部エネルギー

分散型蛍光 X 線分析装置（日立ハイテクサイエンス社製 SEA5120S）である。分析条件は、管電圧:45kV、管電流:8μA、測定時間:100 秒、コリメータ径:1.8 ㎜、試料室雰囲気:大気である。

【紀尾井町遺跡Ⅱ】使用機器は、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置（日本電子（株）JSX-3201M）である。分析条件は、管電圧:50kV、管電流:3μA、測定時間:180 秒、1 次側コリメータ径:0.5 ㎜、試料室雰囲気:大気である。

(3) クロスセクション観察

採取塗膜片を不飽和ポリエステル樹脂（昭和電工（旧昭和高分子）社製リゴラック）で包埋し、耐水研磨紙＃1500・＃1000、ラッピングフィルム 9μm、アルミナ懸濁液 3.0μm ・0.1μmの順に研磨を行い、薄片プレパラートを作成した後、金属顕微鏡(Olympus 社製 GX51)下で観察をおこなった。

3 漆製品の材質・製作技法の分析結果

(1) 樹種同定

【有楽町二丁目遺跡】

確認された樹種は、トチノキ 138 点(55.2%)、ブナ属 59 点(23.6%)、ケヤキ 20 点(8%)、コナラ亜属コナラ節 6 点(2.4%)、モクレン属 5 点(2%)、トネリコ属シオジ節 4 点(1.6%)、カツラ 3 点（1.2%)、クリ 3 点（1.2%)、ミズキ 3 点（1.2%)、カエデ属 2 点（0.8%)、コシアブラ 2 点（0.8%)、エゴノキ属 1 点（0.4%)、キハダ 1 点（0.4%)、サクラ属 1 点（0.4%)、不明（資料状態が悪く同定不可）2 点（0.8%）である（後藤ら 2010)。

【紀尾井町遺跡Ⅱ】

確認された樹種はトチノキ 9 点（42.9%)、ヒノキ 4 点（19%)、カツラ 3 点（14.3%)、ブナ属 2 点(9.5%)、コナラ属 1 点(4.8%)、モクレン属 1 点(4.8%)、ケヤキ 1 点(4.8%)である（鈴木 2013)。

以上の結果から、樹種と成形方法と後述する髹漆技法の関係性を考察するため、沢口悟一の分類（沢口 1966）をもとに、①挽物…木材を轆轤などで回転させながら刃物で削り、成形する同心円状の製品、②板物…木材を製材し板とし、組み立てて成形する製品、③曲物…木材を薄く削り、曲げて器物の外側を作り、底板と甲板を付けて成形する筒状の製品。成田寿一郎の分類（成田 1996a,b）をもとに、④箍物…桶、樽類の製品、⑤その他…刳物、彫物の製品とし木工技術別に分類をおこなった。

さらに、挽物の器種は『飯田町遺跡』（千代田区飯田町遺跡調査会 2001）、挽物以外の器種は『行元寺跡』（新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館埋蔵文化財課 2003）を参考に分類をおこなった。なお、図 2-1 は有楽町二丁目遺跡を主として代表的な器種をまとめたものである。

有楽町二丁目遺跡は全てが挽物で、確認された器種は点数の多い順に椀類 75 点(30%)、飯椀 68 点(27.2%)、汁椀 60 点(24%)、椀蓋 22 点(8.8%)、汁椀もしくは椀蓋 10 点(4%)、皿 5 点（2%）、平椀 3 点（1.2%）、壺椀 1 点（0.4%）、椀蓋もしくは皿 1 点（0.4%）、不明 5 点（2%）である。

紀尾井町遺跡Ⅱは、挽物 17 点（80.1%）、曲物 2 点（9.5%）、板物 1 点（4.8%）、刳物 1 点（4.8%）で、確認された器種は点数の多い順に椀蓋 5 点（23.8%）、汁椀 4 点（19%）、飯椀 3 点（14.3%）、腰高 2 点（9.5%）、櫃蓋 2 点（9.5%）、平椀 1 点（4.8%）、蓋類 1 点（4.8%）、皿 1 点（4.8%）、膳 1 点（4.8%）、壺杓子 1 点（4.8%）である。

表 2-1 は、器種ごとにみた樹種の点数と各器種内で占める割合をまとめたものである。有楽町二丁目遺跡、紀尾井町遺跡Ⅱともにトチノキの出土点数が多く、有楽町二丁目遺跡では全体に占める割合が 40%を越える。トチノキ、ブナ属、ケヤキ、クリ、カツラは「挽物」に、ヒノキは「板物」、「曲物」に主に利用され、木材の加工技術に適した用材選択がなされていることがわかる。

(2) 蛍光 X 線分析（定性分析）

【有楽町二丁目遺跡】

器面の塗り色は、内外面とも赤一色、内外面とも黒一色、内面黒色外面赤色、内面赤色外面黒色の 4 種類に大別でき、それぞれ 21 点、24 点、1 点、198 点である。

表 2-2 は器面の塗り色ごとに加飾・地塗りに使用された色漆と検出元素をまとめたものである。図 2-2 は代表的な検出元素のスペクトルをまとめたものである。器面の地塗りに赤色漆が使用される資料は 220 点あった。赤色漆の使用顔料は、Fe が検出されベンガラ（第二酸化鉄 Fe_2O_3）、Hg が検出され水銀朱（硫化水銀 HgS）と判断される。水銀朱の使用率を器面の塗り色ごとにみると赤一色で 28.6%、内面黒色外面赤色で 100%、内面赤色外面黒色で 11.6%と外面が赤色となる場合、特に赤一色の場合は水銀朱、内面が赤色となる場合はベンガラの割合が高く、選択的に使い分けをしていると推測される。

加飾技法は漆絵のみが観察され、加飾のある資料（文字を除く）は 138 点あり、加飾率

は 55.2%である。漆絵に使用された色漆は赤色漆、黄色漆、黒色漆の 3 種類である。表 2-2 は器面の塗り色ごとに漆絵に使用された色漆と検出元素をまとめたものである。赤色漆の使用顔料は、Fe が検出されベンガラ（第二酸化鉄 Fe_2O_3）、Hg が検出され水銀朱（硫化水銀 HgS）と判断される。黄色漆の使用顔料は、As が検出され石黄（硫化ヒ素 As_2S_3）と判断される。

有楽町二丁目遺跡出土漆製品は江戸時代前期に該当する資料群で、器面の塗り色や加飾部分に水銀朱を使用する割合が全体の 34.4%を占め、比較的高いといえるだろう。先行研究によれば、赤色漆に使用された水銀朱とベンガラの値段は、江戸時代前期には相対価格差はほとんどみられないが、江戸時代後期頃には約 30 倍の相対価格差がみられ、水銀朱は高価で入手困難のものであった。17 世紀前半頃には、赤色漆はベンガラに比較して水銀朱を用いる例が多く、時代を経るごとに水銀朱の使用率が低下し、ベンガラが一般化するとされている（北野 2005a）。

【紀尾井町遺跡Ⅱ】

器面の塗り色は、内外面とも赤一色、内外面とも黒一色、内面赤色外面黒色の 3 種類に大別でき、それぞれ 1 点、4 点、16 点である。

表 2-3 は器面の塗り色ごとに加飾・地塗りに使用された色漆と検出元素をまとめたものである。器面の地塗りに赤色漆が使用される資料は 17 点あった。赤色漆の使用顔料は、Fe が検出されベンガラ（第二酸化鉄 Fe_2O_3）、Hg が検出され水銀朱（硫化水銀 HgS）と判断される。水銀朱の使用率を器面の塗り色ごとにみると赤一色で 100%、内面赤色外面黒色で 25%と外面が赤色となる場合、特に赤一色の場合は水銀朱、内面が赤色となる場合はベンガラの割合が高く、選択的に使い分けをしていると推測される。器面の地塗りにグラデーション状に黄色漆、緑色漆が使用される資料は 1 点あった。黄色漆の使用顔料は、As が検出され石黄（硫化ヒ素 As_2S_3）と判断される。緑色漆の使用顔料は，As が検出され石黄（硫化ヒ素 As_2S_3）と判断される。緑色漆は藍などの天然植物染料で青色に着色した漆の中に石黄粉を混入して造られる（北野 2005b）。

加飾技法は漆絵、箔絵・切箔、蒔絵が観察され、加飾のある資料（文字を除く）は 13 点あり、加飾率は 61.9%である。漆絵に使用された色漆は赤色漆、黄色漆の 2 種類である。表 2-3 は器面の塗り色ごとに漆絵、箔絵・切箔、蒔絵に使用された色漆と検出元素をまとめたものである。赤色漆の使用顔料は、Fe が検出されベンガラ（第二酸化鉄 Fe_2O_3）、Hg が検出され水銀朱（硫化水銀 HgS）と判断される。黄色漆の使用顔料は、As が検出され石

黄（硫化ヒ素 As_2S_3）と判断される。箔絵・切箔、蒔絵は、前者からは Au、後者からは Ag が検出され金、銀と判断される。

器面の塗り色や加飾部分に水銀朱を使用する割合が全体の 38%を占め、有楽町二丁目遺跡出土漆製品と同様に比較的高い。

【紀尾井町遺跡】

器面の塗り色は、内面赤色外面黒色 23 点、不明 1 点である。表 2-3 は器面の塗り色ごとに加飾・地塗りに使用された色漆と検出元素をまとめたものである。器面の地塗りに赤色漆が使用される資料は 24 点あった。赤色漆の使用顔料は、全てで Fe が検出されベンガラ（第二酸化鉄 Fe_2O_3）と判断される。

加飾技法は漆絵、蒔絵が観察され、加飾のある資料（文字を除く）は 13 点あり、加飾率は 54.2%である。漆絵に使用された色漆は赤色漆、黄色漆の 2 種類である。表 2-3 は器面の塗り色ごとに漆絵、蒔絵に使用された色漆と検出元素をまとめたものである。赤色漆の使用顔料は、Fe が検出されベンガラ（第二酸化鉄 Fe_2O_3）、Hg が検出され水銀朱（硫化水銀 HgS）と判断される。黄色漆の使用顔料は、As が検出され石黄（硫化ヒ素 As_2S_3）と判断される。蒔絵は、Ag が検出され銀と判断される。

加飾部分に水銀朱を使用する割合は全体の 16.7%を占め、赤色漆の加飾があるものでは水銀朱 4:ベンガラ 8 となり、水銀朱の使用率は低い。

【尾張藩麹町邸跡】

器面の塗り色は、内外面とも赤一色、内外面とも黒一色、内面赤色外面黒色の 3 種類に大別でき、それぞれ 3 点、1 点、6 点である。

表 2-3 は器面の塗り色ごとに加飾・地塗りに使用された色漆と検出元素をまとめたものである。器面の地塗りに赤色漆が使用される資料は 9 点あった。赤色漆の使用顔料は、Fe が検出されベンガラ（第二酸化鉄 Fe_2O_3）、Hg が検出され水銀朱（硫化水銀 HgS）と判断される。水銀朱の使用率を器面の塗り色ごとにみると赤一色で 66.7%、内面赤色外面黒色で 16.7%と赤一色の場合は水銀朱、内面が赤色となる場合はベンガラの割合が高く、選択的に使い分けをしていると推測される。

加飾技法は漆絵、蒔絵が観察され、加飾のある資料（文字を除く）は 4 点あり、加飾率は 40%である。漆絵に使用された色漆は全て黄色漆によるものである。黄色漆の使用顔料は、As が検出され石黄（硫化ヒ素 As_2S_3）と判断される。なお、As が検出された資料は 1 点のみであるが、3 点は後述のクロスセクション観察で石黄が確認できた。

器面の塗り色や加飾部分に水銀朱を使用する割合が全体の 30%を占め、水銀朱の使用率は比較的低い。

(3) クロスセクション観察

髹漆において、下地は漆製品を堅牢にし、素地の形状を修補整備するために極めて重要であり、主に高級品に使用される最も堅牢で最良とされる砥粉・地粉と生漆を用いた漆下地、日用品に使用される簡易で廉価であるが堅牢な炭粉と生渋を用いた渋下地、廉価で堅牢性より外観の体裁を主眼としている砥粉・地粉・胡粉と膠を用いる膠下地がある（沢口 1966)。ここでは、塗膜構造の観察結果を附表に掲載した。下地に炭粉を用いたものを炭粉渋下地（附表 2-1 分析資料一覧表では「炭」と表記)、鉱物系の材質を用いたものを鉱物系下地（附表 2-1 分析資料一覧表では「サビ」と表記）とした。なお、目視による観察では器面全体の塗り色を黒としているが、黒色顔料の混和はみられない褐色漆（附表 2-1 分析資料一覧表では「褐」と表記）と鉄や油煙を含む黒色漆（附表 2-1 分析資料一覧表では「黒」と表記）に区別できる。図 2-3 は代表的な塗膜断面まとめたものである。

【有楽町二丁目遺跡】

鉱物系下地 10 点（4%)、炭粉渋下地 224 点（89.6%)、鉱物系＋炭粉渋下地 9 点（3.6%）が確認された。塗りの構造は下地の上の漆塗りのほとんどが 1 層もしくは 2 層塗りで、漆絵（附表 2-1 分析資料一覧表では「色」と表記）の加飾が施される合計 2～3 層の簡易な構造である。塗りが一番多いものは 6 層である。

【紀尾井町遺跡Ⅱ】

鉱物系下地 3 点（14.3%)、炭粉渋下地 15 点（71.4%)、柿渋とみられる層向と垂直の方向に亀裂がある褐色層（岡田 1995;永嶋 1987）が塗布された下地がないもの（附表 2-1 分析資料一覧表では「柿渋」と表記）3 点（14.3%）が確認された。塗りの構造は下地の上の漆塗りのほとんどが 1 層もしくは 2 層塗りで、漆絵など（附表 2-1 分析資料一覧表では「色」と表記）の加飾が施される合計 2～3 層の簡易な構造である。塗りが一番多いものは 4 層である。

【紀尾井町遺跡】

鉱物系下地 1 点（4.2%)、炭粉渋下地 23 点（95.8%）が確認された。塗りの構造は下地の上の漆塗りのほとんどが 1 層もしくは 2 層塗りで、漆絵などの加飾が施される合計 2～3 層の簡易な構造である。塗りが一番多いものは 8 層であるが、当該資料は塗膜片のみ

で器種や時代が不明である。

【尾張藩麹町邸跡】

鉱物系下地 2 点（20%）、炭粉渋下地 8 点（80%）が確認された。塗りの構造は下地の上の漆塗りのほとんどが 1 層もしくは 2 層塗りで、漆絵などの加飾が施される合計 2～3 層の簡易な構造である。塗りが一番多いものは 4 層である。

4 漆器の器種と材質・製作技法

先行研究において、民俗調査では、近世以降のろくろ挽物である漆器椀・皿・蓋・盃類には広葉樹散孔材もしくは環孔材の靭性がある材が適材とされ（橋本 1979）、出土漆製品の分析において、挽物類には広葉樹の利用が多くトチノキ・ブナ・ケヤキ材の利用頻度が極めて高く、板物類ではヒノキ・スギ・マツなどの針葉樹の利用が一般的であるとされている（北野 2005b）。さらに、ケヤキ材にはサビ下地（本論文では鉱物系下地）に朱や金蒔絵などが使用される優品、ブナ材には炭粉下地（本論文では炭粉渋下地）にベンガラ顔料が使用される一般的な量産品、トチノキやカツラ材には銀・錫蒔絵や石黄が使用されるやや程度の良い品という、樹種と漆塗り構造と漆工材料の間の明らかな相関関係が認められている（北野 2005a）。

このような先行研究を踏まえて、前節で得られた分析結果を総合的に捉えることで、遺跡の漆製品の全体の様相を検討してみることにしたい。ここでは、器種ごとに器面の塗り色、下地、樹種、色漆の使用顔料をみることにより各属性の関係性を考察する。

まず、有楽町二丁目遺跡全体の様相を器種ごとにみる（表 2-4）。なお、( ) は各器種で器面の塗り色ごとにみる各下地の割合である。

「飯椀」には、塗り色が内外面ともに赤一色、内外面ともに黒一色、内面赤色外面黒色に共通して炭粉渋下地がみられる。特に内面赤色外面黒色は全てが炭粉渋下地で、46 点と最も多い。そのうち、樹種はトチノキ 28 点、ブナ属 10 点が主となる。一方、赤一色は鉱物系下地 1 点（16.7%）で樹種はケヤキ、鉱物系+炭粉渋下地 1 点（16.7%）で樹種はトネリコ属シオジ節、炭粉渋下地 4 点（66.7%）で樹種はトチノキ 2 点、ブナ属 2 点である。黒一色は鉱物系下地 1 点（8.3%）で樹種はケヤキ、炭粉渋下地 8 点（66.7%）で樹種はブナ属 4 点が主となる。

鉱物系下地、鉱物系+炭粉渋下地が用いられる樹種は全てケヤキ、トネリコ属シオジ節であり、赤一色において赤色漆に使用される顔料は全て水銀朱である。

「汁椀」には、「飯椀」と同様に、塗り色が内外面ともに赤一色、内外面ともに黒一色、内面赤色外面黒色に共通して炭粉渋下地がみられる。赤一色、黒一色は全て炭粉渋下地で、樹種も全てブナ属である。一方、内面赤色外面黒色は鉱物系下地 1 点（1.8%）で樹種はケヤキ、鉱物系+炭粉渋下地 2 点（3.5%）で樹種はケヤキ 1 点、トチノキ 1 点、炭粉渋下地 50 点（87.7%）で樹種はトチノキ 34 点、ブナ属 9 点が主となる。

また、内面赤色外面黒色で鉱物系下地、鉱物系+炭粉渋下地が用いられる汁椀の 66.7%は、赤色漆に使用される顔料が水銀朱である。

「飯椀」「汁椀」という器種が判別できなかった「椀類」には、塗り色が内外面ともに赤一色、内外面ともに黒一色、内面黒色外面赤色、内面赤色外面黒色に共通して炭粉渋下地がみられる。赤一色は鉱物系下地 1 点(16.7%)で樹種はケヤキ、炭粉渋下地 5 点(83.3%)で樹種はケヤキ 2 点、ブナ属 2 点が主となる。黒一色は鉱物系下地 1 点（20%）で樹種はケヤキ、炭粉渋下地 4 点（80%）で樹種はブナ属 4 点が主となる。内面黒色外面赤色は炭粉渋下地で樹種はケヤキである。内面赤色外面黒色は鉱物系下地 1 点（1.6%）で樹種はケヤキ、鉱物系+炭粉渋下地 2 点（3.2%）で樹種はトネリコ属シオジ節 1 点、トチノキ 1 点、炭粉渋下地 59 点（95.2%）で樹種はトチノキ 42 点、ブナ属 8 点が主となる。

赤一色、黒一色、内面赤色外面黒色で鉱物系下地、鉱物系+炭粉渋下地が用いられる椀類の 60%は、赤色漆に使用される顔料が水銀朱である。

「平椀」は、塗り色は全て内外面ともに黒一色で、鉱物系下地である。樹種はケヤキ 2 点、トチノキ 1 点である。

「壺椀」は、塗り色は内外面ともに黒一色で、炭粉渋下地である。樹種はエゴノキ属である。

「椀蓋」は、塗り色が内外面ともに赤一色、内面赤色外面黒色に共通して炭粉渋下地がみられる。赤一色は鉱物系下地 1 点で樹種はケヤキ、鉱物系+炭粉渋下地 1 点で樹種はケヤキ、炭粉渋下地 2 点で樹種はブナ属である。内面赤色外面黒色は炭粉渋下地で樹種も全てトチノキである。

赤一色で鉱物系渋下地が用いられる全ての椀蓋は赤色漆に使用される顔料が水銀朱である。

器種を細分できなかった「汁椀もしくは椀蓋」には、塗り色が内外面ともに赤一色、内外面ともに黒一色、内面赤色外面黒色に共通して炭粉渋下地がみられる。赤一色は鉱物系+炭粉渋下地 1 点で樹種はトチノキ、炭粉渋下地は 2 点で樹種はブナ属である。黒一色は炭

粉渋下地 1 点で樹種はブナ属である。内面赤色外面黒色は鉱物系+炭粉渋下地 1 点で樹種はトネリコ属シオジ節、炭粉渋下地は 5 点で樹種はトチノキ 4 点、サクラ属 1 点である。

赤一色、内面赤色外面黒色で鉱物系+炭粉渋下地が用いられる全ての汁椀もしくは椀蓋は赤色漆に使用される顔料が水銀朱である。

「皿」には、塗り色が内外面ともに黒一色、内面赤色外面黒色に共通して炭粉渋下地がみられる。黒一色は炭粉渋下地 1 点で樹種はブナ属である。内面赤色外面黒色は全て炭粉渋下地で樹種はブナ属 2 点、カツラ 1 点、ケヤキ 1 点である。

器種を細分できなかった「椀蓋もしくは皿」は、塗り色は内面赤色外面黒色、炭粉渋下地、樹種はトチノキである。

以上のように、器種で若干のばらつきがあるものの各器面の塗り色と材質・製作技法の関係が確認できた。それぞれの器種で鉱物系下地、鉱物系+炭粉渋下地の堅牢なつくりの優品と、炭粉渋下地の量産品に大別できることがわかった。前述のように有楽町二丁目遺跡全体では赤一色が 21 点、黒一色が 24 点、内面黒色外面赤色が 1 点、内面赤色外面黒色が 198 点あり、鉱物系下地、鉱物系+炭粉渋下地が各器面の塗り色ごとに占める割合は、赤一色で 28.6%、黒一色で 20.8%といずれも 20%を越えるのに対して、内面赤色外面黒色では 4%である。このことは、赤一色、黒一色の食器に優品がより多く含まれていることを示している。それとともに、炭粉渋下地が各器面の塗り色ごとに占める割合は赤一色で 71.4%、黒一色で 79.2%といずれも 70%を越えており、これらは外観が赤一色、黒一色の食器でありながら、品質は量産品である中間的な存在として位置づけられるのではないだろうか。

また、前節の分析結果から器面の地塗りの赤色に水銀朱が使用されているものは 30 点あり、下地の材質別にその内訳をみると鉱物系下地 5 点、鉱物系+炭粉渋下地 5 点、炭粉渋下地 10 点である。さらに、樹種別にその内訳をみるとトチノキ 11 点（内訳:鉱物系下地 1 点、鉱物系+炭粉渋下地 1 点、炭粉渋下地 9 点)、トネリコ属シオジ節 3 点（内訳:鉱物系+炭粉渋下地 3 点)、ケヤキ 9 点（内訳:鉱物系下地 4 点、鉱物系+炭粉渋下地 1 点、炭粉渋下地 4 点）である。すなわち、水銀朱の使用が優先されるのは、前述のように器面の塗り色が赤一色という要因だけでなく、下地が鉱物系下地、鉱物系+炭粉渋下地で樹種がケヤキ、トネリコ属シオジ節のもの、次いで下地が炭粉渋下地で樹種がケヤキのもの、そして下地が炭粉渋下地で樹種がトチノキという順にあるという傾向がみられた。

5 出土漆製品の器種組成の検討

次に、漆製品の時期別の様相を検討する際の前提となる、器種組成の問題を考えてみることにする。

漆製品は有機物であるため、遺存度が低くその多くが破片であり、接合しても個体にならない資料や器種が不明な資料が多い。実際に、発掘調査報告書の実測図や観察表では、南部箔椀などの文様のある資料や、平・壺椀のように形態に特徴を有する資料もしくはほぼ完形の資料が主に報告されてきた。一方、自然科学分析として報告される漆製品の材質・技法は、個体にならない資料を含んだ接合後の 1 資料を 1 点として、サンプリングがおこなわれることが多いようである。つまり、自然科学分析では考古学的に観察された実測図や観察表よりも扱う資料数が多い。このことから、自然科学分析と発掘調査報告書の考古学的記載の間で、漆製品の全体像が異なる可能性が指摘できる。したがって、出土漆製品の数量的な算定方法を改めて検討する必要性があるように思われる。本節では、前節で扱った有楽町二丁目遺跡出土漆製品を用いて器種組成をはじめとする数量的な算定方法を検討することにしたい。

近世江戸遺跡において一遺跡から出土する遺物量は膨大であり、遺跡ごとの特徴を捉えるために「何が」、「どれくらい」出土したのかを体系的に把握する必要があった。陶磁器類の数量的な算定方法には、①総破片数、②総重量、③特定部位数、④接合個体数、⑤平均重量個体数、⑥口径/底径累積推定個体数がある（森本 2009）。例えば、総破片数は複雑な操作を必要としない利点がある一方、大型の器種は多くの破片に割れる等破損度の違いにより器種組成に影響を与えること（C.Orton2000）、様々な器種が混在する場合に大きな問題があること（森本 2009）が指摘されているように、それぞれの方法には長所と短所がある。そして、算定方法により数量やそれに基づく器種組成は異なっている。

出土漆製品の場合、有機物であるために水漬け保管されることが多く、樹種によって吸水量が異なることや、自然乾燥・保存処理により重量が一定ではない。したがって、重量を用いた②総重量と⑤平均重量個体数という算定方法は採用できない。器種は椀類が多く把手や鈕など特定の部位が少ないため、③特定部位数による数量的な算定も困難である。また、前述のように、出土漆製品は遺存度が低く、多くが破片であり、接合しても個体にならない資料が多いことから、接合作業後 1/2 以上残存する④接合個体数を算定することにも適していない。このような理由から、①総破片数および⑥口径/底径累積推定個体数（口縁部もしくは底部の破片を同心円上において径を計測し、残存径を合計する）が、漆製品

の数量的な算定方法として検討の対象となると考えられる。

本節では、①総破片数および⑥口径/底径累積推定個体数の算定方法を取り上げるが、後者は東京都新宿区内藤町遺跡で用いられた算定方法（以下、推定個体数）を使用する。推定個体数とは、半分以上残存する個体別資料と底部破片を円周上で計測した底部換算値を合算した推定個体数を算出するものである。底部破片を同心円上において径を計測し、その残存径を 1/8 未満、1/8～2/8、2/8～3/8、3/8～4/8、4/8 以上に分類し、1/16×（1/8 未満）+3/16×（1/8～2/8）+5/16×（2/8～3/8）+7/16×（3/8～4/8）1+1×（4/8 以上）で計算し、合計 1 となったものを個体数 1 とする（新宿区内藤町遺跡調査団 1992）。なお、内藤町遺跡では底部が出土しない焙烙は口縁部破片を用いるとしているが、本節では全て底部破片を用いた。また、前述のように、本節の総破片数は接合後の破片数とする。これは、出土漆製品が完形の状態で出土することが少なく、大・小の破片の状態で出土することが多いため、大形の破片は接合しやすく、接合することで器種の判別が可能となり器種判別率が上がるからである。

まず、総破片数について検討する（表 2-5、6）。表 2-5 は、飯椀・汁椀・平椀・壺椀・椀蓋・皿という器種と、「飯椀」「汁椀」という器種を判別できなかった椀類、器種を細分できなかった汁椀もしくは椀蓋、および椀蓋もしくは皿を合わせた、全ての出土漆製品の時期別の破片数を示したものである。総破片数は 245 点である。時期別の総計をみると、Ⅰ期（1606～1640 年代）6 点、Ⅱ期（1640 年代～1707 年）6 点、Ⅱb 期（1650 年代後半）4 点、Ⅱc 期（1650～60 年代）6 点、Ⅱd 期（1650～70 年代）1 点と点数が少ないので、この時期のものから器種組成を読み取ることは難しい。これに対して、Ⅰa 期（1620～1630 年代前半）は 174 点と最も多く、Ⅰb 期（1630 後半～1640 年代）も 48 点と多いので、器種組成を検討することは可能である。

Ⅰa 期（1620～1630 年代前半）の器種組成は、飯椀 47 点（27%）、汁椀 42 点（24.1%）、平椀 2 点（1.2%）、壺椀 1 点（0.6%）、椀蓋 15 点（8.6%）、皿 5 点（2.9%）、器種を細分できなかった汁椀もしくは椀蓋 5 点（2.9%）、椀蓋もしくは皿 1 点（0.6%）、「飯椀」「汁椀」という器種が判別できなかった椀類 56 点（32.2%）である。Ⅰb 期（1630 後半～1640 年代）の器種組成は、飯椀 15 点（31.3%）、汁椀 12 点（25%）、平椀 1 点（2.1%）、椀蓋 4 点（8.3%）、細分できなかった汁椀もしくは椀蓋 2 点（4.2%）、判別できなかった椀類 14 点（29.2%）であり、壺椀・皿は認められなかった。また、出土漆製品全体の器種組成をみると、飯椀 68 点（27.8%）、汁椀 60 点（24.5%）、平椀 3 点（1.2%）、壺椀 1 点（0.4%）、椀蓋 22 点（9%）、

皿 5 点（2.0%）、器種を細分できなかった汁椀もしくは椀蓋 10 点（4.1%）、椀蓋もしくは皿 1 点（0.4%）、器種が判別できなかった椀類 75 点（30.6%）である。

ただし、上記のような器種組成では、細分できなかった汁椀もしくは椀蓋、椀蓋もしくは皿は全体の約 3～4%と少ないが、判別できなかった椀類が約 30%と高い割合を占めていることから、判別できた器種組成をそのまま受け入れることは難しい。

そこで、表 2-5 から「飯椀」「汁椀」という器種が判別できなかった椀類、器種を細分できなかった汁椀もしくは椀蓋、および椀蓋もしくは皿を除いた表 2-6 を作成した。表 2-6 で点数の多いⅠa 期（1620～1630 年代前半）・Ⅰb 期（1630 後半～1640 年代）および全ての出土漆製品の器種組成の割合をみると、表 2-5 よりも飯椀約 14～16%、汁椀約 13%、椀蓋約 4～5%、皿約 1～2%の増加が認められる。

次に、推定個体数について検討したい（表 2-7、8）。表 2-7 は、飯椀・汁椀・平椀・壺椀・椀蓋・皿という器種と、「飯椀」「汁椀」という器種が判別できなかった椀類、器種を細分できなかった汁椀もしくは椀蓋、および椀蓋もしくは皿を合わせた、出土漆製品の時期別の推定個体数を示したものである。推定個体数の総計は 92 個体であり、総破片数の総計 245 点の 1/3 強である。時期別の総計をみると、Ⅰ期（1606～1640 年代）2 個体、Ⅱ期（1640 年代～1707 年）0 個体、Ⅱb 期（1650 年代後半）2 個体、Ⅱc 期（1650～60 年代）2 個体、Ⅱd 期（1650～70 年代）0 個体と個体数がきわめて少ないので、器種組成を読み取ることはできない。一方、Ⅰa 期（1620～1630 年代前半）は 68 個体と最も多く、Ⅰb 期（1630 後半～1640 年代）も 18 点とやや多いので、器種組成を検討することにした。

Ⅰa 期（1620～1630 年代前半）の器種組成は、飯椀 34 個体（50%）、汁椀 19 個体（27.9%）、椀蓋 7 個体（10.3%）、皿 2 個体（2.9%）、汁椀もしくは椀蓋 2 個体（2.9%）、椀蓋もしくは皿 1 個体（1.5%）、椀類 3 個体（4.4%）、である。Ⅰb 期（1630 後半～1640 年代）の器種組成は飯椀 8 個体（44.4%）、汁椀 7 個体（38.9%）、椀蓋 1 個体（5.6%）、汁椀もしくは椀蓋 1 個体（5.6%）、椀類 1 個体（5.6%）であった。また、出土漆製品全体の器種組成をみると、飯椀 46 個体（50%）、汁椀 27 個体（29.3%）、椀蓋 9 個体（9.8%）、皿 2 個体（2.2%）、器種を細分できなかった汁椀もしくは椀蓋 3 個体（3.3%）、椀蓋もしくは皿 1 個体（1.1%）、「飯椀」「汁椀」という器種が判別できなかった椀類 4 個体（4.4%）である。

表 2-8 は、表 2-7 から「飯椀」「汁椀」という器種が判別できなかった椀類、細分できなかった汁椀もしくは椀蓋、および椀蓋もしくは皿を除いたものである。除外したものは推定個体数全体の約 9%を占めており、表 2-8 で個体数の多いⅠa 期（1620～1630 年代前

半)・Ⅰb 期（1630 後半～1640 年代）および全ての出土漆製品の器種組成の割合をみると、表 2-7 よりも飯椀約 5～6%、汁椀約 3～5%、椀蓋約 1 %、皿 0.2～0.3%の増加が認められた。

表 2-7 と表 2-8 にみるように、総破片数と比べて器種組成の割合に大きな差がみられなかったのは、椀類が器種を判別できない破片であり、推定個体数の算定においては底部を含まない破片・小片はカウントされないため、椀類の推定個体数全体に占める割合が本来低いことに起因すると考えられる。

これまで述べてきた総破片数と推定個体数の算定方法において、器種が判別・細分できなかったものを除外した表 2-6 と表 2-8 を比較すると、総破片数（表 2-6）では飯椀 68 点（42.8%）、汁椀 60 点（37.7%）、平椀 3 点（1.9%）、壺椀 1 点（0.6%）、椀蓋 22 点（13.9%）、皿 5 点（3.1%）、総計 159 点。推定個体数（表 2-8）では飯椀 46 個体（54.8%）、汁椀 27 個体（32.1%）、椀蓋 9 個体（10.7%）、皿 2 点（2.4%）、総計 92 個体となり、推定個体数は総破片数の約 1/2 である。それぞれの器種の比率の差は飯椀±12.0%とやや高いが、汁椀±5.6%、椀蓋±3.2%、皿±0.7%であり、器種が判別・細分できなかったものを除外する前の表 2-5 と表 2-7 の差よりも近い数値となる。

以上述べてきたように、出土漆製品における総破片数による算定方法では、器種を判別できなかった椀類が約 30%と高い割合を占めている器種組成（表 2-5）と比べて、器種が判別・細分できなかったものを除外した器種組成（表 2-6）の方がより妥当性が高いと考えられる。一方、推定個体数による算定方法では、器種が判別・細分できなかったものを含む器種組成（表 2-7）と除外した器種組成（表 2-8）を比較すると、総破片数のような大きな差はみられないが、除外した器種組成（表 2-8）の方がより妥当性が高いとしてよいだろう。

問題は、総破片数の表 2-6 と推定個体数の表 2-8 のいずれを選択するかである。上述のように両者の器種の比率の差は飯椀が±12.0%とやや高いが他の器種では大きな差はない。ただし、総破片数では、小片でありながらも形態に特徴を有する資料によって、平椀・壺椀という器種を認識することができたが、推定個体数では、底部を含まない破片・小片はカウントされず、平・壺椀が認識されなかった。このことから、器種が判別・細分できなかったものを除外した総破片数（表 2-6）を出土漆製品の器種組成を示すものとして採用することにした。

最後に、表 2-6 から点数の多かったⅠa 期（1620～1630 年代前半）・Ⅰb 期（1630 後半

～1640 年代）を抽出したものが表 2-9 である。点数はⅠb 期になると約 1/3 に減少し、器種は壺椀、皿が確認されてない。しかし、それぞれの比率の差は飯椀±4.9%、汁椀±0%、平椀±1.3%、椀蓋±0.9%でいずれも 5%以内におさまり、Ⅰa 期、Ⅰb 期で器種組成はほぼ同じといえるだろう。また、Ⅰa 期、Ⅰb 期ともに飯椀、汁椀、椀蓋の順に出土点数が多いことがわかる。これは、17 世紀末から 18 世紀前葉までは汁椀よりも飯椀の組成比率が高いという指摘（後藤 2001）と一致している。また、Ⅰa 期にはいわゆる近世的な椀揃形式を構成する飯、汁、平、壺椀、椀蓋が確認できるとともに、Ⅰb 期に皿が認められないことは、17 世紀第 2 四半期以降ほとんど皿がみられなくなるという指摘（永越 2006）のとおりである。すなわち、本遺跡の漆製品のⅠa 期・Ⅰb 期の器種組成は江戸時代前期の様相を示す資料であるといえる。

6 漆器の時期別の様相

前節で述べた漆器の器種組成を踏まえて、有楽町二丁目遺跡の時期別の様相をみることにしたい（表 2-10～12）。表 2-10～12 は器種ごとに器面の塗り色、下地、樹種の関係をまとめたものである。明確な年代が不詳であるⅠ期（1606～1640 年代）とⅡ期（1640 年代～1707 年）は除いた。なお、( ) は各器種で器面の塗り色ごとにみる各下地の割合である。

Ⅰa 期（1620～1630 年代前半）の様相は以下のとおりである（表 2-10）。

「飯椀」には、塗り色が内外面ともに赤一色、内外面ともに黒一色、内面赤色外面黒色に共通して炭粉渋下地がみられる。47 点のうち赤一色は 5 点あり、鉱物系下地 1 点（20%）で樹種はケヤキである。鉱物系+炭粉渋下地 1 点（20%）で樹種はトネリコ属シオジ節である。炭粉渋下地 3 点（60%）で樹種はトチノキ 3 点、ブナ属 1 点である。黒一色は 7 点あり、全て炭粉渋下地で樹種はブナ属 3 点が主となる。内面赤色外面黒色は 32 点あり、全て炭粉渋下地で樹種はトチノキ 19 点が主となる。

「汁椀」には、塗り色が内外面ともに赤一色、内外面ともに黒一色、内面赤色外面黒色に共通して炭粉渋下地がみられる。42 点のうち赤一色は 2 点あり、全て炭粉渋下地で樹種はブナ属である。黒一色は 1 点あり、炭粉渋下地でブナ属である。内面赤色外面黒色は 39 点あり、鉱物系下地 1 点（2.6%）で樹種はケヤキである。鉱物系+炭粉渋下地 2 点（5.1%）で樹種はトチノキ 1 点、ケヤキ 1 点である。炭粉渋下地 36 点（92.3%）で樹種はトチノキ 26 点で主となる。

「飯椀」「汁椀」という器種が判別できなかった「椀類」には、塗り色が内外面ともに

赤一色、内外面ともに黒一色、内面黒色外面赤色、内面赤色外面黒色に共通して炭粉渋下地がみられる。56 点のうち赤一色は 5 点あり、鉱物系下地 1 点（20%）で樹種はトチノキである。炭粉渋下地 4 点（80%）でブナ属 2 点、ケヤキ 2 点である。黒一色は 1 点あり、炭粉渋下地で樹種はブナ属である。内面黒色外面赤色は 1 点あり、炭粉渋下地で樹種はケヤキである。内面赤色外面黒色は 48 点あり、鉱物系+炭粉渋下地 2 点（4.2%）で樹種はトチノキ 1 点、トネリコ属シオジ節 1 点である。炭粉渋下地 46 点（95.8%）で樹種はトチノキ 32 点が主となる。

「平椀」は、2 点が黒一色であり、全てが鉱物系下地で樹種はトチノキ 1 点、ケヤキ 1 点である。

「壺椀」は 1 点が黒一色で、炭粉渋下地で樹種はエゴノキ属である。

「椀蓋」には、塗り色が内外面ともに赤一色、内面赤色外面黒色に共通して炭粉渋下地がみられる。15 点のうち赤一色は 4 点あり、鉱物系下地 1 点（25%）で樹種はケヤキである。鉱物系+炭粉渋下地 1 点（25%）で樹種はケヤキである。炭粉渋下地 2 点（40%）で樹種はブナ属である。

器種を細分できなかった「汁椀もしくは椀蓋」は、塗り色が内外面ともに赤一色、内面赤色外面黒色に共通して炭粉渋下地がみられる。5 点のうち赤一色は 2 点あり、鉱物系+炭粉渋下地 1 点（50%）で樹種はトチノキである。炭粉渋下地 1 点（50%）で樹種はブナ属である。内面赤色外面黒色は 3 点あり、全て炭粉渋下地で樹種はトチノキ 2 点が主となる。

「皿」には、塗り色が内外面ともに黒一色、内面赤色外面黒色に共通して炭粉渋下地がみられる。5 点のうち黒一色は 1 点あり、炭粉渋下地で樹種はブナ属である。内面赤色外面黒色は 4 点あり、全て炭粉渋下地で樹種はブナ属 2 点で主となる。

器種を細分できなかった「椀蓋もしくは皿」は、1 点が内面赤色外面黒色であり、炭粉渋下地で樹種はトチノキである。

Ｉb 期（1630 後半～1640 年代）の様相は以下のとおりであった（表 2-11）。

「飯椀」は、15 点のうち黒一色は 4 点あり、鉱物系下地 1 点（25%）で樹種はケヤキである。内面赤色外面黒色は 11 点あり、全て炭粉渋下地で樹種はトチノキ 9 点が主となる。

「汁椀」は、12 点全てが内面赤色外面黒色で、炭粉渋下地 8 点（66.7%）で樹種はトチノキ 6 点が主となる。

「飯椀」「汁椀」という器種が判別できなかった「椀類」では、塗り色が内外面ともに赤一色、内外面ともに黒一色、内面赤色外面黒色に共通して炭粉渋下地がみられる。14

点のうち赤一色は 1 点あり、炭粉渋下地で樹種はトチノキである。黒一色は 2 点あり、全て炭粉渋下地で樹種はトチノキ 1 点、ブナ属 1 点である。内面赤色外面黒色は 11 点あり、全て炭粉渋下地で樹種はトチノキ 7 点で主となる。

「平椀」は、1 点が黒一色であり、鉱物系下地で樹種はケヤキである。

「椀蓋」は、4 点全てが内面赤色外面黒色であり、炭粉渋下地で樹種はトチノキである。器種を細分できなかった「汁椀もしくは椀蓋」は 2 点のうち赤一色は 1 点あり、炭粉渋下地で樹種はブナ属である。内面赤色外面黒色は 1 点あり、鉱物系+炭粉渋下地で樹種はトネリコ属シオジ節である。

Ⅱb 期（1650 年代後半）は（表 2-12)、「飯椀」は 2 点のうち赤一色は 1 点あり、炭粉渋下地で樹種はブナ属である。「椀蓋」は 2 点全てが内面赤色外面黒色であり、炭粉渋下地で樹種はトチノキである。

Ⅱc 期（1650～60 年代）は（表 2-12)、「飯椀」は 2 点のうち黒一色は 1 点あり、炭粉渋下地で樹種はブナ属である。内面赤色外面黒色は 1 点あり、炭粉渋下地で樹種はトチノキである。「汁椀」は 3 点全てが内面赤色外面黒色であり、炭粉渋下地で樹種はトチノキ 1 点、ブナ属 1 点、モクレン属 1 点である。「飯椀」「汁椀」という器種が判別できなかった「椀類」1 点が内面赤色外面黒色であり、炭粉渋下地で樹種はトチノキである。

Ⅱd 期（1650～70 年代）は（表 2-12)、器種を細分できなかった「汁椀もしくは椀蓋」1 点で内面赤色外面黒色であり、炭粉渋下地で樹種はトチノキである。

Ⅰa・Ⅰb 期には、各器種の器面の塗り色ごとに鉱物系下地、鉱物系+炭粉渋下地を使用する優品と炭粉渋下地の量産品がみられる。一方、Ⅱb 期以降になると鉱物系下地、鉱物系+炭粉渋下地の優品が減り、炭粉渋下地の量産品の割合が高くなる。

ここでは、有楽町二丁目遺跡のⅡb～Ⅱd 期（1650～70 年代）と近い時期の紀尾井町遺跡Ⅱ（表 2-13）と比較する。資料は 21 点あり、内訳は 17 世紀中葉の資料 14 点、17 世紀後葉の資料 2 点、17 世紀代の資料 5 点である。

紀尾井町遺跡Ⅱ（表 2-13）では、挽物の「飯椀」は 3 点全てが内面赤色外面黒色であり、炭粉渋下地で樹種はトチノキ 2 点、コナラ属 1 点である。「汁椀」は 4 点全てが内面赤色外面黒色であり、炭粉渋下地で樹種はトチノキである。「平椀」1 点が内面赤色外面黒色であり、炭粉渋下地で樹種はトチノキである。「腰高」は 2 点全てが内面赤色外面黒色であり、炭粉渋下地で樹種はカツラ 1 点、モクレン属 1 点である。

「椀蓋」5 点全てが内面赤色外面黒色であり、鉱物系下地 1 点（20%）で樹種はカツラ

である。また、炭粉渋下地 4 点（80%）で樹種はトチノキ 2 点が主となる。

「皿」1 点が黒一色であり、鉱物系下地で樹種はカツラである。

「蓋類」1 点が内面赤色外面黒色であり、炭粉渋下地で樹種はブナ属である。

板物の「膳」1 点が黒一色であり、前述のように下地がなく柿渋とみられる褐色層が塗布され、樹種はヒノキである。

曲物の「櫃蓋」2 点全てが黒一色であり、「膳」と同様に下地はなく、樹種もヒノキである。刳物の「壺杓子」1 点が赤一色であり、鉱物系下地で樹種はヒノキである。

紀尾井町遺跡Ⅱの挽物をみると「椀蓋」、「皿」でそれぞれ 1 点鉱物系下地であるものの、88.2%が炭粉渋下地である。また、「平椀」は有楽町二丁目遺跡では黒一色で鉱物系下地であったのに対し、紀尾井町遺跡Ⅱでは内面赤色外面黒色で炭粉渋下地である。

最後に、樹種同定をおこなっていないが、参考資料として両遺跡の前、後続の時代の紀尾井町遺跡と尾張藩麹町邸跡（表 2-14）を挙げる。紀尾井町遺跡は時期不明の 3 点を除いた 21 点で、その内訳は 17 世紀前半代～1660 年代の資料 19 点、1640～60 年代の資料 1 点、17 世紀末～18 世紀初頭の資料 1 点である。尾張藩麹町邸跡は時期不明を除いた 8 点で、その内訳は 1680 後半～1700 年代の資料 4 点、幕末～明治時代初期の 1877 年頃の資料 4 点である。

紀尾井町遺跡では（表 2-14）、各時代の器種構成は、1640～60 年代は「椀蓋」1 点（100%）である。17 世紀前半代～1660 年代は「飯椀」5 点（26.3%）、「汁椀」3 点（15.8%）、「椀蓋」3（15.8%）、「椀蓋もしくは椀類」1 点（5.3%）、「椀類」7 点（36.8%）である。17 世紀末～18 世紀初頭は「椀蓋もしくは汁椀」1 点（100%）である。点数の多い 17 世紀前半代～1660 年代の資料の器種構成の比率は、有楽町二丁目遺跡のⅠa 期に近い。全時代で全ての資料が器面の塗り色が内面赤色外面黒色で、炭粉渋下地である。

尾張藩麹町邸跡では（表 2-14）、各時代の器種構成は 1680 後半～1700 年代は「椀蓋」1 点（25%）、「椀類」3 点（75%）である。幕末～明治時代初期の 1877 年頃は「椀蓋」2 点（50%）、「椀類」2 点（50%）である。1680 後半～1700 年代において「椀蓋」は 1 点が内面赤色外面黒色であり、炭粉渋下地である。「椀類」3 点のうちは赤一色が 1 点、内面赤色外面黒色が 2 点あり、いずれも炭粉渋下地である。幕末～明治時代初期の 1877 年頃において、「椀蓋」2 点のうち赤一色が 1 点あり、鉱物系下地である。内面赤色外面黒色が 1 点あり、炭粉渋下地である。「椀類」2 点のうち赤一色が 1 点、内面赤色外面黒色が 1 点あり、いずれも炭粉渋下地である。全体の資料点数が少ないため、他の遺跡と単純に比較できな

いが、赤一色のものに鉱物系下地の堅牢なつくりの優品だけでなく、炭粉渋下地の量産品があることが確認できる。

以上のように器種ごとに、器面の塗り色、樹種、下地、色漆の使用顔料をみると漆製品の品質の違いが明らかになり、時代や遺跡ごとの差がとらえやすくなる。17 世紀前半において、各器種で鉱物系下地、鉱物系+炭粉渋下地の堅牢なつくりの優品と炭粉渋下地の量産品に大別できるが、鉱物系下地、鉱物系+炭粉渋下地の堅牢なつくりの優品は、器面の塗り色が赤一色、黒一色の飯・汁・平・壺椀に優先的に使用される傾向にある。また、これらの樹種はケヤキ、トネリコ属シオジ節が選択されることが多い。一方で、赤一色、黒一色の漆器に炭粉渋下地の量産品の質のものが一定量存在する。18 世紀前半以降に平・壺椀の品質が一般化したとされるが（後藤 2001）、より早い段階から平・壺椀にも優品と一般の品質のもの、すなわち量産的なものがあったと考えられる。これらは前述のように、外観が優品のより多い赤一色、黒一色の食器でありながら、品質は量産品である中間的な存在として位置づけられるのではないだろうか。

結語

本章では、漆製品の材質・製作技法の文化財科学的な分析と、考古学的な器種分類、器種組成の変遷を重ね合わせる試みの一つとして、有楽町二丁目遺跡を中心に近世江戸遺跡における大名屋敷遺跡から出土した漆製品の材質・製作技法の文化財科学的な分析と器種との関係、および漆器の器種組成を検討した。

まず、材質・製作技法の文化財科学的な分析と器種との関係をみると、各器種で若干のばらつきがあるものの器面の塗り色と材質・技法の関係が確認できた。それぞれの器種で鉱物系下地、鉱物系+炭粉渋下地の堅牢なつくりの優品と、炭粉渋下地の量産品に大別できることがわかった。さらに器面の塗り色ごとに下地の材質をみると、赤一色、黒一色の漆器において炭粉渋下地が占める割合が高く、外観が赤一色、黒一色の食器でありながら、品質は量産品である中間的な漆器が存在する可能性が考えられる。

次に、出土漆製品の時期別の様相を検討する際の前提となる、器種組成の検討をおこなった。出土漆製品の特質から、総破片数もしくは推定個体数による算定方法が考えられる。いずれも全体の器種の比率では大きな差はみられなかったが、推定個体数では、底部を含まない破片・小片はカウントされないため小片でありながらも形態に特徴を有する平・壺椀が認識されなかった。このことから、出土漆製品の器種組成には、器種が判別・細分で

きなかったものを除外した総破片数が妥当性が高いと考えられる。

近世的な椀揃形式の成立と普及に漆器の材質・製作技法がどのように関わっていたかについては、以下のような様相が認められた。

有楽町二丁目遺跡では、Ⅰa 期（1620～1630 年代前半）にいわゆる近世的な椀揃形式を構成する飯・汁・平・壺椀、椀蓋が確認でき、Ⅰb 期（1630 後半～1640 年代）以降に皿がみられなくなる。そして、飯椀、汁椀、椀蓋の順に出土点数が多く、全体における飯椀の組成比率が高いことがわかる。さらに点数は少ないが、紀尾井町遺跡Ⅱ、紀尾井町遺跡、尾張藩麹町邸跡の材質・製作技法をあわせると、17 世紀前半において、各器種で鉱物系下地、鉱物系+炭粉渋下地の堅牢なつくりの優品と炭粉渋下地の量産品に大別できるが、鉱物系下地、鉱物系+炭粉渋下地の堅牢なつくりの優品は、特に器面の塗り色が赤一色、黒一色の飯・汁・平・壺椀に優先的に使用される傾向にある。一方で、赤一色、黒一色の飯・汁・平・壺椀には、炭粉渋下地の量産品の質のものも一定量存在していたことが確認された。

以上のように、本章では、江戸の大名屋敷から出土した漆製品の材質・製作技法と器種との関係、器種組成を遺跡ごと時期ごとで取り上げた。大名屋敷の空間構成は御殿空間と詰人空間に区分されており（吉田 1988)、空間構成を背景にした漆製品のより具体的な使用実態を把握するためには、一括性の高い漆製品が出土した遺構単位で陶磁器などの共伴遺物を含めた検討をおこなう必要があるだろう。本章で分析対象とした資料は主に 17 世紀代のもので資料数の限界もあったため、この点は今後の課題としたい。

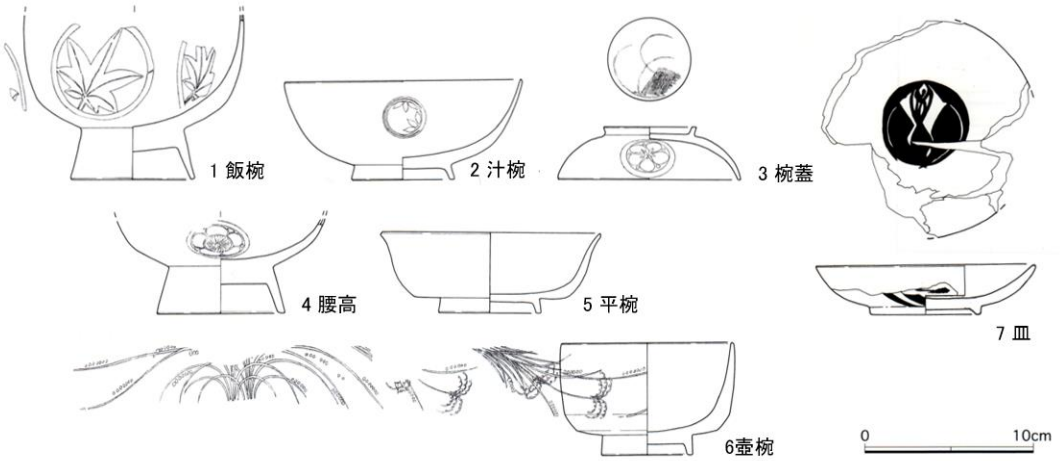

図 2-1 出土漆製品の代表的な器種

1～6:有楽町二丁目遺跡、7:飯田町遺跡(株式会社武蔵文化財研究所 2006『有楽町二丁目遺跡』、千代田区飯田町遺跡調査会 2001『飯田町遺跡』より転載、一部抜粋)

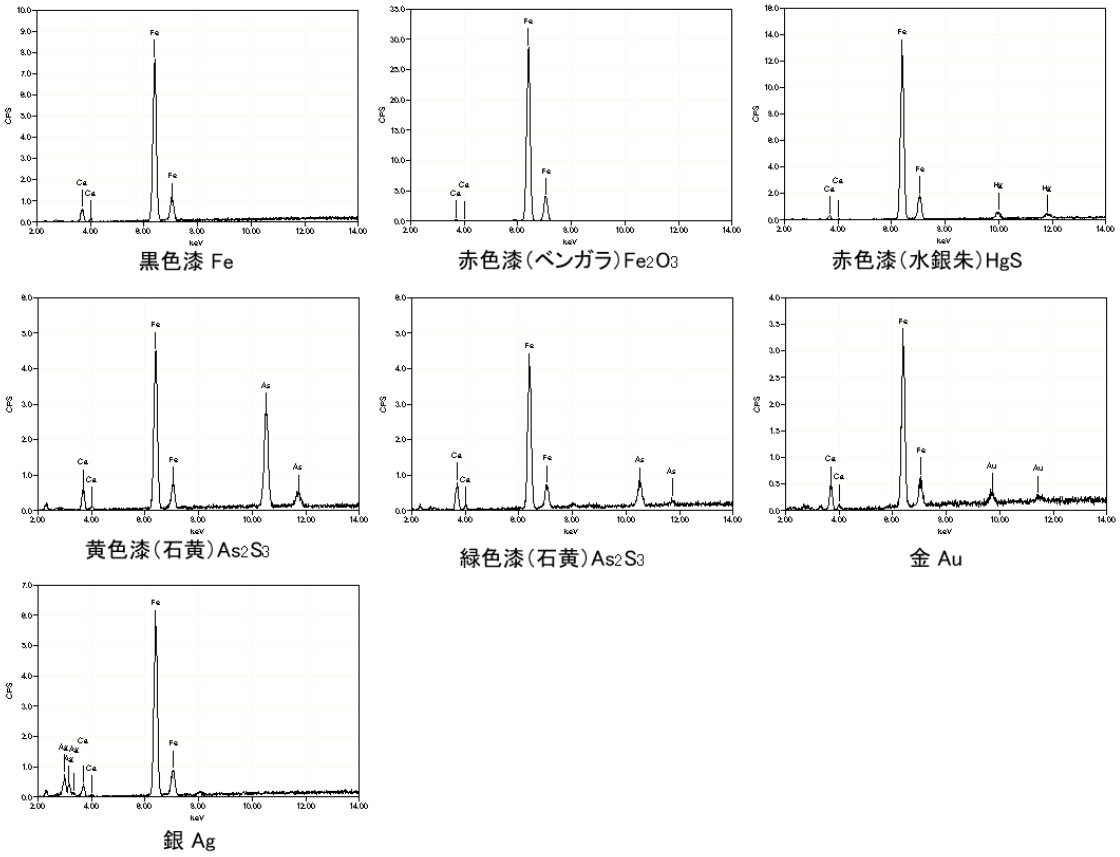

図 2-2　代表的な検出元素のスペクトル

（大成エンジニアリング株式会社 2006『紀尾井町遺跡Ⅱ』より転載、一部抜粋・改変）

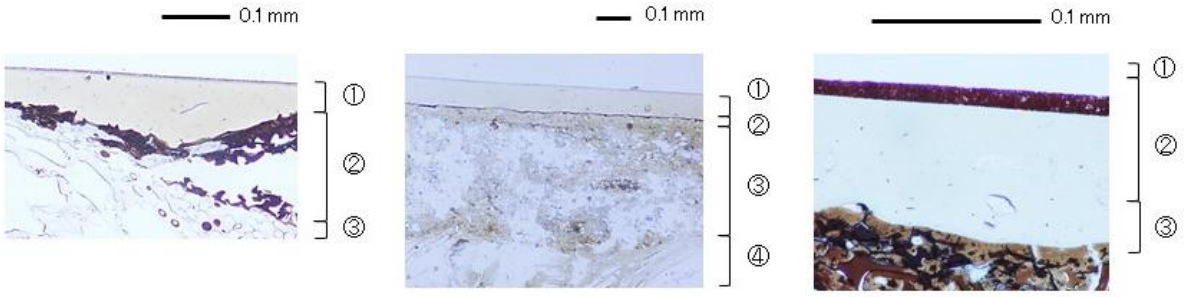

図 3-3　代表的な塗膜断面

左:炭粉渋下地（①褐色漆②炭粉渋下地③木胎）、中央:鉱物系下地（①褐色漆②黒色漆③鉱物系下地④木胎）、右:漆絵加飾（①赤色漆＝漆絵加飾②褐色漆③炭粉渋下地）

表 2-1　器種ごとにみた樹種の点数、各器種内で占める割合

有楽町二丁目遺跡

木工技術別分類	器種	樹種	点数
挽物	飯椀	トチノキ	31(45.6%)
		ブナ属	20(29.4%)
		コナラ亜属コナラ節	4(5.9%)
		ケヤキ	3(4.4%)
		コシアブラ	2(2.9%)
		ミズキ	2(2.9%)
		モクレン属	2(2.9%)
		キハダ	1(1.5%)
		クリ	1(1.5%)
		トネリコ属シオジ節	1(1.5%)
		不明	1(1.5%)
挽物	汁椀	トチノキ	36(60%)
		ブナ属	14(23.3%)
		ケヤキ	4(6.7%)
		クリ	2(3.3%)
		モクレン属	2(3.3%)
		カツラ	1(1.7%)
		コナラ亜属コナラ節	1(1.7%)
挽物	平椀	ケヤキ	2(66.7%)
		トチノキ	1(33.3%)
挽物	壺椀	エゴノキ属	1(100%)
挽物	椀蓋	トチノキ	18(81.8%)
		ケヤキ	2(9.1%)
		ブナ属	2(9.1%)

木工技術別分類	器種	樹種	点数
挽物	汁椀or椀蓋	トチノキ	5(50%)
		ブナ属	3(30%)
		サクラ属	1(10%)
		トネリコ属シオジ節	1(10%)
挽物	椀蓋or皿	トチノキ	1(100%)
挽物	椀類	トチノキ	45(60%)
		ブナ属	14(18.7%)
		ケヤキ	8(10.7%)
		トネリコ属シオジ節	2(2.7%)
		コナラ亜属コナラ節	1(1.3%)
		カツラ	1(1.3%)
		ミズキ	1(1.3%)
		カエデ属	1(1.3%)
		モクレン属	1(1.3%)
		不明	1(1.3%)
挽物	皿	ブナ属	3(60%)
		カツラ	1(20%)
		ケヤキ	1(20%)
挽物	不明	ブナ属	3(60%)
		トチノキ	1(20%)
		カエデ属	1(20%)

紀尾井町遺跡Ⅱ

木工技術別分類	器種	樹種	点数
挽物	飯椀	トチノキ	2(66.7%)
		コナラ属	1(33.3%)
挽物	汁椀	トチノキ	4(100%)
挽物	平椀	トチノキ	1(100%)
挽物	腰高	カツラ	1(50%)
		モクレン属	1(50%)
挽物	椀蓋	トチノキ	2(40%)
		カツラ	1(20%)
		ケヤキ	1(20%)
		ブナ属	1(20%)
挽物	蓋類	ブナ属	1(100%)
挽物	皿	カツラ	1(100%)
板物	膳	ヒノキ	1(100%)
曲物	櫃蓋	ヒノキ	2(100%)
刳物	壺杓子	ヒノキ	1(100%)

表 2-2　器面の塗り色ごとに加飾・地塗りに使用された色漆、検出元素（有楽町二丁目遺跡）

有楽町二丁目遺跡

加飾箇所

赤×赤

漆絵の色	点数	検出元素	点数内訳
黄色漆	1	As	1
黒色漆	5	Fe	5

黒×黒

漆絵の色	点数	検出元素	点数内訳
赤色漆	10	Fe	1
		Hg	9

黒×赤

漆絵の色	点数	検出元素	点数内訳
赤色漆	130	Fe	62
		Hg	68
黄色漆	18	As	18

地塗り

赤×赤

塗り色	点数	検出元素	点数内訳
赤色漆	21	Fe	15
		Hg	6

赤×黒

塗り色	点数	検出元素	点数内訳
赤色漆	1	Hg	1

黒×赤

塗り色	点数	検出元素	点数内訳
赤色漆	198	Fe	175
		Hg	23

※高台内に文様がある資料は採取不可のため、赤×赤は1点、黒×赤は2点少ない。
黒×赤は赤色漆と黄色漆を併用している資料があり、それぞれ重複して数えている。

表 2-3 器面の塗り色ごとに加飾・地塗りに使用された色漆、検出元素（紀尾井町遺跡Ⅱ、紀尾井町遺跡、尾張藩麹町邸跡）

紀尾井町遺跡Ⅱ

加飾箇所

	漆絵の色	点数	検出元素	点数内訳
黒×赤	赤色漆	12	Fe	5
			Hg	7
	黄色漆	2	As	2
	蒔絵	点数	検出元素	点数内訳
	銀	1	Ag	1
	切箔・箔絵	点数	検出元素	点数内訳
	金	2	Au	2

地塗り

	塗り色	点数	検出元素	点数内訳
赤×赤	赤色漆	1	Hg	1

	塗り色	点数	検出元素	点数内訳
黒×赤	赤色漆	16	Fe	12
			Hg	4

※黒×赤は赤色漆、黄色漆、蒔絵、切箔・箔絵を併用している資料があり、それぞれ重複して数えている。
資料番号14, 15, 20はFeとともにAsが微量に検出しているが、本表ではFeとした。
資料番号1、5はHgともにAsが微量に検出しているが、本表ではHgとした。

紀尾井町遺跡

加飾箇所

	漆絵の色	点数	検出元素	点数内訳
黒×赤	赤色漆	12	Fe	8
			Hg	4
	黄色漆	1	As	1
	蒔絵	点数	検出元素	点数内訳
	銀	1	Ag	1

地塗り

	塗り色	点数	検出元素	点数内訳
黒×赤	赤色漆	23	Fe	23

	塗り色	点数	検出元素	点数内訳
不明	赤色漆	1	Fe	15

※黒×赤は赤色漆と黄色漆を併用している資料があり、それぞれ重複して数えている。

尾張藩麹町邸跡

加飾箇所

	漆絵の色	点数	検出元素	点数内訳
黒×赤	黄色漆	4	As	4

地塗り

	塗り色	点数	検出元素	点数内訳
赤×赤	赤色漆	3	Fe	1
			Hg	2

	塗り色	点数	検出元素	点数内訳
黒×赤	赤色漆	6	Fe	5
			Hg	1

表 2-4 器種ごとにみる器面の塗り色、下地、樹種、色漆の使用顔料の関係（有楽町二丁目遺跡）

有楽町二丁目遺跡

		赤×赤			黒×黒			赤×黒	黒×赤				不明	総計
		鉱物系下地	鉱物系+炭粉渋下地	炭粉渋下地	鉱物系下地	炭粉渋下地	－	炭粉渋下地	鉱物系下地	鉱物系+炭粉渋下地	炭粉渋下地	－	炭粉渋下地	
飯椀	トチノキ			2			1				28(2)			31
	ブナ属			2		4	2				10		2	20
	コナラ亜属コナラ節					2							2	4
	ケヤキ	1(1)			1						1			3
	コシアブラ					1					1			2
	ミズキ										2			2
	モクレン属										2			2
	キハダ										1(1)			1
	クリ					1								1
	トネリコ属シオジ節		1(1)											1
	不明										1(1)			1
汁椀	トチノキ									1	34(3)	1		36
	ブナ属			2		1					9	2		14
	ケヤキ								1(1)	1(1)	2(1)			4
	クリ										2(1)			2
	モクレン属										2			2
	カツラ										1(1)			1
	コナラ亜属コナラ節											1		1
平椀	ケヤキ				2									2
	トチノキ				1									1
壺椀	エゴノキ属					1								1
椀蓋	トチノキ										18(1)			18
	ケヤキ	1(1)	1											2
	ブナ属			2										2
汁椀or椀蓋	トチノキ		1(1)								4			5
	ブナ属			2		1								3
	トネリコ属シオジ節									1(1)				1
	サクラ属										1			1
椀蓋or皿	トチノキ										1			1
椀類	トチノキ	1(1)		1		1				1	41(3)			45
	ブナ属			2(1)		3					8(1)		1	14
	ケヤキ			2	1			1(1)	1(1)		3(1)			8
	トネリコ属シオジ節									1(1)	1			2
	カツラ										1			1
	ミズキ										1			1
	カエデ属										1			1
	コナラ亜属コナラ節										1			1
	モクレン属										1(1)			1
	不明										1			1
皿	ブナ属					1					2			3
	カツラ										1			1
	ケヤキ										1(1)			1
不明	ブナ属									1	1		1	3
	トチノキ										1			1
	カエデ属										1			1
	総計	3	3	15	5	16	3	1	2	6	186	4	6	250

※( )は器面の地塗りに水銀朱が使用された資料の点数

表 2-5　総破片数にみる有楽町二丁目遺跡の器種組成

総破片数

器種	Ⅰ期	Ⅰa期	Ⅰb期	Ⅱ期	Ⅱb期	Ⅱc期	Ⅱd期	総計
飯椀	2(33.3%)	47(27%)	15(31.3%)		2(50%)	2(33.3%)		68(27.8%)
汁椀	2(33.3%)	42(24.1%)	12(25%)	1(16.7%)		3(50%)		60(24.5%)
平椀		2(1.2%)	1(2.1%)					3(1.2%)
壺椀		1(0.6%)						1(0.4%)
椀蓋		15(8.6%)	4(8.3%)	1(16.7%)	2(50%)			22(9%)
汁椀or椀蓋		5(2.9%)	2(4.2%)	2(33.3%)			1(100%)	10(4.1%)
椀蓋or皿		1(0.6%)						1(0.4%)
椀類	2(33.3%)	56(32.2%)	14(29.2%)	2(33.3%)		1(16.7%)		75(30.6%)
皿		5(2.9%)						5(2.0%)
総計	6(100%)	174(100%)	48(100%)	6(100%)	4(100%)	6(100%)	1(100%)	245(100%)

表 2-6　総破片数にみる有楽町二丁目遺跡の器種組成（器種が判別・細分できなかった資料を除外）

総破片数

器種	Ⅰ期	Ⅰa期	Ⅰb期	Ⅱ期	Ⅱb期	Ⅱc期	Ⅱd期	総計
飯椀	2(50%)	47(41.2%)	15(46.9%)		2(50%)	2(40%)		68(42.8%)
汁椀	2(50%)	42(37.5%)	12(37.5%)	1(50%)		3(60%)		60(37.7%)
平椀		2(1.8%)	1(3.1%)					3(1.9%)
壺椀		1(0.9%)						1(0.6%)
椀蓋		15(13.4%)	4(12.5%)	1(50%)	2(50%)			22(13.9%)
皿		5(4.5%)						5(3.1%)
総計	4(100%)	112(100%)	32(100%)	2(100%)	4(100%)	5(100%)	0	159(100%)

表 2-7　推定個体数にみる有楽町二丁目遺跡の器種組成

推定個体数

器種	Ⅰ期	Ⅰa期	Ⅰb期	Ⅱ期	Ⅱb期	Ⅱc期	Ⅱd期	総計
飯椀	2(100%)	34(50%)	8(44.4%)		1(50%)	1(50%)		46(50%)
汁椀		19(27.9%)	7(38.9%)			1(50%)		27(29.3%)
椀蓋		7(10.3%)	1(5.6%)		1(50%)			9(9.8%)
汁椀or椀蓋		2(2.9%)	1(5.6%)					3(3.3%)
椀蓋or皿		1(1.5%)						1(1.1%)
椀類		3(4.4%)	1(5.6%)					4(4.4%)
皿		2(2.9%)						2(2.2%)
総計	2(100%)	68(100%)	18(100%)	0	2(100%)	2(100%)	0	92(100%)

表 2-8　推定個体数にみる有楽町二丁目遺跡の器種組成（器種が判別・細分できなかった資料を除外）

推定個体数

器種	Ⅰ期	Ⅰa期	Ⅰb期	Ⅱ期	Ⅱb期	Ⅱc期	Ⅱd期	総計
飯椀	2(100%)	34(54.8%)	8(50%)		1(50%)	1(50%)		46(54.8%)
汁椀		19(30.6%)	7(43.8%)			1(50%)		27(32.1%)
椀蓋		7(11.3%)	1(6.3%)		1(50%)			9(10.7%)
皿		2(3.2%)						2(2.4%)
総計	2(100%)	62(100%)	16(100%)	0	2(100%)	2(100%)	0	84(100%)

表 2-9　表 2-6 からⅠa 期・Ⅰb 期のみを抽出

器種	Ⅰa期	Ⅰb期	総計
飯椀	47(42%)	15(46.9%)	62(43.1%)
汁椀	42(37.5%)	12(37.5%)	54(37.5%)
平椀	2(1.8%)	1(3.1%)	3(2.1%)
壺椀	1(0.9%)		1(0.7%)
椀蓋	15(13.4%)	4(12.5%)	19(13.2%)
皿	5(4.5%)		5(3.5%)
総計	112(100%)	32(100%)	144(100%)

表 2-10　器種ごとにみる器面の塗り色、下地、樹種、色漆の使用顔料の関係（有楽町二丁目遺跡Ｉａ期）

有楽町二丁目遺跡　Ｉa期

		赤×赤			黒×黒		赤×黒	黒×赤			不明	総計
		鉱物系下地	鉱物系+炭粉渋下地	炭粉渋下地	鉱物系下地	炭粉渋下地	炭粉渋下地	鉱物系下地	鉱物系+炭粉渋下地	炭粉渋下地	炭粉渋下地	
飯椀	トチノキ			2						16(1)		18
	ブナ属			1		3				9	2	15
	コナラ亜属コナラ節					2					1	3
	ケヤキ	1(1)								1		2
	コシアブラ					1				1		2
	ミズキ									2		2
	モクレン属									2		2
	キハダ									1(1)		1
	クリ					1						1
	トネリコ属シオジ節		1(1)									1
汁椀	トチノキ								1	25(3)		26
	ブナ属			2		1				6		9
	ケヤキ							1(1)	1(1)	2(1)		4
	カツラ									1(1)		1
	クリ									1		1
	モクレン属									1		1
平椀	ケヤキ				1							1
	トチノキ				1							1
壺椀	エゴノキ属					1						1
椀蓋	トチノキ									11(1)		11
	ケヤキ	1(1)	1									2
	ブナ属			2								2
汁椀or椀蓋	トチノキ		1(1)							2		3
	ブナ属			1								1
	サクラ属									1		1
椀蓋or皿	トチノキ									1		1
椀類	トチノキ	1(1)							1	32(2)		34
	ブナ属			2(1)		2				5(1)		9
	ケヤキ			2			1(1)			3(1)		6
	トネリコ属シオジ節								1(1)	1		2
	カツラ									1		1
	ミズキ									1		1
	カエデ属									1		1
	モクレン属									1(1)		1
	不明									1		1
皿	ブナ属					1				2		3
	カツラ									1		1
	ケヤキ									1(1)		1
不明	ブナ属									1	1	2
	総計	3	3	12	2	12	1	1	4	134	4	176

※( )は器面の地塗りに水銀朱が使用された資料の点数

表 2-11　器種ごとにみる器面の塗り色、下地、樹種、色漆の使用顔料の関係（有楽町二丁目遺跡Ｉｂ期）

有楽町二丁目遺跡　Ｉb期

		赤×赤	黒×黒			黒×赤			総計
		炭粉渋下地	鉱物系下地	炭粉渋下地	－	鉱物系+炭粉渋下地	炭粉渋下地	－	
飯椀	トチノキ				1		9(1)		10
	ブナ属				2		1		3
	ケヤキ		1						1
	不明						1(1)		1
汁椀	トチノキ						6	1	7
	ブナ属						2	2	4
	コナラ亜属コナラ節							1	1
平椀	ケヤキ		1						1
椀蓋	トチノキ						4		4
汁椀or椀蓋	トネリコ属シオジ節					1(1)			1
	ブナ属	1							1
椀類	トチノキ	1		1			7		9
	ブナ属			1			3		4
	コナラ亜属コナラ節						1		1
不明	カエデ属						1		1
	トチノキ						1		1
	総計	2	2	2	3	1	36	4	50

※( )は器面の地塗りに水銀朱が使用された資料の点数

表 2-12 器種ごとにみる器面の塗り色、下地、樹種、色漆の使用顔料の関係（有楽町二丁目遺跡Ⅱb,Ⅱc,Ⅱd 期）

有楽町二丁目遺跡　Ⅱb期,Ⅱc期,Ⅱd期

			赤×赤	黒×黒	黒×赤	不明	総計
			炭粉渋下地	炭粉渋下地	炭粉渋下地	炭粉渋下地	
Ⅱb期	飯椀	コナラ亜属コナラ節				1	1
		ブナ属	1				1
	椀蓋	トチノキ			2		2
		総計	1		2	1	4
Ⅱc期	飯椀	トチノキ			1		1
		ブナ属		1			1
	汁椀	トチノキ			1		1
		ブナ属			1		1
		モクレン属			1		1
	椀類	トチノキ			1		1
		総計		1	5		6
Ⅱd期	汁椀or椀蓋	トチノキ			1		1
		総計			1		1

表 2-13 器種ごとにみる器面の塗り色、下地、樹種、色漆の使用顔料の関係（紀尾井町遺跡Ⅱ）

紀尾井町遺跡Ⅱ

			赤	黒		黒×赤		総計
			鉱物系下地	鉱物系下地	なし	鉱物系下地	炭粉渋下地	
挽物	飯椀	トチノキ					2(1)	2
		コナラ属					1	1
	汁椀	トチノキ					4(2)	4
	平椀	トチノキ					1	1
	腰高	カツラ					1	1
		モクレン属					1	1
	椀蓋	トチノキ					2	2
		カツラ					1	1
		ケヤキ				1(1)		1
		ブナ属					1	1
	皿	カツラ		1				1
	蓋類	ブナ属					1	1
板物	膳	ヒノキ			1			1
曲物	櫃蓋	ヒノキ			2			2
刳物	壺杓子	ヒノキ	1(1)					1
		総計	1	1	3	1	15	21

※( )は器面の地塗りに水銀朱が使用された資料の点数

表 2-14 器種ごとにみる器面の塗り色、下地、樹種、色漆の使用顔料の関係（紀尾井町遺跡，尾張藩麹町邸跡）

紀尾井町遺跡

		黒×赤	総計
		炭粉渋下地	
1640～1660年代	椀蓋	1	1
17世紀前半～1660年代	飯椀	5	5
	汁椀	3	3
	椀蓋	3	3
	椀蓋or椀類	1	1
	椀類	7	7
17世紀末～18世紀初頭	椀蓋or汁椀	1	1
	総計	21	21

尾張藩麹町邸跡

		赤×赤		黒×赤	総計
		鉱物系下地	炭粉渋下地	炭粉渋下地	
1680後半～1700年代	椀蓋			1	1
	椀類		1	2	3
1877年前後	椀蓋	1(1)		1	2
	椀類		1(1)	1	2
	総計	1	2	5	8

※( )は器面の地塗りに水銀朱が使用された資料の点数

有楽町二丁目遺跡

附表 2-1 分析資料一覧表

時期	年代	遺構番号	遺構性格		遺物番号	木工技術別分類	器種	推定個体数	樹種	塗り色（外面×内面）	文様色	主な検出元素（外面）	主な検出元素（内面）	塗膜構造（外面）	塗膜構造（内面）	下地材	備考
Ⅰ	不明	48	土坑	羽柴	1	挽物	汁椀	0	トチノキ	黒×赤	赤・黄	Fe Hg	Fe	赤1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰ	不明	244	土坑	羽柴	1	挽物	飯椀	1	トチノキ	黒×赤	赤	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰ	不明	247	土坑	羽柴	1	挽物	椀類	0	ブナ属	不明	–	Fe	–	褐1炭1	–	炭粉渋下地	炭化し状態悪
Ⅰ	不明	247	土坑	羽柴	2	挽物	飯椀	1	トチノキ	黒×赤	赤・黄	Fe Hg As	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰ	不明	247	土坑	羽柴	3	挽物	汁椀	0.4375	トチノキ	黒×赤	赤	–	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰ	不明	247	土坑	羽柴	4	挽物	椀類	0	ケヤキ	黒×黒	–	Fe	Fe	褐1黒1サビ1	褐1黒1サビ1	鉱物系下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	11	土坑	羽柴	1	挽物	飯椀	1	ブナ属	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	17	土坑	羽柴	1	挽物	汁椀	0.1875	トチノキ	黒×赤	赤	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	17	土坑	羽柴	2	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤・黄	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	17	土坑	羽柴	3	挽物	汁椀	1	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	17	土坑	羽柴	4	挽物	飯椀	0	トチノキ	赤×赤	黒	Fe	Fe	赤1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	17	土坑	羽柴	5	挽物	汁椀	0.1875	ブナ属	黒×赤	赤	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1褐1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	17	土坑	羽柴	6	挽物	汁椀	1	トチノキ	黒×赤	–	–	Fe Hg	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	17	土坑	羽柴	7	挽物	壺椀	0.0625	エゴノキ属	黒×黒	–	Fe	Fe	褐1炭1	褐1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	17	土坑	羽柴	8	挽物	椀類	0	ブナ属	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1褐2炭1	赤1褐1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	17	土坑	羽柴	9	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	–	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	17	土坑	羽柴	10	挽物	椀類	0.1875	トネリコ属シオジ節	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	18	土坑	羽柴	1	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	–	–	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	18	土坑	羽柴	2	挽物	椀類	0	トネリコ属シオジ節	黒×赤	–	–	Fe Hg	褐1黒1サビ1炭1	赤1サビ1炭1	鉱物系+炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	21	S21系建物跡	羽柴	1	挽物	汁椀	1	トチノキ	黒×赤	–	–	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	21	S21系建物跡	羽柴	2	挽物	汁椀	1	モクレン属	黒×赤	–	–	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	資料番号7と接合
Ⅰa	1610～1630年代前半	21	S21系建物跡	羽柴	3	挽物	汁椀	0	カツラ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe Hg	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	資料番号8と接合
Ⅰa	1610～1630年代前半	21	S21系建物跡	羽柴	4	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤・黄	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1褐1炭1	炭粉渋下地	資料番号5と接合
Ⅰa	1610～1630年代前半	21	S21系建物跡	羽柴	6	挽物	椀類	0	ブナ属	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe Hg	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	21	S21系建物跡	羽柴	9	挽物	椀類	0	ブナ属	赤×赤	–	Fe Hg	Fe	赤1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	21	S21系建物跡	羽柴	10	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe Hg	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	21	S21系建物跡	羽柴	11	挽物	平椀	0	トチノキ	黒×黒	–	Fe	Fe	褐1黒1サビ1	褐1黒1サビ1	鉱物系下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	1	挽物	飯椀	1	ブナ属	黒×赤	–	–	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	底部に釘書き
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	2	挽物	椀類	1	ケヤキ	黒×赤	–	–	Fe	色1褐1炭1	赤1褐1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	3	挽物	飯椀	1	ブナ属	黒×赤	–	–	Fe	褐1炭1	赤1褐1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	5	挽物	皿	1	ブナ属	黒×赤	赤	Fe	Fe	色1褐1炭1	–	炭粉渋下地	底部に釘書き
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	6	挽物	飯椀	1	ブナ属	赤×赤	–	Fe	Fe	赤1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	資料番号25と接合
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	7	挽物	飯椀	1	ミズキ	黒×赤	–	–	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	8	挽物	飯椀	0.3125	コナラ亜属コナラ節	黒×黒	–	–	Fe	褐1炭1	–	炭粉渋下地	状態悪
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	9	挽物	飯椀	1	ケヤキ	黒×赤	–	–	Fe	色1褐1炭1	赤1褐1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	10	挽物	汁椀	1	トチノキ	黒×赤	赤・黄	Fe As	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	資料番号18の一部と接合
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	11	挽物	飯椀	1	コシアブラ	黒×赤	赤	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	12	挽物	皿	1	カツラ	黒×赤	–	–	Fe	色1褐1炭1	赤1褐1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	13	挽物	飯椀	1	ブナ属	黒×黒	–	–	Fe	褐1炭1	–	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	14	挽物	汁椀	1	ブナ属	黒×赤	赤	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	15	挽物	汁椀	0.1875	トチノキ	黒×赤	赤・黄	Fe Hg As	Fe Hg As	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	16	挽物	不明	0	ブナ属	黒×赤	赤	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	17	挽物	飯椀	0.1875	ブナ属	黒×赤	–	–	Fe	褐1炭1	–	炭粉渋下地	炭化し状態悪
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	18	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤・黄	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	資料番号10の一部と接合
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	19	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	20	挽物	汁椀	0.0625	トチノキ	黒×赤	–	Fe	Fe	褐1炭1	赤1褐1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	21	挽物	椀蓋	0.0625	トチノキ	黒×赤	赤・黄	Fe Hg	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	22	挽物	汁椀	0.1875	トチノキ	黒×赤	赤・黄	Fe As	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	23	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	24	挽物	汁椀	0.3125	トチノキ	黒×赤	赤・黄	Fe As	Fe	色1褐1炭1	赤1褐1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	26	挽物	椀蓋	1	トチノキ	黒×赤	–	Fe	Fe Hg	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	27	挽物	椀蓋	1	トチノキ	黒×赤	黄	Fe As	Fe As	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	28	挽物	汁椀	0.1875	トチノキ	黒×赤	赤	–	Fe Hg As	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	29	挽物	汁椀	1	トチノキ	黒×赤	–	–	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	30	挽物	皿	0.1875	ブナ属	黒×黒	赤	Fe	Fe	褐1炭1	赤1褐1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	31	挽物	飯椀	0.0625	コシアブラ	黒×黒	赤	Fe	Fe	褐1炭1	赤1褐1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	32	挽物	皿	0.1875	ブナ属	黒×赤	赤	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	33	挽物	飯椀	0	コナラ亜属コナラ節	黒×黒	–	–	Fe	色1褐1炭1	–	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	34	挽物	飯椀	0	モクレン属	黒×赤	–	–	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	35	挽物	椀蓋	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg As	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	36	挽物	汁椀	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	22	土坑	羽柴	37	挽物	椀類	0	ブナ属	黒×黒	赤	Fe	Fe	色1褐1炭1	褐1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	1	挽物	飯椀	1	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	2	挽物	飯椀	1	トチノキ	黒×赤	–	–	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	底部に釘書きか
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	3	挽物	飯椀	1	ブナ属	黒×赤	–	–	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	4	挽物	汁椀	0.4375	トチノキ	黒×赤	赤・黄	Fe As	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	5	挽物	椀蓋	0.3125	トチノキ	黒×赤	赤・黄	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	6	挽物	汁椀	0.0625	ケヤキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe Hg	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	8	挽物	汁椀	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	9	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	–	–	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	10	挽物	汁椀	0.0625	トチノキ	黒×赤	黄	Fe	Fe	褐1サビ1炭1	赤1サビ1炭1	鉱物系+炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	13	挽物	飯椀	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe	Fe	褐1炭1	赤1褐1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	14	挽物	汁椀or椀蓋	0	サクラ属	黒×赤	赤・黄	Fe As	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	15	挽物	椀蓋	0	ケヤキ	赤×赤	黒	Fe	Fe	赤1サビ1炭1サビ1	赤1サビ1炭1サビ1	鉱物系+炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	16	挽物	飯椀	1	トチノキ	黒×赤	赤	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	資料番号12と接合
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	17	挽物	汁椀	1	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	18	挽物	汁椀	0.1875	ブナ属	黒×赤	–	–	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	19	挽物	椀蓋	0.4375	トチノキ	黒×赤	–	–	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	20	挽物	椀類	0	カエデ属	黒×赤	–	–	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	21	挽物	飯椀	1	ブナ属	黒×赤	–	–	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	22	挽物	飯椀	1	トチノキ	黒×赤	–	–	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	23	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	24	挽物	椀蓋	1	ブナ属	赤×赤	赤	Fe	Fe	赤1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	25	挽物	椀類	0.0625	トチノキ	黒×赤	赤・黄	Fe Hg As	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	26	挽物	皿	0.4375	ケヤキ	黒×赤	赤	–	Fe Hg	褐1炭1	赤1褐1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	27	挽物	椀蓋	0.1875	トチノキ	黒×赤	–	–	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	28	挽物	汁椀	0.0625	ブナ属	黒×赤	–	–	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	29	挽物	椀類	0	ブナ属	赤×赤	–	Fe	Fe	赤1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	30	挽物	椀類	0	x	黒×赤	赤	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	31	挽物	椀類	0	ブナ属	黒×赤	–	–	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	32	挽物	飯椀	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	33	挽物	椀類	0	ケヤキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe Hg	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	34	挽物	椀類	0	ケヤキ	赤×赤	–	Fe	Fe	赤1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	35	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	36	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	37	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	–	–	Fe	褐1黒1サビ1炭1	赤1サビ1炭1	鉱物系+炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	38	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	27	溝状遺構	羽柴	39	挽物	椀類	0	ブナ属	黒×赤	赤	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1褐1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	35	木組土坑	羽柴	1	挽物	汁椀	0.4375	クリ	黒×赤	–	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	35	木組土坑	羽柴	2	挽物	飯椀	0.3125	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	35	木組土坑	羽柴	3	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	35	木組土坑	羽柴	4	挽物	汁椀or椀蓋	0.1875	トチノキ	赤×赤	黒	Fe Hg	Fe Hg	赤1黒1サビ1（炭1）	赤1褐1黒1サビ1炭1	鉱物系+炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	1	挽物	汁椀	1	ケヤキ	黒×赤	–	–	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	2	挽物	椀蓋	1	トチノキ	黒×赤	黄	Fe As	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	3	挽物	汁椀	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	4	挽物	汁椀	1	ケヤキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe Hg	色1褐1黒1サビ1炭1	赤1サビ1炭1	鉱物系+炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	5	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	6	挽物	飯椀	1	トネリコ属シオジ節	赤×赤	–	Fe Hg	Fe Hg	赤1サビ1炭1	赤1サビ1炭1	鉱物系+炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	7	挽物	飯椀	0.4375	トチノキ	黒×赤	–	–	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	8	挽物	飯椀	1	トチノキ	黒×赤	–	–	Fe Hg	褐1炭1	赤1褐1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	9	挽物	飯椀	1	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg		色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	10	挽物	椀蓋	0.4375	ケヤキ	赤×赤	–	Fe Hg	Fe Hg	色1褐1サビ1	色1褐1サビ1	鉱物系下地	平椀蓋
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	11	挽物	汁椀	0.4375	ブナ属	赤×赤	–	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	12	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe Hg	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	13	挽物	飯椀	1	キハダ	黒×赤	–	–	Fe Hg	褐1炭1	赤1褐1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	14	挽物	飯椀	0.4375	ブナ属	黒×赤	–	–	Fe	褐1黒1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	15	挽物	不明	1	ブナ属	不明	–	Fe	–	褐1炭1	–	炭粉渋下地	炭化
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	16	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤・黄	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	17	挽物	椀類	0.0625	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	18	挽物	椀類	0	ケヤキ	黒×赤	赤	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	19	挽物	椀類	0	カツラ	黒×赤	–	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	20	挽物	椀類	0	ケヤキ	赤×赤	黒	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1褐1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	21	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	22	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	–	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	23	挽物	椀類	0.0625	トチノキ	黒×赤	–	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	49	土坑	羽柴	24	挽物	椀類	0	ケヤキ	赤×黒	–	Fe Hg	Fe	赤1炭1	褐1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	50	土坑	羽柴	1	挽物	椀蓋	1	トチノキ	黒×赤	黄	Fe As	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	50	土坑	羽柴	2	挽物	汁椀	1	ケヤキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe Hg	色1褐1黒1サビ1黒1サビ1	赤1サビ1	鉱物系下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	50	土坑	羽柴	5	挽物	飯椀	1	モクレン属	黒×赤	赤	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	底部釘書きか
Ⅰa	1610～1630年代前半	50	土坑	羽柴	3	挽物	椀蓋or皿	1	トチノキ	黒×赤	赤	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	50	土坑	羽柴	4	挽物	汁椀	1	ブナ属	黒×赤	–	–	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	底部釘書きか
Ⅰa	1610～1630年代前半	54	土坑	羽柴	1	挽物	椀蓋	1	ブナ属	赤×赤	–	Fe	Fe	赤1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	54	土坑	羽柴	2	挽物	汁椀or椀蓋	1	トチノキ	黒×赤	赤	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	55	土坑	羽柴	1	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤・黄	Fe Hg As	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	

有楽町二丁目遺跡

時期	年代	遺構番号	遺構性格		遺物番号	木工技術別分類	器種	推定個体数	樹種	塗り色（外面×内面）	文様色	主な検出元素（外面）	主な検出元素（内面）	塗膜構造（外面）	塗膜構造（内面）	下地材	備考
Ⅰa	1610～1630年代前半	61	土坑	羽柴	2	挽物	汁椀	1	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	61	土坑	羽柴	3	挽物	飯椀	1	ブナ属	不明	-	-	Fe	色1掲1炭1	赤1掲1炭1	炭粉洗下地	炭化、底部釘書きか
Ⅰa	1610～1630年代前半	61	土坑	羽柴	4	挽物	汁椀	1	トチノキ	黒×赤	-	-	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	61	土坑	羽柴	5	挽物	汁椀	1	トチノキ	黒×赤	-	-	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	61	土坑	羽柴	6	挽物	飯椀	1	コナラ亜属コナラ節	不明	-	Fe	Fe	掲1炭1	赤1掲1炭1	炭粉洗下地	炭化
Ⅰa	1610～1630年代前半	61	土坑	羽柴	7	挽物	汁椀	1	トチノキ	黒×赤	-	-	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	61	土坑	羽柴	8	挽物	汁椀	1	ブナ属	赤×赤	-	Fe	Fe	赤1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	61	土坑	羽柴	9	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	61	土坑	羽柴	10	挽物	椀蓋	0.1875	トチノキ	黒×赤	赤・黄	Fe As	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	61	土坑	羽柴	11	挽物	椀類	0.1875	モクレン属	黒×赤	-	Fe	Fe Hg	掲1炭1	赤1掲1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	61	土坑	羽柴	12	挽物	平椀	0	ケヤキ	黒×黒	-	Fe	Fe	掲1黒1サビ1	掲1黒1サビ1	鉱物系下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	230	土坑	羽柴	1	挽物	飯椀	1	トチノキ	赤×赤	-	Fe	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	230	土坑	羽柴	2	挽物	汁椀	0	トチノキ	黒×赤	黄	Fe As	Fe As	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	230	土坑	羽柴	3	挽物	飯椀	1	ブナ属	黒×赤	-	Fe	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	230	土坑	羽柴	4	挽物	椀蓋	1	トチノキ	黒×赤	-	Fe	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	230	土坑	羽柴	5	挽物	椀類	0.0625	トチノキ	黒×赤	-	Fe As	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	230	土坑	羽柴	6	挽物	汁椀	1	ブナ属	黒×赤	赤	Fe	Fe	色1掲1炭1	赤1掲1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	230	土坑	羽柴	7	挽物	汁椀or椀蓋	1	ブナ属	赤×赤	-	Fe	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	230	土坑	羽柴	8	挽物	飯椀	1	ケヤキ	赤×赤	-	Fe Hg	Fe Hg	色1赤1掲1サビ1	赤1サビ1	鉱物系下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	230	土坑	羽柴	9	挽物	椀類	1	ブナ属	黒×赤	赤	Fe	Fe	赤1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	230	土坑	羽柴	10	挽物	椀類	0	ミズキ	黒×赤	赤	Fe	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	230	土坑	羽柴	11	挽物	椀類	1	トチノキ	黒×赤	-	Fe	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	230	土坑	羽柴	12	挽物	椀類	0.1875	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	230	土坑	羽柴	13	挽物	椀類	0	ブナ属	黒×黒	-	測定不可	Fe	掲2黒1掲1炭1	掲1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	230	土坑	羽柴	14	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	-	Fe	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	230	土坑	羽柴	15	挽物	汁椀	0.4375	トチノキ	黒×赤	-	Fe	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	230	土坑	羽柴	16	挽物	飯椀	1	ミズキ	黒×赤	-	Fe	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	231	土坑	羽柴	1	挽物	飯椀	1	ブナ属	黒×黒	赤	Fe	-	掲1炭1	-	炭粉洗下地	炭化し状態悪
Ⅰa	1610～1630年代前半	231	土坑	羽柴	2	挽物	飯椀	1	ブナ属	不明	-	Fe		掲1炭1	-	炭粉洗下地	炭化
Ⅰa	1610～1630年代前半	231	土坑	羽柴	3	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	231	土坑	羽柴	4	挽物	汁椀	0.0625	トチノキ	黒×赤	黄	Fe As	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	248	土坑	羽柴	1	挽物	飯椀	1	クリ	黒×黒	赤	Fe	-	掲1炭1	-	炭粉洗下地	炭化し状態悪
Ⅰa	1610～1630年代前半	248	土坑	羽柴	2	挽物	飯椀	1	ブナ属	黒×黒	赤	Fe	Fe	赤1掲1炭1	掲1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	248	土坑	羽柴	3	挽物	汁椀	1	ブナ属	黒×黒	赤	Fe	Fe	掲1炭1	赤1掲1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	248	土坑	羽柴	4	挽物	飯椀	1	トチノキ	黒×赤	-	Fe	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	248	土坑	羽柴	5	挽物	飯椀	1	トチノキ	黒×赤	-	Fe	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	248	土坑	羽柴	6	挽物	飯椀	1	トチノキ	黒×赤	-	Fe	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	248	土坑	羽柴	7	挽物	飯椀	1	トチノキ	黒×赤	-	Fe	Fe As	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	底部に傷（釘書きか）
Ⅰa	1610～1630年代前半	248	土坑	羽柴	8	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	黄	Fe As	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	248	土坑	羽柴	9	挽物	汁椀	0.3125	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	248	土坑	羽柴	10	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤・黄	Fe As	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	248	土坑	羽柴	11	挽物	汁椀	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	248	土坑	羽柴	12	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	248	土坑	羽柴	13	挽物	飯椀	0	トチノキ	黒×赤	黒	Fe Hg	Fe Hg	赤1サビ1	赤1サビ1	鉱物系下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	248	土坑	羽柴	14	挽物	飯椀	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	掲1炭1	赤1掲1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	248	土坑	羽柴	15	挽物	飯椀	1	ブナ属	黒×赤	-	Fe	Fe As	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰa	1610～1630年代前半	248	土坑	羽柴	16	挽物	飯椀	1	トチノキ	黒×赤	-	Fe	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	1	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	-	-	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	2	挽物	飯椀	0.4375	トチノキ	黒×赤	赤・黄	Fe Hg	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	3	挽物	飯椀	1	トチノキ	黒×赤	-	Fe	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	4	挽物	飯椀	1	トチノキ	黒×赤	-	Fe	Fe Hg	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	5	挽物	飯椀	1	トチノキ	黒×赤	-	-	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	底部に釘書き
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	6	挽物	飯椀	0.1875	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	7	挽物	飯椀	1	ブナ属	黒×黒	赤	Fe	Fe	-	-	-	炭化
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	8	挽物	飯椀	1	ブナ属	黒×黒	-	-	Fe	-	-	-	状態悪
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	9	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	10	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	-	Fe	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	11	挽物	汁椀	1	ブナ属	黒×赤	-	-	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	胴部に穴あり（直径0.6mm）
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	12	挽物	飯椀	1	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	13	挽物	汁椀or椀蓋	0.4375	トネリコ属シオジ節	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe Hg	色1掲1サビ1炭1	赤1サビ1炭1	鉱物系+炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	14	挽物	椀類	0	ブナ属	黒×赤	-	-	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	15	挽物	飯椀	0.3125	トチノキ	黒×黒	-	-	Fe	-	-	-	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	16	挽物	汁椀	1	トチノキ	黒×赤	赤	Fe	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	17	挽物	汁椀	0.1875	コナラ亜属コナラ節	黒×赤	赤	Fe	Fe	-	-	-	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	18	挽物	汁椀	1	ブナ属	黒×赤	-	-	Fe	-	-	-	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	19	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×黒	赤	Fe Hg	Fe	色1掲1炭1	掲1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	20	挽物	椀類	0	ブナ属	黒×赤	-	-	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	21	挽物	飯椀	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	22	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	23	挽物	飯椀	0	x	黒×赤	-	-	Fe Hg	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	24	挽物	飯椀	1	トチノキ	黒×赤	-	-	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	底部に釘書き
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	25	挽物	椀類	0	ブナ属	黒×黒	赤	Fe	Fe	色1掲1炭1	色1掲1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	26	挽物	飯椀	0.1875	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	27	挽物	椀類	0	トチノキ	赤×赤	黄	Fe As	Fe	赤1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	28	挽物	椀蓋	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	20	ごみ溜り	羽柴	29	挽物	椀類	0	ブナ属	黒×赤	-	Fe	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	110	溝状遺構	井伊	1	挽物	汁椀	1	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	110	溝状遺構	井伊	2	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤	Hg	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	110	溝状遺構	井伊	3	挽物	椀蓋	1	トチノキ	黒×赤	赤	Fe	Fe	掲1炭1	-	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	110	溝状遺構	井伊	4	挽物	汁椀	0.4375	トチノキ	黒×赤	-	-	Fe	-	-	-	
Ⅰb	1630後半～1640年代	110	溝状遺構	井伊	5	挽物	汁椀	0.4375	ブナ属	黒×赤	-	Fe	Fe	-	-	-	
Ⅰb	1630後半～1640年代	110	溝状遺構	井伊	6	挽物	椀類	0	コナラ亜属コナラ節	黒×赤	赤	Fe	Fe	-	赤1掲1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	110	溝状遺構	井伊	7	挽物	椀類	1	トチノキ	黒×赤	-	-	Fe	掲1炭1	赤1掲1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	110	溝状遺構	井伊	8	挽物	汁椀	1	ブナ属	黒×赤	-	-	Fe	掲1炭1	赤1掲1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	110	溝状遺構	井伊	9	挽物	椀蓋	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	110	溝状遺構	井伊	10	挽物	飯椀	0	ブナ属	黒×赤	-	Fe	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	110	溝状遺構	井伊	11	挽物	椀蓋	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe	Fe	赤1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	113	S113系溝	屋敷境	1	挽物	汁椀	1	トチノキ	黒×赤	赤・黄	Fe Hg As	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	123	溝状遺構	井伊	1	挽物	汁椀	1	トチノキ	黒×赤	赤	Fe	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	204	S113系溝	屋敷境	1	挽物	不明	1	トチノキ	黒×赤	-	-	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	204	S113系溝	屋敷境	2	挽物	不明	1	カエデ属	黒×赤	-	Fe	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	204	S113系溝	屋敷境	3	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	204	S113系溝	屋敷境	4	挽物	汁椀	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe	Fe	色1掲1炭1	赤1掲1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	204	S113系溝	屋敷境	5	挽物	汁椀	0.1875	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	204	S113系溝	屋敷境	6	挽物	平椀	0	ケヤキ	黒×黒	-	Fe	Fe	色1掲1黒1サビ1	色1掲1黒1サビ1	鉱物系下地	かつらあり
Ⅰb	1630後半～1640年代	204	S113系溝	屋敷境	7	挽物	飯椀	1	ケヤキ	黒×黒	-	Fe	Fe	色1掲1黒1サビ1	色1掲1黒1サビ1	鉱物系下地	
Ⅰb	1630後半～1640年代	204	S113系溝	屋敷境	8	挽物	汁椀or椀蓋	1	ブナ属	赤×赤	-	Fe	Fe	赤1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅱ	17世紀前葉	24	下水遺構	羽柴・堀	1	挽物	汁椀or椀蓋	0.3125	ブナ属	黒×黒	-	Fe	Fe	掲1炭1	-	炭粉洗下地	
Ⅱ	17世紀前葉	24	下水遺構	羽柴・堀	2	挽物	不明	1	ブナ属	黒×赤	-	Fe	Fe	色1掲1サビ1炭1	赤1サビ1炭1	鉱物系+炭粉洗下地	
Ⅱ	17世紀前葉	24	下水遺構	羽柴・堀	3	挽物	椀蓋	0.4375	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅱ	17世紀前葉	29	上水遺構	羽柴・堀	1	挽物	汁椀or椀蓋	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅱ	17世紀前葉	29	上水遺構	羽柴・堀	2	挽物	汁椀	0.1875	クリ	黒×赤	赤・黄	Fe Hg	Fe Hg	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅱ	17世紀前葉	29	上水遺構	羽柴・堀	3	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe Hg	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅱ	17世紀前葉	29	上水遺構	羽柴・堀	4	挽物	椀類	0	ケヤキ	黒×赤	-	Fe	Fe Hg	掲1黒1サビ1	赤1掲1サビ1	鉱物系下地	
Ⅱb	1650年代後半	250	土坑	堀	1	挽物	飯椀	0.4375	ブナ属	赤×赤	-	Fe As	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅱb	1650年代後半	250	土坑	堀	2	挽物	飯椀	1	コナラ亜属コナラ節	不明	赤	Fe	-	掲1炭1	-	炭粉洗下地	炭化
Ⅱb	1650年代後半	250	土坑	堀	3	挽物	椀蓋	1	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅱb	1650年代後半	250	土坑	堀	4	挽物	椀蓋	0.1875	トチノキ	黒×赤	赤	Fe	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅱc	1650～1660年代	7	上水遺構	堀	1	挽物	椀類	0	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1掲1炭1	赤1掲1炭1	炭粉洗下地	
Ⅱc	1650～1660年代	43	土坑	井伊	1	挽物	飯椀	0.4375	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅱc	1650～1660年代	43	土坑	井伊	2	挽物	汁椀	0.4375	ブナ属	黒×赤	-	Fe	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅱc	1650～1660年代	43	土坑	井伊	3	挽物	汁椀	0.1875	モクレン属	黒×赤	-	Fe	Fe	掲1炭1	赤1掲1炭1	炭粉洗下地	
Ⅱc	1650～1660年代	43	土坑	井伊	4	挽物	汁椀	1	トチノキ	黒×赤	赤・黄	Fe	Fe	色1掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	
Ⅱc	17世紀前葉～中葉	253	土坑	堀	1	挽物	飯椀	1	ブナ属	黒×黒	-	Fe	Fe	掲1炭1	掲1炭1	炭粉洗下地	
Ⅱd	1650～1670年代	232	上水遺構	堀	1	挽物	汁椀or椀蓋	0.1875	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	掲1炭1	赤1炭1	炭粉洗下地	

※本論文で扱った項目のみ一覧表にした。その他の項目については引用文献に挙げた 後藤ら2010 を参照されたい。

紀尾井町遺跡Ⅱ

時期	年代	遺構番号	遺構性格		遺物番号	木工技術別分類	器種	推定個体数	樹種	塗り色（外面×内面）	文様色	主な検出元素（外面）	主な検出元素（内面）	塗膜構造（外面）	塗膜構造（内面）	下地材	備考
Ⅰa	17世紀中葉	106	土坑	管沼	2	挽物	平椀	－	トチノキ	黒×赤	赤・黄・銀	Fe As Ag	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	17世紀中葉	106	土坑	管沼	3	挽物	椀蓋	－	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	17世紀中葉	106	土坑	管沼	4	曲物	櫃蓋	－	ヒノキ	黒	-	Fe	Fe	褐1柿渋1	-	なし	
Ⅰa	17世紀中葉	106	土坑	管沼	5	挽物	飯椀	－	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe Hg	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	赤色漆（内面）から微量のAs
Ⅰa	17世紀中葉	106	土坑	管沼	6	挽物	汁椀	－	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe Hg	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	17世紀中葉	106	土坑	管沼	7	板物	舘	－	ヒノキ	黒	-	Fe	Fe	褐1柿渋1	-	なし	
Ⅰa	17世紀中葉	106	土坑	管沼	8	挽物	椀蓋	－	カツラ	黒×赤	-	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	17世紀中葉	106	土坑	管沼	9	挽物	飯椀	－	コナラ属	黒×赤	-	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	17世紀中葉	106	土坑	管沼	10	挽物	椀蓋	－	ブナ属	黒×赤	赤・黄・金	Fe As Au	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰa	17世紀中葉	106	土坑	管沼	11	刳物	壺杓子	－	ヒノキ	赤	-	Fe Hg	Fe	赤1サビ2	-	鉱物系下地	
Ⅰa	17世紀中葉	106	土坑	管沼	12	曲物	櫃蓋	－	ヒノキ	黒	-	Fe	Fe	褐1柿渋1	-	なし	黒色漆（外面）から微量のAs
Ⅰa	17世紀中葉	106上層	盛土	管沼	1	挽物	椀蓋	－	ケヤキ	黒×赤	-	Fe	Fe Hg	褐1黒1サビ1	赤1サビ1	鉱物系下地	黒色漆（外面）から微量のHg
Ⅰa	17世紀中葉	106上層	盛土	管沼	2	挽物	蓋類	－	ブナ属	黒×赤	金	Fe As Au	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰb	17世紀後葉	72	下水溝	管沼	1	挽物	椀蓋	－	トチノキ	黒×赤	-	Fe Hg	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰb	17世紀後葉	72	下水溝	管沼	2	挽物	汁椀	－	トチノキ	黒×赤	赤	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	赤色漆（文様）から微量のAs
－	17世紀代	B区じ-2 B区じ½	盛土	管沼	1	挽物	腰高	－	モクレン属	黒×赤	赤	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	赤色漆（文様）から微量のAs
－	17世紀代	B区じ-2 B区じ½	盛土	管沼	2	挽物	汁椀	－	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
－	17世紀代	B区じ-2 B区じ½	盛土	管沼	3	挽物	飯椀	－	トチノキ	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
－	17世紀代	トレンチ10	盛土	管沼	1	挽物	腰高	－	カツラ	黒×赤	赤	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	赤色漆（文様）から微量のAs
－	17世紀代	トレンチ10	盛土	管沼	1	挽物	皿	－	カツラ	黒	-	Fe	Fe	褐1黒1サビ1	褐1黒1サビ1	鉱物系下地	黒色漆（外面）から微量のAs

紀尾井町遺跡

時期	年代	遺構番号	遺構性格		遺物番号	木工技術別分類	器種	推定個体数	樹種	塗り色（外面×内面）	文様色	主な検出元素（外面）	主な検出元素（内面）	塗膜構造（外面）	塗膜構造（内面）	下地材	備考
Ⅰ	1640～60年代	37	井戸	本多	1	挽物	椀蓋	－	－	黒×赤	赤	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	木樋南一括(S35扱い)の注記あり
Ⅰ	17世紀前半～1660年代	35	廃棄土坑	屋敷境	1	挽物	椀類	－	－	黒×赤	赤	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰ	17世紀前半～1660年代	35	廃棄土坑	屋敷境	2	挽物	汁椀	－	－	黒×赤	-	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰ	17世紀前半～1660年代	35	廃棄土坑	屋敷境	3	挽物	椀蓋	－	－	黒×赤	赤	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰ	17世紀前半～1660年代	35	廃棄土坑	屋敷境	4	挽物	椀蓋or椀	－	－	黒×赤	赤	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰ	17世紀前半～1660年代	35	廃棄土坑	屋敷境	5	挽物	椀類	－	－	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰ	17世紀前半～1660年代	35	廃棄土坑	屋敷境	6	挽物	椀類	－	－	黒×赤	銀	Fe Ag As	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰ	17世紀前半～1660年代	35	廃棄土坑	屋敷境	7	挽物	椀蓋	－	－	黒×赤	赤	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰ	17世紀前半～1660年代	35	廃棄土坑	屋敷境	8	挽物	椀類	－	－	黒×赤	-	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰ	17世紀前半～1660年代	35	廃棄土坑	屋敷境	9	挽物	飯椀	－	－	黒×赤	-	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰ	17世紀前半～1660年代	35	廃棄土坑	屋敷境	10	挽物	椀類	－	－	黒×赤	赤	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰ	17世紀前半～1660年代	35	廃棄土坑	屋敷境	11	挽物	椀蓋	－	－	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰ	17世紀前半～1660年代	35	廃棄土坑	屋敷境	12	挽物	飯椀	－	－	黒×赤	-	Fe	Fe	褐1炭1	赤1褐1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰ	17世紀前半～1660年代	35	廃棄土坑	屋敷境	13	挽物	椀類	－	－	黒×赤	-	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰ	17世紀前半～1660年代	35	廃棄土坑	屋敷境	14	挽物	椀類	－	－	黒×赤	-	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰ	17世紀前半～1660年代	35	廃棄土坑	屋敷境	15	挽物	汁椀	－	－	黒×赤	赤・黄	Fe As	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰ	17世紀前半～1660年代	35	廃棄土坑	屋敷境	16	挽物	飯椀	－	－	黒×赤	-	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰ	17世紀前半～1660年代	35	廃棄土坑	屋敷境	17	挽物	飯椀	－	－	黒×赤	-	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰ	17世紀前半～1660年代	35	廃棄土坑	屋敷境	18	挽物	汁椀	－	－	黒×赤	-	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅰ	17世紀前半～1660年代	35	廃棄土坑	屋敷境	19	挽物	飯椀	－	－	黒×赤	-	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅱ	17世紀末～18世紀初頭	46	地下構造物遺構	麹町部	1	挽物	椀蓋or汁椀	－	－	黒×赤	赤	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
不明	不明	木樋北	木樋	－	1	挽物	椀類	－	－	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
不明	不明	230	不明	－	1	不明	塗膜片のみ	－	－	不明	-	Fe	-	赤2サビ1赤4サビ1	-	炭粉渋下地	
不明	不明	遺構外	－	－	1	挽物	皿	－	－	黒×赤	赤	Fe Hg	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	鉱物系下地	

尾張藩麹町邸跡

時期	年代	遺構番号	遺構性格		遺物番号	木工技術別分類	器種	推定個体数	樹種	塗り色（外面×内面）	文様色	主な検出元素（外面）	主な検出元素（内面）	塗膜構造（外面）	塗膜構造（内面）	下地材	備考
Ⅱ	1680後半～1700年代	303	地下室	麹町部	1	挽物	椀蓋	－	－	黒×赤	黄	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅱ	1680後半～1700年代	303	地下室	麹町部	2	挽物	椀類	－	－	黒×赤	黄	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅱ	1680後半～1700年代	303	地下室	麹町部	3	挽物	椀類	－	－	赤×赤	-	Fe	Fe	赤1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	S314の注記あり
Ⅱ	1680後半～1700年代	303	地下室	麹町部	4	挽物	椀類	－	－	黒×赤	黄	Fe	Fe	色1褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	S314の注記あり
Ⅵ	1877年前後	231	漬状遺構	麹町部	1	挽物	椀類	－	－	赤×赤	-	Fe Hg	Fe Hg	赤1褐1赤1炭1	赤2炭1	炭粉渋下地	
Ⅵ	1877年前後	231	漬状遺構	麹町部	1	挽物	椀蓋	－	－	赤×赤	-	Fe Hg	Fe	赤1サビ1	赤1サビ1	炭粉渋下地	
Ⅵ	1877年前後	231	漬状遺構	麹町部	1	挽物	椀類	－	－	黒×赤	-	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
Ⅵ	1877年前後	231	漬状遺構	麹町部	1	挽物	椀類	－	－	黒×赤	-	Fe	Fe	褐1炭1	赤1炭1	炭粉渋下地	
不明	不明	320	不明	麹町部	1	挽物	椀蓋	－	－	黒×赤	黄	Fe As	Fe Hg	色1褐1黒1サビ1	赤1サビ1	鉱物系下地	
不明	不明	不明	不明	－	1	挽物	平椀	－	－	黒×黒	-	Fe	Fe	褐1炭1	褐1炭1	炭粉渋下地	

第 3 章　町屋遺跡から出土した漆製品の材質・製作技法

はじめに

近世都市江戸は将軍の居住する江戸城を中心に、武家地、町人地、寺社地で構成された城下町であった。町人地を構成する基礎的な単位は町であり、その町を構成する基本的な単位は町屋敷である。町屋敷とは、街路に面して分割された土地と、そこに建てられた建家をあわせたものをさす（杉森 2001)。一般に、表側には主屋である町屋が、裏側には土蔵などの付属建物や長屋などが建てられ、商人や職人の営業と生活の場であった。

徳川家康の江戸入府とともに町人地は本格的に造成され、江戸の中心部に位置する日本橋などの町は発展した。一方、江戸の周縁部に位置する赤坂、麻布、四谷、市谷、牛込、小石川、浅草、本所、深川などの町は明暦 3 年（1657）の明暦の大火後の市街地の拡大により形成された(渋谷 2001)。

近世都市江戸の範囲、いわゆる御府内の面積の 69%が武家地であり（内藤 1966)、近世江戸遺跡の考古学的調査の対象の多くは武家屋敷である。町屋などが営まれた町人地の面積は 16%であり、町屋遺跡の発掘調査事例も武家屋敷遺跡より少ない。本章では、江戸の周縁部に位置する町屋遺跡であり、且つ近接した東京都新宿区若葉三丁目遺跡 3 次調査、南元町遺跡 3 次調査出土漆製品の材質・製作技法の文化財科学的な分析をおこない、2 遺跡の漆製品の共通点と差異を検証してみたい。

1 漆製品出土遺跡の概要

分析資料は、東京都新宿区若葉三丁目遺跡 3 次調査（以下、若葉三丁目遺跡Ⅲとする）出土の漆製品 109 点、新宿区南元町遺跡 3 次調査（以下、南元町遺跡Ⅲとする）出土の漆製品 148 点である（附表 3-1 分析資料一覧表)。

(1) 若葉三丁目遺跡Ⅲ

東京都新宿区の南東部に位置し、近世には鮫河橋谷町と呼ばれていた地域である。元和年間（1615～1623）に開発された新田を寛永 13 年（1636）に盛土をし、百姓町屋が起立した。寛文 4 年（1664）に伊賀者が大縄給地として拝領したが、拝領地を町人に貸すことが認められた拝領町屋となり、幕末まで存在した。街区は東西に長い短冊状の敷地に区割りされる。短冊状の敷地の中央に路地を設け、土地を 2 分割し、道路から約 7～8 間（13～15m）は店舗や土蔵などの建物が建てられる表店空間、裏手空間には長屋建物が高密度で建

てられ、敷地ごとに井戸や厠遺構が構築される共用空間が確認された。漆製品の出土は盛土からが多く、軟弱な地盤を改良するための盛土に塵芥を混入させたことによると推測される。盛土に用いられた遺物は遺跡周辺の地域から短時間で排出されたとは考え難く、仮置き（溜め置き・ストック）されていたと考えられる。盛土造成は最低でも 5 回以上おこなわれ、5 面盛土は自然堆積層直上に堆積することから、百姓町屋あるいは伊賀者拝領町屋の成立を契機にするものと推測される。3･4 面盛土は伊賀者拝領町屋の時期に該当する。火災などの片付けによる盛土の嵩上げの痕跡は認められておらず､その契機は不明である。1・2 面盛土は近代以降の盛土である（加藤建設株式会社文化財調査部 2016）。分析資料は 3～5 面盛土から出土したものが 78 点、遺構から出土したものが 30 点、表土採取が 1 点である。遺構から出土した遺物も盛土と同様に、いずれも屋敷の引き払いや火災の片付けなどの一括廃棄ではなく「日常」的な廃棄によるものである。各遺構からの出土点数が少ないため、遺構性格ごとの比較は困難である。

（2）南元町遺跡Ⅲ

東京都新宿区の南東部に位置し、近世には元鮫河橋仲町、元鮫河橋表町と呼ばれた地域である。側溝を伴った道路と街区を仕切る大下水が検出された。道路面は町屋造成に関わる盛土であり、道路面から出土した遺物は路面の嵩上げのため他所から運ばれた土に混入したものである。道路面と街区の生活面の嵩上げは必ずしも一致していない。18 世紀前葉の道路面、街区 3 の 19 世紀前葉～後葉に構築されたごみ穴には和歌山藩赤坂邸に由来する遺物が含まれていた。和歌山藩赤坂邸（現 赤坂御用地）は本遺跡の東に道路を挟んで接している。和歌山藩赤坂邸は文政元年（1818）、天保 6 年（1835）に焼失しており、火災の片付けや新たな普請により藩邸のごみが町屋街区の一部に廃棄されたと考えられている（国際文化財株式会社 2015）。分析資料は道路、道路と街区の地境や土留めなどの盛土から出土したものが 40 点、遺構から出土したものが 104 点（うち遺構性格不明 11 点）、調査区一括採取が 1 点、表土採取が 3 点である。遺構出土の遺物の多くがごみ穴遺構に由来にする。これらのごみ穴遺構は、道路や街区に構築されたものであり、「日常」的な廃棄と考えられる。ただし、41 号遺構に廃棄された和歌山藩邸関連遺物は藩邸の火災の片付けなど「非日常」的な廃棄と考えられる。41 号遺構は出土点数が少ないため、遺物の傾向に差異が認められなかった。また、各遺構からの出土点数は少なく、遺構性格ごとの比較は困難である。

以上のように、2遺跡において、「日常」的な廃棄が主体であり、盛土出土資料、遺構出土資料ともに盛土や遺構性格が強く反映されないと判断した。したがって、分析する漆製品資料は遺跡一括資料とし、遺跡全体の傾向を示すものとする。各遺跡の時期別の傾向は4節で後述する。

2 漆製品の材質・製作技法の分析方法

漆製品の製作は、①原木から木材を調整し成形する木地製作、②木地に下地および上塗りをおこなう髹漆、③漆絵や蒔絵などを施す加飾の工程からなる。考古学的な形態などの観察をおこなった後、①を明らかにするため樹種同定、②③を明らかにするため蛍光X線分析（定性分析）による色漆の使用顔料の同定、クロスセクション観察による塗膜断面の構造観察をおこなった。なお、樹種同定は明治大学黒耀石研究センター客員研究員能城修一氏の指導のもと実施し、既刊の発掘調査報告書に遺跡全般の出土材の同定結果を報告している（能城ら2015;能城・都築2016)。本章では、漆製品に使用された樹種を抽出し、②③の分析データを交えて考察する。

（1）樹種同定

出土木材から直接、カミソリを用いて横断面、接線断面、放射断面の切片を切り取り、ガムクロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合物）で封入しプレパラートを作成した後、光学顕微鏡下で観察をおこなった。

（2）蛍光X線分析（定性分析）

使用装置は、微小部エネルギー分散型蛍光X線分析装置（日立ハイテクサイエンス社製SEA5120S）である。分析条件は、管電圧:45kV、管電流:8μA、測定時間:100秒、コリメータ径:1.8㎜、試料室雰囲気:大気である。

（3）クロスセクション観察

採取塗膜片を不飽和ポリエステル樹脂（昭和電工（旧昭和高分子）社製リゴラック）で包埋し、耐水研磨紙＃1500・＃1000、ラッピングフィルム9μm、アルミナ懸濁液3.0μm・0.1μmの順に研磨を行い、薄片プレパラートを作成した後、金属顕微鏡(Olympus社製GX51)下で観察をおこなった。

3 漆製品の材質・製作技法の分析結果

（1）樹種同定

【若葉三丁目遺跡Ⅲ】

確認された樹種はヒノキ 32 点、ブナ属 23 点、トチノキ 23 点、サワラ 4 点、アスナロ 3 点、トウヒ属 3 点、サクラ属 3 点、カツラ属 3 点、スギ 2 点、モクレン属 2 点、マツ属単維管束亜属 1 点、マツ属複維管束亜属 1 点、モミ属 1 点、アサガラ属 1 点、キリ 1 点、アカメガシワ 1 点、クリ 1 点、イスノキ 1 点、タケ亜科 1 点、不明（採取不可もしくは採取時の状態が悪い）2 点である（能城・都築 2016）。

【南元町遺跡Ⅲ】

確認された樹種はトチノキ 42 点、ヒノキ 35 点、ブナ属 27 点、イスノキ 8 点、アスナロ 7 点、ケヤキ 5 点、タケ亜科 4 点、スギ 3 点、カツラ属 3 点、クリ 3 点、ミズキ 2 点、カエデ属 2 点、エゴノキ属 1 点、モクレン属 1 点、単子葉 1 点、不明（採取不可もしくは採取時の状態が悪い）4 点である（能城ら 2015）。

以上の結果から、樹種と成形方法と後述する髹漆技法の関係性を考察するため、沢口悟一の分類（沢口 1966）をもとに、①挽物…木材を轆轤などで回転させながら刃物で削り、成形する同心円状の製品、②板物…木材を製材し板とし、組み立てて成形する製品、③曲物…木材を薄く削り、曲げて器物の外側を作り、底板と甲板を付けて成形する筒状の製品。さらに、成田寿一郎の分類（成田 1996a, b）をもとに、④箍物…桶、樽類の製品、⑤その他…刳物、彫物の製品とし木工技術別に分類をおこなった。

若葉三丁目遺跡Ⅲにおいては、挽物 57 点（52%）、板物 36 点（33%）、曲物 8 点（7%）、箍物 3 点（3%）、その他 5 点（5%）であった。南元町遺跡Ⅲでは、漆工具 3 点を除き、挽物 88 点（61%）、板物 23 点（16%）、曲物 13 点（9%）、箍物 3 点（2%）、その他 18 点（12%）であった。木工技術別分類にみた割合を比較すると、「挽物」は南元町遺跡Ⅲがやや高い。「板物」は若葉三丁目遺跡Ⅲが高く、南元町遺跡Ⅲの約 2 倍である。「曲物」、「箍物」は大差がない。「その他」は南元町遺跡Ⅲが高く、若葉三丁目遺跡Ⅲの約 2 倍である。表 3-1 は樹種別に木工技術別分類をまとめたものである。

上位 3 種（トチノキ、ブナ属、ヒノキ）とそれぞれが総出土点数に占める割合は 2 遺跡で大差がない。トチノキ、ブナ属は「挽物」に、ヒノキは「板物」、「曲物」に主に利用され、木材の加工技術に適した用材選択がなされていることがわかる。

（2）蛍光 X 線分析（定性分析）

【若葉三丁目遺跡Ⅲ】

漆絵、蒔絵などの加飾がある資料は 24 点あり、加飾率は 22%である（表 3-2）。赤色漆の使用顔料は、Fe が検出されベンガラ（第二酸化鉄 Fe_2O_3）、Hg が検出され水銀朱（硫化水銀 HgS）と判断される。黄色漆の使用顔料は、As が検出され石黄（硫化ヒ素 As_2S_3）と判断される。蒔絵には、Au、Ag、Sn、Cu が検出され金、銀、錫、銅と判断される（図 3-1）。いずれも地蒔きではなく、文様部に蒔かれたものである。一つの測定箇所から複数の金属粉が検出される場合があり、混合されて使用されていたことがわかる。また、これらの金属粉とともに As、Hg が検出された。これは後述のクロスセクション観察（図 3-2 ④）にあるように、蒔絵の下絵に赤色漆、黄色漆を用いることに由来する。

器面全体の塗り色に赤、緑色の色漆が使用される資料は 66 点あった。赤色漆の使用顔料は、Fe が検出されベンガラ（第二酸化鉄 Fe_2O_3）、Hg が検出され水銀朱（硫化水銀 HgS）と判断される。緑色漆の使用顔料は、As が検出され石黄（硫化ヒ素 As_2S_3）と判断される。緑色漆は藍などの天然植物染料で青色に着色した漆の中に石黄粉を混入（北野 2005b）して造られる。器面のどちらかに赤色漆が使用される場合、外面が赤色となる場合は水銀朱、内面が赤色となる場合はベンガラの割合が高く、選択的に使い分けをしていると推測される。

【南元町遺跡Ⅲ】

漆絵、箔絵、蒔絵などの加飾がある資料は 53 点あり、加飾率は 37%である（表 3-2）。赤色漆の使用顔料は、Fe が検出されベンガラ（第二酸化鉄 Fe_2O_3）、Hg が検出され水銀朱（硫化水銀 HgS）と判断される。黄色漆、緑色漆の使用顔料は、As が検出され石黄（硫化ヒ素 As_2S_3）と判断される。蒔絵には、Au、Ag、Sn、Cu、Cu＋Zn が検出され金、銀、錫、銅、真鍮と判断される。横櫛 1 点（分析資料番号:南 133）を除き、いずれも地蒔きではなく、文様部に蒔かれたものである。これらも前述のように混合され使用されていたと考えられる。また、若葉三丁目遺跡Ⅲと同様に金属粉とともに下絵の赤色漆、黄色漆に由来する As、Hg が検出された。

器面全体の塗り色に赤、緑色の色漆が使用される資料は 94 点あった赤色漆の使用顔料は、Fe が検出されベンガラ（第二酸化鉄 Fe_2O_3）、Hg が検出され水銀朱（硫化水銀 HgS）と判断される。緑色漆の使用顔料は、As が検出され石黄（硫化ヒ素 As_2S_3）と判断される。器面のどちらかに赤色漆が使用される場合、外面が赤色となる場合は水銀朱、内面が赤色となる場合はベンガラの割合が高く、若葉三丁目遺跡Ⅲと同様の傾向を示す。一方、器面の両面が赤色となる場合は、若葉三丁目遺跡Ⅲよりも水銀朱の使用の割合が高くなっている。

以上の結果から、南元町遺跡Ⅲは全体の加飾率、蒔絵など金属粉や金箔を用いた加飾率も高く、金属粉のバリエーションも多いことがわかった。

赤色漆に使用された水銀朱とベンガラの値段は江戸時代後期頃には約 30 倍の相対価格差がみられ、水銀朱は高価で入手困難のものであった。また、時代を経るごとに水銀朱の使用率が低下し、ベンガラが一般化する（北野 2005a)。蒔絵に関しても、江戸時代後期頃の金対銀相場のレートは 3～4 対 1 とされる。したがって、代用金粉として時代を経るごとに石黄粉、銀粉、錫粉が利用された（北野 2005a)。

2 遺跡でも赤色漆に使用される顔料はベンガラの割合が高い（表 3-2)。また、蒔絵粉は金を単独で使用するよりも混合された金属粉もしくは銀粉、錫粉の使用がみられた。

(3) クロスセクション観察

髹漆において、下地は漆器を堅牢にし、素地の形状を修補整備するために極めて重要であるとされ（沢口 1966)、主に高級品に使用される最も堅牢で最良とされる砥粉・地粉と生漆を用いた漆下地、日用品に使用される簡易で廉価であるが堅牢な炭粉と生渋を用いた渋下地、廉価で堅牢性より外観の体裁を主眼としている砥粉・地粉・胡粉と膠を用いる膠下地がある（沢口 1966)。

ここでは､蛍光 X 線分析結果および顕微鏡下の観察で炭粉を用いたものを炭粉渋下地(附表 3-1 分析資料一覧表では「炭」と表記)、鉱物系の材質を用いたものを鉱物系下地（附表 3-1 分析資料一覧表では「サビ」と表記)、下地を用いず木地に直接漆を塗布した下地なし（附表 3-1 分析資料一覧表では「なし」と表記）の 3 つに大別した。

若葉三丁目遺跡Ⅲにおいて、鉱物系下地 10 点（9%)、炭粉渋下地 71 点（65%)、下地なし 28 点(26%)､南元町遺跡Ⅲにおいて､鉱物系下地 17 点(12%)､炭粉渋下地 80 点(55%)、鉱物系＋炭粉渋下地 4 点（3%)、下地なし 45 点（31%）が確認された。炭粉渋下地の割合が若葉三丁目遺跡Ⅲでやや高いが、いずれの差も 10%以内に収まり 2 遺跡で大きな差はみられなかった。

下地材の他に 2 遺跡に共通する点として、下地の上の漆塗りのほとんどが 1 層もしくは 2 層塗りで漆絵（附表 3-1 分析資料一覧表では赤色漆による漆絵であれば､「赤（装)」と表記)、蒔絵の加飾が施される合計 2～3 層の簡易な構造である。塗りが一番多いものでも 15 層に留まる。なお、目視による観察では器面全体の塗り色を黒としているが、塗膜断面からは黒色顔料の混和はみられず、褐色漆であった（附表 3-1 分析資料一覧表では「褐」

と表記)。また、箔絵や蒔絵の加飾が施されるもの（附表 3-1 分析資料一覧表では金属粉の材質を問わず、「金」と表記）に必ずしも高級品に使用される鉱物系下地が用いられず、炭粉渋下地が使用されていることが多いことがわかった。以下、顕微鏡下で観察された代表的、特徴的な塗り構造の写真を載せて記載する（図 3-2)。

①鉱物系下地（分析資料番号:若 76）…a:上塗りにあたる褐色漆層で、層厚は約 3μm である。B:下地の上に塗布された薄い黒色層で、層厚は 1μm に満たない。c:下地にあたる鉱物系下地層で、層厚は約 15μm である。d:木地の上に施された布着せで、繊維の径は縦方向に約 15μm、横方向に約 35μm である。樹種はヒノキである。

②炭粉渋下地（分析資料番号:南 8）…a:上塗りにあたる緑色漆層で、所々に混和された石黄がみられる。層厚は約 2μm である。b:下地にあたる炭粉渋下地で、層厚は約 4μm である。c:木地にあたる。樹種はブナ属である。

③鉱物系＋炭粉渋下地層（分析資料番号:南 135）…a:上塗りにあたる褐色漆層で、層厚は約 4μm である。b:下地の上に塗布された薄い黒色層で、層厚は 1μm に満たない。c:下地にあたる鉱物系下地層で、層厚は約 4μm である。d:下地にあたる炭粉渋下地で、層厚は約 3μm である。e:木地にあたる。樹種はトチノキである。

④蒔絵（分析資料番号:南 148）…a:蒔絵加飾で、錫粉の厚さは約 0.5μm、横方向は約 2μm である。b:蒔絵の下絵にあたる黄色漆層で、層厚は約 1μm である。黄色顔料は石黄である。c:上塗りにあたる褐色漆層で、層厚は約 5μm である。d:下地にあたる炭粉渋下地で、層厚は約 5μm である。e: 木地にあたる。樹種はトチノキである。

文様の一部を盛上げる技法が用いられ、盛上げの材質はそれぞれ主に炭粉と錫粉であることが観察された。木炭粉末を蒔き、盛上げる炭粉上高蒔絵、炭粉の代わりに焼錫粉を用いる錫上高蒔絵の技法（荒川 1969）を応用したものと推測される。

⑤炭粉上げ（分析資料番号:南 106）a:盛上げ部分の縁に施された赤色漆の漆絵加飾で、赤色顔料は水銀朱である。b:盛上げ部分の縁に施された蒔絵加飾で、金粉の厚さは約 0.3μm、横方向は約 1μm である。c:盛上げ部分の上に塗布された黒色漆層で、層厚は約 1μm である。d:盛上げ部分にあたる。炭粉を主とし、ごく微量の石黄が混和している。層厚は約 3μm である。e:盛上げ部分にあたる。ベンガラを主とし、所々に炭粉が混和している。層の下部に空隙がみられる。層厚は約 1μm である。f:木地の上に塗布された褐色漆層。ごく微量の黒色顔料が混和している。層厚は約 1.5μm である。g:木地にあたる。樹種はイスノキである。

⑥錫上げ（分析資料番号:南 139）a:盛上げ部分の縁に施された金蒔絵で、金粉の厚さは約 0.1μm、横方向は約 1μm である。b:盛上げ部分の上に塗布された黒色漆層。層厚は約 1μm である。c:盛上げ部分にあたる。石黄と炭粉と推測される黒色粉が混和し、層の上部には微量の錫粉が確認できる。層厚は約 1μm である。d:盛上げ部分にあたる。ベンガラを主とし、所々に石黄が混和している。層厚は約 1μm である。e: 盛上げ部分にあたる。c 同様、石黄と炭粉と推測される黒色粉、ごく微量の錫粉が混和している。層厚は約 3μm である。f:盛上げ部分にあたる。 d 同様、ベンガラを主とし、所々石黄が混和している。層厚は約 1μm である。g:資料全体を盛上げるための錫粉の層。層の下部には微量のベンガラが確認できる。錫粉の厚さは約 0.3μm、横方向は約 3μm で、層厚は約 2μm である。h:木地の上に塗布された褐色漆層。層厚は約 1μm である。i:木地にあたる。樹種はイスノキである。
⑦下地なし（分析資料番号:南 55）…a:褐色漆層で、層厚は約 4μm である。b:木地にあたる。樹種はヒノキである。
⑧下地なし（分析資料番号:南 34）…a:茶色層で塗膜の垂直方向に多数の亀裂がはいる。層厚は約 5μm である。b:木地にあたる。樹種はスギである。

4 若葉三丁目遺跡Ⅲと南元町遺跡Ⅲの様相の検討

以上のような分析項目ごとにみる結果では、若葉三丁目遺跡Ⅲと南元町遺跡Ⅲの 2 遺跡で木工技術別分類の組成比以外に大きな差はみられなかった。しかしながら、先行研究において、民俗調査では、近世以降のろくろ挽物である漆器椀・皿・蓋・盃類には広葉樹散孔材もしくは環孔材の靭性がある材が適材とされ（橋本 1979)、出土漆製品の分析において、挽物類には広葉樹の利用が多くトチノキ・ブナ・ケヤキ材の利用頻度が極めて高く、板物類ではヒノキ・スギ・マツなどの針葉樹の利用が一般的であるとされている（北野 2005b)。さらに、ケヤキ材にはサビ下地（本論文では鉱物系下地）に朱や金蒔絵などが使用される優品、ブナ材には炭粉下地（本論文では炭粉渋下地）にベンガラ顔料が使用される一般的な量産品、トチノキやカツラ材には銀・錫蒔絵や石黄が使用されるやや程度の良い品という、樹種と漆塗り構造と漆工材料の間の明らかな相関関係が認められている（北野 2005a)。一方、漆工技術の視点から木地と下地の関係の程度が示されている(沢口 1966)（表 3-3)。

このような先行研究にもとづき、前節で得られた結果を総合的に捉えることで、2 遺跡の漆製品の全体の様相と時期別の様相の違いを検討してみることにしたい。特に木工技術

別分類において 2 遺跡間に相違がみられることから、ここでは、木工技術別分類ごとに器種、樹種、下地、器面の塗り色、加飾をみることにより各属性の関係性を考察する。

まず、2 遺跡の全体の様相を木工技術別分類ごとにみる（表 3-4）と、両遺跡とも「挽物」の出土点数が圧倒的に多く、次いで「板物」が、3 番目に若葉三丁目遺跡Ⅲでは「曲物」、南元町遺跡Ⅲでは「その他」が多い。若葉三丁目遺跡Ⅲの「板物」、南元町遺跡Ⅲの「その他」はそれぞれ器種のバリエーションが多いことがわかる。なかでも南元町遺跡Ⅲの「その他」は横櫛や笄の装身具類の出土点数は他の遺跡と比べて多く、蒔絵加飾率が高いことが特徴的である。また、南元町遺跡Ⅲは漆箆など漆工用具 3 点が出土している。

最も出土点数の多い「挽物」をみると、南元町遺跡Ⅲでは、塗り色の主要なバリエーションである器面が赤一色、黒一色、外面と内面を黒と赤で塗分けているもの全てに鉱物系下地がみられる。ケヤキには鉱物系下地が使用され、器面の塗り色に水銀朱や蒔絵が施されるものが多いことがわかる。特に器面が赤一色の杯においてはその傾向が顕著にみられる。しかし、外面黒色内面赤色のトチノキやブナ属を用いた椀蓋には、主に炭粉渋下地が使用され、箔絵や蒔絵加飾が施されるものがおおよそ半数に及ぶ。つまり、箔絵や蒔絵加飾が施されるものに必ずしも鉱物系下地が用いられず、炭粉渋下地が使用されていることが多いことがわかった。

一方、若葉三丁目遺跡Ⅲでは、器面が赤一色、黒一色のものに鉱物系下地がみられ、黒と赤で塗分けているものは、全て炭粉渋下地である。炭粉渋下地のものにも器面の塗り色に水銀朱が使用されている。外面黒色内面赤色の椀、椀蓋の蒔絵加飾率は、南元町遺跡Ⅲと比較して低いが、蒔絵加飾が施されるものに炭粉渋下地が使用されていることが多い傾向は 2 遺跡で共通していることがわかった。また、杯においては南元町遺跡Ⅲでみられたような樹種や材質の優位性はみられない。

2 番目に出土点数の多い「板物」をみると、特徴として下地がないものが多く、「挽物」に比べて塗り色と下地材の相関は明確ではない。南元町遺跡Ⅲでは、器面が赤一色のものと黒と赤で塗分けているもので鉱物系下地と炭粉渋下地がみられるが、鉱物系下地が占める割合が前者は 25%、後者は 50%である。むしろ、下地なしが 18 点あり「板物」全体の 78%を占める。黒と赤で塗分けているヒノキを用いた膳はいずれも鉱物系下地で、器面の塗り色に水銀朱が使用されており樹種や材質に優位性がみられる。

一方、若葉三丁目遺跡Ⅲでは、器面が黒一色のものと黒と赤で塗分けているもので鉱物系下地と炭粉渋下地がみられるが、両者とも鉱物系下地が占める割合がそれぞれの 20%と

差がない。むしろ、下地なしが 16 点あり「板物」全体の 44%を占める。また、器面の塗り色に水銀朱が使用されているもの、蒔絵加飾が施されるものはみられない。南元町遺跡Ⅲと比べ炭粉渋下地の点数が多く、器種の偏りはみられない。

若葉三丁目遺跡Ⅲで 3 番目に出土点数の多い「曲物」をみると、「板物」と同様に下地なしが多いことが特徴である。器面が黒一色のものが 6 点あり「曲物」全体の 75%を占める。下地なしが 7 点あり「曲物」全体の 88%を占める。その中でも出土点数の多い小型容器、中型容器の 4 点が該当する。器面の塗り色に水銀朱が使用されているもの、蒔絵加飾が施されるものはみられない。なお、南元町遺跡Ⅲでは「曲物」は 4 番目に出土点数が多い。器面が黒一色のものが 10 点あり「曲物」全体の 77%を占める。下地なしが 11 点あり「曲物」全体の 85%を占める。その中でも出土点数の多い小型容器、中型容器の 5 点が該当し、概ね若葉三丁目遺跡Ⅲと同様の傾向がみられる。しかし、器面を黒と赤で塗分けているヒノキを用いた櫃蓋は鉱物系下地で器面の塗り色に水銀朱が使用されている。同じ櫃蓋でも黒一色のアスナロを用いたものは炭粉渋下地であり、樹種や材質に優位性がみられる。

南元町遺跡Ⅲで 3 番目に出土点数の多い「その他」をみると、「板物」、「曲物」と同様に下地なしが多く、下地なしが 13 点あり「その他」全体の 72%を占める。その中の 9 点は横櫛、笄や煙管の装身具類に該当する。さらに、蒔絵加飾が施される 6 点は全て横櫛、笄に該当し、特に横櫛で蒔絵加飾が顕著にみられる。なお、若葉三丁目遺跡Ⅲでは「その他」は 4 番目に出土点数が多い。特段出土点数の多い器種がなく、塗り色と下地材の相関が明確でない。横櫛は 1 点のみであり、白木に下地なしでベンガラ顔料の赤色漆で文様が施され、若葉三丁目遺跡Ⅲとは異なる様相を示す。

このように木工技術別分類ごとにみることで、2 遺跡の差異と共通点が明らかになり、先行研究（北野 2005a）で指摘された漆塗り構造と樹種や漆工材料の相関関係という全体の傾向を捉えつつも、器種ごとのより細かい傾向を把握することができた。

次に、2 遺跡の様相を木工技術別分類ごとに時期別に検討する。2 遺跡には遺物の出土点数のピークがそれぞれ 2 つある。若葉三丁目遺跡Ⅲでは、18 世紀前葉～中葉に帰属する 45 点、18 世紀末～19 世紀前葉に帰属する 28 点でそれぞれ全体の 41%、26%を占める。南元町遺跡Ⅲでは、18 世紀前葉の帰属する 74 点、19 世紀後葉に帰属する 22 点で全体の 51%、16%を占める。ここでは、若葉三丁目遺跡Ⅲ9 点、南元町遺跡Ⅲ15 点と出土点数が少ないが、2 遺跡に共通する 18 世紀後葉の資料、及び上述の出土点数のピークがある若葉三丁目遺跡Ⅲ・18 世紀前葉～中葉、18 世紀末～19 世紀前葉と南元町遺跡Ⅲ・18 世紀前葉、19 世

紀後葉との資料の比較をおこなう。

まず、2 遺跡に共通する 18 世紀後葉の様相（表 3-5）は、木工技術別分類にみると両者とも「挽物」の割合が高く、いずれの差も 10%以内に収まり、器種の数はほぼ同じである。材質･技法面では､鉱物系下地が下地材全体に占める割合は若葉三丁目遺跡Ⅲ11%に対し、南元町遺跡Ⅲ14%である。蒔絵の加飾率は若葉三丁目遺跡Ⅲの 33%に対し、南元町遺跡Ⅲの 36%と南元町遺跡Ⅲのほうが若干高く、器面の塗り色に水銀朱の使用がみられるが、比率として 2 遺跡に大差はない。

次に、各遺跡の出土点数が多い年代の様相を年代順にみる。

南元町遺跡Ⅲの 18 世紀前葉の様相（表 3-6）は、木工技術別分類にみる組成比は「挽物」に次いで「板物」が 22%、「曲物」が 16%といずれも 10%を越え、器種は漆工具を除き、17 種である。材質・技法面では、下地材は鉱物系下地が 12 点（16%）、炭粉渋下地が 32 点（43%）である。器面の塗り色の水銀朱利用や蒔絵の加飾率は 17 点（23%）で、水銀朱の利用が「挽物」だけでなく「板物」、「曲物」までみられる。器種の多さは和歌山藩赤坂邸に由来する遺物が一部に含まれていたことによると考えられるが、いずれも曲物の小型容器や鬢水入れ、箍物の桶・樽類などの優品ではないため、材質・技法面で他の資料と大差がない。

若葉三丁目遺跡Ⅲの 18 世紀前葉～中葉の様相（表 3-7）は、木工技術別分類にみる組成比は「挽物」に次いで「板物」が 44%と全体の半数近くまで及び、器種は 11 種である。下地材は鉱物系下地が 6 点（13%）、炭粉渋下点（58%）である。器面の塗り色の水銀朱使用や蒔絵の加飾率は 6 点（13%）で、「挽物」のみにみられる。いずれも、「挽物」に次いで「板物」が多いが、その組成比が異なる。器面の塗り色の水銀朱使用や蒔絵の加飾が施される器種のバリエーションも南元町遺跡Ⅲの方が多く、加飾率は 10%ほど異なる。

若葉三丁目遺跡Ⅲの 18 世紀末～19 世紀前葉の様相（表 3-8）は、木工技術別分類にみる組成比は「挽物」に次いで「板物」18%で、器種は 7 種である。下地材は鉱物系下地が 1 点（6%）、炭粉渋下地が 23 点（82%）である。器面の塗り色の水銀朱使用や蒔絵の加飾率は 7 点（25%）で、「挽物」のみにみられる。

南元町遺跡Ⅲの 19 世紀後葉の様相（表 3-9）は、木工技術別分類にみる組成比は「挽物」に次いで「その他」が 27%で、器種は 7 種である。下地材は鉱物系下地が 1 点（5%）、炭粉渋下地が 13 点（59%）である。器面の塗り色に水銀朱利用や蒔絵の加飾率は 7 点（32%）で「挽物」と「その他」の横櫛に顕著にみられる。

ここでは、2 遺跡の木工技術別分類にみる組成比が大きく異なる。南元町遺跡Ⅲの「その他」に横櫛を多く含むことから、櫛には下地材を用いることが少ないため全体の炭粉渋下地の割合が下がるが、高い加飾性があるため加飾率が維持されている。

結語

以上のように、2 遺跡間で共通する 18 世紀後葉の様相は大きな差がみられなかったが、これは 18 世紀後葉の資料数が少なかったため、2 遺跡間の様相の違いが遺跡性格に因るか否か明確な差異を読み取ることができなかった可能性がある。むしろ、若干の時代幅があるものの出土点数のピークがある 18 世紀前葉と 18 世紀前葉～中葉、18 世紀末～19 世紀前葉と 19 世紀後葉という近接した時期において様相が異なることから、遺跡性格の違いによるものと考えられる。出土資料においては、木工技術別分類の組成比や加飾率の高さからみられるように各遺跡全体の様相と相関することがわかった。

このように近接する町屋遺跡でも漆製品の様相の相違がみとめられる要因の一つとして、木工技術別分類の差、つまり器種のバリエーションによるものがあったと考えられる。漆製品は、樹種によって木工技術や材質・製作技法の適性が異なる。装飾性が高い櫛のような器種が多いほど、遺跡全体の加飾率は高くなる。従来の樹種同定、蛍光 X 線分析（定性分析）、クロスセクション観察という分析項目のみでは埋没してしまう遺物の情報をどのような器種があるか、木工技術や器種別に材質・製作技法を検討することで、詳細な差異の要因が明らかになり、個々の遺跡出土の漆製品の特徴を捉えることができるのではないかと考えられる。そうした漆製品の特徴は、各遺跡の歴史的背景や居住者の生活につながるものであろう。

最後に、若葉三丁目遺跡Ⅲ・18 世紀前葉～中葉と南元町遺跡Ⅲ・18 世紀前葉の下地材について、鉱物系下地の下地材全体に占める割合がそれぞれ 16%、13%と大差がないのに対し、炭粉渋下地の割合が 43%、58%と 15%ほど差がある。これは、前述したように南元町遺跡Ⅲにおいて木工技術別分類にみる組成比の「曲物」の割合が高いことに起因すると考えられる。

曲物は下地材を使用せず、木地に直接漆を塗布する資料が多いためである。これら曲物に塗布された塗料の中に、黒もしくは茶褐色の漆以外と推定されるものがみられた（附表 3-1 分析資料一覧表では「茶」と表記）。本論文は、顕微鏡下による観察のみであるが、類似する観察事例として、石川県西川島遺跡出土の中世漆器の柿渋下地に淡褐色の層に層向と

垂直方向にクラックがみられるもの（永嶋 1987)、京都市内遺跡出土の中世漆器の塗膜の色調が濃茶褐色で、層向と垂直の亀裂が多数入るもの（岡田 1995）が挙げられる。これらは柿渋と推定されている。柿渋は漆の代用品として使用されてきた（今井 2003)。漆と柿渋の利用の関係性については、今後の課題としたい。

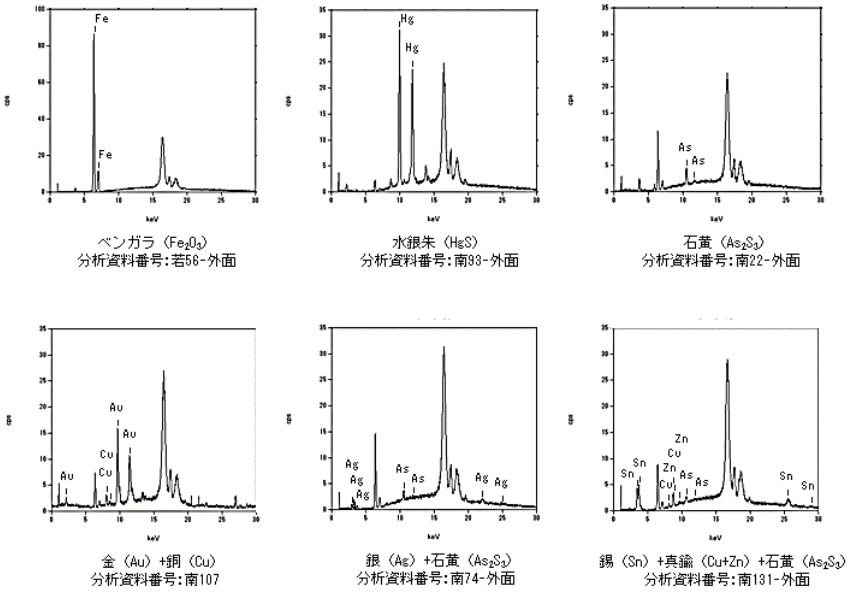

図 3-1 代表的な検出元素のスペクトル

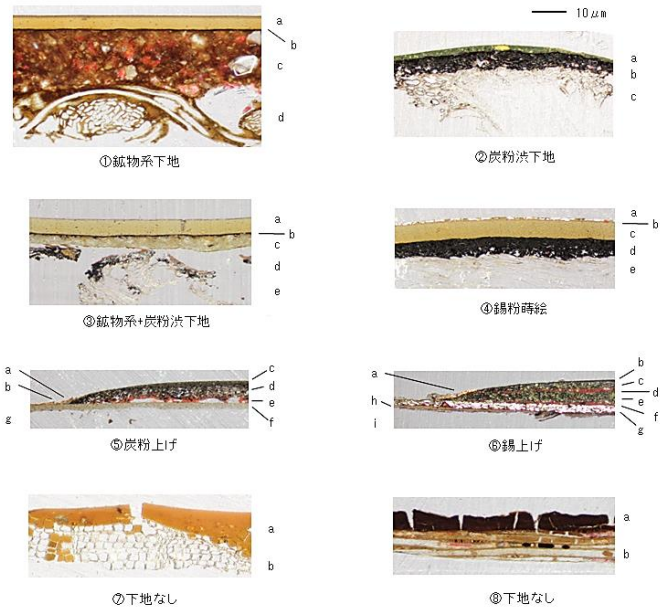

図 3-2 若葉三丁目遺跡Ⅲ、南元町遺跡Ⅲ出土漆製品のクロスセクション

表 3-1 樹種別にみた木工技術別分類

若葉三丁目遺跡Ⅲ

樹種	総点数	木工技術別分類	点数内訳
ヒノキ	32 (29%)	挽物	1
		板物	23
		曲物	5
		指物	2
		その他	1
ブナ属	23 (21%)	挽物	23
トチノキ	23 (21%)	挽物	22
		板物	1
サワラ	4 (4%)	板物	2
		指物	1
		その他	1
カツラ属	3 (3%)	挽物	3
サクラ属	3 (3%)	挽物	3
アスナロ	3 (3%)	板物	3
トウヒ属	3 (3%)	曲物	3

樹種	総点数	木工技術別分類	点数内訳
スギ	2 (2%)	板物	2
モクレン属	2 (2%)	挽物	1
		板物	1
マツ属単維管束亜属	1 (1%)	板物	1
マツ属複維管束亜属	1 (1%)	板物	1
アサガラ属	1 (1%)	挽物	1
アカメガシワ	1 (1%)	挽物	1
モミ属	1 (1%)	板物	1
クリ	1 (1%)	板物	1
キリ	1 (1%)	その他	1
イスノキ	1 (1%)	その他	1
タケ亜科	1 (1%)	その他	1
不明	2 (2%)	挽物	2

南元町遺跡Ⅲ

樹種	総点数	木工技術別分類	点数内訳
トチノキ	42 (28%)	挽物	41
		その他	1
ヒノキ	35 (24%)	板物	20
		曲物	10
		指物	1
		その他	2
		漆工具	2
ブナ属	27 (18%)	挽物	26
		その他	1
イスノキ	8 (5%)	その他	8
アスナロ	7 (5%)	挽物	1
		板物	2
		曲物	2
		指物	1
		漆工具	1

樹種	総点数	木工技術別分類	点数内訳
ケヤキ	5 (3%)	挽物	5
タケ亜科	4 (3%)	その他	4
スギ	3 (2%)	板物	1
		曲物	1
		指物	1
カツラ属	3 (2%)	挽物	3
クリ	3 (2%)	挽物	3
ミズキ	2 (1%)	挽物	2
カエデ属	2 (1%)	挽物	2
エゴノキ属	1 (1%)	挽物	1
モクレン属	1 (1%)	挽物	1
単子葉	1 (1%)	その他	1
不明	4 (3%)	挽物	3
		その他	1

表 3-2 器面の塗り色ごとに加飾・地塗りに使用された色漆、検出元素

若葉三丁目遺跡Ⅲ
加飾箇所

	総点数	検出元素		点数内訳
赤色漆	8 (33%)	Fe		5
		Hg		3
黄色漆	7 (29%)	As		6
		As+Hg		1
蒔絵	9 (38%)	検出元素		点数内訳
		金属粉	下絵	
		Au	-	3
		Au	As	3
		Ag	As	1
		Sn	As+Hg	1
		Sn	As	1
計	24			

※分析資料番号:若46 Cuが微量のためCuを除いた検出元素を用いた

器面全体の塗り色（外×内）

	総点数	測定した塗り色	検出元素	点数内訳
赤のみ	9	赤色漆	Fe	9
赤×赤	9	赤色漆	Fe	7
			Hg	2
黒×赤	41	赤色漆	Fe	36
			Hg	5
赤×黒	2	赤色漆	Fe	1
			Hg+As ※一部、緑色	1
緑×赤	5	緑色漆	As	5
		赤色漆	Fe	4
			Hg	1
計	66			

南元町遺跡Ⅲ
加飾箇所

	総点数	検出元素		点数内訳
赤色漆	12 (23%)	Fe		11
		Hg		1
黄色漆	10 (19%)	As		10
黒色漆	1 (2%)	Fe		1
箔絵・蒔絵	27 (51%)	検出元素		点数内訳
		金属粉	下絵	
		Au	-	4
		Au	Hg	2
		Au	As	3
		Au	Hg+As	1
		Au+Ag	-	1
		Au+Sn	As	1
		Au+Cu+Zn	As	1
		Ag	-	2
		Ag	As	9
		Ag+Cu+Zn	As	1
		Sn	As	1
		Sn+Cu+Zn	As	1
未検出	3 (6%)			
計	53			

※分析資料番号:南14,25,93,106,107,122,139,144,145
Cuが微量のためCuを除いた検出元素を用いた

器面全体の塗り色（外×内）

	総点数	測定した塗り色	検出元素	点数内訳
赤のみ	8	赤色漆	Fe	5
			Hg	3
赤×赤	18	赤色漆	Fe	11
			Hg	7
黒×赤	52	赤色漆	Fe	47
			Hg	4
		黒色漆	As	1
赤×黒	6	赤色漆	Fe	3
			Hg	3
黒/赤	2	赤色漆	Fe	2
黄×赤	1	黄色漆	As	1
		赤色漆	Fe	1
緑×赤	5	緑色漆	As	5
		赤色漆	Fe	5
その他	2			
計	94			

表 3-3 木地と下地の関係（沢口 1966 より作成）

	素地と下地の関係の程度	樹種名	適す下地	備考
挽物用	優良	ケヤキ	漆下地	椀類など高級漆器素地として専用される。摺漆塗木地呂塗に最も適す。
		トチ	漆下地・渋下地	椀、盆、渋下地に適す。漆下地に対して瘠目の出現は少なく、一般に賞用される。
		イタヤ	渋下地	椀類、渋下地に適す。山中漆器に最も多く使用される。
	良	タモ	漆下地	椀類、菓子器、摺漆塗に適す。花塗には漆下地を必要とする。
		クリ	（漆下地）	椀類、目はじき塗などに適す。
		ミズメサクラ	漆下地・渋下地	椀、盆、茶櫃などに使用される。
		セン	漆下地・渋下地	ミズメサクラと同じ。
		ブナ	渋下地	材料の豊富な点において群を抜く。渋下地丸物の普通漆器に多く使用される。
		ホオ	渋下地	椀、盆、飯器類、渋下地に適す。
		カツラ	渋下地	盆、飯器、その他大形挽物に使用される。
	可	ハン	渋下地	椀類、渋下地に適す。
		チシヤ	渋下地	椀類、渋下地に適す。
板物用	優良	ケヤキ	漆下地	摺漆、木地呂塗に適す。木理の美しさゆえ賞用される。
		アテ	漆下地	輪島では板物に専用される。金沢地方では曲物に使用される。
		アスナロ	漆下地	能代では春慶塗に専用される。
		ヒノキ	漆下地	板物素材として理想的。高級漆器素地として古来、専用される。高山春慶塗に使用される。
		イチョウ	漆下地	瘠目の発生が少ない。
		クワ	（漆下地）	専ら摺漆用となす。
	良	サワラ	漆下地	春慶塗に適す。
		キリ	漆下地	摺漆用として趣がある。
		シオジ	（漆下地）	主に摺漆、目はじき塗に適す。木地呂塗となす。
		ホオ	渋下地	渋下地に最も適し、盆、膳、箱など広く使用される。
		カツラ	渋下地	ホオと同じ。
	可	スギ	（漆下地）	膠下地を応用し、琉球漆器にも使用される。
		セン	（漆下地）	シオジに等しいが、品位はやや劣る。
		マツ	渋下地	―

※樹種名は原文（沢口1966）のままとした。
※原文（沢口1966）は「漆下地にも適すること勿論なれば、これを略した」ため、本稿では（ ）で補っている。

表 3-4 木工技術別分類ごとにみる器面の塗り色、下地、樹種、色漆の使用顔料の関係（若葉三丁目遺跡Ⅲ）

若葉三丁目遺跡Ⅲ

挽物		黒×赤	赤×黒	赤×赤			黒×黒		緑×赤		黒	
		炭粉渋下地	炭粉渋下地	鉱物系下地	炭粉渋下地	なし	鉱物系下地	炭粉渋下地	鉱物系下地	炭粉渋下地	炭粉渋下地	
椀	トチノキ	13 (2)			1		1	1				16
	ブナ属	5 (2) (1)						3 (2)		2	1	11
	カツラ属							1				1
	サクラ属	1										1
	アサガラ属	1										1
	モクレン属	1										1
	不明	1										1
椀蓋	トチノキ	4 (1)			2							6
	ブナ属	1			1			2 (1)		2		6
	カツラ属	1										1
	アカメガシワ	1										1
蓋類	ブナ属		1					1				2
杯	ブナ属				2							2
	カツラ属			1								1
	サクラ属								1			1
鉢	ブナ属							2 (1)				2
合子蓋	ヒノキ					1						1
不明	サクラ属	1										1
	不明	1										1
	総計	31	1	1	6	1	1	10	1	4	1	57

曲物		黒	赤		
		なし	炭粉渋下地	なし	
櫃	ヒノキ	1			1
柄杓	ヒノキ	1			1
小型容器	トウヒ属	2			2
	ヒノキ	2		1	3
中型容器	ヒノキ		1		1
	総計	6	1	1	8

箍物		黒		
		炭粉渋下地	なし	
鍋等蓋	ヒノキ	1		1
	サワラ		1	1
桶・樽類	ヒノキ		1	1
	総計	1	2	3

板物		黒×赤			赤×黒	赤×赤	黒			赤		
		鉱物系下地	炭粉渋下地	なし	なし	なし	鉱物系下地	炭粉渋下地	なし	炭粉渋下地	なし	
膳	ヒノキ		2	1		1	1	3	2			10
	アスナロ								1			1
	スギ								1			1
	マツ属単維管束亜属										1	1
	モクレン属		1									1
箱類	ヒノキ		1		1			1				3
鏡箱	ヒノキ								1			1
灯台	アスナロ								1			1
仏具	ヒノキ						1					1
露卯下駄	クリ							1				1
不明	ヒノキ	1	1				2		3	1		8
	アスナロ		1									1
	スギ										1	1
	マツ属複維管束亜属								1			1
	モミ属							1				1
	トチノキ		1									1
	サワラ	1									1	2
	総計	2	7	1	1	1	4	6	10	1	3	36

その他		黒		赤		白木	
		鉱物系下地	炭粉渋下地	炭粉渋下地	なし	なし	
横櫛	イスノキ					1	1
刃物類柄	キリ	1					1
箸	ヒノキ				1		1
	タケ亜科			1			1
不明	サワラ		1				1
	総計	1	1	1	1	1	5

赤字…地塗りに水銀朱が使用される

燈字…蒔絵加飾が施される

表 3-4　続き

南元町遺跡Ⅲ

挽物		黒×赤			赤×黒		赤×赤			黒×黒			黄×赤	緑×赤	茶×茶	
		鉱物系下地	鉱物系+炭粉渋下地	炭粉渋下地	鉱物系下地	炭粉渋下地	鉱物系下地	鉱物系+炭粉渋下地	炭粉渋下地	鉱物系下地	鉱物系+炭粉渋下地	炭粉渋下地	炭粉渋下地	炭粉渋下地	炭粉渋下地	
椀	ケヤキ	1								1						2
	トチノキ		1	17 (3)					3		1	4 (2)			1	27
	ブナ属			7(1) (1)					3			2		4		16
	カツラ属			1												1
	アスナロ			1												1
椀蓋	ケヤキ						1									1
	トチノキ			13(1) (6)												13
	ブナ属			4(2)					1				1	1		7
	カツラ属			1												1
	不明			1				1								2
蓋類	カエデ属			1												1
杯	ケヤキ						1 (1)									1
	ブナ属						1 (1)		2							3
	ミズキ						1									1
	モクレン属						1 (1)									1
	不明						1									1
鉢	トチノキ			1												1
盆	カツラ属										1					1
	ミズキ											1				1
嚢	エゴノキ属				1											1
独楽	カエデ属			1												1
不明	ケヤキ						1									1
	クリ			1		2										3
	総計	1	1	49	1	2	7	1	9	1	2	7	1	5	1	88

板物		黒×赤		赤×黒		赤×赤	黒×黒	赤		黒		
		鉱物系下地	炭粉渋下地	鉱物系下地	なし	なし	なし	鉱物系下地	なし	炭粉渋下地	なし	
膳	ヒノキ	1		1			1				4	7
	アスナロ										1	1
箱類	ヒノキ		1			1		1				3
鏡箱	ヒノキ								1			1
不明	ヒノキ				1				2 (1)	1	5	9
	アスナロ										1	1
	スギ										1	1
	総計	1	1	1	1	1	1	1	3	1	12	23

曲物		赤×黒	黒		赤	
		鉱物系下地	炭粉渋下地	なし	なし	
蓋類	アスナロ			1		1
櫃蓋	ヒノキ	1			1	2
	アスナロ		1			1
鬢水入れ	ヒノキ			1		1
柄杓	ヒノキ			1		1
小型容器	ヒノキ			4	1	5
中型容器	スギ			1		1
不明	ヒノキ			1		1
	総計	1	1	9	2	13

その他		黒			黒/赤		赤	白木	変わり塗	
		鉱物系下地	炭粉渋下地	なし	炭粉渋下地	なし	なし	なし	なし	
横櫛	イスノキ		1	4 (3)			1	1	1	8
笄	トチノキ							1		1
	不明	1								1
煙管羅宇	単子葉			1						1
切匙	ヒノキ			1						1
壺杓子	ヒノキ	1								1
不明	ブナ属								1	1
	タケ亜科		1		1	1	1			4
	総計	2	2	6	1	1	2	2	2	18

箍物		黒		
		鉱物系下地	なし	
鍋蓋類	ヒノキ		1	1
	アスナロ	1		1
桶・樽類	スギ		1	1
	総計	1	2	3

赤字…地塗りに水銀朱が使用される
燈字…蒔絵加飾が施される

表 3-5 若葉三丁目遺跡Ⅲと南元町遺跡Ⅲの 18 世紀後葉の様相

若葉三丁目遺跡Ⅲ			挽物			板物	曲物	
			黒×赤	赤×赤	黒×黒	黒	黒	
			炭粉渋下地			鉱物系下地	なし	
挽物	椀	カツラ属			1			1
		アサガラ属	1					1
	椀蓋	トチノキ	1	1				2
		ブナ属			1			1
	鉢	ブナ属			1			1
板物	膳	ヒノキ				1		1
	鏡箱	ヒノキ					1	1
曲物	小型容器	ヒノキ					1	1
		総計	2	1	3	1	2	9

南元町遺跡Ⅲ			挽物						板物	その他		漆工具	
			黒×赤	赤×赤			黄×赤	緑×赤	黒	黒/赤	黒		
			炭粉渋下地	鉱物系+炭粉渋下地	鉱物系下地	炭粉渋下地	炭粉渋下地	炭粉渋下地	なし	炭粉渋下地	なし		
挽物	椀	トチノキ	2										2
		ブナ属						1					1
	椀蓋	トチノキ	2										2
		ブナ属	1			1	1						3
		不明		1									1
	杯	ブナ属				1 (1)							1
		モクレン属			1 (1)								1
板物	膳	アスナロ							1				1
その他	切匙	ヒノキ									1		1
	不明	タケ亜科								1			1
漆工具	漆箆	ヒノキ										1	1
		総計	5	1	1	2	1	1	1	1	1	1	15

表 3-6 南元町遺跡Ⅲの 18 世紀前葉の様相

南元町遺跡Ⅲ			挽物									板物								曲物			箍物		その他				漆工具	
			黒×赤			赤×黒	赤×赤		黒×黒		緑×赤	黒×赤	赤×黒		赤×赤	黒×黒	黒		赤	赤×黒	黒	赤	黒		黒			赤		
			鉱物系下地	鉱物系+炭粉渋下地	炭粉渋下地	炭粉渋下地	鉱物系下地	炭粉渋下地	鉱物系+炭粉渋下地	炭粉渋下地	炭粉渋下地	鉱物系下地	鉱物系下地	なし	なし	なし	炭粉渋下地	なし	なし	鉱物系下地	なし	なし	鉱物系下地	なし	鉱物系下地	炭粉渋下地	なし	なし		
挽物	椀	ケヤキ	1																											1
		トチノキ		1 (1)	9 (3)			1		2 (1)																				13
		ブナ属			2 (1)			1			2																			5
		カツラ属			1																									1
	椀蓋	ケヤキ					1																							1
		トチノキ			5 (1)																									5
		ブナ属									1																			1
		不明			1																									1
	杯	ケヤキ					1 (1)																							1
		ミズキ					1																							1
		不明					1																							1
	盆	カツラ属							1																					1
		ミズキ								1																				1
	不明	ケヤキ					1																							1
		クリ			1	2																								3
板物	膳	ヒノキ										1	1			1		3												6
	箱類	ヒノキ													1															1
	不明	ヒノキ												1			1	4	2											8
		アスナロ																1												1
		スギ																1												1
曲物	櫃蓋	ヒノキ																		1										1
	蓋類	アスナロ																			1									1
	鬢水入れ	ヒノキ																			2									2
	柄杓	ヒノキ																			1									1
	小型容器	ヒノキ																			3	1								4
	中型容器	スギ																			1									1
箍物	鍋蓋類	ヒノキ																						1						1
		アスナロ																					1							1
	桶・樽類	スギ																						1						1
その他	横櫛	イスノキ																								1				1
	煙管羅宇	単子葉																									1			1
	壺杓子	ヒノキ																							1					1
	不明	タケ亜科																								1		1		2
漆工具	漆箆	ヒノキ																											1	1
	曲物	アスナロ																											1	1
		総計	1	1	19	2	5	2	1	3	3	1	1	1	1	1	1	9	2	1	8	1	1	2	1	2	1	1	2	74

赤字…地塗りに水銀朱が使用される

燈字…蒔絵加飾が施される

表 3-7 若葉三丁目遺跡Ⅲの 18 世紀前葉～中葉の様相

若葉三丁目遺跡Ⅲ			挽物							板物								曲物		箍物	その他		
			黒×赤	赤×黒	赤×赤		黒×黒		緑×赤	黒×赤			赤×赤	黒			赤	黒	赤	黒	黒		
			炭粉渋下地	炭粉渋下地	鉱物系下地	炭粉渋下地	鉱物系下地	炭粉渋下地	鉱物系下地	鉱物系下地	炭粉渋下地	なし	なし	鉱物系下地	炭粉渋下地	なし	なし	なし	なし	炭粉渋下地	鉱物系下地	炭粉渋下地	
挽物	椀	トチノキ	7（1）				1																8
		ブナ属	1					2															3
	椀蓋	トチノキ				1																	1
		ブナ属				1																	1
	蓋類	ブナ属		1				1															2
	杯	カツラ属			1（1）																		1
		サクラ属							1														1
		ブナ属				1																	1
	鉢	ブナ属						1															1
板物	膳	ヒノキ									2	1	1		2	1							7
		モクレン属									1												1
	箱類	ヒノキ													1								1
	露卵下駄	クリ													1								1
	不明	ヒノキ									1			1		3							5
		アスナロ									1												1
		サワラ								1							1						2
		スギ															1						1
		マツ属複維管束亜属														1							1
曲物	小型容器	ヒノキ																1	1				2
		トウヒ属																1					1
箍物	鍋等蓋	ヒノキ																		1		1	2
その他	刃物類柄	キリ																			1		1
		総計	8	1	1	3	1	4	1	1	5	1	1	1	4	5	2	2	1	1	1	1	45

表 3-8 若葉三丁目遺跡Ⅲの 18 世紀末～19 世紀前葉の様相

若葉三丁目遺跡Ⅲ			挽物						板物					箍物	その他	
			黒×赤	赤×赤		黒×黒	緑×赤	黒	黒×赤	黒			赤	黒	赤	
			炭粉渋下地	炭粉渋下地	なし	炭粉渋下地	炭粉渋下地	炭粉渋下地	炭粉渋下地	鉱物系下地	炭粉渋下地	なし	炭粉渋下地	なし	なし	
挽物	椀	トチノキ	3（1）	1		1										5
		ブナ属	4(2)（1）			1	1	1								7
		サクラ属	1													1
		モクレン属	1													1
	椀蓋	トチノキ	1													1
		ブナ属				1										1
		カツラ属	1													1
	杯	ブナ属		1												1
	合子蓋	ヒノキ			1											1
	不明	サクラ属	1													1
		不明	1													1
板物	膳	ヒノキ									1	1				2
	不明	トチノキ							1							1
		ヒノキ								1			1			2
箍物	桶・樽類	ヒノキ												1		1
その他	箸	ヒノキ													1	1
		総計	13	2	1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	28

表 3-9 南元町遺跡Ⅲの 19 世紀後葉の様相

南元町遺跡Ⅲ			挽物				板物	曲物		その他					
			黒×赤	赤×黒	赤×赤	黒×黒	黒	黒		黒	黒/赤	赤	白木	変わり塗	
			炭粉渋下地	鉱物系下地	炭粉渋下地	炭粉渋下地	なし	炭粉渋下地	なし	なし	なし	なし	なし	なし	
挽物	椀	トチノキ	2			1									3
		ブナ属	2		1										3
	椀蓋	トチノキ	3（1）												3
		ブナ属	1												1
		カツラ属	1												1
	蓋類	カエデ属	1												1
	棗	エゴノキ属		1											1
板物	膳	ヒノキ					1								1
曲物	櫃蓋	アスナロ						1							1
	不明	ヒノキ							1						1
その他	横櫛	イスノキ								2（1）		1	1	1	5
	不明	タケ亜科									1				1
		総計	10	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	22

赤字…地塗りに水銀朱が使用される
燈字…蒔絵加飾が施される

附表 3-1 分析資料一覧表

若葉三丁目遺跡Ⅲ

分析資料番号	木工技術別分類	器種	樹種名	木取		地塗り色外×内	文様有無	文様位置	主要な元素（外）	主要な元素（内）	塗膜構造（外）	塗膜構造（内）	下地材	遺構廃絶年代	出土地点	
若1	板物	膳	マツ属単維管束亜属	板目		赤			Fe	-	赤赤木	-	なし	17世紀後葉～末	384	5面遺構
若2	板物	仏具	ヒノキ	割材		黒			Fe	-	褐赤サビ	-	鉱物系下地	17世紀後葉～末	384	5面遺構
若3	その他	不明	サワラ	板目		黒			Fe	-	褐炭木	-	炭粉洪下地	17世紀後葉～末	384	5面遺構
若4	挽物	椀蓋	ブナ属	横木取	板目	黒×赤	有	外・高台内	Fe Hg	Fe	赤（装）褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	17世紀末葉以前	H-5	5面盛土
若5	挽物	椀蓋	アカメガシワ	横木取	柾目	黒×赤	有	外・高台内	Fe As	Fe	金（装）黄褐炭木	赤炭	炭粉洪下地	17世紀末葉以前	H-5	5面盛土
若6	挽物	椀蓋	ブナ属	横木取	板目	緑×赤			Fe As	Fe	緑炭木	赤炭木	炭粉洪下地	17世紀末葉以前	H-5	5面盛土
若7	板物	灯台	アスナロ	柾目		黒			Fe	-	褐炭赤木	-	なし	17世紀末葉以前	一括	5面盛土
若8	挽物	椀蓋	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	17世紀末葉以前	トレンチ2	5面盛土
若9	曲物	柄杓	ヒノキ	柾目		黒			Fe	-	茶木	-	なし	17世紀末葉以前	G-3	5面盛土
若10	挽物	椀	ブナ属	横木取		緑×赤			Fe As	Fe	緑炭木	赤炭木	炭粉洪下地	17世紀末～18世紀中葉	287	5面遺構
若11	板物	箱類	ヒノキ	柾目		黒×赤			Fe As	-	黒緑炭木	赤炭木	炭粉洪下地	17世紀末～18世紀中葉	287	5面遺構
若12	板物	膳	アスナロ	板目		黒			Fe	-	茶木	-	なし	17世紀末～18世紀中葉	381	5面遺構
若13	曲物	櫃	ヒノキ	追柾目		黒			Fe	-	褐木	-	なし	17世紀末～18世紀前葉	380	5面遺構
若14	板物	箱類	ヒノキ	追柾目		赤×黒	有	外	Fe As	Fe	褐黄(装)赤木	褐赤木	なし	18世紀前葉	370	5面遺構
若15	板物	不明	モミ属	追柾目		黒			Fe	-	褐炭木	-	炭粉洪下地	18世紀前葉	379	5面遺構
若16	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤	有	外	Fe	Fe	赤（装）褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	A-4	4面盛土
若17	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤	有	高台内	Fe	Fe	赤（装）褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	C-4	4面盛土
若18	板物	箱類	ヒノキ	柾目		黒			Fe	-	褐炭粉木	-	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	C-4	4面盛土
若19	板物	不明	サワラ	板目		黒×赤			Fe	Fe	褐黒サビ褐黒サビ褐黒サビ褐黒サビ褐黒サビ木	赤サビサビ木	鉱物系下地	18世紀前～中葉	C-4	4面盛土
若20	板物	不明	サワラ	板目		赤			Fe	-	赤木	-	なし	18世紀前～中葉	C-4	4面盛土
若21	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×黒			Fe	Fe	褐褐黒サビ木	褐黒サビ黒サビサビ木	鉱物系下地	18世紀前～中葉	E-4	4面盛土
若22	挽物	椀蓋	トチノキ	横木取	柾目	赤×赤			Fe	Fe	赤炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	E-4	4面盛土
若23	挽物	椀	ブナ属	横木取	柾目	黒×赤	有	外	Fe As	Fe	黄（装）褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	E-3	4面盛土
若24	板物	膳	モクレン属	柾目		黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	E-3	4面盛土
若25	挽物	椀蓋	ブナ属	横木取	板目	赤×赤			Fe	Fe	褐赤赤炭木	赤赤炭木	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	G-4	4面盛土
若26	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	F-6	4面盛土
若27	板物	不明	アスナロ	板目		黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤褐炭木	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	G-10	4面盛土
若28	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	G-3	4面盛土
若29	挽物	杯	ブナ属	横木取	板目	赤×赤	有	内	Fe	Fe Au As	赤炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	G-3	4面盛土
若30	板物	膳	ヒノキ	板目		黒			Fe	-	褐黒サビ褐炭木	-	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	G-3	4面盛土
若31	板物	膳	ヒノキ	柾目		黒			Fe	-	褐赤木	-	なし	18世紀前～中葉	G-3	4面盛土
若32	板物	露卯下駄	クリ	板目		黒			Fe	-	褐炭木	-	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	G-3	4面盛土
若33	板物	不明	ヒノキ	追柾目		黒			Fe	-	褐木	-	なし	18世紀前～中葉	G-3	4面盛土
若34	曲物	小型容器	ヒノキ	板目		黒			Fe	-	褐赤木	-	なし	18世紀前～中葉	G-3	4面盛土
若35	曲物	小型容器	ヒノキ	板目		赤			Fe	-	褐赤木	-	なし	18世紀前～中葉	G-3	4面盛土
若36	挽物	鉢	ブナ属	横木取	板目	黒×黒			Fe	Fe	褐黒サビ褐黒サビ褐黒サビ炭木	褐黒サビ褐黒褐黒サビ炭木	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	G-4	4面盛土
若37	板物	膳	ヒノキ	板目		黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤木	なし	18世紀前～中葉	G-4	4面盛土
若38	挽物	椀	ブナ属	横木取	板目	黒×黒	有	外	Fe Au	Fe	褐炭木	褐炭木	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	G-6	4面盛土
若39	挽物	椀	ブナ属	横木取	板目	黒×黒	有	外	Fe Au	Fe	金（装）褐炭木	褐炭木	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	G-6	4面盛土
若40	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	G-6	4面盛土
若41	挽物	蓋類	ブナ属	横木取	板目	赤×黒			Fe As Hg	Fe	赤赤炭木/緑赤炭木	褐褐炭木	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	G-6	4面盛土
若42	板物	膳	ヒノキ	柾目		赤×赤			Fe	Fe	赤褐赤木	赤褐赤木	なし	18世紀前～中葉	G-6	4面盛土
若43	板物	膳	ヒノキ	追柾目		黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	G-6	4面盛土
若44	板物	不明	ヒノキ	柾目		黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	G-6	4面盛土
若45	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	G-7	4面盛土
若46	挽物	杯	カツラ属	横木取	柾目	赤×赤	有	内	Fe Hg	Fe Hg Au Cu	金（装）赤赤褐サビ木	赤赤サビ	鉱物系下地	18世紀前～中葉	G-9	4面盛土
若47	板物	膳	ヒノキ	板目		黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	G-9	4面盛土
若48	その他	刃物類柄	キリ	板目		黒			Fe	-	褐炭サビ木		鉱物系下地	18世紀前～中葉	G-9	4面盛土
若49	板物	不明	ヒノキ	柾目		黒			Fe	-	褐黒サビサビ木	-	鉱物系下地	18世紀前～中葉	H-4	4面盛土
若50	板物	不明	ヒノキ	柾目		黒			Fe	-	褐赤褐赤木	-	なし	18世紀前～中葉	H-4	4面盛土
若51	籠物	鍋等蓋	ヒノキ	板目		黒			Fe	-	褐黒サビ褐黒褐炭木	-	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	H-4	4面盛土
若52	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤	有	外	Fe As Hg	Fe	金（装）褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	H-5	4面盛土
若53	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤			Fe	Fe Hg	褐炭木	赤褐炭木	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	H-5	4面盛土
若54	板物	不明	ヒノキ	横木取	板目	黒			Fe	-	-	褐茶木	なし	18世紀前～中葉	H-5	4面盛土
若55	板物	不明	マツ属複維管束亜属	板目		黒			Fe	-	茶木	-	なし	18世紀前～中葉	H-6	4面盛土
若56	板物	不明	スギ	板目		赤			Fe	-	赤褐赤木	-	なし	18世紀前～中葉	H-7	4面盛土
若57	挽物	蓋類	ブナ属	柾目		黒×黒			Fe	-	褐炭木	-	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	I-4	4面盛土
若58	板物	膳	ヒノキ	柾目		黒			Fe	-	褐炭木	-	炭粉洪下地	18世紀前～中葉	I-5	4面盛土
若59	挽物	杯	サクラ属	横木取	柾目	緑×赤			Fe As	Fe Hg	緑サビ木	赤サビ木	鉱物系下地	18世紀前～中葉	I-6	4面盛土
若60	曲物	小型容器	トウヒ属	柾目		黒			Fe	-	褐木	-	なし	18世紀前～中葉	188	4面遺構
若61	挽物	椀	トチノキ	横木取		黒×赤			Fe	Fe	炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀中葉	292	5面遺構
若62	その他	箸	タケ亜科	—		赤			Fe	-	赤褐炭木	-	炭粉洪下地	18世紀中葉	292	5面遺構
若63	板物	不明	ヒノキ	板目		黒×赤			Fe	Fe	黒赤サビ木	赤黒褐赤サビ木	鉱物系下地	18世紀中葉	375	5面遺構
若64	曲物	小型容器	トウヒ属	柾目		黒			Fe	-	褐木	褐木	なし	18世紀中葉	375	5面遺構
若65	その他	横櫛	イスノキ	板目		-	有		Fe	-	赤（装）木	-	なし	18世紀中葉	375	5面遺構
若66	挽物	椀	トチノキ	横木取		黒×赤	有	外	Fe As	Fe	黄（装）褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀中葉	327東側	5面遺構
若67	挽物	椀蓋	トチノキ	横木取		黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀中葉～19世紀前葉	193	4面遺構
若68	挽物	椀	アサガラ属	横木取		黒×赤	有	外	Fe As	Fe	黄（装）褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀後葉	341	3面遺構
若69	挽物	椀蓋	ブナ属	横木取		黒×黒	有	外・高台内	Fe Au As	Fe	金（装）褐炭木	褐炭木	炭粉洪下地	18世紀後葉	341	3面遺構
若70	挽物	椀	カツラ属	横木取		黒×黒			Fe	Fe	褐炭木	褐炭木	炭粉洪下地	18世紀後葉	180	4面遺構
若71	板物	鏡箱	ヒノキ	追柾目		黒			Fe	-	褐茶赤木	-	なし	18世紀後葉	180	4面遺構
若72	曲物	小型容器	トウヒ属	柾目		黒			Fe	-	褐木	-	なし	18世紀後葉	180	4面遺構
若73	挽物	椀蓋	トチノキ	横木取		赤×赤			Fe	Fe	赤炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀後葉	337	4面遺構
若74	挽物	椀蓋	トチノキ	横木取		黒×赤	有	外・高台内	Fe Ag As	Fe	金（装）褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀後葉	366	4面遺構
若75	挽物	鉢	ブナ属	横木取		黒×黒	有	内	Fe As Sn Hg	Fe	金（装）赤褐炭木	褐炭木	炭粉洪下地	18世紀後葉	337北側板外	4面遺構
若76	板物	膳	ヒノキ	柾目		黒			Fe	-	褐黒サビ布	-	鉱物系下地	18世紀後葉	366	5面遺構
若77	板物	膳	スギ	追柾目		黒			Fe	-	褐赤木	-	なし	18世紀後葉～19世紀前葉	183	3面遺構
若78	板物	膳	ヒノキ	柾目		黒			Fe	-	褐赤木	-	なし	18世紀末～19世紀前葉	B-3-4	3面盛土
若79	板物	不明	ヒノキ	板目		赤			Fe	-	赤炭木	-	炭粉洪下地	18世紀末～19世紀前葉	C-4	3面盛土
若80	板物	不明	ヒノキ	柾目		黒			Fe	-	褐炭サビ木	-	鉱物系下地	18世紀末～19世紀前葉	G-8	3面盛土
若81	挽物	椀	トチノキ	横木取		赤×赤			Fe Hg	Fe Hg	赤褐炭木	赤赤炭木	炭粉洪下地	18世紀末～19世紀前葉	一括	3面盛土
若82	挽物	合子蓋	ヒノキ	柾目		赤×赤	有	外	Fe As	-	黄黒（装）赤木	-	なし	18世紀末～19世紀前葉	一括	3面盛土
若83	挽物	椀	ブナ属	横木取		緑×赤			Fe As	Fe	緑炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀末～19世紀前葉	表土	3面盛土
若84	挽物	椀	トチノキ	横木取		黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀末～19世紀前葉	D-3	3面盛土
若85	挽物	椀蓋	ブナ属	横木取		黒×黒	有	外・高台内	Fe	Fe	赤（装）褐炭木	褐炭木	炭粉洪下地	18世紀末～19世紀前葉	D-3	3面盛土
若86	挽物	不明	サクラ属	横木取		黒×赤			Fe	Fe	褐褐炭木	赤赤炭木	炭粉洪下地	18世紀末～19世紀前葉	D-3	3面盛土
若87	挽物	椀	トチノキ	横木取		黒×黒			Fe	Fe	褐炭木	褐炭木	炭粉洪下地	18世紀末～19世紀前葉	D-4	3面盛土
若88	板物	膳	ヒノキ	柾目		黒			Fe	-	褐炭木		炭粉洪下地	18世紀末～19世紀前葉	E・F-5～8	3面盛土
若89	挽物	椀	ブナ属	横木取		黒×黒			Fe	Fe	褐炭木	褐炭木	炭粉洪下地	18世紀末～19世紀前葉	E-F-9	3面盛土
若90	挽物	椀蓋	カツラ属	横木取		黒×赤	有	外・高台内	Fe	Fe	金（装）赤褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀末～19世紀前葉	E-F-9	3面盛土
若91	挽物	椀	ブナ属	横木取		黒×赤			Fe	Fe Hg	褐炭木	赤サビ炭木	炭粉洪下地	18世紀末～19世紀前葉	E-3	3面盛土
若92	挽物	椀	モクレン属	横木取		黒×赤			Fe	Fe Hg	褐赤炭木	赤褐炭木	炭粉洪下地	18世紀末～19世紀前葉	E-3	3面盛土
若93	挽物	椀	サクラ属	横木取		黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀末～19世紀前葉	E-3	3面盛土
若94	籠物	桶・樽類	ヒノキ	追柾目		黒			Fe	-	赤褐木	-	なし	18世紀末～19世紀前葉	E-3	3面盛土
若95	挽物	杯	ブナ属	横木取		赤×赤	有	内	Fe	Fe Au As	黄（装）赤炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀末～19世紀前葉	E-4	3面盛土
若96	挽物	椀	ブナ属	横木取		黒			Fe	-	炭木	-	炭粉洪下地	18世紀末～19世紀前葉	F-2	3面盛土
若97	挽物	椀	ブナ属	横木取		黒×赤	有	外	Fe Sn As	Fe	金（装）黄褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀末～19世紀前葉	F-6	3面盛土
若98	挽物	椀	ブナ属	横木取		黒×赤			Fe	Fe Hg	褐赤炭木	赤赤炭木	炭粉洪下地	18世紀末～19世紀前葉	F-7	3面盛土
若99	挽物	椀	トチノキ	横木取		黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀末～19世紀前葉	F-8	3面盛土
若100	挽物	椀	ブナ属	横木取		黒×赤	有	外	Fe Hg	Fe	赤（装）褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀末～19世紀前葉	F-9	3面盛土
若101	挽物	椀蓋	トチノキ	横木取		黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀末～19世紀前葉	G-4	3面盛土
若102	挽物	不明	不明	-		黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀末～19世紀前葉	G-4	3面盛土
若103	板物	不明	トチノキ	横木取		黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤木	炭粉洪下地	18世紀末～19世紀前葉	G-4	3面盛土
若104	その他	箸	ヒノキ	柾目		赤			Fe	-	赤茶木	-	なし	18世紀末～19世紀前葉	G-4	3面盛土
若105	挽物	椀	トチノキ	横木取		黒×赤			Fe	Fe Hg	褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	18世紀末～19世紀前葉	G-6	3面盛土
若106	曲物	中型容器	ヒノキ	柾目		赤			Fe	-	赤褐炭木	-	炭粉洪下地	19世紀前葉～中葉	182	3面遺構
若107	挽物	椀	不明	-		黒×赤	有	外	Fe Hg	Fe	赤（装）褐炭木	赤炭木	炭粉洪下地	19世紀前葉～中葉	182	3面遺構
若108	籠物	鍋等蓋	サワラ	柾目		赤			Fe	-	赤木	-	なし	不明	一括	表土
若109	挽物	椀蓋	ブナ属	横木取		緑×赤			Fe As	Fe	緑炭木	赤炭木	炭粉洪下地	不明	368上面	3面遺構

南元町遺跡Ⅱ

分析資料番号	木工技術別分類	器種	樹種名	木取		地塗り色外×内	文様有無	文様位置	主要な元素（外）	主要な元素（内）	塗膜構造（外）	塗膜構造（内）	下地材	遺構廃絶年代	出土地点	
南1	挽物	椀	ブナ属	横木取	柾目	黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	96	g～h
南2	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト	Fe	Fe	赤（装）褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	96	h～i
南3	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	96	h～i
南4	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト	Fe	Fe	赤（装）褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	96	h～i
南5	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト・高台内	Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	96	h～i
南6	挽物	椀蓋	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト・高台内	Fe Ag As	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	96	h～i
南7	挽物	椀蓋	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	96	h～i
南8	挽物	椀蓋	ブナ属	横木取	板目	緑×赤			Fe As	Fe	緑炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	96	h～i
南9	挽物	杯	ミズキ	横木取	板目	赤×赤	有	ウチ	Fe	Fe As	赤サビ	黄（装）赤サビ	鉱物系下地	18世紀前葉	96	h～i
南10	挽物	不明	クリ	横木取	柾目	黒×赤			Fe	Fe	黒褐黒炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	96	h～i
南11	挽物	椀	ケヤキ	横木取	柾目	黒×赤			Fe	Fe Hg	褐黒サビ木	赤サビ木	鉱物系下地	18世紀前葉	96	i
南12	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×黒			Fe	Fe	褐炭木	褐炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	96	i～j
南13	挽物	椀	ブナ属	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト	Fe Ag As	Fe	金（装）褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	96	i～j
南14	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト	Fe Ag Cu As	Fe	金（装）黄褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	96	i～j
南15	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×黒	有	ソト	Fe Ag As	Fe	金（装）黄褐炭木	褐炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	96	i～j
南16	挽物	不明	クリ	柾目		赤×黒			Fe	Fe	赤褐炭木	褐黒炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	96	i～j
南17	挽物	不明	ヒノキ	板目		赤×黒			Fe	Fe	赤サビ茶木	茶木	なし	18世紀前葉	96	i～j
南18	曲物	蓋類	アスナロ	板目		黒			Fe		茶木	-	なし	18世紀前葉	96	i～j
南19	曲物	中型容器	スギ	板目		黒			Fe		茶木	-	なし	18世紀前葉	96	i～j
南20	挽物	盆	ミズキ	横木取	柾目	黒×黒	有	ウチ	Fe	Fe	赤（装）褐炭木	褐炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	96	i～k
南21	板物	不明	ヒノキ	割材		黒			Fe		茶木	-	なし	18世紀前葉	96	i～k
南22	挽物	椀	ブナ属	横木取	板目	緑×赤			Fe As	Fe	緑炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	96	l～m
南23	挽物	椀蓋	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト・高台内	Fe	Fe	赤（装）褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉※和歌山藩	213	b
南24	挽物	椀	カツラ属	横木取	板目	黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉※和歌山藩	213	
南25	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト	Fe Ag Cu As	Fe	金（装）褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉※和歌山藩	213	
南26	挽物	不明	ケヤキ	横木取	柾目	赤×赤			Fe Hg	Fe Hg	赤サビ木	赤サビ木	鉱物系下地	18世紀前葉※和歌山藩	213	
南27	挽物	不明	クリ	板目		赤×黒			Fe	Fe	褐黒炭木	赤褐炭木	炭粉混下地	18世紀前葉※和歌山藩	213	
南28	板物	膳	ヒノキ	柾目		黒			Fe		茶木	-	なし	18世紀前葉※和歌山藩	213	
南29	板物	不明	ヒノキ	柾目		赤			Fe		赤木	-	なし	18世紀前葉※和歌山藩	213	
南30	板物	不明	ヒノキ	柾目		赤			Fe Hg		赤木	-	なし	18世紀前葉※和歌山藩	213	
南31	曲物	蓋水入れ	ヒノキ	柾目		黒			Fe		褐木	-	なし	18世紀前葉※和歌山藩	213	
南32	曲物	小型容器	ヒノキ	柾目		黒			Fe		茶木	-	なし	18世紀前葉※和歌山藩	213	
南33	曲物	小型容器	ヒノキ	-		黒			Fe		茶木	-	なし	18世紀前葉※和歌山藩	213	
南34	箍物	桶・樽類	スギ	柾目		黒			Fe		茶木	-	なし	18世紀前葉※和歌山藩	213	
南35	その他	横櫛	イスノキ	板目		黒	有		Fe As		赤黄（装）褐炭木	-	炭粉混下地	18世紀前葉※和歌山藩	213	
南36	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト	Fe Au	Fe	褐黒サビ炭木	赤黒サビ炭木	鉱物系+炭粉混下地	18世紀前葉	215	
南37	挽物	椀	ブナ属	横木取	柾目	黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	215	
南38	挽物	椀	ブナ属	横木取	板目	赤×赤			Fe	Fe	赤炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	215	
南39	板物	不明	ヒノキ	板目		黒			Fe		茶木	-	なし	18世紀前葉	215	
南40	箍物	鍋蓋類	アスナロ	板目		黒			Fe		褐赤サビ木	-	鉱物系下地	18世紀前葉	215	
南41	その他	煙管羅宇	単子葉	丸木		黒	有		Fe		黒木	-	なし	18世紀前葉	215	
南42	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	215	a
南43	挽物	椀蓋	ケヤキ	横木取	柾目	赤×赤			Fe Hg	Fe Hg	赤サビ木	赤サビ木	鉱物系下地	18世紀前葉	215	a
南44	板物	膳	ヒノキ	柾目		黒×黒			Fe		茶木	-	なし	18世紀前葉	215	a
南45	板物	膳	ヒノキ	板目		赤×黒			Fe	Fe Hg	赤褐サビ木	褐褐黒サビ木	鉱物系下地	18世紀前葉	215	a
南46	板物	膳	ヒノキ	板目		黒×赤			Fe Hg	Fe Cu As	黄褐サビ	赤褐サビ	鉱物系下地	18世紀前葉	215	a
南47	板物	膳	ヒノキ	柾目		黒			Fe		茶木	-	なし	18世紀前葉	215	a
南48	板物	膳	ヒノキ	柾目		黒			Fe		褐木	-	なし	18世紀前葉	215	a
南49	板物	箱類	ヒノキ	板目		赤×赤			Fe	Fe	赤黒赤サビ木	赤木	なし	18世紀前葉	215	a
南50	板物	不明	ヒノキ	柾目		黒			Fe		茶木	-	なし	18世紀前葉	215	a
南51	板物	不明	ヒノキ	板目		黒			Fe		茶木	-	なし	18世紀前葉	215	a
南52	板物	不明	アスナロ	板目		黒			Fe		茶木	-	なし	18世紀前葉	215	a
南53	板物	不明	ヒノキ	柾目		黒			Fe		褐炭木	-	炭粉混下地	18世紀前葉	215	a
南54	曲物	槽蓋	ヒノキ	柾目		赤×黒			Fe	Fe Hg	赤サビサビ木	褐黒サビ木	鉱物系下地	18世紀前葉	215	a
南55	曲物	小型容器	ヒノキ	柾目		黒			Fe		褐木	-	なし	18世紀前葉	215	a
南56	曲物	小型容器	ヒノキ	柾目		赤			Fe		褐木	-	なし	18世紀前葉	215	a
南57	箍物	鍋蓋類	ヒノキ	柾目		黒			Fe		褐木	-	なし	18世紀前葉	215	a
南58	その他	不明	タケ亜科	削り出し		黒			Fe	Fe	褐炭木	赤褐炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	215	a
南59	漆工具	漆箆	ヒノキ	柾目		-			Fe Hg		黒赤褐木	-	-	18世紀前葉	215	a
南60	漆工具	曲物	アスナロ	柾目		-			Fe As		褐木	-	-	18世紀前葉	215	b上層
南61	挽物	椀	ブナ属	横木取	柾目	緑×赤			Fe As	Fe	緑炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	216	
南62	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト	Fe	Fe	赤（装）褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	216	
南63	挽物	盆	カツラ属	柾目		黒×黒	有	ウチ	Fe		-	赤（装）褐炭サビ木	鉱物系+炭粉混下地	18世紀前葉	216	
南64	その他	麦杓子	ヒノキ	柾目		黒			Fe		褐黒サビ木	-	鉱物系下地	18世紀前葉	216	
南65	挽物	椀蓋	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト・高台内	Fe As	Fe	黄（装）褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	223	
南66	挽物	杯	ケヤキ	横木取	柾目	赤×赤	有	ウチ	Fe Hg	Fe Hg Au	赤サビ木	赤サビ木	鉱物系下地	18世紀前葉	224	b～c
南67	挽物	椀蓋	不明	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト	Fe As	Fe	黄（装）褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	224b～224c	盛土一括
南68	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	赤×赤			Fe	Fe	赤炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	224	c
南69	曲物	柄杓	ヒノキ	柾目		黒			Fe		茶木	-	なし	18世紀前葉	224	c
南70	その他	不明	タケ亜科	丸木		赤			Fe Hg		赤木	-	なし	18世紀前葉	224号以南	
南71	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	36h以北	
南72	挽物	杯	不明	横木取	柾目	赤×赤	有	ウチ	Fe Hg	Fe Hg	赤サビ	赤サビ	鉱物系下地	18世紀前葉	269	
南73	板物	不明	スギ	板目		黒			Fe		褐木	-	なし	18世紀前葉	269	
南74	挽物	椀蓋	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト・高台内	Fe Ag As	Fe	金（装）褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉	36	j
南75	挽物	椀蓋	トチノキ	横木取	板目	黒×赤	有	ソト	Fe As	Fe	黄（装）褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前～中葉	96	e～f
南76	挽物	椀蓋	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト・高台内	Fe Ag As	Fe	金（装）褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前～中葉	96	e～f
南77	板物	不明	ヒノキ	柾目		黒			Fe		茶木	-	なし	18世紀前～中葉	96	e～f
南78	曲物	槽蓋	ヒノキ	柾目		赤			Fe		褐赤木	-	なし	18世紀前～中葉	96	e～f
南79	挽物	椀蓋	ブナ属	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト・高台内	Fe Ag Cu Zn As	Fe	褐（装）褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前～中葉	36	g
南80	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト	Fe	Fe	金（装）褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前～中葉	171	
南81	挽物	椀蓋	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト	Fe Hg As	Fe Hg	黄（装）褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉～19世紀中葉	36西	
南82	曲物	小型容器	ヒノキ	柾目		黒			Fe		茶木	-	なし	18世紀前葉～19世紀中葉	36以北	
南83	挽物	椀	トチノキ	横木取	板目	赤×赤			Fe	Fe	赤炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀前葉～19世紀中葉	36付近	
南84	挽物	椀	ケヤキ	横木取	板目	黒×黒			Fe	Fe	褐黒サビ	褐黒サビ木	鉱物系下地	18世紀前葉～19世紀中葉	36付近	
南85	挽物	椀	ブナ属	横木取	柾目	黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤褐炭木	炭粉混下地	18世紀後葉以前	4号建物	
南86	挽物	椀蓋	ブナ属	-		黄×赤	有	ウチ	Fe As	Fe	黄炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀後葉	247	
南87	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト	Fe	Fe	褐炭木	赤赤炭木	炭粉混下地	18世紀後葉	36	e
南88	挽物	椀蓋	ブナ属	横木取	柾目	赤×赤			Fe Hg	Fe Hg	赤赤炭木	褐赤炭木	炭粉混下地	18世紀後葉	247	
南89	板物	膳	アスナロ	柾目		黒			Fe		茶木	-	なし	18世紀後葉	93	c
南90	挽物	椀蓋	不明	横木取	柾目	赤×赤			Fe	Fe	赤サビ炭木	赤サビ炭木	鉱物系+炭粉混下地	18世紀後葉	93	c
南91	挽物	椀蓋	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト・高台内	Fe	Fe Ag	金（装）赤褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀後葉	93d以南	
南92	挽物	椀蓋	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト・高台内	Fe Ag As	Fe	金（装）黄褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀後葉	93d以南	
南93	挽物	杯	モクレン属	横木取	柾目	赤×赤	有	ウチ	Fe Hg	Fe Hg Au Ag Cu	赤サビ木	金（装）赤サビ	鉱物系下地	18世紀後葉	93d以南	
南94	その他	不明	タケ亜科	割材		黒/赤			Fe	Fe	赤赤炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀後葉	93d以南	
南95	挽物	椀蓋	ブナ属	-		黒×赤	有	ウチ	Fe Au	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀後葉	96	b～c
南96	挽物	杯	ブナ属	横木取	板目	赤×赤	有	ウチ	Fe	Fe Au	赤炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀後葉	96	c～d
南97	挽物	椀	ブナ属	横木取	板目	緑×赤			Fe As	Fe	緑炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀後葉	146	
南98	漆工具	漆箆	ヒノキ	柾目					Fe		赤褐木	-	なし	18世紀後葉	155	a
南99	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀後葉	209	
南100	その他	切匙	ヒノキ	柾目		黒			Fe	Fe	褐木	赤サビ褐木 ※背の部分のみ	なし	18世紀後葉	214	
南101	挽物	椀	アスナロ	横木取	板目	黒×赤	有	ソト	Fe As	Fe	黄（装）褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀末葉	136	
南102	挽物	椀蓋	ブナ属	横木取	板目	黒×赤	有	ソト	Fe Hg	Fe	赤褐炭	赤炭木	炭粉混下地	18世紀末葉	136	
南103	板物	鏡箱	ヒノキ	板目		赤			Fe		赤褐赤木	-	なし	18世紀末葉	136	
南104	挽物	独楽	カエデ属	-					Fe		褐炭木	-	炭粉混下地	18世紀末葉	145	a
南105	挽物	椀	ブナ属	横木取	柾目	赤×赤			Fe	Fe	赤炭木	赤炭木	炭粉混下地	18世紀代	200	
南106	その他	横櫛	イスノキ	柾目		黒	有		Fe Au Cu As Hg		金黒炭赤（装）褐木	-	なし	19世紀前葉※和歌山藩	41	
南107	その他	笄	不明	-		黒	有		Fe Au Cu Hg		金（装）褐黒褐黒サビ	赤サビ木	鉱物系下地	19世紀前葉※和歌山藩	41	
南108	挽物	椀	ブナ属	横木取	板目	黒×黒			Fe Cu	Fe	褐炭木	褐炭木	炭粉混下地	19世紀前葉	135	
南109	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	19世紀前葉	244	
南110	板物	箱類	ヒノキ	柾目		黒×赤	有	ソト	Fe	Fe	赤（装）褐炭木	赤サビ炭木	炭粉混下地	19世紀前葉	282	
南111	挽物	鉢	トチノキ	竪木取		黒×赤			Fe	Fe Hg	褐黒褐黒褐炭木	赤サビ黒赤黒赤炭木	炭粉混下地	19世紀前葉	282	
南112	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×黒			Fe	Fe	褐炭木	褐炭木	炭粉混下地	19世紀中葉	77	
南113	その他	横櫛	イスノキ	柾目		黒	有		Fe As		黄（装）褐木	-	なし	19世紀後葉	33	
南114	挽物	椀	ブナ属	横木取	板目	黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	19世紀後葉	65	
南115	挽物	椀	ブナ属	横木取	板目	黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	19世紀後葉	65	
南116	挽物	椀	ブナ属	横木取	板目	赤×赤			Fe	Fe	赤炭木	赤炭木	炭粉混下地	19世紀後葉	65	
南117	挽物	椀蓋	トチノキ	横木取	柾目	赤×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	19世紀後葉	65	
南118	挽物	椀蓋	ブナ属	横木取	板目	黒×赤	有	ソト・高台内	Fe As	Fe	金（装）褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	19世紀後葉	65	
南119	挽物	蓋類	カエデ属	竪木取		黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤木	炭粉混下地	19世紀後葉	65	
南120	曲物	槽蓋	アスナロ	柾目		黒			Fe		褐炭木	-	炭粉混下地	19世紀後葉	65	
南121	曲物	不明	ヒノキ	板目		黒			Fe		褐木	-	なし	19世紀後葉	65	
南122	その他	横櫛	イスノキ	柾目		赤	有		Fe Au Cu As		黄（装）木	-	なし	19世紀後葉	65	1
南123	挽物	椀蓋	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト・高台内	Fe As	Fe	金（装）黄褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	19世紀後葉	65	東側
南124	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	19世紀後葉	65	東側
南125	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤			Fe	Fe	褐炭木	赤炭木	炭粉混下地	19世紀後葉	70	
南126	板物	膳	ヒノキ	柾目		黒			Fe		褐木	-	なし	19世紀後葉	70	

南元町遺跡

分析資料番号	木工技術別分類	器種	樹種名	木取		地塗り色 外×内	文様有無	文様位置	主要な元素（外）	主要な元素（内）	塗膜構造（外）	塗膜構造（内）	下地材	遺構廃絶年代	出土地点	
南127	その他	横櫛	イスノキ	板目		黒	有		Fe Au Hg		金赤黒赤赤（装）木	-	なし	19世紀後葉	70	
南128	その他	横櫛	イスノキ	板目		白木	有		Fe As		黄（装）木	-	なし	19世紀後葉	70	
南129	挽物	椀蓋	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト・高台内	Fe Ag	Fe	金（装）黒炭木	赤炭木	炭粉渋下地	19世紀後葉	70	西2区
南130	挽物	椀	エゴノキ属	竪木取		赤×黒			Fe	Fe Hg	赤サビサビ木	褐黒褐黒サビ木	鉱物系下地	19世紀後葉	70	西2区
南131	挽物	椀蓋	カツラ属	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト・高台内	Fe Sn Cu Zn As	Fe	金（装）褐炭木	赤炭	炭粉渋下地	19世紀後葉	86	
南132	その他	不明	タケ亜科	割材		黒/赤			Fe	Fe	赤赤黒木	-	なし	19世紀後葉	92	
南133	その他	横櫛	イスノキ	柾目		変わり塗			Fe Au Hg		赤褐赤木	-	なし	19世紀後葉※和歌山藩	220	
南134	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×黒	有	ソト	Fe Ag As	Fe	黄（装）褐炭木	褐炭木	炭粉渋下地	19世紀後葉※和歌山藩	220	
南135	挽物	椀	トチノキ	横木取	板目	黒×黒			Fe	Fe	褐黒サビ炭木	褐黒サビ炭木	鉱物系+炭粉渋下地	19世紀代	76	
南136	挽物	椀	ブナ属	横木取	柾目	緑×赤			Fe As	Fe	緑炭木	赤炭木	炭粉渋下地	近代	97	
南137	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	赤×赤			Fe	Fe	赤炭木	赤炭	炭粉渋下地	近代	97	
南138	挽物	椀	ブナ属	横木取	板目	黒×黒			Fe	Fe	褐炭木	褐炭木	炭粉渋下地	-	B区調査区一括	
南139	その他	横櫛	イスノキ	柾目		黒	有		Fe Au Cu Sn As		金黒赤黒赤錫（装）褐木	-	なし	-	B区盛土2	
南140	その他	笄	トチノキ	板目		白木	有		Fe Au As		金（装）木	-	なし	-	C区西端　トレンチ内建物	
南141	その他	不明	ブナ属	芯なし削り出し		変わり塗			Fe Hg As		赤褐赤黄緑木	-	なし	-	C区表土一括	
南142	挽物	杯	ブナ属	横木取	板目	赤×赤	有	ウチ	Fe	Fe Au Cu Zn As	赤炭木	赤黄（装）赤炭木	炭粉渋下地	-	C区表土一括	
南143	挽物	椀	トチノキ	横木取	板目	茶×茶	有	ソト	Fe	Fe	黒（装）褐褐褐木	褐褐褐炭	炭粉渋下地	-	C区盛土3	
南144	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤			Fe Cu	Fe Cu	褐炭木	赤炭木	炭粉渋下地	-	C区盛土3	
南145	挽物	杯	ブナ属	横木取	柾目	赤×赤	有	ウチ	Fe Hg Au Cu As	Fe Hg	金（装）黄赤サビ木	赤赤サビ	鉱物系下地	-	C区盛土3	
南146	板物	箱類	ヒノキ	柾目		赤			Fe		赤黒サビ木	-	鉱物系下地	-	C区盛土3	
南147	挽物	椀	ブナ属	横木取	板目	黒×赤			Fe	Fe Hg	褐サビ炭木	赤赤炭木	炭粉渋下地	-	D区盛土2	
南148	挽物	椀	トチノキ	横木取	柾目	黒×赤	有	ソト	Fe Sn As	Fe	金（装）黄褐炭木	赤炭木	炭粉渋下地	-	E区表土	

第 4 章　南部箔椀・吉野椀・朽木盆

はじめに

17 世紀後半以降、各藩の奨励のもと、各地の地理的特徴を生かした特産品が成立し漆器もその一つであった。18 世紀後半以降は、各藩の藩政改革に伴う藩専売の展開の中で、技術革新や流通統制が進められ、特産地の形成と淘汰がすすんだ。以下は文献史料にみられる漆器生産に関する記述である（岩淵 2017）。

『毛吹草』（1645）…各地の名産：山城（塗師細工ほか）、大和（塗桶、塗鉢）、和泉（中浜塗木履・常器椀）、近江（朽木塗物 盆鉢・五器など）、陸奥（会津 薄椀・薄盆）、石見（濱田折敷）、播磨（清水折敷）、越前（塗笠）、紀伊（黒江渋地椀 根来椀・折敷）、伊予（塗板）、筑前（折敷）、肥前（唐蒔絵）、日向（五器）

『和漢三才図会』（1712）…諸国の土産：山城（塗物）、大和（塗桶 奈良、塗挽盞、吉野食次）、紀伊（椀 名草郡黒江）、陸奥（椀 会津）、下野（椀・折敷 日光 盆・木鉢）

「諸国産物競」…産物として塗物：日光、駿河、会津、津軽、出羽

（岩淵 2017）

岩淵令治は会津藩を事例に取り上げ、株仲間解散令以前においては、問屋を商品の信用の担保とする贈答用や会食用の上級品と工程を省略した安価な地方向けの商品が江戸で流通しており、後者は「出店」や 5、600 にものぼる問屋外の店で庶民に向けて販売されていたと推察される。巨大都市江戸にはさまざまなレベルの漆器が流通し、発掘調査で検出される多様な漆器もこうした漆器の大衆化・多様化を示す（岩淵 2017）としている。

江戸の日用漆器は、奥州会津塗、紀州黒江塗、近江日野椀などの大規模生産地から集積された（北野 2005a）が、漆器生産遺構が残らないため、出土資料による厳密な生産地を特定できない。しかし、遺跡から出土した椀類、椀蓋類の中には文様意匠が特徴的なものがみられ、伝世品と比較することで生産地が推定できる漆器がある。主に、南部領（盛岡藩）で生産された金箔装飾の「南部箔椀」、奈良県吉野地方で生産された芙蓉文の「吉野椀」、滋賀県朽木地方で生産された 16 弁菊花文の「朽木盆」が該当する。

本章では、伝世品の様相をふまえて、近世江戸遺跡から出土した南部箔椀、吉野椀、朽木盆について、考古学的所見による遺跡の性格・年代と文化財科学的な分析によって得られた材質・製作技法をあわせて述べることにしたい。

1 南部箔椀、吉野椀、朽木盆の伝世品

荒川浩和は、『漆椀百選』（荒川 1975）で産地による特徴として、「漆椀の産地が産地自体の椀を必ずしも多く伝へてゐるとは限らないし、製作の当初から一定様式を継承して椀生産を行ってゐる産地もあり得ない。従って、現在散在してゐる遺例からその産地を辿ることも、現在の生産状況によって過去の椀形式を推定することも、ともに極めて困難である」としつつも、「様式的特徴の共通したものをできるだけ多く比較検討し、製作された時代と地域の蓋然性を示すしかないであらう」と述べ、伝世品、文献史料からその特徴をまとめている。ここでは、近年すすめられている主に美術史分野、文献史料の研究成果から本章で取り上げる各漆器とその産地の概要を述べる。

（1）南部箔椀

東北地方には金箔を使用した「秀衡椀」、「南部椀」、「浄法寺椀」、「会津絵椀」などがあり、文様意匠から強い関連が考えられるが、それぞれの起源や産地・名称の定義については未だ多くの議論がある。本章では、金箔を使用した椀を東北系箔椀と括り、「南部箔椀」に含まれるものとした。

特に岩手県の古椀の呼称は「秀衡椀」、「南部椀」、「浄法寺椀」、「正法寺椀」があり、その関係について齋藤里香は以下のようにまとめている（齋藤 2010）。

「秀衡椀」（図 4-1）は、奥州藤原氏三代秀衡の名を冠する大型の三重椀で、桃山～江戸時代頃の作と言われている。内側は朱塗りで、外側は黒塗りの上に朱で雲と動植物の模様を描き、雲の上に菱形と細い短冊型の金箔を置く。旧衣川村（現奥州市）の増沢集落など平泉近辺に産地が求められているが、作られた場所も年代も確かなことは分かっていない。

「南部椀」（図 4-2）は、江戸時代に南部領（盛岡藩）で産出した椀で、「浄法寺椀」の他領での呼び名という。現在の二戸市浄法寺や八幡平市安代近辺で作られた。南部椀＝箔椀とする説があるが、箔椀以外も南部椀と呼ばれていた。南部箔椀のデザインは秀衡椀の影響を受けたと考えられているが、文様は決まって枝菊で、高台にも装飾がつく。四重椀を基本とするが、平椀、壺椀の揃いもある。箔椀は盛岡藩の重要な産物で、藩の管理下にあった。

「正法寺椀」（図 4-3）は、正法寺に伝わる黒塗りの椀である。鉄鉢形の三重椀で、もとは相当の数があったものと考えられる。底裏に「正法寺」と赤漆で書かれている。寺域内で作られたともいうが産地、年代とも確かなことは分からない。

仙台藩主・伊達綱村の命で、佐久間義和がまとめた『奥羽観跡聞老志』(1719) では、飯器の産地として会津に次いで江刺郡「正法寺」の名がある。「正法寺」の椀は「飯器(いいわん) 会津出所多品 又江刺郡出所之ヲ正法寺椀謂 内朱ニシ外漆ニシ 或鸛鶴(かんかく)畫 或花草蒔 之ニ飾金箔 其ノ朱色煒燁(いよう) 好事ノ者茶亭之飯器ト為 其ノ雅物尤モ愛可」とあり、今にいう「秀衡椀」を「正法寺椀」と呼んだものとする。しかしながら、里見藤右衛門の『封内土産考』(1800) では、「江刺郡ニ正法寺椀ヲ出ス事今古之ヲ聞不 南部定法寺ト云所ヨリ此ノ器ヲ出セリ」とあり、佐久間義和の誤った伝聞によるものではないかとしている。また。大槻玄沢の「秀衡椀之記」(『磐水漫草』) (1794) では、秀衡椀と秀衡椀に倣った浄法寺産の椀に言及し、両者を別に扱っている。しかし、一般には秀衡椀とデザインの似る浄法寺の箔椀が一連のものと見なされていたのだろう。大槻如電の「秀衡椀考」(『骨董協会雑誌』) (1899) では、「此椀は奥州にては浄法寺椀といひ関東にては南部椀といふ」が、正法寺椀には紋様がなく、浄法寺椀と唱えがまぎらわしいが別のものだと断っている (齋藤 2010)。

以上のことから、江戸時代には「秀衡椀」、「正法寺椀」、「浄法寺椀」は区別されつつも、金箔の装飾があり類似した文様特徴を持つ「秀衡椀」と「浄法寺椀」、音が似ている「浄法寺椀」と「正法寺椀」がそれぞれ混同されたと考えられる。

現在では、「南部椀」は江戸時代に南部領 (盛岡藩) で産した椀で、浄法寺近辺で作られ、「浄法寺椀」ともいう。この内、「南部箔椀」あるいは「浄法寺箔椀」と呼ばれる金箔付きの椀のデザインは「秀衡椀」の影響を受けたものと考えられている (齋藤 2010)。

これらの違いについては、形態や材質・技法から指摘がおこなわれている。秀衡椀は、飯・汁・菜の蓋なしの三ツ組の椀で、木地には例外なくケヤキ材を使い、下地は漆を塗り重ねた漆地である。浄法寺箔椀は、飯・汁だけの蓋付きの四ツ組の椀である。木地の材料はブナで、下地も錆下地か渋下地になっている (高橋 1988)。同様に、秀衡椀は三重椀形式で錆下地はそれほど厚くなく、内朱外黒漆を塗る。文様の漆絵は、口縁に朱漆で雲形を垂らし四割菱と切箔を貼り、朱漆で草木などを描く。浄法寺椀は渋下地に内紅殻漆、外は黒漆で塗り、紅殻漆で雲形を表し、菱形や切箔を置き、斜線と枝菊は黄漆で描いている (渡邉 2003b) としている。

福島県の「会津椀」について、金箔、色漆の松竹梅文様、消粉蒔絵の破魔矢と梅花文様で構成されるいわゆる「会津絵」(図 4-4) は、18 世紀後半の青漆と消粉蒔絵の新技術導入によって、18 世紀末以降に大量生産された。会津絵の基となる金箔貼漆絵漆器の製作は、後述のように出土資料から早ければ 17 世紀前半、遅くとも 17 世紀後半におこなわれてい

たと考えられる。この出土資料は、南部箔椀に非常に類似しており、南部箔椀から影響を受けたと言われる会津金箔貼漆絵椀の初期のものと考えられる（小林 2004)。一方、伝世品では、江戸時代の初期から中期にかけて南部の浄法寺椀を模して会津で製作されたという伝承のある枝菊漆絵絲目椀が挙げられる（図 4-5)。図 4-5 は、ケヤキ材を轆轤で糸目にひきあげた菓子椀で、漆錆を丁寧に施し、内赤外黒漆に塗り、口縁は黄漆で雲形状に斜線で表し、金箔を置き枝菊を描いている（渡邉 2003a)。

(2) 吉野椀

吉野山周辺（現奈良県吉野郡吉野町、下市町周辺）を中心に生産され、口承資料および『奈良縣吉野郡史料（中巻)』(1919) から寛永年間（1624～1644）頃に、小倉屋喜兵衛なる者が日常什器を中心とした漆器に吉野桜もしくは芙蓉文様を赤色漆で描き（図 4-6)、吉野の特産品としたことが始まりとされる（北野 2005b)。その後、江戸時代中期に一時衰退した漆器業を再興すべく春慶塗の技法を導入するが、天明の飢饉（1782～1787）により途絶する。寛政年間（1789～1800）に吉田屋重兵衛らが回復を図り、安政 5 年（1858）に漆器業者仲間が設立される（北野 2003)。

茶道の基本的な式次第や茶道具などを記述した手引き書である『茶書』史料の『茶道早合点 巻之下 会席道具類』(1771)、『茶道筌蹄（巻之五)』(1816)、『茶式湖月抄 三編下巻』（1851) には、それぞれ「吉野椀 黒ぬり赤絵 芙蓉の花葉 赤絵の椀ともいう」、「吉野椀 坪付 利休好み 当茶碗といふハふよう也 蔦の花也」、「吉野椀（内外黒花塗、内外朱漆で芙蓉之絵有　朱で口縁いっかけ)」という記述（北野 2003）があり、茶会席の道具として吉野椀が使われたことがわかる。

表千家 8 代啐啄斎、表千家 9 代了々斎の活躍にみるように、茶道が一般化する元禄年間（1688～1704) 以降、茶会席用の漆器も 18 世紀後半以降に一般化したものであると考えられている。吉野絵の意匠は、大和名所であった吉野山をイメージするものとして、江戸時代中期以降には茶匠由来の茶会席食器の一つとして、茶会席用の漆器の加飾図柄として吉野絵の意匠を導入して京漆器など関西系の漆器生産地を中心に生産されたことも口承資料は伝えている（北野 2003, 2005b)。

(3) 朽木盆

滋賀県旧朽木村（現高島市）を中心に寛永年間（1624～1644）に椀、盆、膳を産した（荒

川 1975)。朽木村は、交代寄合・旗本朽木家の知行地に組み入れられ、消費地である京都に近く、江戸時代前期には「朽木塗り物」として広く知られ、代表的な漆器が朽木盆もしくは菊盆である（図 4-7)。地内外面に黒色もしくは赤褐色の漆を塗布し、十六菊紋と呼ばれる花弁文様を盆内面に描いている（北野 2005a)。

『御参勤御用木地之覚』(『朽木村木地山文書』所収）(1834）によれば、近世朽木盆は、大名・旗本などの上級武家社会の間でさまざまな用向きに際し、贈答品として供せられる漆器盆という性格も併せ持っていたようである（北野 2005a)。

なお、滋賀県君ヶ畑・蛭谷地方はロクロを使い、漆器の木地となる椀や盆をつくる木地師発祥の地とされ、祖神 惟喬親王の伝承が多く残る（橋本 1979)。木地師は良質な木材を求めて山地帯を移動するため､早くから朽木地方では木製品がつくられたといわれている。

2 近世江戸遺跡から出土した南部箔椀・吉野椀・朽木盆

(1) 南部箔椀

第 1 章の出土漆製品の集成から、近世江戸遺跡では 12 遺跡（内訳:千代田区 5 遺跡、中央区 1 遺跡、港区 4 遺跡、文京区 2 遺跡）30 点の出土があった（図 4-8、9)。なお、南部箔椀の菱形金箔は、方形や短冊形の金箔を用いて構成され、その割付や貼り合わせのバリエーションがあるがここでは菱形金箔と一括りにして表現した。

・千代田区丸の内一丁目遺跡（1 点）（丸の内 1-40 遺跡調査会 1998）

遺跡は江戸城鍛冶橋門北側に位置し、向長屋に利用された可能性がある 243 号遺構（土坑）から出土した 17 世紀前葉の腰高である。図 4-8-1 は内面赤色漆、外面黒色漆で、外面口縁部に赤色漆で雲形を描き、その上に短冊形、小形の菱形金箔を置き、さらにその上から黄色漆で斜線を描く。外面胴部の大形の菱形金箔の間に黄色漆で松竹を描く。

・千代田区有楽町二丁目遺跡（3 点）（株式会社武蔵文化財研究所 2006）

飯田藩堀家屋敷の 27 号（溝状遺構)、49 号（土坑)、248 号（土坑）遺構から出土した 17 世紀前葉の椀蓋と椀類である。図 4-8-2～4 は内面赤色漆、外面黒色漆で、外面口縁部に赤色漆で雲形を描き、その上に短冊形、小形の菱形金箔を置き、さらにその上から黄色漆で斜線を描く。図 4-8-2 は外面胴部の大形の菱形金箔の間に黄色漆で竹を描く。図 4-8-3 は外面胴部の大形の菱形金箔の間に黄色漆で菊花・枝葉を描く。高台内は黄色漆で菊花・葉・蕾を描く。図 4-8-4 は報告書によると内面赤色漆、外面黒色漆で、外面胴部の大形の菱形金箔の間に茶色と緑色漆で菊花・枝葉を描く。高台内は茶色と緑色漆で菊花・葉・蕾を描

く。報告書によると茶色と緑色漆とあるが、赤色と黄色漆の誤記と考えられる。

・**千代田区外神田一丁目遺跡**（1 点）（千代田区外神田一丁目遺跡調査会 1999）

遺跡は神田川沿いの河岸地に該当し､93 号遺構から出土した 17 世紀前葉の飯椀である。図 4-8-5 は内面赤色漆、外面黒色漆で、外面口縁部に赤色漆で雲形を描き、その上に短冊形、小形の菱形金箔を置き、さらにその上から黄色漆で斜線を描く。外面胴部の大形の菱形金箔の間に黄色漆で竹を描く。

・**千代田区飯田町遺跡（2001）**（2 点）（千代田区飯田町遺跡調査会 2001）

高松藩松平家屋敷の盛土（Ⅲ区盛土層）、1962 号遺構周辺から出土した 17 世紀前葉の椀蓋、椀類である。図 4-8-6 は報告書によると内面赤色漆、外面赤色漆で、外面口縁部に黒色漆で雲形を描き、小形の菱形金箔を置く。外面胴部の大形の菱形金箔の間の主文様は不明である。図 4-8-7 は報告書によると内面黒色漆、外面黒色漆で、高台部は茶色漆で短冊形、小形の菱形金箔を置く。茶色漆とあるが、金箔の上に描かれた黄色漆の斜線のことであろうか、詳細は不明である。

・**千代田区紀尾井町遺跡Ⅱ**（1 点）（大成エンジニアリング株式会社 2013）

紀州藩徳川家麹町邸以前、丹波亀山藩菅沼家屋敷の 106 号遺構（土坑）から出土した 17 世紀中葉の椀蓋である。図 4-8-8 は内面赤色漆、外面黒色漆で、外面口縁部に赤色漆で雲形を描き、小形の菱形金箔を置き、さらにその上から黄色漆で斜線を描く。外面胴部に大形の菱形金箔はなく、黄色漆で菊花・枝葉を描く。花弁・蕊は黄色、花芯は赤色漆である。高台内は黄色漆で菊葉・蕾、赤色漆と黄色漆と金箔で扇を描く。

・**中央区京葉線八丁堀遺跡**（1 点）（京葉線八丁堀遺跡調査団 1990）

八丁堀は明暦の大火以前は、寺院が多い地域であったが、大火後は小禄の武士と町人の居住地になる。遺跡は町屋、武家屋敷それぞれの一部に該当し、遺構外から出土した時期不明の椀蓋である。図 4-8-9 は報告書によると内面茶色漆、外面黒色漆とあるが、茶色は赤色漆のことであろう。外面口縁部に赤色漆で雲形を描き、その上に短冊形・小形の菱形金箔を置き、さらにその上から黄色漆で斜線を描く。外面胴部の大形の菱形金箔の間に菊花・枝葉を描く。高台内は菊葉・蕾が描かれ、蕾は金箔であるが、詳細は不明である。

・**港区愛宕下遺跡Ⅰ**（2 点）（東京都埋蔵文化財センター2009）

遺跡は大名・高禄の旗本屋敷に該当し、82 号遺構（土坑）、盛土（盛土 4 層南）から出土した時期不明の椀蓋、椀類である。図 4-8-10 は報告書によると外面胴部の大形の菱形金箔の間に菊花・枝葉を描く。高台内は菊花を描く。図 4-8-11 は報告書によると外面胴部の

大形の菱形金箔の間に菊花・枝葉を描く。いずれも詳細は不明である。

・**港区愛宕下遺跡Ⅲ**（5 点）（東京都埋蔵文化財センター2014）

遺跡は大名・高禄の旗本屋敷に該当し、48 号（土坑）、2 号（土取土坑）遺構、盛土（盛土 4 層、盛土Ⅲ-2 層）から出土した椀蓋、汁椀、椀類である。年代が明確な 2 号遺構は 17 世紀前葉～中葉の資料である。図 4-8-12 は報告書によると内面赤色漆、外面赤色漆で、外面口縁部に黒色漆で雲形を描く。外面胴部の大形の菱形金箔の間に黄色漆で菊花・枝葉を描く。花弁・蕊は黄色漆、花芯は黒色漆である。高台内は黒・黄色漆で菊花・葉・蕾を描く。図 4-8-13 は報告書によると内面赤色漆、外面黒色漆で、外面口縁部に赤色漆で雲形を描き、その上に小形の菱形金箔を置く。外面胴部の大形の菱形金箔の間に黄色漆で菊花・枝葉を描く。花弁・蕊は黄色漆、花芯は不明である。図 4-8-14、15 は報告書によると内面赤色漆、外面黒色漆で、外面口縁部に短冊形・小形の菱形金箔を置き、その上にから黄色漆で斜線を描く。外面胴部の大形の菱形金箔の間に黄色漆で菊花・枝葉を描く。花弁・蕊は黄色漆、花芯は赤色漆である。図 4-8-16 は報告書によると外面黒色漆で、外面胴部の大形の菱形金箔の間に黄色漆で菊花・枝葉を描く。花弁・蕊は黄色漆、花芯は赤色漆である。高台内は黄色漆で菊花・葉・蕾を描く。花弁・蕊は黄色漆、花芯は赤色漆である。いずれも詳細は不明である。

・**港区汐留遺跡Ⅱ**（７点）（東京都埋蔵文化財センター2000）

遺跡は仙台藩伊達家、会津藩保科家、龍野藩脇坂家屋敷が該当し、龍野藩脇坂家屋敷の 6K-落ち込み 11、5L-133、4K-23~25K~L、6K-21E、6L-3~6E グリッドから出土した時期不明の飯椀、椀蓋、汁椀である。図 4-9-1 は内面赤色漆、外面黒色漆で、外面口縁部に赤色漆で雲形を描き、その上に短冊形・小形の菱形金箔を置き、さらにその上から黄色漆で斜線を描く。外面胴部の大形の菱形金箔の間に黄色漆で菊花・枝葉を描く。花弁・蕊は黄色漆、花芯は赤色漆である。図 4-9-2 は内面赤色漆、外面黒色漆で、外面口縁部に赤色漆で雲形を描き、その上に短冊形・小形の菱形金箔を置き、さらにその上から黄色漆で斜線を描く。外面胴部の大形の菱形金箔の間に黄色漆で菊花・枝葉を描く。蕊はなく、花弁は黄色漆、花芯は赤色漆である。高台内は黄色漆で菊花・葉・蕾を描き、花弁・蕊は黄色漆、花芯は赤色漆である。図 4-9-3、4 は内面赤色漆、外面黒色漆で、外面口縁部に赤色漆で雲形を描き、その上に短冊形・小形の菱形金箔を置き、さらにその上から黄色漆で斜線を描く。外面胴部の大形の菱形金箔の間に黄色漆で菊花・枝葉を描く。花弁・蕊は黄色漆、花芯は赤色漆である。図 4-9-5 は内面赤色漆、外面黒色漆で、外面口縁部に赤色漆で雲形を描き、

その上に短冊形・小形の菱形金箔を置き、さらにその上から黄色漆で斜線を描く。外面胴部の大形の菱形金箔の間に黄色漆で菊花・枝葉を描く。花弁・蕊は黄色漆、花芯は赤色漆である。高台内は黄色漆で菊花・葉を描き、花弁・蕊は黄色漆、花芯は赤色漆である。黄色漆が全体的に赤みを帯びている。図 4-9-6 は内面赤色漆、外面黒色漆で、外面口縁部に赤色漆で雲形を描き、その上に短冊形・小形の菱形金箔を置き、さらにその上から黄色漆で斜線を描く。外面胴部の大形の菱形金箔の間に黄色漆で鶴亀を描く。高台内には黄色漆で記号のような文様が描かれている。図 4-9-7 は内面赤色漆、外面黒色漆で、外面口縁部に赤色漆で雲形を描き、その上に短冊形・小形の菱形金箔を置き、さらにその上から黄色漆で斜線を描く。外面胴部の大形の菱形金箔の間に黄色漆で菊花・枝葉を描く。花弁・蕊は黄色漆、花芯は赤色漆である。高台内は黄色漆と金箔で菊葉・蕾を描き、菊葉は黄色漆である。蕾を金箔で押し、その上から黄色漆で蕾の輪郭を描く。黄色漆が全体的に赤みを帯びている。

・港区豊後森藩久留島家・丹波亀山藩松平家屋敷跡遺跡（1 点）（港区教育委員会 2014）

遺跡は豊後森藩久留島家、丹波亀山藩松平家屋敷に該当し、丹波亀山藩松平家屋敷の 176 号遺構（井戸）18 世紀代から出土した椀蓋である。図 4-9-8 は内面赤色漆、外面黒色漆で、外面口縁部に赤色漆で雲形を描き、その上に短冊形、小形の菱形金箔を置き、さらにその上から黄色漆で斜線を描く。外面胴部の大形の菱形金箔の間には黄色漆で菊花・枝葉を描く。花弁・蕊は黄色漆、花芯は赤色漆である。高台内には黄色漆で菊葉・蕾、黄色漆と金箔で扇を描く。扇面を金箔で押し、その上から黄色漆で扇の要・扇骨描く。

・文京区春日町遺跡第Ⅲ・Ⅳ地点（5 点）（文京区遺跡調査会 2000）

水戸藩徳川家小石川邸の整地層（R-1、R-2、R-3、R-5 グリッド）から出土した時期不明の汁椀、椀蓋、椀類である。図 4-9-9 は内面赤色漆、外面黒色漆で、外面胴部の大形の菱形金箔の間に赤色漆で鶴亀を描く。図 4-9-10 は内面赤色漆、外面黒色漆で、外面胴部の大形の菱形金箔の間に黄色漆で菊花・枝葉を描く。花弁・蕊は黄色漆、花芯は赤色漆である。高台内は黄色漆で菊花・葉を描く。蕊はなく、花弁は黄色漆、花芯は赤色漆である。図 4-9-11 は内面赤色漆、外面黒色漆で、外面口縁部に赤色漆で雲形を描き、その上に短冊形、小形の菱形金箔を置き、さらにその上から黄色漆で斜線を描く。外面胴部の大形の菱形金箔の間に赤色漆で鶴亀を描く。図 4-9-12 は報告書によると内面赤色漆、外面黒色漆で、外面胴部の大形の菱形金箔の間に赤・黄色漆で亀松を描く。図 4-9-13 は内面赤色漆、外面黒色漆で、外面口縁部に赤色漆で雲形を描き、その上に短冊形、小形の菱形金箔を置き、さ

らにその上から黄色漆で斜線を描く。外面胴部の大形の菱形金箔の間に黄色漆で菊花・枝葉を描く。花弁・蕊は黄色漆、花芯は赤色漆である。高台内は黄色漆で菊蕾を描く。黄色漆が全体的に赤みを帯びている。

・文京区小石川牛天神下遺跡（1 点）（都立文京盲学校遺跡調査班 2000）

旗本本目家屋敷の 198 号遺構（池状遺構）から出土した 17 世紀中葉の椀蓋である。図 4-9-14 は内面赤色漆、外面黒色漆で、外面口縁部に赤色漆で雲形を描き、その上に短冊型、小型の菱形金箔を置き、さらにその上から黄色漆で斜線を描く。大型の菱形金箔の間に赤色漆で菊花・枝葉を描く。蕊はなく、花弁は赤色漆、花芯は金箔である。高台内は赤色漆で菊花・葉・蕾を描く。菊花は金箔が押され、その上から赤色漆で花弁が線描きされる。菊葉・蕾は赤色漆である。高台内に穿孔があり、食器に使用された後、別の用途に転用されたと考えられる。

以上のように、近世江戸遺跡出土の南部箔椀は菱形金箔以外の外面胴部の文様意匠に菊花を用いるものが大半で、竹（もしくは松竹）、鶴亀、高台内に扇を用いるものは少ない。竹の事例は図 4-8-1、2、5 である。鶴亀の事例は図 4-9-6、9、11、12 である。扇の事例は図 4-8-8、図 4-9-8 である。

また、菊花を描くにも蕊の有無、花弁・花芯・枝葉・蕾で部位によって色を違えたり、金箔を用いることもある。図 4-10 のように、伝世品の浄法寺椀でも菊花の描き方にバリエーションがある。

以上の資料から、次のような細分が可能である。

Ⅰ外面胴部の菱形金箔以外の文様意匠の構成要素が何か

①雲形の有無

②菊花文

③松竹文

④鶴亀文

④その他

Ⅱそれぞれがどのような素材で描かれているか（高台内も含める）

①金箔

②赤色漆

③黄色漆

④その他

特に類例の多い菊花の文様意匠はⅡの分類が重要である。また、これにより同じ遺跡、遺構から出土した南部箔椀でも文様意匠が異なることが明らかになった。

時期が不明な中央区京葉線八丁堀遺跡、港区愛宕下遺跡Ⅰ、港区汐留遺跡Ⅱ、文京区春日町遺跡第Ⅲ・Ⅳ地点以外は、いずれも 17 世紀前～中葉の遺構から出土している。南部箔椀は出土する時期が限られており、年代指標となる資料である。

最後に、前述したように生産地として推定される東北地方での出土例を挙げる。

・福島県会津若松市城東町遺跡（1 点）

遺跡は若松城外堀と武家屋敷跡に該当し、特に蒲生忠郷の時代には本丸防備の要として重臣の屋敷が与えられていた。16 世紀末～17 世紀前半の 6 号遺構（性格不明）から出土した（会津若松市教育委員会文化課 1994;小林 2004)。図 4-9-15 は外面黒色漆、内面赤色漆で、外面口縁部に赤色漆で雲形、その上に短冊形・小形の菱形金箔を置き、さらにその上から黄色漆で斜線を描く。外面胴部の大形の菱形金箔の間に黄色漆で菊花を描く。花弁・蕊は黄色漆、花芯は赤色漆である。高台内は黄色漆で菊葉・蕾を描く。

（2）吉野椀

第 1 章の出土漆製品の集成から、近世江戸遺跡では 10 遺跡（内訳:千代田区 3 遺跡、港区 2 遺跡、新宿区 3 遺跡、文京区 1 遺跡、墨田区 1 遺跡）13 点の出土があった（図 4-11)。なお、第 1 章の集成対象とはならなかったが、発掘調査報告書に写真のみ掲載されている資料が 2 遺跡 2 点（台東区下谷遺跡下谷二丁目 1 番地点出土吉野椀 1 点、江東区千田遺跡出土吉野椀蓋 1 点）ある。

・千代田区飯田町遺跡（1995）（1 点）（飯田町遺跡調査会 1995）

高松藩松平家屋敷の 716 号遺構から出土した椀である。図 4-11-1 は報告書によると内面黒色漆、外面黒色漆で、外面に芙蓉を描く。樹種はブナ属である（高橋 1995)。

・千代田区飯田町遺跡（2001）（1 点）（千代田区飯田町遺跡調査会 2001）

高松藩松平家屋敷の 6268 号遺構（瓦廃棄土坑）から出土した 18 世紀末の椀蓋である。6268 号遺構は寛政元年（1789)、寛政 4 年（1792）の屋敷内の火災処理の廃棄坑であり、一部、被熱し炭化している。図 4-11-2 は内面黒色漆、外面黒色漆で、外面と高台内に赤色漆で芙蓉を描く。

・千代田区溜池遺跡（2011）（1 点）（東京都埋蔵文化財センター2011）

山王日枝神社の隣接した二本松藩丹羽家屋敷の 791 号遺構から出土した 18 世紀中葉頃

の椀蓋である。図 4-11-3 は報告書によると内面黒色漆、外面黒色漆で、外面と高台内に赤色漆で芙蓉を描く。

・港区汐留遺跡（1996）（1 点）（汐留地区遺跡調査会 1996）

遺跡は仙台藩伊達家、会津藩保科家屋敷が該当し、仙台藩伊達家屋敷の 73 号遺構（井戸）から出土した 18 世紀前半～19 世紀初頭の椀蓋である。図 4-11-4 は報告書によると内面赤色漆、外面黒色漆で、外面と高台内に赤色漆で芙蓉を描く。

・港区旧芝離宮庭園遺跡（1 点）（旧芝離宮庭園調査団 1988）

明治 9 年（1876）に芝離宮となる以前、江戸時代は小田原藩大久保家屋敷に該当し、B17-Ⅳ層から出土した 18 世紀後の皿である。口径が約 17 ㎝のため、皿よりも盆に近い形態である。図 4-11-5 は内面黒色漆、外面黒色漆で、内面に赤色漆で芙蓉を描く。

・新宿区三栄町遺跡（1 点）（東京都新宿区教育委員会 1988）

遺跡は伊賀者、御持組大縄地の御家人組屋敷に該当し、御持組大縄地の 1-a 号（土坑）遺構から出土した 19 世紀代の椀蓋である。図 4-11-6 は報告書によると内面黒色漆、外面黒色漆で、外面と高台内に赤色漆で芙蓉を描く。

・新宿区若葉三丁目遺跡Ⅲ（1 点）（加藤建設株式会社文化財調査部 2016）

拝領町屋内の盛土（盛土 3 面,D-3 グリッド）から出土した 18 世紀末～19 世紀前葉の椀蓋である。図 4-11-7 は内面黒色漆、外面黒色漆で、外面と高台内に赤色漆で芙蓉を描く。

・新宿区内藤町遺跡（2002）（1 点）（東京都埋蔵文化財センター2002）

遺跡は旗本・御家人屋敷に該当し、D-5 グリッドから出土した 19 世紀代の椀蓋である。図 4-11-8 は報告書によると内面外面の色は不明で、外面と高台内に赤色漆で芙蓉を描く。

・文京区東京大学本郷構内の遺跡工学部 1 号館地点（4 点）（東京大学埋蔵文化財調査室 2005）

遺跡は加賀藩前田家屋敷に該当し、隣接する水戸藩邸との地境にあたる SK01（土坑）遺構から出土した 18 世紀後葉～19 世紀代の椀である。図 4-11-9～12 は内面黒色漆、外面黒色漆で、外面に赤色漆で芙蓉を描く。

・墨田区錦糸町駅北口遺跡（1 点）（墨田区錦糸町駅北口遺跡調査団 1996）

旗本大嶋家屋敷の 61 号（池）遺構から出土した 18 世紀中頃の椀蓋である。図 4-11-13 は内面黒色漆、外面黒色漆で、外面と高台内に赤色漆で芙蓉を描く。

以上のようにいずれも武家屋敷を中心に 18 世紀中～19 世紀前葉の遺構から出土している。港区汐留遺跡（1996）以外は内面外面とも黒色漆が塗布され、赤色漆で芙蓉を描く。

いずれの器種においても芙蓉の描き方、筆致による差が大きい。出土事例が少なく、帰属する年代幅が狭いため、これを単に経年変化による簡略化とは言い難い。したがって、高台径や腰部の立ち上がりなど形態的な差異によって分類することが望ましいが、個体差が大きく、グルーピングまで至っていないのが現状である。

これらの要因として、吉野塗の赤色漆絵文様にはバラエティがあり、前述の北野氏の指摘だけでなく、すべてが吉野から一元的に供給されたものではなく（四柳 2009)、一部京都でも作られていた（上神・岡本 2008）ことが考えられる。

(3) 朽木盆

第 1 章の出土漆製品の集成から、近世江戸遺跡では 1 遺跡 1 点の出土があり、新宿区發昌寺跡である（図 4-11)。ただし、朽木盆に類似した菊花盆の出土例は他に 2 点あるが、花弁の縁が二重に描かれており、且つ残存度がわずかで朽木盆とは判別し難い。

・新宿区發昌寺跡（1 点）（新宿区南元町遺跡調査会 1991）

遺跡は、發昌寺墓地に該当し、15 号（墓）遺構の副葬品である。埋葬施設は甕棺で、被葬者は性別不明の幼児である。甕棺（F 類）の年代は 19 世紀前半～中葉である。図 4-11-14 は内面黒色漆、外面黒色漆で、内面に赤色漆で菊文を描く。

3 南部箔椀、吉野椀の文化財科学的分析

これらの文様意匠に特徴のある漆器の材質・製作技法について、『漆椀百選』(荒川 1975) に一部記されているもの、北野信彦の文化財科学的な分析（北野 2005a, b）によって明らかにされているものがある。第 2 章、第 3 章で取り上げた遺跡からも南部箔椀、吉野椀が出土しており、文化財科学的な分析をおこなった。ここでは、分析の一例として挙げる。

(1) 南部箔椀　紀尾井町遺跡Ⅱ出土資料

第 2 章取り上げた紀尾井町遺跡Ⅱ出土の平椀（分析資料番号:紀尾井町遺跡Ⅱ-10）で 106 号遺構（土坑）から出土した、丹波亀山藩菅沼家屋敷期の 17 世紀中葉の資料である（写真 4-1)。

木胎に使用された樹種はブナ属である（鈴木 2013)。内面に赤色漆、外面に黒色漆が塗布され、外面の主文様は漆絵で、黄色漆で菊花・枝葉を描く。花弁・蕊は黄色漆、花芯は赤色漆である。外面口縁部に赤色漆で雲形が巡り、その上に小形の菱形金箔（△状）が押

されている。さらにその上から黄色漆で斜線を描く。高台内に扇と菊枝葉・蕾が描かれ、菊枝葉・蕾は黄色漆である。扇の中骨は黄色、扇面は赤色漆で描かれ、扇面の上に金箔を置く。さらにその上から黄色漆で扇骨を描く。

分析方法は、蛍光 X 線分析（定性分析）、クロスセクション観察である。

【蛍光 X 線分析】

内面の赤色漆から Fe が検出されベンガラ（第二酸化鉄 Fe_2O_3）と判断される。外面文様部の赤色漆から Fe が検出されベンガラ（第二酸化鉄 Fe_2O_3）、黄色漆から As が検出され石黄（硫化ヒ素 As_2S_3）、金箔から Au が検出され金と判断される。

【クロスセクション観察】

図 4-12①（外面文様部の黄色漆）a:漆絵加飾（菊花・枝葉）にあたる黄色漆層で、層厚は約 10μm である。黄色顔料である石黄の粒子が確認できる。b:上塗りにあたる褐色漆層で、層厚は約 15μm である。c:下地にあたる炭粉渋下地層で、層厚は 30μm である。

図 4-12②（外面文様部の赤・黄色漆）a:漆絵加飾（斜線）にあたる黄色漆層で、層厚は約 6μm である。黄色顔料である石黄の粒子が確認できる。b:漆絵加飾にあたる赤色漆層（雲形）で、層厚は約 15μm である。赤色顔料であるベンガラの粒子が確認できる。c:上塗りにあたる褐色漆層で、層厚は約 18μm である。d:下地にあたる炭粉渋下地層で、層厚は 2μm である。

図 4-12③（外面文様部の赤・黄色漆、金箔）a:漆絵加飾（斜線）にあたる黄色漆層で、層厚は約 5μm である。黄色顔料である石黄の粒子が確認できる。b:切箔・箔絵加飾（小形の菱形金箔）にあたる金箔層で、金箔の厚さは約 2μm である。c:漆絵加飾（雲形）にあたる赤色漆層で、層厚は約 15μm である。赤色顔料であるベンガラの粒子が確認できる。d:上塗りにあたる褐色漆層で、層厚は約 12μm である。e:下地にあたる炭粉渋下地層で、層厚は 4μm である。

先行研究では、『漆椀百選』（荒川 1975）の浄法寺椀の特徴として「〈塗〉内辨柄塗・外黒漆塗で、下地は余り厚くなく、渋下地様のものも見られる。」、「〈加飾〉雲形と変菱形には辨柄を用ひ、斜線と枝菊は黄漆で描き、花心に黄の彩漆粉を蒔いたと思はれるものも見られるが、これは顔料の粒子が時代を経て露出したものかもしれない。花や蕾に箔を用いたものは、花瓣に針描を用ひ、花心には辨柄を点じてゐる。箔は大小の方形と短冊形で、菱形は用いられてゐない。（中略）雲形上には大小の方形箔を並べ、短冊形を×状に配してゐるが、きはめて規則的に配列したものや、やゝ自由に配したものがある。」が挙げられてい

る。また、北野信彦によると、近世江戸遺跡出土の南部箔椀の木地の樹種はブナ属で、炭粉下地に 1～2 層の上塗りで内面の赤色漆にベンガラ、外面の文様に石黄とベンガラが使用されていた（北野 2005a)。これらの先行研究と紀尾井町遺跡Ⅱ出土の平椀の分析結果は一致した。

(2) 吉野椀　若葉三丁目遺跡Ⅲ出土資料

第 3 章で取り上げた若葉三丁目遺跡Ⅲ出土の椀蓋（分析資料番号:若 85）である（写真 4-2)。盛土（盛土 3 面,D-3 グリッド）から出土し、拝領町屋の 18 世紀末～19 世紀前葉の資料である。

木胎に使用された樹種はブナ属である（能城・都築 2016)。内面に黒色漆、外面に黒色漆が塗布され、外面・高台内に漆絵で赤色漆の芙蓉が描かれている。

分析方法は、蛍光 X 線分析（定性分析)、クロスセクション観察である。

【蛍光 X 線分析】

内面の赤色漆から Fe が検出されベンガラ（第二酸化鉄 Fe_2O_3）と判断される。外面文様部の赤色漆から Fe が検出されベンガラ（第二酸化鉄 Fe_2O_3）と判断される。

【クロスセクション観察】

図 4-13①（内面の黒色漆）a:上塗りにあたる褐色漆層で、層厚は約 10μm である。表面付近が変色している。b:下地にあたる炭粉渋下地層で、層厚は約 5μm である。c:木地にあたる。

図 4-13②（外面の黒色漆、外面文様部の赤色漆）a: 漆絵加飾にあたる赤色漆層で、層厚は約 2μm である。赤色顔料であるベンガラの粒子が確認できる。b:上塗りにあたる褐色漆層で、層厚は約 7μm である。表面付近が変色している。c:下地にあたる炭粉渋下地層で、層厚は約 3μm である。d:木地にあたる。

北野信彦の先行研究によると、近世江戸遺跡出土の吉野椀の木地の樹種はブナ属、サクラ亜属が使用されていたが、ブナ属の使用比率が高かった。炭粉下地に 1～2 層の上塗りで、吉野絵の赤色漆は朱とベンガラが使用されていたが、朱の使用比率が高かった。これらの様相と若葉三丁目遺跡Ⅲ出土の椀蓋の分析結果は概ね一致した。一方、長崎県長崎市万才町遺跡（高島秋帆邸跡)、伝世の加賀藩家老本多家所蔵什器には錆下地が使用された奢侈品からやや良質の規格品があり、若干の品質差がある（北野 2005b)。

結語

近世江戸遺跡出土の南部箔椀・吉野椀・朽木盆は以下のような様相がみられた。

南部箔椀は、12 遺跡（内訳:千代田区 5 遺跡、中央区 1 遺跡、港区 4 遺跡、文京区 2 遺跡）から大名屋敷を中心に出土し、その年代は 17 世紀前葉～中葉である。

近世江戸遺跡出土の南部箔椀は、『漆椀百選』（荒川 1975）の浄法寺椀の特徴としてあげられている材質、装飾技法と一致している。また、近世江戸の南部箔椀の木地の樹種はブナ属、炭粉下地に 1～2 層の上塗りで内面の赤色漆にベンガラ、外面の文様に石黄とベンガラが使用されていたとされる（北野 2005a）。これらの先行研究と紀尾井町遺跡Ⅱ出土の南部箔椀の平椀の文化財科学的な分析結果は一致した。

南部箔椀は盛岡藩家老席日誌『雑書』寛永 21 年（1644）4 月 17 日条によれば、許可なく領外への移出を禁止する御留品で、藩の統制品として指定されていた。実際に盛岡城内でも身分の上の人たちが使用した（工藤 2013）。江戸遺跡では東北地方に関連する武家屋敷からの出土ではなかったが、工藤の指摘するような、上位の階層によって一般的な流通ではない限られたルートでもたらされたものと考えられる。

吉野椀は 10 遺跡（内訳:千代田区 3 遺跡、港区 2 遺跡、新宿区 3 遺跡、文京区 1 遺跡、墨田区 1 遺跡）から大名屋敷を中心に出土し、その年代は 18 世紀中葉～19 世紀前葉である。

先行研究によると、近世江戸遺跡出土の吉野椀の木地の樹種はブナ属、サクラ亜属のうちブナ属の使用比率が高かった。炭粉下地に 1～2 層の上塗りで、吉野絵の赤色漆は朱とベンガラが使用され、朱の比率が高かった（北野 2005b）。これらの様相と若葉三丁目遺跡Ⅲ出土の椀蓋の文化財科学的な分析結果は概ね一致した。一方、長崎県長崎市万才町遺跡（高島秋帆邸跡）、伝世の加賀藩家老本多家所蔵什器には錆下地が使用されたやや良質の規格品から奢侈品があり、若干の品質差がある（北野 2005b）。

吉野椀を含む茶会席用の漆器は 18 世紀後半に一般化したとされる（北野 2003,2005b）。近世江戸では、吉野椀は概ね時期が一致する 18 世紀中葉以降に大名屋敷遺跡から多く出土しており、茶道と繋がりがあると考えられる。なお、吉野絵は今日でも茶の湯の器の文様として用いられている（瀬山 2010）。

朽木盆は、近世江戸遺跡では新宿区の 1 遺跡から出土しており、甕棺墓の副葬品である。甕棺墓は低禄の旗本および藩士の墓にあたるため、日常雑器とは考え難い。

以上のことから、武家屋敷を中心に出土する南部箔椀、吉野椀、朽木盆は出土の様相や

伝世品、口承資料を含めた文献史料をふまえて、日常の食器というより贈答、宴席、茶の湯など特別な目的・用途の漆器であったと考えられる。

図 4-1　秀衡椀（上）、秀衡椀の文様の展開図（下）

（岩手県立博物館 2010『いわての漆』;荒川 1975『漆椀百選』より転載）

図 4-2　南部椀（上）、南部椀の文様の展開図（下）

（岩手県立博物館 2010『いわての漆』;荒川 1975『漆椀百選』より転載）

図 4-3　正法寺椀（岩手県立博物館 2010『いわての漆』より転載）

図 4-4　朱刷毛目塗松竹梅漆絵膳椀（福島県立博物館 2004『会津絵　会津の漆絵漆器』より転載）

図 4-5　菊漆絵絲目椀（福島県立博物館 2004『会津絵　会津の漆絵漆器』より転載

図 4-6　吉野椀（浦添市美術館 2008『日本の漆と暮らし-上神コレクション-』より転載）

図 4-7　朽木盆（浦添市美術館 2008『日本の漆と暮らし-上神コレクション-』より転載）

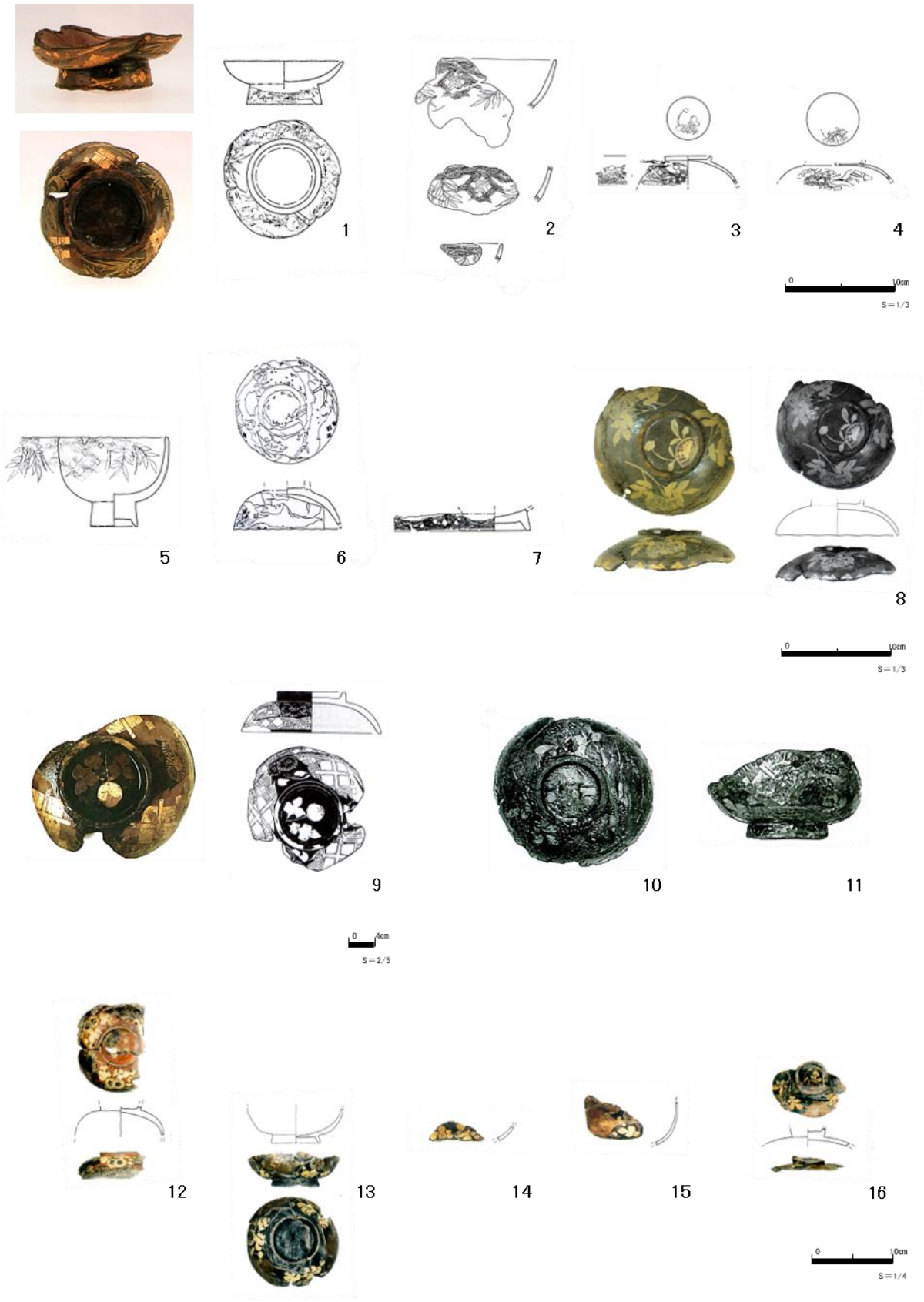

図 4-8 近世江戸遺跡出土の南部箔椀 1

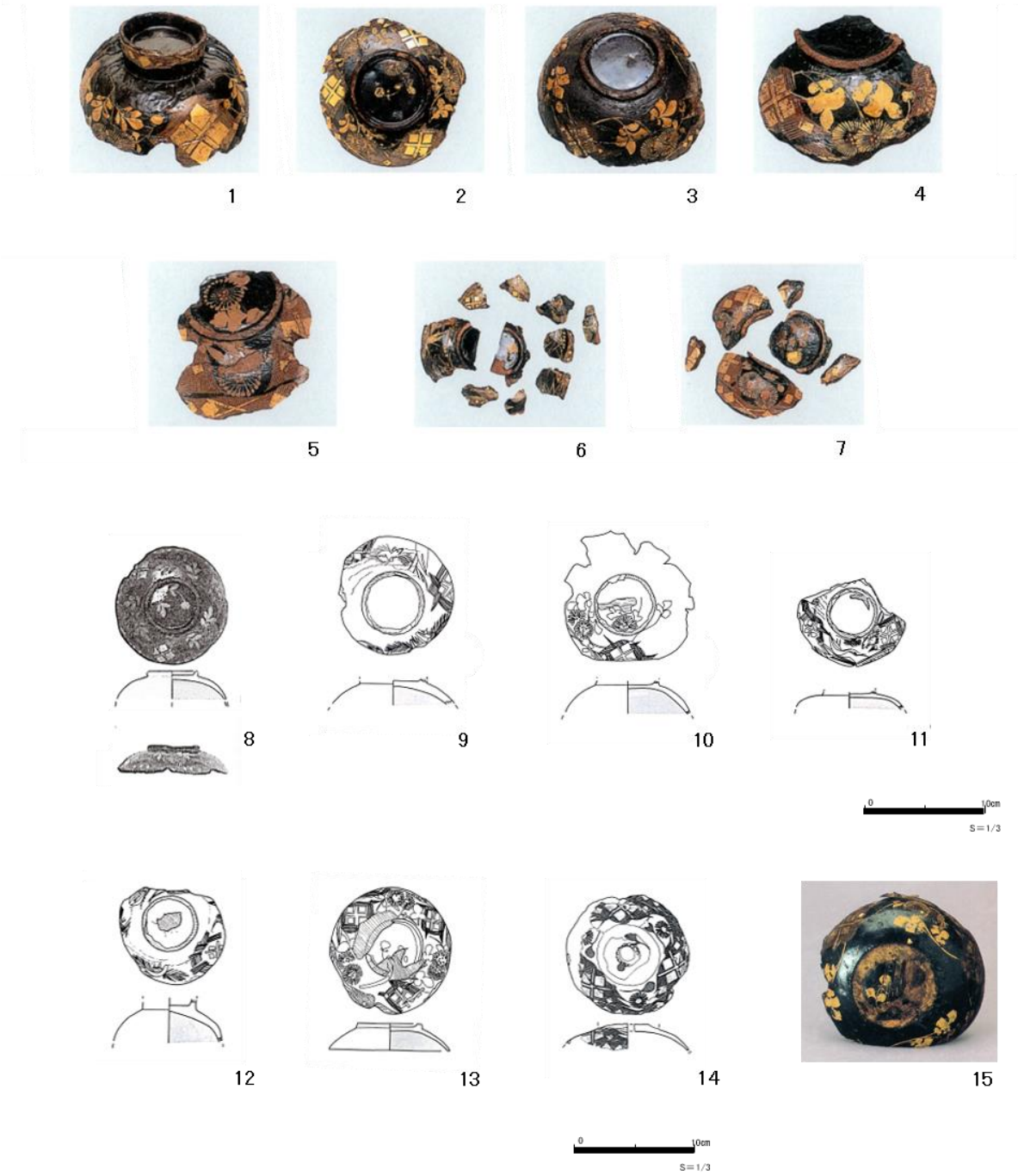

図 4-9 近世江戸遺跡出土の南部箔椀 2

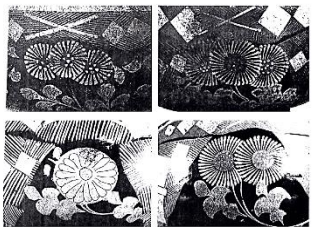

図 4-10 菊花文様の描き方の違い（荒川 1975『漆椀百選』より転載）

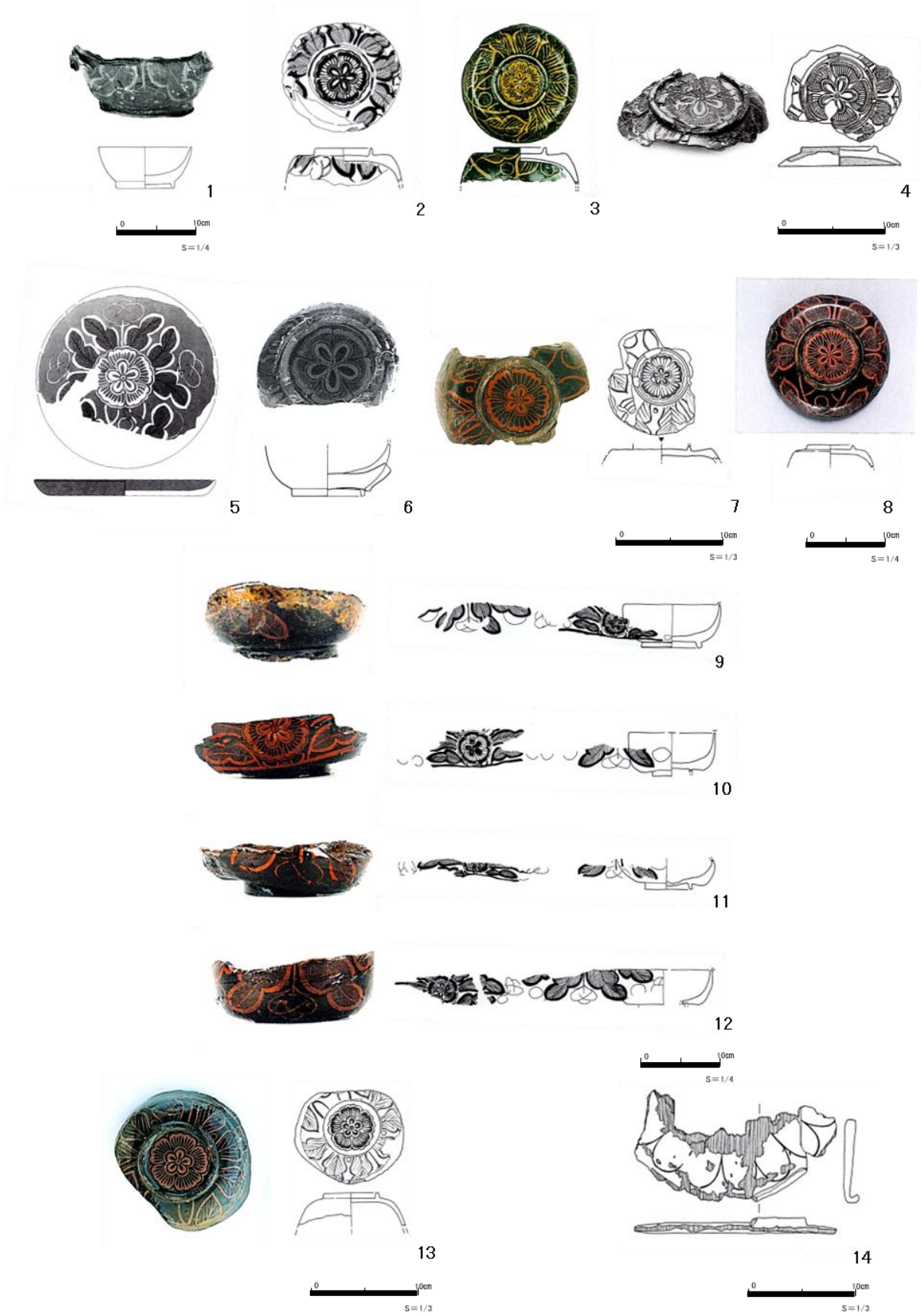

図 4-11　近世江戸遺跡出土の吉野椀、朽木盆

写真 4-1　紀尾井町遺跡Ⅱ出土南部箔椀（右:内面、左:外面）

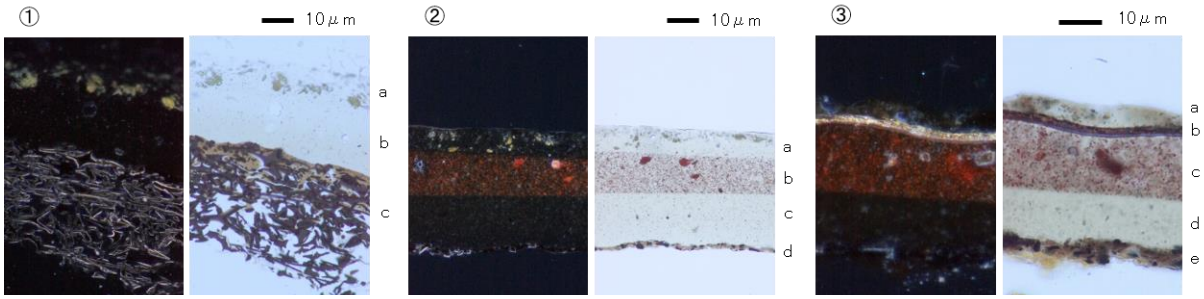

図 4-12　紀尾井町遺跡Ⅱ出土南部箔椀クロスセクション

写真 4-2　若葉三丁目遺跡Ⅲ出土吉野椀（右:内面、左:外面）

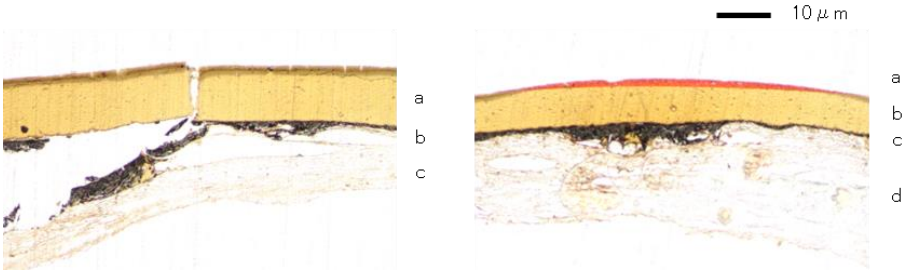

図 4-13　若葉三丁目遺跡Ⅲ出土吉野椀クロスセクション（右:内面、左:外面）

第 5 章　近世江戸遺跡出土の漆工用具

はじめに

近世でも中世の流れをひく「職人尽絵」の類が多く製作され、塗師や蒔絵師だけでなく烏帽子折、印籠師、鞘師などの漆を扱う職人の姿が描かれている。しかし、ここに全ての漆工用具が描かれておらず、職人に関する文献史料も十分でないため不明な点が多い。

また、都市への漆液の流通も不明点が多い。京都を中心に描かれた『人倫訓蒙図彙』(1690)の漆屋（図 5-1）には「諸のこし漆あり、并砥粉をも商。所々にあり。」とあり（朝倉 1990)、「こし漆」がどの精製段階の漆液をさすか不明であるが、漆液が都市に流通していたことがわかる。また、江戸においては東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院入院棟 A 地点から「うるしや長兵へ」、「弐百目入」と墨書された曲物製漆液容器（写真 5-1）が出土し、『人倫訓蒙図語彙』の漆桶・樽の後ろに描かれているような曲物に小分けにされて流通していたと考えられる。このように、近世江戸遺跡から出土する漆工用具は絵画資料を補完し、文献史料では明らかにされない都市の漆工の実態を示すものといえる。

本章では、近世江戸遺跡から出土した漆工用具と現在の漆工用具と比較をおこなうとともに、現在の漆工用具ではみられない用具の文化財科学的分析を実施し、近世江戸における漆利用と職人の関係について考えてみることにしたい。

1 現在の漆工用具

現在の漆工用具がまとめられているものとして『漆工手帳Ⅱ　材料と用具』(1960)、『日本漆工の研究』(1966)、『漆芸の伝統技法』(1986）が主に挙げられる。髹漆や蒔絵などの加飾の作業工程によって道具は多種多様である。ここでは佐々木英の『漆芸の伝統技法』から、漆塗りの基本工程に必要な用具を以下に挙げる（佐々木 1986)。

（i）漆を扱うのに必要なもの

定盤　漆を練ったり、下地を調製したりするときに用いる板で、パレットの役目も兼ねる（図 5-2)。

箆と箆木　パレットナイフの役目のほか、漆塗りの前段階としての“下地”付けに使われる。箆木は箆をつくるための板。塗師刀で削って箆に仕上げる（図 5-3)。

濾し紙　漆の中に入っている埃などをとり除くために必要な濾過紙。

茶碗　濾した漆は、どんぶり、茶碗、猪口などに入れておく（図 5-4)。

蓋紙　漉した漆を入れた器に用いる紙の蓋（図 5-5)。

（ii）塗りに必要なもの

通し刷毛　毛髪の素直なものを梳いて漆で固め、ヒノキの薄板ではさみ、木端も板を当ててつくる。刷毛がすり減ったら、塗師刀で削り出して用いる（図 5-5)。

油箱　使い終わった漆刷毛はナタネ油でていねいに洗い、漆をつき出す（図 5-6)。

（iii）その他

塗師刀、切出し小刀、小鉋　箆を平に削ったり、漆刷毛を切り出したり、各自が扱いやすいにつくるために用いる刃物。切出し小刀はこれに準じ多目的に使われる。小鉋は箆削りなどに用いる（図 5-7)。

裁ち鋏　布を切るのに用いる。

角粉盤　20 ㎝四方ほどの、厚さのある、目のない竪木の板で、角粉などを潰す板。

※角粉　鹿の角を切ったときに、角の中にある石灰質を蒸焼きにした白粉末。呂色磨きに用いる。

以上のように、現在の漆工用具は漆を扱うためのものと漆を塗るためのもの、その他の用具や材料の加工に使用するものに大別される。

2 近世江戸遺跡から出土した漆工用具

第 1 章で述べたように、近世江戸遺跡から出土した漆工用具は 47 遺跡（内訳:千代田区 4 遺跡、港区 5 遺跡、新宿区 26 遺跡、文京区 6 遺跡、台東区 2 遺跡、墨田区 1 遺跡、渋谷区 1 遺跡、豊島区 2 遺跡）708 点である。出土点数上位 2 器種は濾し紙 497 点、貝パレット 73 点である。濾し紙は 18 世紀代以降に、貝パレットは 17 世紀代以降に出土がみられる。上位 2 器種全てで 18 世紀代の出土点数が多い。濾し紙の出土点数が圧倒的に多く、漆工用具全体の約 70%を占める。

出土の傾向として、漆液容器、溜容器、漆箆、漆刷毛、貝パレット、濾し紙などがセットになって出土する遺跡と貝パレット、濾し紙のみもしくは溜容器と貝パレットのセットになって出土する遺跡に大別できる。前者は 17、18 世紀の武家地から出土し事例は少なく、後者は時期、遺跡性格を問わず出土し事例は多い。なお、後者は若干であるが 18 世紀以降に出土点数が増える傾向にあり、濾し紙よりも貝パレットが単体で出土する頻度が高い。

ここでは、漆液容器、溜容器、漆箆、漆刷毛、貝パレット、濾し紙などがセットになっ

て出土する遺跡の中で、一つの遺構から 3 器種以上出土し且つ漆工の工程が推定できるものを漆工用具一括資料としてその様相を述べる。

・**千代田区外神田四丁目遺跡**（40 点）（東京都埋蔵文化財センター2004）

郡上藩遠藤家屋敷もしくはそれ以前の遺構と考えられる 3128 号遺構（土坑）から出土した 17 世紀代の資料である。3128 号遺構からは定盤 2 点、漆箆 19 点、漆刷毛 1 点、不明（道具の加工木片、未製品を含む）15 点の計 37 点が出土した。写真 5-2 は代表的なものである。

定盤の一部が焦げていることから火災に遭い、一括廃棄されたものと考えられる。また、箆に付着した漆や下地材に複数の種類があることから、工房のような体制で複数の作業がおこなわれていたと推定されている。

・**新宿区尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅸ**（461 点）（東京都埋蔵文化財センター2002）

尾張藩徳川家市谷邸の東御殿の東側に該当し、「御道具方役所」「御道具方」（「市ヶ谷屋敷平面図」（1747～1786））、「土間」「勝手」「御細工方」（「市谷御屋敷之図」（1794～1871））、「御細工所」「コシカケ」（「元治元年御屋形御長屋之図」（1864））にあたる、48 地点 173-3B-1 号遺構（土坑）から出土した 18 世紀後葉から 19 世紀初頭の資料である。173-3B-1 号遺構からは磁器製漆溜容器 5 点、陶器製漆溜容器 4 点、曲物製漆溜容器 1 点、漆椀製漆溜容器 1 点、貝パレット 13 点,濾し紙 304 点、研炭 1 点の計 329 点が出土した。

なお、48 地点以外にも東御殿に隣接する「御土蔵」（「市ヶ谷屋敷平面図」、「市谷御屋敷之図」）にあたる 42 地点、東御殿周辺の「大工小屋」（「市谷御屋敷之図」）にあたる 43 地点、市谷邸南側の長屋空間にあたる 44 地点からも特に大量の漆濾し紙のような漆工用具がまとまって出土している。

・**新宿区坂町遺跡**（24 点）（新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館埋蔵文化財課 2002）。

御持組大縄地に該当し、同心屋敷地の 4 号遺構（ごみ穴）から出土した 18 世紀後半の資料である。4 号遺構の遺物の帰属年代が 17 世紀代から幕末までと幅広いが、主体となる遺物は 4-b（中層）に属するものである。写真 5-3 は代表的なものである。

4 号遺構からは漆液容器 2 点、陶器製漆溜容器 2 点、曲物製漆溜容器 1 点,漆椀製漆溜容器 5 点、漆箆 2 点、漆刷毛 1 点、貝パレット 3 点、濾し紙 5 点、濾し布 1 点、濾し紙束 1 点、漆蓋紙 1 点の計 24 点が出土した。また、報告書に図示されたもの以外に、4 号遺構からは陶磁器製漆溜容器 19 個体 47 破片、漆椀の漆溜容器 12 個 23 片、貝製の漆溜容器・パレット 24 個体 47 破片、濾し紙 522 点が出土している。

なお、4 号遺構の遺物は、遺跡が位置する四谷地域周辺の組屋敷、町人地、中・上級の武家屋敷のものと思われる異なる身分・階層の複数の世帯に由来すると推測されている。

・文京区春日町遺跡第Ⅵ地点（22 点）（文京区遺跡調査会 1999）

水戸藩徳川家小石川邸の北端の長屋空間に該当する 54 号遺構（ごみ穴）から出土した 18 世紀中～19 世紀代の資料である。54 号遺構からは漆液容器 1 点、磁器製漆溜容器 1 点，陶器製漆溜容器 7 点、曲物製漆溜容器 2 点、貝パレット 4 点、濾し紙 4 点の計 19 点が出土した。写真 5-4 は代表的なものである。

なお、第 1 章の集成には入れていないが、陶器碗に入った赤色顔料のベンガラ 1 点も 54 号遺構から出土している。また、54 号遺構からは、破損したものを漆で継いで補修する漆継ぎがおこなわれたとみられる割れ口に漆が付着した磁器 5 点（内訳:碗 3 点、皿 1 点、合子蓋 1 点)、陶器 18 点（内訳:碗 13 点、皿 2 点、鉢 1、香炉 1、小瓶 1）が出土している。

漆継ぎ補修に関わる一連の作業工程が復元でき、藩邸内で破損した陶磁器の補修をおこなったと考えられている（北野ら 1999)。

3 貝製漆溜容器の文化財科学的分析

以上のように、近世江戸遺跡から出土した漆工用具一括資料を現在の漆工用具と比較すると、漆箆や漆刷毛のように形状に大きな変化がみられず共通するものがある一方で、貝製のパレットなど現在ではみられない用具がある。このような出土漆工用具の用途を明らかにするためには、用具に付着した漆がどのような性質であるか文化財科学的分析をおこない､漆の性質からどのような作業工程で使用された用具かを推定することが必要である。

ここでは、第 1 章の集成では取り上げることのできなかった、東京大学本郷構内の遺跡教育学部総合研究棟地点から出土した漆工用具・貝製漆溜容器の文化財科学的分析をおこなった（都築 2015)。

（1）東京大学本郷構内の遺跡教育学部総合研究棟地点の概要

当該調査地は、明治 2 年（1869）に明治政府に収公されるまで江戸時代を通じてほぼ水戸藩徳川家駒込邸であった。水戸藩徳川家は元和 8 年（1622）に駒込邸を下屋敷として拝領した。元禄 6 年（1693）に本所小梅屋敷を得たことを契機に駒込邸を中屋敷とした。明暦 3 年（1657）の大火の際には、上屋敷であった小石川邸から徳川頼房、光圀が駒込邸へ避難し、「火事小屋御殿」、「書楼」などが建てられた。寛文 5 年（1665）以降、明の朱舜水

が居住し（堀内 2011）、彰考館の前身となる史館が建設される（原 2015）など活発な土地利用がおこなわれてきた。

（2）対象資料

水戸藩徳川家駒込邸の西側台地の長屋空間に該当し、SU84 遺構（地下室）から出土した 17 世紀後半～18 世紀前葉のアカガイ製漆溜容器 1 点である（写真 5-5）。

なお、SU84 遺構には被熱を受けた遺物が含まれ、元禄 16 年（1703）もしくは正徳 4 年（1714）の火災によって廃棄されたものと考えられる（堀内 2015）。本遺跡から他の漆工用具は出土していない。

（3）漆溜容器・パレットをめぐる問題の所在と分析目的

前述のように、近世江戸遺跡から出土し現在の漆工ではみられない用具や用途が不明の漆工関連遺物の一つとして貝製のパレットがある。

動物考古学の分野では、パレットとして用いられている貝類は漁場や市場で剥き身にして殻をその近くに廃棄していたものが主体で、パレットに使用するために上記の場からもたらされたものの可能性があるとし、19 世紀以前に簡易な容器として認識されていた（阿部 2008）。また、使用途中の色漆が乾かないように上面に掛けた紙の一部が内容物の中から検出されている事例もあり、パレットのみではなく溜容器としての機能を有するものも含まれている。溜容器としては、薄手で壊れやすく殻厚が薄く容量のないバカガイよりも、厚手で丈夫であり殻厚が厚く容量のあるアカガイのほうがすぐれていると指摘されている（阿部 2008）。

本分析では、（6）で詳述するように、現在の漆工用具において貝製の容器およびパレットという名称の用具が確認できないことから、出土漆工用具における貝製のパレットの定義と、貝製のパレットの道具として機能や位置づけを明確にすることを目的とする。文化財科学的分析によって、使用された漆がどのような性質を有しているのか、内容物の成分はもちろんのこと、特に塊となっている本資料のような場合、その形成過程を明らかにする。

（4）分析方法

【クロスセクション観察】

アカガイ製の容器の断面から漆の堆積層の厚さ、精製度や色調、夾雑物や顔料の有無を観察するため、殻頂を有す中心部の幅 0.5cm を採取した。なお、アカガイに充填された内容物はフーリエ変換赤外分光光度計（FT-IR）の測定により漆であることが確認されている（難波・服部 2015）。

（5）分析結果

アカガイ製の容器の断面観察をおこなった結果、茶褐色と黄色味をもつ灰白色の 2 層がみられた。空気に接する上層は茶褐色を呈し緻密で硬質な固化膜を形成し、下層は灰白色の粗い粒子の集合体のようである（図 5-8）。

日本の漆液の標準的な成分組成はウルシオール 60～65%、ゴム質 5～7%、含窒素物 2～3%、水 25～30%、ラッカーゼ酵素 0.2%である（永瀬 1986）。ウルシノキから掻採った樹液は荒味漆とよばれ不透明な灰白色であるが、空気に触れると表面は褐色となり、そのまま放置しておけば黒味を帯びた褐色（内部は灰白色）となる。さらに時間が経過するといわゆる乾燥状態（固化の状態ともいう）に入り、漆の内部までも黒褐色となる（伊藤 1979）。

図 5-9 は漆液の採取から精製の過程を示したものである。荒味漆は採取時に混入した樹皮などの夾雑物を含むため濾過をおこなう。濾過を経た漆液は生漆とよばれ、水分を多く含むため塗装には適さない。塗装に用いるためには生漆を加熱しながら撹拌し（「なやし」、「くろめ」）、粒子を揃えて精製漆にする。盛物漆を桶に入れて 2・3 日置いた時、上層は自然に「くろま」り茶褐色となり、ウルシオールを多く含む。中層は黄味をもつ乳白色となり、ウルシオール、含窒素物、水分、酵素などがほどよく混ざり合っている。下層は灰白色となり、イゾコとよばれる不純物や採取時の夾雑物、水分、ゴム質などが沈殿している。生漆はこのように分離する自浄力を持っており、精製漆にはこの作用はみられない（丹下 2009）。

アカガイ製漆溜容器の断面は精製前の成分分離状態と同じ様相がみられるため、未精製漆である可能性が高い。そこで、現在の漆工に用いられている生漆（液体）（試料 No.1）と自然固化した生漆（試料 No.2）、自然固化した荒味漆（No.3）を比較資料とした。

試料 No.1（製造年月日 平成 24 年 8 月 10 日、（株）播与漆行）は荒味漆から濾過を経た生漆である。漆液を瓶に入れ蓋をせずに空気中で 3 カ月以上放置した結果、5 層確認できた（写真 5-6）。1 層は黒褐色の固化膜が形成され、「ちぢみ皺」がみられる。2～5 層は固化しておらず、上より茶褐色、黄褐色、乳白色、灰白色の層を成し分離している。

試料 No.2（中国産漆、国立歴史民俗博物館・永嶋正春氏より提供）は荒味漆から濾過を経た生漆で、平面上で自然固化したものである。薄片プレパラートに仕上げ断面観察をおこなった結果、茶褐色の固化層がみられた（写真 5-7）。

試料 No.3（日本産（浄法寺）漆、国立歴史民俗博物館・永嶋正春氏より提供）はウルシノキの掻き跡より自然固化したもので、荒味漆である。薄片プレパラートに仕上げ断面観察をおこなった結果、茶褐色の固化層に樹皮や塵などの夾雑物が混在している様相がみられた（写真 5-7）。

以上 3 点の比較試料より、アカガイ製漆溜容器の漆は試料 No.1 のような茶褐色層と灰白色層の成分分離状態にあり、茶褐色の固化層は試料 No.2 と同じ様相を呈し、さらに試料 No.3 にみられる樹皮や塵などの夾雑物が確認されないことから荒味漆から濾過を経た漆の可能性が非常に高い。これらは薄片プレパラートなど目視による観察結果であるため、より詳しい漆の精製度を知るためには走査電子顕微鏡や熱分解 - GC/MS などを用いた理化学的な分析が必要である。

（6）考察

ここでは、貝パレットの用語について整理をおこない、文化財科学的な分析結果から本分析資料の道具として機能や位置づけ、文献史料からみる近世江戸における漆利用について考察をおこなう。

まず、発掘調査報告書で報告される漆パレットは貝以外に陶磁器、土器片をいわゆる「パレット」のように使用したものを指すが、貝製のものが大半である。そのため、近世江戸遺跡では、貝パレット（もしくは漆パレット）と呼称されている。さらに、貝パレットは漆や顔料が一定量充填されているものと、漆や顔料が薄く塗布され筆の刷毛目が確認できるものの 2 タイプにわけることができるが、「貝パレット」として一括りに呼称されている。本分析資料は前者に該当する。

現在の漆工用具に貝製の容器およびパレットという名称の用具が確認できない。そこで、漆工用具の機能から検討すると、前者の漆や顔料が充填されているものは、前述の「茶碗」（佐々木 1986）、「漆液容器 大量の場合輸入生漆はドラム罐、ビヤ樽、小判形木桶等であるが、漆店の大形容器は木桶とボール製曲物である。漆工の使用する容器は、掃除は容易であり、容量が適当なので陶磁器製の丼茶碗等が多い。」（沢口 1966）に近い。沢口の分類では、大型の桶から陶磁器製の丼や茶碗まで広い範囲を指す。これに対し、北野信彦は出

土漆工用具の文化財科学的分析から、容器を大型桶容器および小型曲物容器と想定される「漆樹液容器」、くらわんか碗や小鳥餌猪口・中皿などの日常什器である陶磁器を再利用した精製漆樹液を溜めるための「漆溜め容器」（北野 2002）と細分している。したがって、漆や顔料が充填されているものは、漆溜容器と呼称すべきである。そして、「貝パレット」の中の前者すなわち漆や顔料が充填されているものは、容器に陶磁器の代用として貝を用いたと考えられる。

一方、後者の漆や顔料が薄く塗布され筆の刷毛目が確認できるものは、前述の「定盤」（佐々木 1986）、「定盤 主として蒔絵漆或いは彩漆の調製に使用するもの、消粉蒔絵の盛んに行われる地方においては定盤上に蒔絵漆を出して恰もパレットの如き用途にも使用する。」、「爪盤 蒔絵を描くときに左手の親指にかけ、パレットの如く漆を出して使用し、セルロイド、水牛、鼈甲製とある。角丸にして両側面の小孔に紙縒をさして輪形となし指にかける。」（沢口 1966）に近い。しかし、定盤とは大きさが明らかに異なり、出土例と比較しても東京都千代田区外神田四丁目遺跡出土の定盤は木製で板状をなし、約 30 ㎝と大型で（東京都埋蔵文化財センター 2004）貝での代用は不可能であろう。また、出土する貝から爪盤にある紙縒を通す小孔は確認されていない（図 5-10）。したがって、漆や顔料が薄く塗布され筆の刷毛目が確認できるものは、定盤や爪盤とは異なる漆の調製や筆の毛先を整える機能としてのいわゆる「パレット」で貝パレットもしくは漆パレットと呼称するのが妥当である。

以上のことから、本分析資料は、陶磁器の代わりにアカガイを用いて荒味漆から濾過を経た漆を溜めた漆溜容器であると考えた。

次に、漆工用具における貝製漆溜容器の位置づけを検討する。前述の佐々木、沢口、北野が指摘したように、漆を容れる器は「茶碗」、「陶磁器製の丼茶碗」、「くらわんか碗や小鳥餌猪口・中皿などの日常什器である陶磁器」である。また、各地の民具として収集された漆工用具（重要有形民俗文化財「浄法寺の漆掻きと浄法寺塗の用具及び製品」など）でも磁器製の茶碗が用いられている。

近世の絵画資料から『人倫訓蒙図彙』（1690）に描かれた 17 世紀前半の京の塗物師（図 5-11）、『新撰百工図絵』（1896）に描かれた 19 世紀前半の江戸の蒔絵師（図 5-12）は、小型曲物や陶磁器製の茶碗らしいものを用いている。出土例と比較しても、先に挙げた遺跡から磁器、陶器、曲物に漆が充填されたもの、溜めたものが出土しており、これらが漆溜容器として利用されていたことが実態として把握できる。

したがって、陶磁器の代用である貝製の漆溜容器やパレットは絵画上で「職人の道具」としては描かれないものと考えられる。つまり、絵画資料で描かれた「職人」とは異なる近世の零細な手工業、職人の実態を示すものといえるだろう。

最後に、文献史料からみる近世江戸における漆利用について検討する。

まず、漆は大きく分けて塗料と接着材の二つの使用法にわけられる（小松・加藤 1997）。前述したように、特に生漆は水分を多く含むため髹漆作業に適さず、現在の漆工において砥の粉や地の粉を練り込んで下地塗料、木地に薄く摺り込む摺漆、捺染型紙の補強材にするほか接着剤としても使われている（永瀬 1986）。近世江戸においても生漆は精製して使用するという認識はあったようである。先に挙げた東京都文京区春日町遺跡第Ⅵ地点から出土した一括の漆工用具は漆の精製から一連の作業工程が復元できるものであった（北野ら 1999）。

漆を塗料以外の接着材として使用する様相は、『人倫訓蒙図彙』の継物師に「万の器類の破損を、うるしを以てぬりつぎて全ふするなり。ふろしき包をかたにかけ、継物／＼、とふれあるくも、くるしきわざなり。」と見えている（図 5-13）（朝倉 1990）。また、江戸の風俗をまとめた『守貞謾稿』（1853）には「昔ハ、陶器ノ破損皆漆ヲ以テ修二補之一。寛政中始テ、白玉粉ヲ以テ焼接グコトヲナス。今世モ、貴価ノ陶器及ビ茶器ノ類ハ、再竈ニ焼コトヲ好マズ。故ニ、漆ヲ以テ補レ之。金粉ヲ粘ス。日用陶器ノ類ハ焼接ヲ専トス。」とある（喜田川 1853）。寛政期以前は器物の破損を漆で継いだこと、漆屋など店をかまえる居職とは別に漆を利用する職人が確認できる。

行商の継ぎ屋に関して、森本伊知郎は武州生麦村名主であった関口家当主の日記である『関口日記』の寛永 8 年（1796）から弘化 2 年（1845）の生活用具の購入・贈答・補修の記事を取り上げ、陶磁器の焼継ぎがおこなわれた場所の記述がみられないが、行商の焼継ぎ屋を利用したのであろうと指摘している（森本 2009）。また、陶磁器だけでなく漆器の補修や塗り直しもおこなわれており、東京都新宿区行元寺跡、東京都新宿区水野原跡から塗り直しが施された漆器が出土している（難波 2003a, 2003b）。

さらに、江戸時代後期頃の下級武士の間では、各種調度品購入に際し、什器の新調以外にも商売が定着化していた「古物買い」や「塗り直し補修」の方法を積極的に利用したようである（北野 2005）。古物買い、塗り直しに関連して、『今様職人尽歌合』（1825）には行商の古椀買いの姿が確認できる。絵の横の詞書に「このがふしども、塗りつくろハむよりハ、せたかいの市に、もてゆかバや」とあり、「せたかいの市」とは世田谷のボロ市の前身

である六斎市をさし、近郷の農家のために古着、古道具の市が立った（三谷 1975)。このように、古椀買いは古い椀や壊れた椀を買い集めて修繕して売ったのである(遠藤 1991)。

以上のことから、近世江戸における漆利用は店持ちの漆器や調度品の髹漆や蒔絵をおこなう職人とは異なる、文献史料にみられるような器物の補修や塗り直しを中心とした零細な手工業、職人が存在していた。彼らは零細であったが故に、簡便な貝製の漆溜容器やパレットを利用したと考えられる。本分析資料のような貝パレットは、近世江戸での漆が髹漆だけでなく器物の補修や塗り直しに利用され、その利用者が絵画資料に描かれる塗物師や蒔絵師といった居職だけでなく、行商で漆を扱う手工業、職人を示すものでないだろうか。

結語

近世江戸遺跡から出土する漆工用具の様相から、漆液容器、溜容器、漆篦、漆刷毛、貝パレット、濾し紙などがセットになって出土する遺跡と貝パレット、濾し紙のみもしくは溜容器と貝パレットのセットになって出土する遺跡に大別できる。本章では、両者に共通して出土する貝パレットの貝製の漆溜容器の文化財科学的分析をおこなった。分析結果から簡便な貝製の漆溜容器やパレットであり、江戸には漆を利用した様々な規模の手工業、職人が存在したと考えられる。分析資料が、水戸藩徳川家駒込邸出土であることから、ここでは、大名屋敷内での細工活動と町方の職人の関係について述べたい。

大名屋敷内で漆を用いる活動の場として細工所が考えられる。分析資料が出土した水戸藩徳川家駒込邸に細工所があったかは判然としないが、加賀藩前田家では御細工所という役所があり、詳細は『加賀藩御細工所の研究』(金沢美術工芸大学美術工芸研究所 1989, 1993)に以下のようにまとめられている。

加賀藩御細工所が設立された正確な年代はわからないが、慶長の末年から元和の初年と考えられ、武具御土蔵・御細工・弓矢・鉄砲などの管理にあたり、具体的には武具類の保管出納、破損や損失に応じた補修・修理・補充をおこなっていたようである。貞享 4 年(1687)、5 代藩主綱紀の格式改めにより、機構が整い、職務内容や人事などを具体的に知ることができるようになる。

御細工所は藩主が用いる武具の製作・修復、旗指物や前立物などの取り扱いにあたったが、時代が下るにつれて藩主の日用調度品の製作・補修や御能方など藩主御内用の広汎にかかわるようになる。また、御細工所で全ての製作・補修がまかなえたわけではなく、町

方の職人へ発注した。彼らは御細工所へ出向き、特別な設備が必要な場合は自宅で御用細工をおこなった。町方の細工人に御用を命じた場合、手間賃がかかるため御細工者へ召し出される者が多かった。さらに、村方の細工人にも発注をおこない、町方・村方問わず技術を保持する者を掌握し、御用を勤めさせた。

御細工者は藩主の江戸御用にも随伴し、江戸参勤の道中および江戸屋敷在住期間の御手廻御用をも務めた。江戸屋敷の御細工所は御細工者の職種が一通り揃い、国元の金沢御細工所の縮小版であったといえる。具体的な事例として、享保 9 年（1724）の江戸参勤に小刀細工、針細工、絵細工、塗物細工、紙細工、物書、鞢細工、轆轤細工、薫革細工が随行した。江戸に赴いた御細工者は本郷の上屋敷に住居し、上屋敷の部屋に空きがない場合は駒込の中屋敷に住居した。「御用内留帳」に江戸の御細工所の記事が多くないため、細工者の詳細な業務内容をみることはほとんどできない。ただし、第一に藩主の御手廻御用があり、武具の修復は弓・靭の塗修復が各 15 とごく僅かなものであった。また、芸能の御用も多かったようである。江戸においても国元の金沢と同様に、町方の細工人へ武具の修復を発注している。

前述の東京都新宿区尾張藩徳川家上屋敷跡からも漆工用具一括資料が出土しており、大名屋敷において漆を用いた活動の痕跡が伺える。村田香澄は尾張藩御小納戸の職務記録である『江戸御小納戸日記』の元文 4 年（1739）正月から安政 2 年（1855）3 月までの記事から藩士の長屋暮らしについて考察をおこなっている。尾張藩は中上級武士を新規雇用する場合、一芸・一職を備えた者であることを条件にしており、この「一芸」・「一職」は延享 3 年（1746）以来、内職が職芸として公認されていた。職芸の一例を挙げると大工、葺師、木挽、桶師、金具師、檜物師、桐油合羽職、塗師職、畳職、仕立職、武具細工研職、鍛冶職、金物職などがある。このような職芸は趣味の域ではなく、専門的な技術集団を形成していた可能性を指摘し、さらに活動の場は藩邸の中にある「細工所」「大工小屋」という施設だけでなく、日常生活空間の長屋においても行われていた可能性が高いと指摘している（村田 2002）。

大名屋敷内での製作・生産活動を考える場合、村田の指摘する大名屋敷内の御細工所だけでない日常的且つ零細な手工の実態や、『加賀藩御細工所の研究』にみられた町方・村方へ御用を発注する大名屋敷を中心とした地域的なネットワークを検討するべきであろう。

大名屋敷と商人・職人の関係について岩淵令治は以下のような指摘をしている。「武家と商人・職人の関係は自明のこととされ、さらに史料的限界もあいまって、武家の消費を支

える商人、職人は、一部の金融・呉服関係の問屋を除いて、研究対象とはならなかったのである。江戸における消費の内容に検討が及ぶものが少なく、具体的な商人・職人との取引を分析したものはみられないのである。」（岩淵 2004）。さらに岩淵は佐賀藩支藩蓮池藩9代当主嫡子尚丸が明治3年（1871）4月から6月まで麻布邸に滞在した際の関係商人との請取状から、新品の納品のみならず、桶の磨きや蓋の新調、弁当箱の磨き直し、急須の「焼継」、平などの塗物の塗り直し、刀の研ぎ直しなどの修理をおこない、藩は道具の維持のため職人と継続的に関係を結ぶ必要があったと分析している。また、台所方の関係商人・職人には屋敷近辺に居住していた者がいることから、藩邸を「磁極」とした「藩邸社会」の範囲の一端を示すと言及している（岩淵 2004）。

以上のことから、大名屋敷を中心としたローカルネットワークが江戸各所にあり、大名屋敷および藩主を頂点とした藩士は様々なレベルで商人・職人を含めた周辺社会と接点をもっていたことがわかる。

今後は、大名屋敷に出入できる職人だけでなく、その下位にあたるであろう行商の継物師や古椀買い（回収した古椀を塗りかえて市で売る）などの零細な職人の実態と周辺社会を検討することが必要であろう。

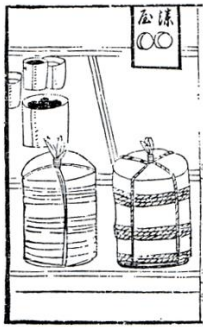

図 5-1 漆屋

（朝倉 1990『人倫訓蒙図語彙』より転載）

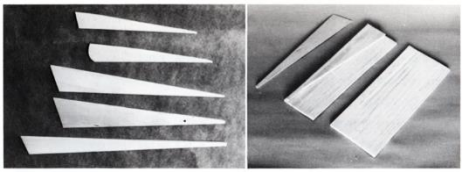

図 5-3 箆（左）、箆木（右）

（佐々木 1986『漆芸の伝統技法』より転載）

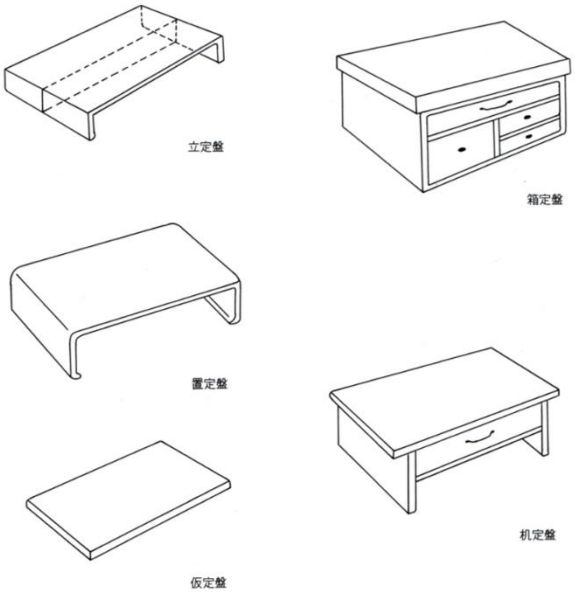

図 5-2 定盤

（丸山 1992『やさしく身につく漆のはなし 1』より転載）

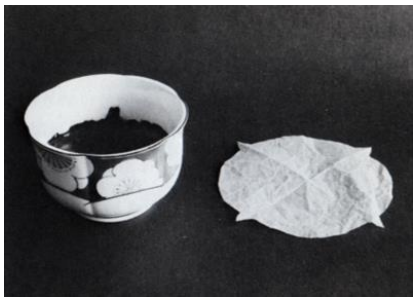

図 5-4　茶碗（左）、蓋紙（右）

（佐々木 1986『漆芸の伝統技法』より転載）

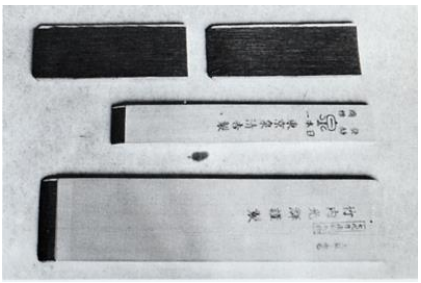

図 5-5　通し刷毛

（佐々木 1986『漆芸の伝統技法』より転載）

図 5-6　油箱

（佐々木 1986『漆芸の伝統技法』より転載）

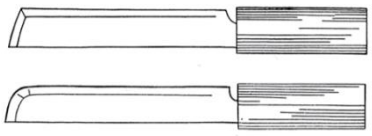

図 5-7　塗師刀

（中山 1960『漆工手帳Ⅱ　材料と用具』より転載）

図 5-8　東京大学本郷構内の遺跡教育学部総合研究棟地点出土アカガイ製漆溜容器のクロスセクション

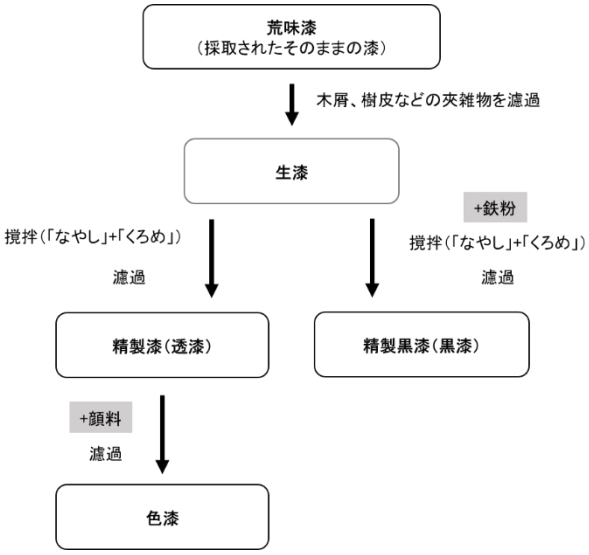

図 5-9　漆液精製の工程

図 5-10　爪盤

（中山 1960『漆工手帳Ⅱ　材料と用具』より転載）

図 5-11　塗物師

（朝倉 1990『人倫訓蒙図語集』より転載）

図 5-12　蒔絵師

（遠藤 1991『日本職人史第 3 巻』より転載）

図 5-13　継物師

（朝倉 1990『人倫訓蒙図語集』より転載）

写真 5-1　東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院入院棟 A 地点出土曲物製漆液容器

（国立歴史民俗博物館 2017『URUSHI ふしぎ物語−人と漆の 12000 年史−』より転載）

写真 5-2　千代田区外神田四丁目遺跡出土漆工用具

（国立歴史民俗博物館 2017『URUSHI ふしぎ物語−人と漆の 12000 年史−』より転載）

写真 5-2　新宿区坂町遺跡出土漆工用具

（国立歴史民俗博物館 2017『URUSHI ふしぎ物語−人と漆の 12000 年史−』より転載）

写真 5-4　文京区春日町遺跡第Ⅵ地点出土漆工用具

（国立歴史民俗博物館 2017『URUSHI ふしぎ物語-人と漆の 12000 年史-』より転載）

写真 5-5　東京大学本郷構内の遺跡教育学部総合研究棟地点出土アカガイ製漆溜容器

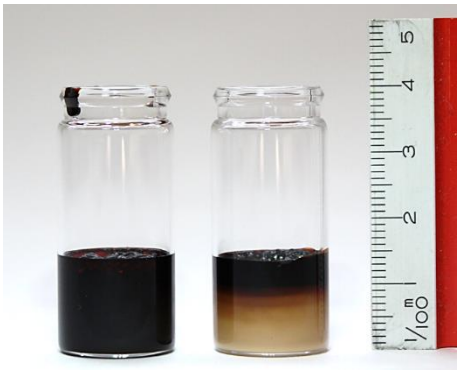

写真 5-6　試料No.1 生漆（右）の自浄作用自浄作用

※参考試料…木地呂漆（左）

写真 5-7　試料No.2 自然固化した生漆（左）、試料No.3 自然固化した荒味漆（右）のクロスセクション

結 論

近世都市江戸は、人とモノの集まる大消費地であると同時に将軍家徳川氏の居城である江戸城を中心とした城下町である。江戸は将軍を頂点とした身分・階層社会であり、武家地、町人地、寺社地に大別されていた。そこで使用されていた漆製品は、優良な工芸品から日常雑器までみられ、階層性や時代性を反映したものであった。

本論文では、まず近世江戸遺跡出土の漆製品の全体像を捉えるために発掘調査報告書から集成を試みた。ここでは、行政区ごとに武家地、町人地、寺社地に大別し、漆製品の出土状況と傾向について述べた。出土点数の変遷においては、総出土点数9,469点のうち約8割が武家地からの出土であること、17、18世紀代の出土点数は3,000点を越えるが、19世紀代に入ると約900点まで減少することが明らかとなった。

出土遺跡の変遷では、漆製品の出土が17世紀代以降の遺跡と18世紀代以降の遺跡に大別できる傾向がみられた。

主要器種の変遷においては、椀類3,170点、椀蓋類が1,302点の出土点数が圧倒的に多く、食事道具・調理具の約70%、総出土点数の約50%を占めることがわかった。

このような傾向を踏まえ、従来の近世墓制・葬制の考古学的研究の成果から寺社地の墓地遺跡の墓に副葬された漆製品の考察をおこなった。副葬品には武家、町人など被葬者の身分・階層性が反映されるため、埋葬施設ごとに異なる副葬品の様相が認められた。全ての埋葬施設で櫛などの装身具は共通してみられる一方、甕棺墓より下位になると食事道具・調理具の出土点数が多くなる傾向にある。

近世江戸遺跡出土の漆製品を現在の行政区ごとに武家地、町人地、寺社地に大別したが、実際には同一の遺跡において、その土地利用や遺物の廃棄のあり方が複雑であることから、個々の遺跡内で遺構単位での漆製品の検討をおこなう必要がある。どのような遺跡から（遺跡性格・遺構）、どのような漆製品（用途分類・器種）が出土し、それはどのような質（材質・製作技法）であるかという知見を蓄積することによって、より明確な漆製品の様相が明らかになると考えられる。すなわち、器種の分類などの考古学的な遺物の観察、漆製品の材質・技法の文化財科学的な分析、遺物の出土状況と遺構と遺跡の性格を総合的に捉えることが必要である。こうした問題意識の上に立って、以下のような大名屋敷遺跡および町屋遺跡から出土した漆製品を取りあげることにした。

江戸における大名屋敷遺跡の漆製品の材質・製作技法の文化財科学的な分析と、考古学

的な器種分類、器種組成の変遷を重ね合わせる試みの一つとして、東京都千代田区有楽町二丁目遺跡を中心に千代田区紀尾井町遺跡Ⅱ、千代田区紀尾井町遺跡、千代田区尾張藩麹町邸跡出土の漆製品を対象にした。

千代田区有楽町二丁目遺跡出土漆製品の材質・製作技法の文化財科学的な分析と器種との関係をみると、各器種で若干のばらつきがあるものの器面の塗り色と材質・製作技法の関係が確認できた。それぞれの器種で鉱物系下地、鉱物系+炭粉渋下地の堅牢なつくりの優品と、炭粉渋下地の量産品に大別できることがわかった。さらに器面の塗り色ごとに下地の材質をみると、赤一色、黒一色の漆器において炭粉渋下地が占める割合が高く、外観が優品のより多い赤一色、黒一色の食器でありながら、品質は量産品である中間的な漆器が存在する可能性が考えられる。

さらに、出土漆製品の時期別の様相を検討する際の前提となる、器種組成の検討をおこなった。出土漆製品の特質から、総破片数もしくは推定個体数による算定方法が考えられる。いずれも全体の器種の比率では大きな差はみられなかったが、推定個体数では、底部を含まない破片・小片はカウントされないため、小片でありながらも形態に特徴を有する平・壺椀が認識されなかった。このことから、出土漆製品の器種組成には、器種が判別・細分できなかったものを除外した総破片数の妥当性が高い。

その上で、近世的な椀揃形式の成立と普及（追川1999;後藤1992,2001;中井1989,1992）に漆製品の材質・製作技法がどのように関わっていたかについては、以下のような様相が認められた。千代田区有楽町二丁目遺跡では、Ⅰa期（1620～1630年代前半）にいわゆる近世的な椀揃形式を構成する飯・汁・平・壺椀、椀蓋が確認でき、Ⅰb期（1630後半～1640年代）以降に皿がみられなくなる。そして、飯椀、汁椀、椀蓋の順に出土点数が多く、全体における飯椀の組成比率が高いことがわかる。さらに点数は少ないが、紀尾井町遺跡Ⅱ、紀尾井町遺跡、尾張藩麹町邸跡の材質・製作技法の分析結果をあわせると、17世紀前半において、各器種で鉱物系下地、鉱物系+炭粉渋下地の堅牢なつくりの優品と炭粉渋下地の量産品に大別できるが、鉱物系下地、鉱物系+炭粉渋下地の堅牢なつくりの優品は、特に器面の塗り色が赤一色、黒一色の飯・汁・平・壺椀に優先的に使用される傾向にある。一方で、赤一色、黒一色の飯・汁・平・壺椀には、炭粉渋下地の量産品の質のものも一定量存在していたことが確認された。

大名屋敷遺跡出土の漆製品の分析では、17世紀代の資料を中心にして漆製品の材質・製作技法といわゆる近世的な椀揃形式の成立過程を明らかにした。18世紀以降に椀揃形式が

成立し漆製品が普及していくことから、次に18～19世紀代の町屋遺跡出土の漆製品を取りあげた。

町屋遺跡出土の漆製品の材質・製作技法の文化財科学的な分析から遺跡ごとの特徴を捉える試みの一つとして、東京都新宿区若葉三丁目遺跡Ⅲと新宿区南元町遺跡Ⅲから出土した漆製品を対象にした。

2遺跡間で共通する18世紀後葉の様相は大きな差がみられなかったが、これは18世紀後葉の資料数が少なかったため、明確な差異を読み取ることができなかった可能性がある。むしろ、出土点数のピークがある18世紀前葉と18世紀前葉～中葉、18世紀末～19世紀前葉と19世紀後葉の様相は異なる。時代別にみても、南元町遺跡Ⅲでは木工技術別分類の「その他」の櫛や笄などの装身具類が多く、特に金、銀、銅、錫を用いた蒔絵など加飾率が高い点にみられるように、各遺跡全体の様相と相関することがわかった。

若葉三丁目遺跡Ⅲと南元町遺跡Ⅲは地理的に近接しており、このような環境の町屋遺跡でも漆製品の様相の相違がみとめられる要因の一つとして、木工技術別分類の差、つまり器種のバリエーションによるものがあったと考えられる。漆製品は、樹種によって木工技術や材質・製作技法の適性が異なる。装飾性が高い櫛のような器種が多いほど、遺跡全体の加飾率は高くなる。どのような器種があるか、木工技術や器種分類に材質・製作技法を検討することで、詳細な差異の要因が明らかになり、個々の遺跡出土の漆製品の特徴を捉えることができるのではないかと考えられる。そうした漆製品の特徴は、各遺跡の歴史的背景や居住者の生活につながるものと考えられる。

第1章の集成より、武家屋敷を中心に出土する南部箔椀、吉野椀、朽木盆があり、これらは出土の様相から贈答、宴席、茶の湯など特別な目的・用途の漆器の様相が明らかになった。南部箔椀は、12遺跡（内訳:千代田区5遺跡、中央区1遺跡、港区4遺跡、文京区2遺跡）から大名屋敷を中心に出土し、その年代は17世紀前葉～中葉である。

近世江戸遺跡出土の南部箔椀は、美術史学による『漆椀百選』（荒川1975）の浄法寺椀の特徴としてあげられている材質、装飾技法と一致している。また、近世江戸の南部箔椀の木地の樹種はブナ属、炭粉下地に1～2層の上塗りで内面の赤色漆にベンガラ、外面の文様に石黄とベンガラが使用されていたとされる（北野2005a）。これらの先行研究と紀尾井町遺跡Ⅱ出土の南部箔椀の平椀の文化財科学的な分析結果は一致した。南部箔椀は領外への移出を禁止する御留品で統制品であったが、実際には藩内の上位の階層によって使用されていた（工藤2013）。近世江戸遺跡では東北地方に関連する武家屋敷からの出土はなか

ったが、一般的な流通ではない限られたルートでもたらされたものと考えられる。

吉野椀は、10遺跡（内訳：千代田区3遺跡、港区2遺跡、新宿区3遺跡、文京区1遺跡、墨田区1遺跡）から大名屋敷を中心に出土し、その年代は18世紀中葉～19世紀前葉である。先行研究によると、近世江戸遺跡出土の吉野椀の木地の樹種はブナ属、サクラ亜属のうちブナ属の使用比率が高かった。炭粉下地に1～2層の上塗りで、吉野絵の赤色漆は朱とベンガラが使用され、朱の比率が高かった（北野2005b）。これらの様相と若葉三丁目遺跡Ⅲ出土の椀蓋の文化財科学的な分析結果は概ね一致した。一方、長崎県長崎市万才町遺跡（高島秋帆邸跡）、伝世の加賀藩家老本多家所蔵什器には錆下地が使用されたやや良質の規格品から奢侈品があり、若干の品質差がある（北野2005b）。吉野椀を含む茶会席用の漆器は18世紀後半に一般化したとされる（北野2003, 2005b）。近世江戸では、吉野椀は概ね時期が一致する18世紀中葉以降に大名屋敷遺跡から多く出土しており、茶道と繋がりがあると考えられる。なお、吉野絵は今日でも茶の湯の器の文様として用いられている（瀬山2010）。

朽木盆は、近世江戸遺跡では新宿区の1遺跡から出土しており、甕棺墓の副葬品である。甕棺墓は低禄の旗本および藩士の墓にあたるため、日常雑器とは考え難い。

さらに、近世江戸遺跡からは漆製品だけでなく漆工用具も出土する。漆工用具の文化財科学的な分析をおこない現代の漆工用具と比較し、近世の絵画資料を参照しながら都市における漆利用の実態を考察し、大名屋敷における漆工をはじめとする生産活動の一端を明らかにした。

第1章の集成より、近世江戸遺跡から出土した漆工用具は47遺跡（内訳：千代田区4遺跡、港区5遺跡、新宿区26遺跡、文京区6遺跡、台東区2遺跡、墨田区1遺跡、渋谷区1遺跡、豊島区2遺跡）708点である。出土器種は濾し紙、貝パレットが多くそれぞれ497点、73点で、濾し紙の出土点数が圧倒的に多く、漆工用具全体の約70％を占める。出土点数の変遷においては、濾し紙は18世紀代以降に、貝パレットは17世紀代以降に出土がみられ、上位2器種全てで18世紀代の出土点数が多い傾向にある。

出土遺跡の変遷においては、近世江戸遺跡から出土する漆工用具の様相から、漆液容器、溜容器、漆箆、漆刷毛、貝パレット、濾し紙などがセットになって出土する遺跡と貝パレット、濾し紙のみもしくは溜容器と貝パレットのセットになって出土する遺跡に大別できる。

現在の漆工用具と比較すると、貝製のパレットなど現在ではみられない用具がある。このような出土漆工用具の用途を明らかにするために、文化財科学的な分析をおこなった。

東京都文京区東京大学本郷構内の遺跡教育学部総合研究棟地点出土のアカガイ製漆溜容器１点を対象とした。分析の結果、容器の内容物の断面から茶褐色と黄色味をもつ灰白色の2層の堆積が確認され、ウルシノキから採集した夾雑物を含む荒味漆を濾過した漆液であることがわかった。

現在の漆工用具、近世の絵画資料、民具資料より漆を容れる器は主に陶磁器製の碗類であることから、貝は陶磁器の代用と考えられる。漆液を溜める容器に簡便な貝を用いることから、江戸における塗物師や蒔絵師といった居職だけでなく、器物の補修や塗り直しを中心とした行商で漆を扱う手工業、職人の存在が考えられる。『加賀藩御細工所の研究』（金沢美術工芸大学美術工芸研究所1989,1993）によると、町方・村方へ御用を発注することがあり、町方・村方の職人が大名屋敷に出入りしていた。

ここから、このような零細な手工業が大名屋敷内でおこなわれ、大名屋敷および藩主を頂点とした藩士は様々なレベルで商人・職人を含めた周辺社会と接点をもっていたことを明らかにした。

以上のことから、近世江戸遺跡出土の漆製品の全体的な様相を捉えた上で、墓の副葬品である漆製品には階層性があることが明らかになった。17世紀代を中心にした大名屋敷遺跡出土の漆製品から近世的な椀揃形式の成立過程、18～19世紀代の町屋遺跡出土の漆製品からは江戸の漆製品の遺跡ごとに異なる普及の様相がみられた。武家屋敷を中心に出土する南部箔椀、吉野椀、朽木盆は、贈答、宴席、茶の湯など特別な目的・用途の漆器であった。また、江戸遺跡出土の漆工用具の一つである漆溜容器の分析により、大名屋敷における漆工の一端がうかがわれた。このように、本論文では、主に器種の分類などの考古学的な遺物の観察と、漆製品の材質・製作技法の文化財科学的な分析を総合的に捉えることにより、近世江戸遺跡の漆製品をめぐる多様な世界を明らかにすることができた。

謝 辞

学位論文の執筆に際し、大学学部学生、修士課程、博士後期課程からの指導教員である早稲田大学人間科学学術院教授・谷川章雄先生に終始熱心なご指導を賜り、深甚なる感謝を申し上げます。

副査の早稲田大学人間科学学術院教授・森本豊富先生、早稲田大学人間科学学術院准教授・原知章先生には多くのご助言とご指導を賜りました。心より感謝申し上げます。

博士後期課程において、国立歴史民俗博物館共同研究「学際的研究による漆文化史の新構築」（平成25年度～27年度）、企画展示「URUSHIふしぎ物語－人と漆の12000年史－」（平成29年度）に参加させていただいたことで、多くの経験と知見を与えていただきました。ご指導を賜りました研究代表の国立歴史民俗博物館研究部・日高薫先生、副代表の国立歴史民俗博物館研究部・林部均先生、学習院女子大学・工藤雄一郎先生には深く感謝を申し上げます。なお、本論文の第1章、第4章はこの研究成果によるものです。

大学学部学生、修士課程、博士後期課程において、蛍光X線分析装置の借用のご承諾、文化財科学分析のご指導を東京学芸大学・二宮修二先生、服部哲則先生、新免歳靖先生、東京都立井草高等学校・難波道成先生に賜りました。また、博士後期課程において、平成25年3月をもって定年退職された国立歴史民俗博物館研究部・永嶋正春先生にご指導を賜りましたことを深く感謝申し上げます。

分析資料のご提供と研究成果のご承諾をいただきました千代田区教育委員会、新宿区文化観光産業部文化観光課、東京大学埋蔵文化財調査室の皆様、後藤宏樹氏、栩木真氏、堀内秀樹先生には心より感謝申し上げます。

また、研究をすすめるにあたり、これまでお世話になりご協力をいただきながら、ここにお名前を記すことができなかった全ての方々に感謝申し上げます。

なお、本論文の第3章は、公益信託吉田学記念文化財科学研究助成基金の助成金、早稲田大学特定課題研究助成費（課題番号:2017S-139）により実施されたものです。研究へのご支援に感謝申し上げます。

引用・参考文献

序 論

荒川浩和 1975『漆椀百選』光琳社出版

安藤弘道 1988「漆椀類」『増上寺子院群光学院・貞松院跡 源興院跡』東京都港区教育委員会

岩瀬彬・小林加奈・佐々木由香・藤代美津子・藤田雅子・松本拓・丸山俊輔・山田昌久編 2002『人類誌集報 2002-漆利用の人類誌調査・飛騨山峡の人類誌・水利用の人類誌・遺跡資料からの人類誌-』東京都立大学人類誌調査グループ

大河内勉 1993「漆器とかわらけの器形比較と相関性について」『鎌倉考古』№26 鎌倉考古学研究所

岡山仁 1982「千葉地遺跡出土の漆器文様について」『鎌倉考古』№15 鎌倉考古学研究所

上村和直 2003「漆器の生産と流通-京都を中心として-」『季刊考古学』第 85 号 雄山閣

梅村清春 1987「清州城下町遺跡出土の木製挽物漆器について-漆器椀を中心として-」『年報 昭和 61 年度』愛知県埋蔵文化財センター

永越信吾 2006「戦国期 - 近世初頭の漆器について」『考古学の諸相Ⅱ 坂詰秀一先生古稀記念論文集』匠出版

追川吉生 1999「江戸出土漆器椀の形態分類-遺構一括資料を中心に-」『江戸の物流-陶磁器・漆器・瓦から-〔江戸遺跡研究会第 12 回大会発表要旨〕』江戸遺跡研究会

岡田文男 1995『古代出土漆器の研究　顕微鏡で探る材質と技法』京都書院

小川直之 2002「ハレの食器と共有膳椀」『もの・モノ・物の世界 新たな日本文化論』雄山閣

折口信夫 1927『国文学の発生（第三稿）』(『中公文庫 折口信夫全集第 1 巻古代研究（国文学篇）』1975 中央公論社)

折口信夫 1929『河童の話』(『中公文庫 折口信夫全集第 3 巻古代研究（民俗学篇 2）』1975 中央公論社)

加藤亜希子・小林加奈・佐々木由香・清水健・藤田雅子・松本拓・丸山俊輔・山田昌久編 2001『人類誌集報 2001-漆利用の人類誌調査・飛騨山峡の人類誌・水利用の人類誌・遺跡資料からの人類誌-』東京都立大学人類誌調査グループ

加藤寛 2002『日本の美術 №428 海を渡った日本漆器Ⅲ（技法と表現）』至文堂

関東民具研究会編著 1999『南関東の共有膳椀 - ハレの食器をどうしていたか』関東民具研究会

北野信彦 1989「漆器について」『西新橋二丁目港区№19 遺跡』港区西新橋二丁目遺跡調査団

北野信彦 2005a『近世出土漆器の研究』吉川弘文館

北野信彦 2005b『近世漆器の産業技術と構造』雄山閣

工藤雄一郎編著 2014『国立歴史民俗博物館研究報告第 187 集 縄文時代の人と植物の関係史』国立歴史民俗博物館

工藤雄一郎・四柳嘉章 2015「石川県三引遺跡および福井県鳥浜貝塚出土の縄文時代漆塗櫛の年代」『植生史研究』23 巻 2 号 植生史研究会

黒川真頼 1878（1976 増訂版）『工芸志料』前田泰次 校注 平凡社

古泉弘 1985「漆椀類」『江戸-都立一橋高校地点発掘調査報告-』都立一橋高校内遺跡調査団

後藤章太郎・佐々木由香・松本拓・丸山俊輔・宮崎央・村上志歩・山田昌久編 2000『人類誌集報 2000-漆利用の人類誌調査・飛騨山峡の人類誌・水利用の人類誌・遺跡資料からの人類誌-』東京都立大学人類誌調査グループ

後藤宏樹 1992「江戸遺跡出土食器の変化と特質」『国学院雑誌』93 巻 12 号 國學院大學

後藤宏樹 2001「「食器」としての漆器椀の変遷とその背景」『食器にみる江戸の食生活〔江戸遺跡研究会第 14 回大会発表要旨〕』江戸遺跡研究会

斉木秀雄 1995「漆器と陶磁器-鎌倉・佐助ヶ谷遺跡を中心に-」『貿易陶磁研究』第 15 集 日本貿易陶磁研究会

沢口悟一 1966『日本漆工の研究』美術出版社

宍戸信悟 1986「中世鎌倉の漆塗木製椀・皿の分類と変遷」『神奈川考古』第 22 号 神奈川考古同人会

宍戸信悟 1987「鎌倉出土漆器文様の構成と展開」『青山考古』5 号 青山考古学会

清水香 2016「大聖寺藩上屋敷跡 廃棄土坑 SK3 から出土した 17 世紀の木製品」『東京大学構内の遺跡医学部附属病院入院棟 A 地点 研究編』東京大学埋蔵文化財調査室

清水香 2017「江戸遺跡から出土した緑色系漆椀の基礎研究」『東京大学構内遺跡調査研究年報』10 東京大学埋蔵文化財調査室

杉本寿 1965『木地師支配制度の研究』ミネルヴァ出版

鈴木三男・能城修一・小林和貴・工藤雄一郎・鯵本眞友美・網谷克彦 2012「鳥浜貝塚から出土したウルシの年代」『植生史研究』21 巻 2 号 日本植生史学会

須藤護 1997「木地屋研究 木地椀の製作工程を中心にして」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 71 集 国立歴史民俗博物館

武田昭子・赤沼英男・土谷信高 2005「下地調整からみた尾張藩上屋敷跡出土漆器の製作技法に関する研究」『文化財保存修復学会誌』49 号 文化財保存修復学会

武田昭子・渡部マリカ 2017「医学部附属病院入院棟 A 地点 SK3 遺構出土漆製品の実証的研究」『東京大学構内遺跡調査研究年報 10』東京大学埋蔵文化財調査室

田村善次郎・宮本千晴 監修 2012『宮本常一とあるいた昭和の日本 23 漆・柿渋と木工』農山漁村文化協会

内藤昌 1966『江戸と江戸城』鹿島出版会

中井さやか 1989「一六世紀の漆器 - 特に三重椀との関連について - 」『考古学の世界』新人物往来社

中井さやか 1992「近世の漆椀について-その器種と組み合わせを考える-」『江戸の食文化』吉川弘文館

中川成夫・加藤晋平 1969「近世考古学の提唱」『日本考古学協会第 35 回総会研究発表要旨』日本考古学協会

中里寿克・江本義理・石川睦郎 1971「宮城県山王遺跡出土弁柄塗漆櫛の技法と保存処置」『保存科学』第 7 巻 東京国立文化財研究所

永嶋正春 1987「中世漆器の塗膜層構造について」『西川島』穴水町教育委員会

永嶋正春 1985「縄文時代の漆工技術」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 6 巻 国立歴史民俗博物館

永嶋正春 1991「三栄町遺跡出土の漆資料について」『三栄町遺跡-骨角貝製品・動物遺存体編-』東京都新宿区教育委員会

永島明子 1999「江戸時代中期の輸出漆器-マリー・アントワネットのコレクションを中心に-」『漆工史』22 号 漆工史学会

仲田茂司 1999「東国中世の漆器」『考古学研究』第 46 巻第 1 号（通巻 181 号）考古学研究会

成瀬晃司・長佐古真也 1998「江戸遺跡における 17 世紀代の〔供膳具〕の様相」『上方と江戸〔第 10 回関西近世考古学研究会大会資料集〕』関西考古学研究会

難波道成・服部哲則 2005「東京都新宿区出土漆工関連遺物に関する保存科学的研究-近世における漆器の「補修」に関して-」『東京学芸大学紀要』57 東京学芸大学

西田宏子 1972「ヴィクトリア・アルバート博物館所蔵漆芸品 1 ファン・ディーメンの箱」『MUSEUM』258 東京国立博物館

西田宏子 1973「ヴィクトリア・アルバート博物館所蔵漆芸品 1 マザラン公爵家の櫃」『MUSEUM』263 東京国立博物館

能城修一 2017a「鳥浜貝塚から見えてきた縄文時代の前半期の植物利用」『さらにわかった！縄文人の植物利用』新泉社

能城修一 2017b「ウルシはどんな植物」『URUSHI ふしぎ物語 - 人と漆の 12000 年史 - 』国立歴史民俗博物館

橋本鉄男 1979『ろくろ』法政大学出版局

服部哲則・難波道成・長岐僚子 2006「近世出土漆製品の材質・製作技法に関する研究-新宿区行元寺跡出土漆器の調査事例から-」『東京学芸大学紀要』58 東京学芸大学

日高薫 2001『日本の美術 №427 海を渡った日本漆器Ⅱ (18・19 世紀)』至文堂

日高薫 2008『異国の表徴 近世輸出漆器の創造力』ブリュッケ

日高薫 2017「列島の漆文化を探る「URUSHI ふしぎ物語 - 人と漆の 12000 年史 - 」開催にあたって」『URUSHI ふしぎ物語 - 人と漆の 12000 年史 - 』国立歴史民俗博物館

堀内秀樹 1997「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』Ⅰ 東京大学埋蔵文化財調査室

本多貴之・増田隆之介・宮腰哲雄 2017a「東京大学本郷構内の遺跡より出土した緑色系漆椀の科学分析」『東京大学構内遺跡調査研究年報』10 東京大学埋蔵文化財調査室

本多貴之・宮腰哲雄・宮里正子・岡本亜紀 2017b「歴史的な琉球漆器の科学分析」『URUSHI ふしぎ物語 - 人と漆の 12000 年史 - 』国立歴史民俗博物館

南茅部町埋蔵文化財調査団編著 2002『垣ノ島 B 遺跡』南茅部町埋蔵文化財調査団

宮坂淳一 1996「小田原城出土の漆器について」『神奈川考古』第 32 号 神奈川考古同人会

山岸寿治 1995『漆職人歳時記』雄山閣出版

山岸寿治 1996『漆よもやま話』雄山閣出版

山崎剛 2001『日本の美術 №426 海を渡った日本漆器Ⅰ (16・17 世紀)』至文堂

山崎剛 2017「近代の漆工芸」『URUSHI ふしぎ物語 - 人と漆の 12000 年史 - 』国立歴史民俗博物館

山田昌久・岡澤祥子編 1997『人類誌集報 1997-漆利用の人類誌調査・飛騨山峡の人類誌調査-』漆利用の人類誌調査・飛騨山峡の人類誌調査グループ

山田昌久・岩田らさ・加藤登紀・川嵜恵・川眞田桂子・松浦久美子編 1998『人類誌集報 1998-漆利用の人類誌調査・飛騨山峡の人類誌・遺跡資料からの人類誌-』漆利用の人類誌調査・飛騨山峡の人類誌調査グループ

山田昌久・岩田らさ・大谷稚歌・小林正・藤田雅子・吉野智里編 1999『人類誌集報 1999-漆利用の人類誌調査・飛騨山峡の人類誌・遺跡資料からの人類誌-』東京都立大学人類誌調査グループ

柳田國男 1910『遠野物語』(『ちくま文庫 柳田國男全集 4』1989 筑摩書房)

柳田國男 1939『木綿以前の事』(『ちくま文庫 柳田國男全集 17』1990 筑摩書房)

柳田國男 1969『山島民譚集 (3)』(『ちくま文庫 柳田國男全集 5』1989 筑摩書房)

吉村元雄 1976「江戸時代輸出漆器基礎資料集 1」『人文論究』26 関西学院大学人文学会

四柳嘉章 1991「古代～近世漆器の変遷と塗装技術」『石川考古学研究会々誌』第 34 号 石川考古学研究会

四柳嘉章 1992「北陸・東北における古代・中世漆器の髹漆技術と画期」『石川考古学研究会々誌』35 号 石川考古学研究会

四柳嘉章 1997「北陸の中世漆器」『中・近世の北陸-考古学が語る社会史-』桂書房

四柳嘉章 2009『漆の文化史』岩波書店

六角紫水 1932 (1960 再版)『東洋漆工史』雄山閣

第 1 章

天木詠子 2014「徳川将軍家の葬儀のための建築」『江戸遺跡研究の視点と展開〔江戸遺跡研究会第 27 回大会発表要旨〕』江戸遺跡研究会

植月学 2008「甲州周辺における狼信仰-笛吹市御坂町に伝わるニホンオオカミ頭骨をめぐって-」『山梨県立博物館研究紀要』第 2 集 山梨県立博物館

追川吉生 1999「江戸出土漆器椀の形態分類-遺構一括資料を中心に-」『江戸の物流-陶磁器・漆器・瓦から-〔江戸遺跡研究会第 12 回大会発表要旨〕』江戸遺跡研究会

貝塚爽平 1979『東京の自然史』紀伊国屋書店

金子浩昌 1992「骨角製品」『内藤町遺跡』東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調査団

北野信彦 2005a『近世出土漆器の研究』吉川弘文館

北野信彦 2005b『近世漆器の産業技術と構造』雄山閣
北野信彦 2015「南元町遺跡 3 次調査出土部材の漆塗装に関する調査」『南元町遺跡Ⅲ』住友不動産株式会社・国際文化財株式会社
北原糸子 1993「江戸時代の新宿」『江戸のくらし 近世考古学の世界』新宿区教育委員会
越村篤 2003「江戸遺跡出土木製品の製作技法と用途分類」『行元寺跡』藤和不動産・新宿区生涯学習財団
後藤宏樹 1992「江戸遺跡出土食器の変化と特質」『国学院雑誌』93-12 國學院大學
後藤宏樹 2001「「食器」としての漆器椀の変遷とその背景」『食器にみる江戸の食生活〔江戸遺跡研究会第 14 回大会発表要旨〕』江戸遺跡研究会
関根達人 1999「東北地方における近世食膳具の構成」『東北文化研究室紀要』40 東北大学文学部東北文化研究室
谷川章雄 1991「江戸の墓地の発掘 身分・階層の表徴としての墓」『甦る江戸』新人物往来社
谷川章雄 2004「江戸の墓の埋葬施設と副葬品」『墓と葬送の江戸時代』吉川弘文館
谷川章雄 2011「江戸の墓と家と個人」『死生学年報 2011 作品にみる生と死』リトン
谷田有史 2000「江戸時代のたばこ」『江戸文化の考古学』吉川弘文館
塚本学 1990「江戸時代人の持ち物について」『江戸のくらし-近世考古学の世界』新宿区教育委員会
内藤昌 1966『江戸と江戸城』鹿島出版会
波多野純 2016「有楽町一丁目遺跡発掘建築部材から見える江戸時代初期の大名屋敷の華やかさ」『発掘された大名屋敷-殿様と勤番武士のくらし-』千代田区教育員会
吉田伸之 1988「近世の城下町・江戸から金沢へ」『週刊朝日百科・日本の歴史・別冊・歴史の読みかた』朝日新聞社

第 2 章

永越信吾 2006「戦国期 - 近世初頭の漆器について」『考古学の諸相Ⅱ』匠出版
追川吉生 1999「江戸出土漆器椀の形態分類-遺構一括資料を中心に-」『江戸の物流-陶磁器・漆器・瓦から-〔江戸遺跡研究会第 12 回大会発表要旨〕』江戸遺跡研究会
岡田文男 1995『古代出土漆器の研究　顕微鏡で探る材質と技法』京都書院
株式会社武蔵文化財研究所編 2006『有楽町二丁目遺跡』有楽町駅前第 1 地区市街地再開発

組合
紀尾井町 6-18 遺跡調査会編 1994『尾張藩麹町邸跡』新日本製鐵株式會社・紀尾井町 6-18 遺跡調査会
北野信彦 2005a『近世出土漆器の研究』吉川弘文館
北野信彦 2005b『近世漆器の産業技術と構造』雄山閣
後藤宏樹 1992「江戸遺跡出土食器の変化と特質」『国学院雑誌』93 巻 12 号 國學院大學
後藤宏樹 2001「「食器」としての漆器椀の変遷とその背景」『食器にみる江戸の食生活〔江戸遺跡研究会第 14 回大会発表要旨〕』江戸遺跡研究会
後藤宏樹・都築由理子・難波道成 2010「有楽町二丁目遺跡出土漆器の科学分析」『千代田区立四番町歴史民俗資料館資料館報』第 18 号 千代田区教育委員会千代田区四番町歴史民俗資料館
沢口悟一 1966『日本漆工の研究』美術出版社
渋谷葉子 2001「江戸の市街」『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館埋蔵文化財課編 2003『行元寺跡』藤和不動産・新宿区生涯学習財団
新宿区内藤町遺跡調査団編 1992『内藤町遺跡』東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調査会
鈴木伸哉 2013「紀尾井町遺跡 2 次調査地点から出土した木製品・遺構構築材の樹種」『紀尾井町遺跡Ⅱ』株式会社西武プロパティーズ・大成建設株式会社
大成エンジニアリング株式会社編 2013『紀尾井町遺跡Ⅱ』株式会社西武プロパティーズ・大成建設株式会社
千代田区飯田町遺跡調査会編 2001『飯田町遺跡』日本貨物鉄道株式会社・東日本旅客鉄道株式会社・千代田区飯田町土地区画整理組合・千代田区飯田町遺跡調査会
千代田区紀尾井町遺跡調査会編 1988『紀尾井町遺跡調査報告書』千代田区紀尾井町遺跡調査会
都築由理子 2013「紀尾井町遺跡 2 次調査出土漆器資料の材質と製作技法」『紀尾井町遺跡Ⅱ』株式会社西武プロパティーズ・大成建設株式会社
内藤昌 1966『江戸と江戸城』鹿島出版会
中井さやか 1989「一六世紀の漆器－特に三重椀との関連について－」『考古学の世界』新人物往来社
中井さやか 1992「近世の漆椀について－その器種と組み合わせを考える－」『江戸の食文

化』吉川弘文館
永嶋正春 1987「中世漆器の塗膜構造について」『西川島』穴水町教育委員会
成田寿一郎 1996a『彫物・刳物（木工諸職双書)』理工学社
成田寿一郎 1996b『曲物・箍物（ 木工諸職双書)』理工学社
橋本鉄男 1979『ろくろ』法政大学出版局
森本伊知郎 2009『近世陶磁器の考古学　出土遺物からみた生産と消費』雄山閣
吉田伸之 1988「近世の城下町・江戸から金沢へ」『週刊朝日百科・日本の歴史・別冊・歴史の読みかた』朝日新聞社
Clive Orton 2000 *Sampling in Archaeology* Cambridge University Press

第 3 章

荒川浩和 1969『日本の美術 №35 蒔絵』至文堂
今井敬潤 2003『柿渋』法政大学出版局
岡田文男 1995『古代出土漆器の研究　顕微鏡で探る材質と技法』京都書院
加藤建設株式会社文化財調査部編 2016『若葉三丁目遺跡Ⅲ』株式会社リーガル不動産・加藤建設株式会社
北野信彦 2005a『近世出土漆器の研究』吉川弘文館
北野信彦 2005b『近世漆器の産業技術と構造』雄山閣
国際文化財株式会社編 2015『南元町遺跡Ⅲ』住友不動産株式会社・国際文化財株式会社
沢口悟一 1966『日本漆工の研究』美術出版社
渋谷葉子 2001「江戸の市街」『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
杉森哲也 2001「町屋敷」『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
内藤昌 1966『江戸と江戸城』鹿島出版会
永嶋正春 1987「中世漆器の塗膜構造について」『西川島』穴水町教育委員会
成田寿一郎 1996a『彫物・刳物（木工諸職双書)』理工学社
成田寿一郎 1996b『曲物・箍物　（木工諸職双書)』理工学社
能城修一・都築由理子・早坂仁敬 2015「南元町遺跡 3 次調査出土木材の樹種」『南元町遺跡Ⅲ』住友不動産株式会社・国際文化財株式会社
能城修一・都築由理子 2016「若葉三丁目遺跡 3 次調査で出土した木製品・建築材等の樹種」『若葉三丁目遺跡Ⅲ』株式会社リーガル不動産・加藤建設株式会社

橋本鉄男 1979『ろくろ』法政大学出版局

第 4 章

会津若松市教育委員会文化課編 1994『若松城下城東町遺跡』会津若松市教育委員会

荒川浩和 1975『漆椀百選』光琳社出版

飯田町遺跡調査会編 1995『飯田町遺跡』飯田町遺跡調査会

岩淵令治 2017「近世における漆器生産の広がりと流通」『URUSHI ふしぎ物語 - 人と漆の 12000 年史 - 』国立歴史民俗博物館

上神亮治・岡本亜紀 2008「作品解説」『日本の漆と暮らし - 上神コレクション - 』浦添市美術館

加藤建設株式会社文化財調査部編 2016『若葉三丁目遺跡Ⅲ』株式会社リーガル不動産・加藤建設株式会社

株式会社武蔵文化財研究所編 2006『有楽町二丁目遺跡』有楽町駅前第 1 地区市街地再開発組合

北野信彦 2003「近世遺跡出土の茶会席食器としての漆器資料」『金沢大学文化財学研究』5 金沢大学埋蔵文化財調査センター

北野信彦 2005a『近世出土漆器の研究』吉川弘文館

北野信彦 2005b『近世漆器の産業技術と構造』雄山閣

旧芝離宮庭園調査団編 1988『旧芝離宮庭園』旧芝離宮庭園調査団

工藤紘一 2013『盛岡藩と漆』盛岡市教育委員会歴史文化課

京葉線八丁堀遺跡調査団編 1990『京葉線八丁堀遺跡』京葉線八丁堀遺跡調査会

小林めぐみ 2004「会津絵の誕生と展開」『会津絵 会津の漆絵漆器』福島県立博物館

齋藤里香 2010「盛岡藩の諸職人」『いわての漆』岩手県立博物館

汐留地区遺跡調査会編 1996『汐留遺跡』汐留地区遺跡調査会

新宿区南元町遺跡調査会編 1991『發昌寺跡』新宿区南元町遺跡調査会

鈴木伸哉 2013「紀尾井町遺跡 2 次調査地点から出土した木製品・遺構構築材の樹種」『紀尾井町遺跡Ⅱ』株式会社西武プロパティーズ・大成建設株式会社

墨田区錦糸町駅北口遺跡調査団編 1996『墨田区錦糸町駅北口遺跡Ⅰ』墨田区錦糸町駅北口遺跡調査団

瀬山里志 2010「おもてなしの食の器」『おもてなしの美』サントリー美術館

大成エンジニアリング株式会社編 2013『紀尾井町遺跡Ⅱ』株式会社西武プロパティーズ・大成建設株式会社
高橋敦 1995「木製品の樹種について」『飯田町遺跡』飯田町遺跡調査会
高橋勇介 1988「塗りもの」『いわての手仕事』社団法人岩手県文化財愛護協会
千代田区飯田町遺跡調査会編 2001『飯田町遺跡』日本貨物鉄道株式会社・東日本旅客鉄道株式会社・千代田区飯田町土地区画整理組合・千代田区飯田町遺跡調査会
千代田区外神田一丁目遺跡調査会編 1999『外神田一丁目遺跡』警視庁・千代田区外神田一丁目遺跡調査会
東京大学埋蔵文化財調査室編 2005『東京大学本郷構内の遺跡工学部 1 号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室
東京都新宿区教育委員会編 1988『三栄町遺跡』東京都新宿区教育委員会
東京都埋蔵文化財センター編 2000『汐留遺跡Ⅱ』東京都埋蔵文化財センター
東京都埋蔵文化財センター編 2002『内藤町遺跡』東京都埋蔵文化財センター
東京都埋蔵文化財センター編 2009『愛宕下遺跡Ⅰ』東京都埋蔵文化財センター
東京都埋蔵文化財センター編 2011『溜池遺跡』東京都埋蔵文化財センター
東京都埋蔵文化財センター編 2014『愛宕下遺跡Ⅲ』東京都埋蔵文化財センター
都立文京盲学校遺跡調査班編 2000『小石川牛天神下』都内遺跡調査会
能城修一・都築由理子 2016「若葉三丁目遺跡 3 次調査で出土した木製品・建築材等の樹種」『若葉三丁目遺跡Ⅲ』株式会社リーガル不動産・加藤建設株式会社
橋本鉄男 1979『ろくろ』法政大学出版局
文京区遺跡調査会編 2000『春日町遺跡第Ⅲ・Ⅳ地点』文京区遺跡調査会
丸の内 1-40 遺跡調査会編 1998『丸の内一丁目遺跡』日本国有鉄道清算事業団・丸の内 1-40 遺跡調査会
港区教育委員会編 2014『豊後森藩久留島家・丹波亀山藩松平家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』港区教育委員会
四柳嘉章 2009『漆の文化史』岩波書店
渡邉明 2003a「技術の変遷」『会津の漆器』会津若松市
渡邉明 2003b「漆絵と蒔絵の変遷」『会津の漆器』会津若松市

第 5 章

朝倉治彦 校注 1990『人倫訓蒙図彙』平凡社

阿部常樹 2008「江戸遺跡出土の貝殻製漆パレット」『多知波奈の考古学-上野恵司先生追悼論集-』橘考古学会

伊藤清三 1979『日本の漆』東京文庫出版部

岩淵令治 2004『江戸武家地の研究』塙書房

遠藤元男 1991『日本職人史 第 3 巻職人の世紀（下)』雄山閣出版

金沢美術工芸大学美術工芸研究所編 1989『加賀藩御細工所の研究（一)』金沢美術工芸大学美術工芸研究所

金沢美術工芸大学美術工芸研究所編 1993『加賀藩御細工所の研究（二)』金沢美術工芸大学美術工芸研究所

北野信彦・菅井裕子・肥塚隆保・佐藤昌憲 1999「春日町遺跡第Ⅵ地点出土の一括漆工関連用具の分析」『春日町遺跡第Ⅵ地点』文京区遺跡調査会

北野信彦 2002「坂町遺跡出土漆器資料の材質と製作技法」『坂町遺跡』新宿区生涯学習財団

北野信彦 2005『近世出土漆器の研究』吉川弘文館

喜田川守貞 1853（1992 校訂版)『守貞謾稿 第一巻』朝倉治彦・柏川修一校訂 東京堂出版

小松大秀・加藤寛 1997『漆芸品の鑑賞基礎知識』至文堂

沢口悟一 1966『日本漆工の研究』美術出版社

佐々木英 1986『漆芸の伝統技法』理工学社

新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館埋蔵文化財課編 2002『坂町遺跡』新宿区生涯学習財団

丹下民雄 2009『備中 漆掻き』社団法人林原共済会

東京都埋蔵文化財センター編 2002『尾張藩徳川家上屋敷Ⅸ』東京都埋蔵文化財センター

東京都埋蔵文化財センター編 2004 『外神田四丁目遺跡』東京都埋蔵文化財センター,

都築由理子 2015「漆パレット・漆溜容器の研究 東京大学本郷構内遺跡教育学部総合研究棟地点 SU84 出土アカガイ製漆溜容器について」『東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要』9 東京大学埋蔵文化財調査室

中山修三編 1960『漆工手帳Ⅱ 材料と用具』日本漆工協会

永瀬嘉助 1986『漆の本: 天然漆の魅力を探る』研成社

難波道成 2003a「出土漆製品の材質･製作技法」『水野原遺跡（第 2 分冊)』新宿区生涯学習

財団
難波道成 2003b「新宿区行元寺跡出土漆器について」『行元寺跡』藤和不動産・新宿区生涯学習財団
難波道成・服部哲則 2015「漆パレット・漆溜容器の研究 東京大学弥生地区・教育学部総合研究棟地点出土貝殻内漆の調査」『東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要』9 東京大学埋蔵文化財調査室
原祐一 2015「漆パレット・漆溜容器の研究 水戸藩駒込邸（中屋敷）の土地利用状況」『東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要』9 東京大学埋蔵文化財調査室
文京区遺跡調査会編 1999『春日町遺跡第Ⅵ地点』文京区遺跡調査会
堀内秀樹 2011「遺跡の地理的・歴史的環境」『東京大学本郷構内の遺跡教育学部総合研究棟地点 インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点』東京大学埋蔵文化財調査室
堀内秀樹 2015「漆パレット・漆溜容器の研究 東京大学本郷構内の遺跡教育学部総合研究棟地点と SU8」『東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要』9 東京大学埋蔵文化財調査室
丸山高志編 1992『やさしく身につく漆のはなし 1』日本漆工協会
三谷一馬 1975『江戸商売図絵』三樹書房
村田香澄 2002「コメント『江戸御小納戸日記』にみる長屋の暮らし」『尾張藩徳川家上屋敷Ⅸ』東京都埋蔵文化財センター
森本伊知郎 2009『近世陶磁器の考古学―出土遺物からみた生産と消費』雄山閣

結 論

荒川浩和 1975『漆椀百選』光琳社出版
追川吉生 1999「江戸出土漆器椀の形態分類-遺構一括資料を中心に-」『江戸の物流-陶磁器・漆器・瓦から-〔江戸遺跡研究会第 12 回大会発表要旨〕』江戸遺跡研究会
金沢美術工芸大学美術工芸研究所編 1989『加賀藩御細工所の研究（一）』金沢美術工芸大学美術工芸研究所
金沢美術工芸大学美術工芸研究所編 1993『加賀藩御細工所の研究（二）』金沢美術工芸大学美術工芸研究所
北野信彦 2003「近世遺跡出土の茶会席食器としての漆器資料」『金沢大学文化財学研究』5 金沢大学埋蔵文化財調査センター
北野信彦 2005『近世漆器の産業技術と構造』雄山閣

工藤紘一 2013『盛岡藩と漆』盛岡市教育委員会歴史文化課

後藤宏樹 1992「江戸遺跡出土食器の変化と特質」『国学院雑誌』93 巻 12 号 國學院大學

後藤宏樹 2001「「食器」としての漆器椀の変遷とその背景」『食器にみる江戸の食生活〔江戸遺跡研究会第 14 回大会発表要旨〕』江戸遺跡研究会

瀬山里志 2010「おもてなしの食の器」『おもてなしの美』サントリー美術館

中井さやか 1989「一六世紀の漆器－特に三重椀との関連について－」『考古学の世界』新人物往来社

中井さやか 1992「近世の漆椀について－その器種と組み合わせを考える－」『江戸の食文化』吉川弘文館